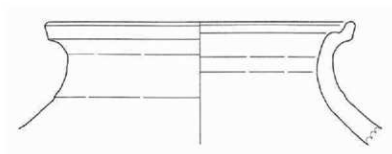


蔵王町文化財調査報告書 第15集

西屋敷遺跡ほか

— 経営体育成基盤整備事業(県営ほ場整備事業)に伴う緊急発掘調査 —



2012年(平成24年)3月

宮城県刈田郡蔵王町教育委員会

西屋敷遺跡ほか

— 経営体育成基盤整備事業(県営ほ場整備事業)に伴う緊急発掘調査 —



5区全景 掘立柱建物跡群と西小屋館跡西辺土塁（写真右上）に沿って確認された堀跡（南から）



6区全景 西小屋館跡（写真奥）西側を区画する溝跡と掘立柱建物跡群（北西から）



5区 掘立柱建物跡群 (南から)



5区 SD57 堀跡 (南から)



5区 SX66 焼成遺構 (南から)



5区 SD57 堀跡と西小屋跡西辺土塁 (西から)



5区 SE85 井戸跡 (西から)



4区 SE45 井戸跡 (南から)

序 文

蔵王山麓の豊かな自然に恵まれた私たちの蔵王町は、大昔から大変住み良い土地だったのでしょ。私たちの足もとに埋もれている多くの遺跡が、悠久の時をこえてそのことを力づくよく物語っています。

蔵王町の北東部に位置する円田盆地では、平成8年度に大規模なほ場整備事業が計画されました。事業の計画区域には多くの遺跡が含まれていたことから、文化財の保存についての協議が重ねられました。この結果、水田となる部分は盛土によって遺跡を保存し、道路や水路などの工事によってやむを得ず破壊される部分について、平成13年度より記録保存のための発掘調査を行なうことになりました。

本書において皆さまにご報告するのは、平成21年度に行なった西屋敷遺跡の発掘調査成果などについてです。今回の調査では、鎌倉～室町時代の西小屋館を取り囲む堀跡の一部がはじめて発掘調査され、土塁と堀で守りを固めた当時の地域有力者の居館であったことが改めて確認されました。館の西側では溝で区画された敷地から多数の掘立柱建物跡や井戸跡が発見され、西小屋館の館主に仕えた家臣の屋敷と推定されます。これらは、西小屋館跡の歴史的価値を再確認するものであるとともに、蔵王山麓に暮らした当時の人びとの暮らしぶりの一端を窺い知ることのできる貴重な成果です。本書にまとめられた学術的成果が、広く皆さまに活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いです。

ほ場整備事業計画の策定と実施にあたっては、宮城県大河原地方振興事務所、蔵王町土地改良区、地元地権者の皆さまより文化財の保存と発掘調査実施へのご理解とご協力をいただきました。地元作業員の皆さまにはさまざまな気象条件の下、野外での発掘作業にあたっていただきました。ご協力を賜りました関係各位の皆さまに厚く心より御礼申し上げます。

最後になりましたが、先人の残した文化遺産を町民の宝として永く後世に継承していくことは、これからの地域色豊かなまちづくりには欠かせない大切なことであります。今後とも、町民各位のご理解とご協力を念願して序といたします。

平成24年3月

蔵王町教育委員会
教育長 佐藤 茂廣

例 言

1. 本書は、蔵王町大字小村崎字西屋敷・宮前地内に所在する西屋敷遺跡ほかの緊急発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査は、経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う事前調査として行なったものであり、発掘調査から整理作業および本書の作成に至る一連の業務は、調査原因となった事業の主体者である宮城県大原河原地方振興事務所を委託者、蔵王町を受託者とする業務委託契約を締結し、蔵王町教育委員会が平成21年度に発掘調査・基礎整理事業、平成23年度に本整理・報告書作成作業を実施した。また、暗渠排水設備の施工に伴い平成22年度に実施した西小屋館跡における遺構確認調査の結果についても本書に収録した。
3. 本遺跡の発掘調査と整理作業は蔵王町教育委員会が主体となり、教育総務課文化財保護係が担当した。職員体制は下記のとおりである。

教 育 長 山田 紘 (H21-22) 佐藤 茂廣 (H23)

教育総務課長 大沼 芳國 (H21-22) 高野 正人 (H23)

課 長 補 佐 阿部 宏 (H21) 高野 正人 (H22) 佐藤 浩明 (H23)

文化財保護係長 佐藤 洋一 主 事 鈴木 雅

文化財臨時職員 庄子 善昭・我妻 なおみ・鈴木 (山戸) 和美 (H21-23)

中沢 祐一 (H21)・渡邊 香織 (H22-23)

発掘調査作業員 我妻 英子・我妻 儀八・我妻 武夫・浅沼 一郎・芦立 清・市川 康雄・太田 忠義・大沼 さつき・大庭 慶志郎・加藤 初子・加藤 力・加藤 洋一・亀井 勇二・熊坂 信子・小杉 佐和子・後藤 扶美江・小林 四郎・小林 美智子・佐藤 和子・佐藤 貴美子・佐藤 照子・佐藤 福治・佐藤 義晴・佐藤 摩里恵・眞貝 誠一・鈴木 光一・鈴木 春夫・鈴木 勝・清野 政男・竹内 侑子・竹内 求・武田 憲繁・樋口 良子・堀内 博・山家 次郎 (H21)

室内整理事業員 我妻 英子・大庭 慶志郎・小杉 佐和子・小林 四郎・小林 美智子・佐藤 貴美子・佐藤 里栄 (H21-23)・市川 康雄 (H21)・岩佐 若奈・佐藤 かおる・佐藤 恵子・松田 律子 (H22-23)

4. 本遺跡の発掘調査および資料整理と本書の作成に際し、以下の諸機関・諸氏よりご指導・ご助言ならびにご協力を賜った。ここに記して深甚より謝意を表します。
宮城県教育庁文化財保護課・石黒伸一郎・早瀬 亮介・山田 しょう・吉井 宏（敬称略・五十音順）
5. 本発掘調査における現場写真撮影に使用した機材等は以下のとおりである。
カメラ：NikonD100・NikonD70s / レンズ：AF-S NIKKOR 18-70mm f3.5-4.5G ED
6. 遺物の写真撮影は、庄子 善昭が担当した。撮影に使用した機材等は以下のとおりである。
カメラ：NikonD90 / レンズ：AF MICRO NIKKOR 60mm F:2.8 D / ストロボ：SUNPAK auto544 / 赤外線カメラ：SONY MVC-FD7 (改) / 赤外線 LED ライト：AE-LED56 /
撮影ソフトウェア：Nikon Camera Control Pro2 / 現像ソフトウェア：Adobe Photoshop Lightroom3 ver.3.0
7. 本書に掲載した遺構実測図のトレース、画像処理、レイアウトには下記のソフトウェアを使用した。
Adobe Photoshop6.0・CS4 / Adobe Illustrator10.0・CS4 / Adobe InDesignCS4
8. 本書に掲載した遺構実測図のトレース、遺物実測図の作成およびトレース、遺物拓本、遺物写真撮影、図版レイアウトなどは文化財臨時職員が中心となり、室内整理事業員がこれを助けた。

9. 本発掘調査の整理作業は、下記の調査員が中心となり、調査員全員で協議しながら進めた。
 遺構：我妻 なおみ、土師器・須恵器：庄子 善昭・鈴木 和美、木製品：庄子善昭、
 縄文土器・陶磁器：渡邊 香織、石器：中沢 祐一・鈴木 雅・鈴木和美、統括：鈴木 雅・庄子 善昭
10. 本書の執筆は調査員全員の協議を経て鈴木 雅が執筆・編集し、鈴木 和美が校正・照合を担当した。
 なお、第6章第2節3・4の執筆にあたっては、庄子 善昭が遺構の分析・検討を担当した。
11. 本発掘調査で出土した遺物および写真・図面等の記録資料については、蔵王町教育委員会が一括して永久保管している。

凡 例

1. 本発掘調査における測量原点の座標値は、日本測地系に基づく平面直角座標第X系による。測量成果表は第6図に示した。なお、方位は座標北を表している。
2. 本発掘調査では、調査区内に工事用測量基準杭を基準として3mグリッドを設定し、東西・南北方向に数字を付した。グリッドの局座標における北は日本測地系に基づく平面直角座標第X系における座標北を基準として東に6.3°の方位である。
3. 第3図は、5万分の1都道府県土地分類基本調査における地形分類図「白石」の一部を使用した。
4. 第4図は、国土地理院による2万5千分の1地形図の電子国土配信データおよび日本高密度メッシュ標高データをもとに風景CG作成ソフトウェア「カシミール3D」を使用して作成した。
5. 写真図版1-2は、国土地理院による空中写真の電子国土配信データの一部を使用した。
5. 本書で使用した土色の記述については、「新版標準土色帖」（小川・竹原2005）を参照した。
6. 本書で使用した遺構番号は、遺構種別に関わらず調査時に付された連続する番号を使用した。
7. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。
 S B：掘立柱建物跡、S A：柱列跡、S E：井戸跡、S K：土坑
 S D：堀跡・溝跡、S X：水溜め状遺構・焼成遺構・性格不明遺構
8. 遺構・遺物実測図の縮尺は下記の通りで、それぞれ図中にスケールを付して示した。
 調査区配置図：1/3000、調査区設定図：1/2000、遺構配置図：1/400
 掘立柱建物跡・柱列跡：1/100（断面図：1/60）
 土坑・井戸跡・焼成遺構：1/60、溝跡・堀跡：1/100・1/200（断面図：1/60）
 土器・陶磁器・木製品：1/3、石器：1/1・2/3・1/2・1/3・1/5、金属製品：1/1
9. 遺構断面図に付した土層注記表の備考欄では、下記の略号を使用して記載した。
 (柱掘)：柱穴掘方埋土、(柱痕)：柱痕跡、(柱抜)：柱材抜き取り痕跡、(柱切)：柱材切り取り痕跡、
 (堆)：堆積土、(崩)：崩落土、(構)：構築土、(人為)：人為的埋土（特記ないときは自然堆積土）
10. 遺構の説明では下記の表記方法を使用して記載した。
 方 位 (例) 北を基準として東に10度傾く：「N - 10° - E」
 重複関係 (例) AよりBが新しい：「A→B」、同時機能：「A = B」、新旧不明：「A - B」
 柱間寸法 柱痕跡が確認されなかった柱穴は中心点を基準に計測し、() 付きで示した。
11. 遺物観察表で、器面調整・加工の前後関係が確認でき、Aの痕跡よりBの痕跡が新しい場合「A→B」、前後関係が不明の場合「A・B」のように記載した。また、() 内の数値は残存値である。
12. 引用文献および執筆にあたり参考にした文献については巻末に一括して掲載した。

調査要項

遺 跡 名：①西屋敷遺跡（宮城県遺跡登録番号：05196 遺跡記号：U L）

②西小屋館跡（宮城県遺跡登録番号：05048 遺跡記号：U B）

所 在 地：①宮城県刈田郡蔵王町大字小村崎字西屋敷・宮前地内

②宮城県刈田郡蔵王町大字小村崎字西屋敷地内

発掘調査面積：① 6,215.5㎡（事前調査分 4024.9㎡、確認調査分 2190.6㎡）

② 165㎡（確認調査・対象面積 2,000㎡）

調 査 期 間：①平成 21 年 4 月 16 日～9 月 30 日

②平成 22 年 12 月 16 日～24 日

調 査 原 因：経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）円田 2 期地区区画整理工事

調 査 主 体：蔵王町教育委員会 教育長 山田 紘

調 査 担 当：蔵王町教育委員会教育総務課文化財保護係

調 査 員：佐藤 洋一・鈴木 雅（教育総務課文化財保護係）

庄子 善昭・我妻 なおみ・山戸 和美（H21-22）・中沢 祐一（H21）

調 査 指 導：宮城県教育庁文化財保護課

調 査 協 力：宮城県大河原地方振興事務所・蔵王町土地改良区・蔵王町小村崎区

目 次

序 文 例 言 凡 例 調査要項 目 次

第1章 遺跡の概要	1
第1節 遺跡の位置と地理的環境	1
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	3
第2章 調査に至る経緯	8
第3章 調査の方法と経過	9
第4章 調査の結果	13
第1節 基本層序	13
第2節 発見された遺構と遺物	13
1 1区	14
2 2区	18
3 3区	37
4 4区	40
5 5区	51
6 6区	103
7 遺構確認調査区	119
(1) 西屋敷遺跡	119
(2) 西小屋館跡	120
8 遺構観察表	121
第5章 自然科学的分析	127
第1節 放射性炭素年代	127
第6章 考察	131
第1節 遺物の特徴と編年的位置づけ	131
第2節 遺構の特徴と機能時期	134
第3節 遺跡の性格	141
第7章 総括	143
引用・参考文献	144

写真図版 遺跡遠景……1 遺構……2 遺物……27 報告書抄録 解 説

挿図目次

第1図	蔵王町の位置	1	第41図	5区中央部掘立柱建物跡群	57
第2図	遺跡の位置と周辺の地形	1	第42図	5区南部掘立柱建物跡群	59
第3図	遺跡の位置と周辺の遺跡	2	第43図	SB77 掘立柱建物跡	61
第4図	円田盆地周辺の中世城館(鳥瞰図)	7	第44図	SB78 掘立柱建物跡	62
第5図	現況測量図・調査区配置図	10	第45図	SB79・SB80 掘立柱建物跡	63
第6図	調査区設定図と主要な遺構の分布	11	第46図	SB82・SB83 掘立柱建物跡	64
第7図	SK94・95・96 土坑、SK96 土坑出土遺物	14	第47図	SB84 掘立柱建物跡	65
第8図	1区遺構配置図	15	第48図	SB92 掘立柱建物跡	66
第9図	SD93 溝跡	16	第49図	SB154 掘立柱建物跡	67
第10図	SD93 溝跡出土遺物(1)	16	第50図	SB156・SB157 掘立柱建物跡	68
第11図	SD93 溝跡出土遺物(2) 遺構外出土遺物	17	第51図	SB155・SB158・SB159 掘立柱建物跡	69
第12図	2区遺構配置図	19	第52図	SB160・SB161 掘立柱建物跡	70
第13図	SK104 土坑	21	第53図	SB162・SB163 掘立柱建物跡	71
第14図	SA118a-g 柱列跡・SD117 溝跡	22	第54図	SB166・SB167・SB168 掘立柱建物跡	73
第15図	SK120・SK121 土坑出土遺物	24	第55図	SB169・SB171・SB172 掘立柱建物跡	74
第16図	SK106・SK119・SK120・SK121・SK123・SK124・SK128・SK138 土坑	25	第56図	SB173・SB174 掘立柱建物跡	75
第17図	SD107 溝跡	26	第57図	SB177・SB178・SB179 掘立柱建物跡	76
第18図	SD101・SD102・SD103・SD105 溝跡	27	第58図	SB180・SB181 掘立柱建物跡	77
第19図	SD107 溝跡出土遺物	28	第59図	SA24・SA76・SA81 柱列跡	79
第20図	SD108・SD109・SD110 溝跡	29	第60図	SA97・SA98 柱列跡	80
第21図	SD126・SD137 溝跡、SD126 溝跡出土遺物	30	第61図	SA164・SA165・SA170・SA176 柱列跡	81
第22図	SD135・SD136・SD212 溝跡、SX115・SX142・SX143 水溜め状遺構、SD117 溝跡・SX143 水溜め状遺構・遺構外出土遺物	33	第62図	SA175 柱列跡	82
第23図	3・4区遺構配置図	35	第63図	SE61・SE67・SE85・SE87 井戸跡	83
第24図	SB127 掘立柱建物跡	37	第64図	SE61・SE67・SE85 井戸跡出土遺物	84
第25図	SK39・SK46 土坑、SD34・SD35・SD36・SD37・SD38 溝跡	38	第65図	SE90 井戸跡・出土遺物	85
第26図	SD214 溝跡、SX145 水溜め状遺構	40	第66図	SK55・SK59・SK60・SK86・SK89・SK91 土坑	87
第27図	SB31・SB47 掘立柱建物跡	41	第67図	SK59・SK89 土坑出土遺物	88
第28図	SB185 掘立柱建物跡	42	第68図	SK152 土坑	89
第29図	SB186・SB187 掘立柱建物跡	43	第69図	SD57 堀跡	90
第30図	SB215 掘立柱建物跡、SA188・SA191 柱列跡	44	第70図	SD57 堀跡出土遺物(1)	91
第31図	SE45 井戸跡	45	第71図	SD57 堀跡出土遺物(2)	92
第32図	SE45 井戸跡出土遺物	46	第72図	SD57 堀跡出土遺物(3)	93
第33図	SK42 土坑	47	第73図	SD48a・SD48b・SD49・SD58 溝跡	95
第34図	SD130a・b、SD131 溝跡、SD130a 溝跡出土遺物	48	第74図	SD64・SD68・SD73・SD88・SD153 溝跡	97
第35図	SD132・SD133 溝跡	49	第75図	SD150・SD151・SD211 溝跡、SX52 焼成遺構、SD48・SD58・SD68 溝跡出土遺物	98
第36図	SX40・SX43・SX44・SX134 焼成遺構	50	第76図	SX62・SX63・SX65・SX66・SX69・SX70・SX71・SX72 焼成遺構(1) 出土遺物	100
第37図	遺構外出土遺物	51	第77図	SX62・SX63・SX65・SX66・SX69・SX70・SX71・SX72 焼成遺構(2)	101
第38図	SB74 掘立柱建物跡	52	第78図	柱穴跡・遺構外出土遺物	102
第39図	5・6区遺構配置図	53	第79図	SB3・SB26 掘立柱建物跡	103
第40図	6区東部・5区北部掘立柱建物跡群	55	第80図	SB146 掘立柱建物跡、SA28・SA183 柱列跡	104
			第81図	SA147・SA148 柱列跡、SX1 性格不明遺構	105
			第82図	SE10・SE11 井戸跡、SK16・SK17・SK18・SK22・SK23 土坑	107
			第83図	SD4a・b 溝跡	108
			第84図	SD4a・b 溝跡出土遺物	111

第85図	SD5a・SD5b・SD6・SD7 溝跡	113
第86図	SD5b・SD7 溝跡出土遺物	115
第87図	SD12・SD13・SD14 溝跡	116
第88図	SD184 溝跡・SX19 性格不明遺構	117
第89図	SD144 溝跡出土遺物	119
第90図	西小屋館跡遺構確認調査区遺構配置図	120

第91図	[参考] 暦年較正年代グラフ	129
第92図	[参考] 暦年較正年代グラフ(カーブプロット図)	130
第93図	中世の出土遺物	133
第94図	西屋敷遺跡・西小屋館跡の区画施設	135
第95図	焼成遺構A類出土炭化物の暦年較正年代範囲	140

表目次

第1表	周辺の遺跡	3
第2表	基本層序	13
第3表	遺構観察表(1) 掘立柱建物跡(1)	121
第4表	遺構観察表(2) 掘立柱建物跡(2)	122
第5表	遺構観察表(3) 柱列跡	122

第6表	遺構観察表(4) 井戸跡	123
第7表	遺構観察表(5) 土坑	123
第8表	遺構観察表(6) 堀跡	124
第9表	遺構観察表(7) 溝跡(1)	124
第10表	遺構観察表(8) 溝跡(2)	125
第11表	遺構観察表(9) その他の遺構	125
第12表	試料一覧および ¹⁴ C年代	128
第13表	¹⁴ C年代と暦年較正年代	128

写真目次

写真1	湯坂山B遺跡第3a・b号竪穴住居跡	4
写真2	門田地区出土長頸壺	5
写真3	窪田遺跡SI101 竪穴住居跡	5
写真4	十郎田遺跡材木堀区画南東隅	6
写真5	都遺跡出土土器・軒平瓦	6
写真6	大六阿弥院如来坐像	6
写真7	我妻家住宅	7

写真8	西屋敷遺跡・西小屋館跡遠景(南から)	9
写真9	西屋敷遺跡近景(5区周辺、南から)	9
写真10	表土掘削作業(5区)	9
写真11	遺構確認作業(6区)	9
写真12	遺構の精査(5区)	10
写真13	遺構の精査(6区)	10
写真14	発掘調査成果見学会	12
写真15	発掘調査成果見学会	12
写真16	遺構実測作業(5区)	12
写真17	遺物実測作業	12

第1章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と地理的環境

宮城県南部の蔵王連峰東麓に位置する蔵王町は、東は村田町と大河原町、西は蔵王連峰をはさんで山形県、南は白石市、北は川崎町と境を接する（第1図）。町域は東西23km、南北13kmで面積は152.85km²を占め、海拔標高は最高点が西端の屏風岳で1,825m、最低点が東南部の松川と白石川の合流点で20mを測る。町域の西部が主に蔵王連峰に連なる山林原野で、東部の松川流域と円田盆地に田園地帯が形成されている。西部は蔵王国定公園に含まれ、遠刈田温泉などが蔵王観光の基地となっているほか、東部の丘陵部を中心に果樹園が営まれ、県内有数の果樹生産地となっている。

西屋敷遺跡は宮城県刈田郡蔵王町大字小村崎字西屋敷・宮前地内に所在する。蔵王町役場の北東約4.1kmに位置し、円田盆地北西部にある標高94mの低平な舌状丘陵上に立地する（第2・3図）。

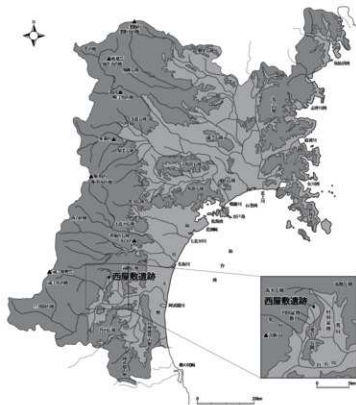
円田盆地は松川の支流である藪川をはじめとする複数の中小河川によって形成された沖積地である。藪川は盆地中央部から東縁に沿って緩やかに蛇行しながら南流し、盆地周囲の丘陵からは無数の小規模な沢が流入している。盆地は南をのぞく三方を丘陵で囲まれており、盆地底面の範囲は東西約1.2km、南北約3.5kmにおよぶ。藪川流域は自然堤防が未発達で、盆地底部に湿地帯を形成しており、盆地の南側は松川との合流地点に向かって開けている。

円田盆地を三方から囲む丘陵のうち、北側から西側にかけては高木丘陵と呼ばれ、蔵王山系の東麓部にあたる。東側は高木丘陵から細長く派生した愛宕山丘陵と呼ばれる小丘陵が南へ延び、さらに東側の村田盆地との地形的な境界をなしている。標高は高木丘陵東端部で約130m、愛宕山丘陵頂部で約170m、盆地南端で約80mである。

愛宕山丘陵はやや急な傾斜をもつ丘陵地で、小規模な沢によって開析された比高差の大きい舌状の小丘陵が連続的に連なっている。盆地東縁に連なるこの舌状小丘陵上には南部で中沢A遺跡、立目場遺跡、台遺跡、塩沢北遺跡などが立地



第1図 蔵王町の位置

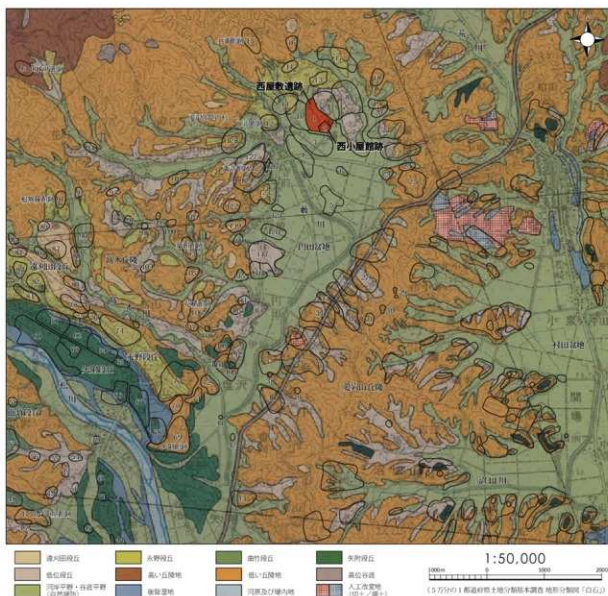


第2図 遺跡の位置と周辺の地形

し、北部では盆地底面との比高差が小さい丘陵末端部に車地蔵遺跡、鍛冶屋敷遺跡などが立地する。一方、高木丘陵は比較的なだらかな傾斜をもち、特に盆地北部では丘陵端部が緩やかに標高を減じつつ盆地中央部まで達している。盆地北西縁に連なるこの低平な丘陵上には本遺跡のほか六角遺跡、十郎田遺跡、窪田遺跡、都遺跡などが立地し、西縁の中南部では諏訪館前遺跡、宋膳堂遺跡などが立地する。

近代以降の明治40年代及び昭和20年代以降に行なわれた耕地整理の結果、遺跡の立地する地形の多くが消失し、円田盆地の大半は水田地帯となった。特に昭和37-38年の敷川堤防改修工事とは場整備以降、ほぼ現在の景観が形成された。耕地整理以前の明治40年の帝国陸地測量部による測量図からは、遺跡の多くが低平な丘陵や微高地上の畑地として利用されていたことが窺い知られる（宮城県教育委員会2003）。このため、現在の盆地底面は地形的な変化に乏しい景観を呈しているが、本来は遺跡が立地する微高地と小規模な沢状の低地とが複雑に入り組んだ景観であったと考えられる。

本遺跡は、盆地西側の高木丘陵の裾部から派生し、盆地北縁から南東方向に細長く延びる舌状丘陵上に立地する。舌状丘陵基部の北東側には戸ノ内遺跡、先端部の南側には西小屋館跡が隣接し、谷地状地形を挟んだ南西側の舌状丘陵上には前戸内遺跡、十郎田遺跡が隣接する。前述の耕地整理以前の測量図によれば、西小屋館跡付近は三等道路（里道）の村田道と足立道が分岐する地方交通の要衝であった。



第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

蔵王町における周知の遺跡は現在190か所を数える。その多くは町域の東部に分布し、蔵王連峰から派生する丘陵部と青森山東麓部、松川流域と円田盆地の平野部などに立地する（第3図・第1表）。旧石器時代から近世に至るまで多数の遺跡が形成されているが、大略的に見て縄文時代の遺跡は蔵王連峰の東麓部から延びる高木丘陵上と青森山東麓部の標高150-250m付近に、弥生時代中期以降の遺跡は円田盆地とその周辺の丘陵辺縁部の標高80-100m付近に立地する傾向が見られる。

第1表 周辺の遺跡（番号は第3図に対応）

番号	遺跡名	種別	時代・中世	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	西阿敷遺跡	集落・散布地	古代・中世		65	愛宕山遺跡	散布地	縄文前・後・古代
2	西小塚遺跡	城郭	中世		66	西浦遺跡	集落・散布地	縄文前・後・古代
3	十郎山遺跡	集落・散布地	縄文・古墳・奈良・平安・中世		67	赤津遺跡	散布地	縄文前・後・弥生・古墳・古代
4	百田遺跡	集落・散布地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世		68	下野井遺跡	散布地	奈良・平安
5	都部遺跡	集落・散布地	縄文後・弥生・古墳・奈良・平安		69	矢野原遺跡	城郭	中世
6	新城遺跡	散布地・城郭	弥生・平安・中世		70	下木山遺跡	散布地	縄文前・弥生・古代
7	八向遺跡	集落・散布地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安		71	野沢遺跡	散布地	弥生
8	原遺跡	散布地	縄文・古代		72	天上古墳群	古墳	弥生前・中・弥生・古墳・古代
9	戸ノ内遺跡	集落・散布地	弥生・平安・中世		73	上野遺跡	散布地	縄文前・弥生・平安
10	前ノ内遺跡	集落・散布地	旧石器？・縄文後・奈良・平安・中世		74	木本遺跡	散布地	縄文中
11	稲佐林遺跡	散布地	縄文早期・古墳・奈良・平安		75	高木遺跡	散布地	縄文
12	平子遺跡	城郭	中世		76	観音山遺跡	散布地	縄文中・弥生・古代
13	後野遺跡	散布地	古代		77	上木本人遺跡	散布地	縄文前・弥生・古代
14	大久保遺跡	集落	古代		78	上木木遺跡	散布地	縄文前・中・古代
15	百能遺跡	城郭	中世		79	結城山遺跡	散布地	縄文
16	野野遺跡	散布地	古代		80	土橋遺跡	散布地	縄文後・弥生
17	蔵王坂遺跡	散布地	縄文・奈良・平安		81	上木木遺跡	散布地	縄文中・中
18	清上遺跡	散布地	古代		82	上木木遺跡	散布地	縄文前・中
19	三の輪遺跡	散布地	古墳・奈良・平安		83	上木木遺跡	散布地	縄文中
20	中地遺跡	散布地	近世・古代		84	八幡平遺跡	散布地	縄文前・中・古代
21	蔵王阿敷遺跡	散布地	縄文中・弥生・古代		85	八山遺跡	散布地	縄文前・弥生・古代
22	上栗の木古遺跡	散布地	古代		86	平代木古遺跡	散布地	縄文前・後・古代
23	山崎遺跡	散布地	縄文早期		87	高田山古遺跡	集落	縄文前・弥生
24	中栗の木古遺跡	散布地	縄文・弥生・古代		88	高田山古遺跡	集落	縄文中・弥生
25	北野山遺跡	散布地	縄文・弥生		89	柳原古遺跡	散布地	縄文前・弥生・古代
26	赤毛上遺跡	集落	弥生・平安・中世		90	円田入遺跡	散布地	縄文前・中
27	大輪遺跡	集落	縄文後・弥生・古墳・平安		91	赤松原遺跡	城郭	中世
28	屋木ノ内遺跡	集落	弥生・古代		92	円田入遺跡	散布地	縄文
29	夕間古墳群	古墳	古墳		93	西方殿遺跡	城郭	中世
30	古家神社古墳	古墳	古墳		94	野沢遺跡	散布地	縄文
31	愛宕山遺跡	散布地	弥生		95	二本榎人遺跡	散布地	縄文早期
32	春日山遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳		96	八古木遺跡	散布地	縄文
33	中沢山遺跡	散布地	弥生・古墳・古代		97	山中遺跡	散布地	平安
34	中沢人遺跡	散布地	縄文早期・弥生・古墳・古代・中世		98	青木遺跡	散布地	古代
35	伊原沢下遺跡	集落	古墳		99	丸山人遺跡	散布地	古代
36	湯川上遺跡	集落	弥生・古墳・平安		100	丸山遺跡	散布地	縄文
37	石部遺跡	散布地	弥生・古墳・平安・中・近世		101	二本榎古遺跡	散布地	縄文・平安
38	西殿古墳	古墳	古墳		102	野沢遺跡	散布地	縄文中
39	中阿敷古墳	古墳	古墳		103	築野遺跡	城郭	中世
40	大山遺跡	集落	縄文早期・弥生・古墳前		104	貝の窪遺跡	散布地	縄文後・弥生
41	鈴掛神社古墳	古墳？	古墳？		105	鳥山遺跡	散布地	縄文中・古代
42	豊田遺跡	散布地	古墳		106	在幡遺跡	城郭	中世
43	赤山遺跡	集落	縄文早期・平安		107	見塚遺跡	散布地	縄文
44	池田遺跡	散布地	縄文前		108	八幡山古墳群	古墳	古墳
45	小塚遺跡	散布地	縄文早期		109	土ヶ石遺跡	散布地	弥生・古代
46	久山遺跡	散布地	縄文後		110	戸ノ内内遺跡	散布地	縄文前・中・弥生・古墳・平安・中世
47	山竹小塚遺跡	城郭	中世		111	安原寺古墳	古墳	古墳
48	浅島山遺跡	散布地	縄文後・古代		112	安原寺遺跡	散布地	弥生・古墳・平安
49	戸塚寺遺跡	散布地	縄文後・古代		113	寺坂遺跡	散布地	平安
50	砂見遺跡	散布地	縄文後		114	堀の内遺跡	集落・散布地	縄文・弥生・古墳・古代
51	下野遺跡	散布地	縄文中		115	木本遺跡	散布地	弥生・平安
52	上野遺跡	散布地	縄文後		116	山中遺跡	集落・散布地	弥生・古墳
53	清木遺跡	散布地	縄文・弥生		117	木本古遺跡	集落・散布地	縄文前・弥生・古代・中世
54	日向原遺跡	散布地	縄文早期・弥生・古代		118	沢田遺跡	散布地	古代
55	八井遺跡	散布地	縄文後		119	北山遺跡	散布地	縄文前・弥生・古代
56	市ノ沢遺跡	散布地	弥生・古代		120	中野遺跡	集落・散布地	縄文前・中・弥生・平安・中・近世
57	新子ノ遺跡	散布地	縄文前・中・弥生・古代		121	望の丸遺跡	散布地	弥生・古墳・中世
58	馬場遺跡	散布地	縄文中		122	大輪内遺跡	散布地	弥生
59	白丸屋敷古墳	古墳	古墳		123	小高遺跡・経塚	散布地・経塚	縄文前・弥生・古代・中世
60	十文字遺跡	散布地	縄文中		124	諏訪原遺跡	散布地	弥生・古墳
61	曲木遺跡	散布地	縄文中		125	諏訪原遺跡	城郭	中世
62	寺門前遺跡	散布地	縄文中・後		126	諏訪原城六郎殿	古墳？	古墳？
63	谷津遺跡	散布地	縄文中・弥生		127	諏訪原前遺跡	集落・散布地	縄文前・弥生・古墳・平安
64	内蔵山遺跡	集落・散布地	縄文中・弥生・平安		128	久六遺跡	散布地	縄文

こうした様相の違いは、概ね当時の人びとの生業形態の変化に伴うものと考えられる。縄文時代の食料獲得の場は主に丘陵地に繁茂した森林であり、弥生時代中期以降の食料生産の場は低湿地に作られた水田であったことを示している。後述するが、蔵王町内における稲作の開始を裏付けるものとしては、稲穀の圧痕がある弥生土器片や、古墳時代の水田跡がある。なお、縄文時代の集落が低湿地の周辺に作られることはなかったが、低平な丘陵と湿地の入り組んだ円田盆地北部の一带は、縄文時代には狩猟の場として利用されていた。以下、各時代・時期における蔵王町周辺の考古学的様相を概観する。

(1) 旧石器時代

宮地区の持長地遺跡、鉄砲町遺跡、明神裏遺跡、小村崎地区の前戸内遺跡が知られている。持長地遺跡では黄褐色ローム漸移層下部よりナイフ形石器が単独出土し（宮城県教育委員会 1980）、鉄砲町遺跡では彫刻刀形石器が採集されている。これらは後期旧石器時代後半期のものと考えられる。明神裏遺跡では細石刃と槍先形尖頭器、前戸内遺跡では槍先形尖頭器が採集されており、後期旧石器時代終末期に位置づけられる可能性がある。しかし、いずれも単独出土しないしは採集資料のため、明確な時期や遺跡の性格については不明な点が多い。なお、宮地区の二屋敷遺跡では石刃状剥片を素材としたナイフ形石器に類似する石器が出土しているが、本地域では縄文時代中期末から後期初頭にかけて山形県寒河江川流域の集落から珪質頁岩製の石刃が交易品として搬入されたことが分かっており、層位的裏付けを伴わない石刃製石器の旧石器としての時期判定には注意を要する。

(2) 縄文時代

草創期については明確な遺跡が発見されていない。周辺地域でも白石市福岡深谷地区の高野遺跡で槍先形尖頭器が、同大鷹沢地区の小管遺跡、戸谷沢遺跡で局部磨製石斧が採集されている程度で、具体的な様相は明らかでない。早期の遺跡には宮地区の明神裏遺跡、沢入D遺跡、円田地区の手代木遺跡、三本根A遺跡、遠刈田地区の北原尾遺跡、前期の遺跡には宮地区の長峰遺跡、八幡平遺跡、円田地区の入山遺跡、愛宕山遺跡、中期の遺跡には宮地区の上原田遺跡、円田地区の高木遺跡、鞆堂山遺跡、湯坂山B遺跡、後期の遺跡には宮地区の二屋敷遺跡、山田沢遺跡、一本木遺跡、円田地区の西浦B遺跡、晩期の遺跡には宮地区の別当遺跡、願行寺遺跡、沢北遺跡、曲竹地区の鍛冶沢遺跡などがある。

鞆堂山遺跡では主に大木8 b 式期の竪穴住居跡5軒、貯蔵穴23基、土坑竪1基などが発見され、竪穴住居跡は貯蔵穴・柱穴群を挟むように分布していた。湯坂山B遺跡では主に大木9式期の竪穴住居跡13軒、貯蔵穴8基などが発見され、多量の土器・石器と土笛が出土している。竪穴住居跡は複式炉を伴うもので、直径9mに及ぶ大型のものもみられる（写真1）。西浦B遺跡では後期初頭～前葉前半期の貯蔵穴・掘立柱建物跡群が発見されている（蔵王町教育委員会 2011a）。二屋敷遺跡では中期末の竪穴住居跡5軒、後期初頭～前葉の炉跡2基、土器埋設遺構4基、配石遺構などが発見され、遺物包含層から多量の遺物が出土している（宮城県教育委員会 1984）。願行寺遺跡では晩期の屈折土偶が採集されている。鍛冶沢遺跡では大洞BC-C1式期の土器埋設遺構や弥生時代初頭の再葬墓と、その周囲に弧状に配置された掘立柱建物跡群が発見されている（宮城県教育委員会 2010）。

遺跡の分布状況を見ると、早期の遺跡は小規模なものが多く、高木丘陵から青麻山東麓部にか



写真1 湯坂山B遺跡第3a・b号竪穴住居跡（大木9式期）

ての広範囲に点在し、遠刈田地区から白石市福岡深谷地区にかけての不忘山東麓部にまとまった分布域を形成する。前期の遺跡数はやや少なくなるが、高木丘陵上と青麻山東麓部に点在する。中期から後期にかけては高木丘陵上に大きな集落が形成され、集中的な遺跡分布域となっている。一方、青麻山東麓部では後期になると多くの集落が形成され、晩期まで継続する大規模な集落がみられる。

このように、時期による分布域の移動と、微地形選択の志向性に変化は見られるものの、縄文時代のおよそ1万数千年間を通して本地域における当時の人びとの生活の中心は蔵王山東麓部から延びる高木丘陵上と、青麻山東麓部にあったと言って良い。なお、円田盆地北部の小村崎地区にある六角遺跡、原遺跡、平沢地区の中組遺跡などでは縄文時代のものと考えられる落とし穴状土坑が確認され、低湿地に面した低平な丘陵裾部が狩猟の場として利用されていたことが分かっている。

(3) 弥生時代

縄文時代晩期から継続する宮地区の沢北遺跡、曲竹地区の鍛冶沢遺跡、これに後続する埴形囲式期の遺跡には宮地区の長峰遺跡、円田地区の清水遺跡、西浦遺跡、塩沢地区の宋膳堂遺跡、東根地区の立目場遺跡、円田式期の遺跡には東根地区の大橋遺跡、塩沢地区の台遺跡、上野遺跡、塩沢北遺跡、小村崎地区の都遺跡、円田地区の西浦遺跡、十三塚式期の遺跡には東根地区の愛宕山遺跡、立目場遺跡、天王山式期の遺跡には東根地区の愛宕山遺跡、塩沢地区の天王遺跡、平沢地区の赤鬼上遺跡などがある。

埴形囲式期以前の遺跡は、鍛冶沢遺跡などのように縄文時代晩期の立地を踏襲しながら、一部円田盆地周縁部の丘陵に立地している。円田式期になると円田盆地周縁部に急速に展開し、遺跡数も急増する。遺構が調査された例は皆無であるが、稲作が受容されたと考えるのに十分な変化と言える。円田地区では伊東信雄氏（1955）による「円田式」命名の標識資料となった長頸壺が出土している（写真2）。十三塚式期から天王山式期にかけてはこうした流れを引き継ぐ一方、愛宕山遺跡のように標高の高い丘陵上に立地する遺跡も見られる。なお、都遺跡（円田式、蔵王町教育委員会2005）、大橋遺跡（天王山式、宮城県教育委員会1980）で出土した土器片の表面には籾殻の圧痕が観察されている。



写真2 円田地区出土長頸壺

(4) 古墳時代

前期（塩釜式期）の遺跡には東根地区の大橋遺跡、伊原沢下遺跡、円田地区の堀の内遺跡、中期（南小泉式期）の遺跡には小村崎地区の都遺跡、窪田遺跡、東根地区の中沢A遺跡、台遺跡があるが、後期（住社式期）の遺跡は明瞭には確認されていない。高塚古墳には宮地区の明神裏古墳、東根地区の夕向原古墳群、古峯神社古墳、塩沢地区の宋膳堂古墳、天王古墳、西脇古墳、中屋敷古墳、八幡山古墳がある。

古墳時代の遺跡は弥生時代の立地を踏襲し、円田盆地周縁部に集中する。前期の大橋遺跡、伊原沢下遺跡は宮城県内における塩釜式最古段階（宮城県教育委員会1980）、中沢A遺跡は南小泉式最古段階の遺跡として知られ、当該地域が周辺に先駆けて新しい文化要素を受容したことが窺える（蔵王町教育委員会2007）。六角遺跡では塩釜式期、立目場遺跡では塩釜式・南小泉式期、窪田遺



写真3 窪田遺跡 S101 竪穴住居跡（南小泉式期）

跡（写真3）などでは南小泉式期の竪穴住居跡が調査されている。前期の堀の内遺跡では、後北C2-D式に位置づけられる縄文土器が出土し（蔵王町教育委員会1997）、北方地域との関係性が窺われる。

また、盆地を取り囲む丘陵上に多くの高塚古墳が築かれている。古峯神社古墳は主軸長38m、夕向原1号墳は主軸長57mの前方後円墳（藤沢2000）、宋膳堂古墳は直径約30mの円墳で、墳輪が採集されている。明神裏古墳は昭和31年に発掘調査され、凝灰岩板石を用いた箱式石棺が確認されている。

（5）古代

飛鳥・奈良・平安時代の遺跡として100か所以上が知られ、このうち発掘調査が行なわれた遺跡としては宮地区の二屋敷遺跡、矢附地区の東山遺跡、塩沢地区の塩沢北遺跡、円田地区の堀の内遺跡、平沢地区の窪田遺跡、都遺跡、赤鬼上遺跡、小村崎地区の戸ノ内遺跡、六角遺跡、十郎田遺跡、前戸内遺跡などがある。また、現在その所在を確認できないが平沢地区の諏訪館横穴墓群がある。

当該期の遺跡は円田盆地周辺に多く分布する一方、町東部の丘陵麓部の広い範囲に分布するようになり、生活領域が拡大したことが窺われる。近年の調査成果を概観すると、十郎田遺跡では7世紀中頃～後半の材木堀による区画施設を伴う集落跡（写真4、蔵王町教育委員会2011d・e）、六角遺跡では8世紀前半の大溝による区画施設を伴う集落跡を確認した（蔵王町教育委員会2008）。都遺跡では8世紀前半の多賀城創建期（奈良時代初頭）に位置づけられる軒平瓦が採集されているのをはじめ、大型の掘立柱建物跡と材木堀による区画施設が確認されており、官衙関連施設が営まれていた可能性がある（写真5、蔵王町教育委員会2005）。これらの集落では、当時の在地土器とは異なる特徴を持つ関東系土器を保有しており、六角遺跡では関東型カマドをもつ竪穴住居跡も確認されている。関東系土器は窪田遺跡、堀の内遺跡などでも出土している（蔵王町教育委員会1997・2009a・2011b）。

また、前戸内遺跡では官衙風に配置された平安時代の掘立柱建物跡群が確認され、墨書土器が出土している（蔵王町教育委員会2009c）。東山遺跡では、平安時代の竪穴住居跡と土器溜遺構が確認され、灰軸陶器、転用碗のほか、墨書土器が多量に出土している（宮城県教育委員会1981）。

このほか、平沢地区に現存する丈六阿弥陀如来坐像（写真6、県指定文化財）は平安時代末期の作風とされ、阿弥陀如来を信仰し東北各地に造立したとされる奥州藤原氏との関係性が窺われる。また、丈六阿弥陀堂があったとされる平沢字丈六地区には、阿弥陀堂の参道杉並木として植えられた杉のうち一本が現生し、平沢弥陀の杉（県指定天然記念物）と呼ばれている。



写真4 十郎田遺跡材木堀区画南東隅（7世紀中頃～後半）



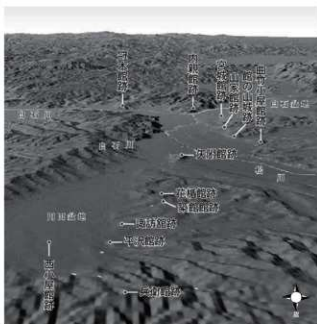
写真5 都遺跡出土土器（7世紀中頃～後半）・軒平瓦（8世紀前半）



写真6 丈六阿弥陀如来坐像（12世紀・保護制）

(6) 中世

城館跡に宮地区の宮城館跡、山家館跡、館の山城跡、曲竹地区の曲竹小屋館跡、円田地区の花橋館跡、棚村館跡、小村崎地区の西小屋館跡、兵衛館跡、平沢地区の諏訪館跡、平沢館跡、矢附地区の矢附館跡などがあり、町東部の丘陵上に多くの城館が築かれている(第4図)。また、山家館跡に隣接する持長地遺跡では掘立柱建物跡群に伴って常滑系陶器、馬具、鉄鈴、刀子などが出土し、鎌倉-南北朝時代の武士の屋敷地と考えられている(宮城県教育委員会1980)。館の山城跡に隣接する青竹遺跡では掘立柱建物跡群が確認され、館と一体的に機能した施設の可能性が指摘されている(蔵王町教育委員会2009b)。小村崎地区の十部田遺跡では多数の掘立柱建物跡と井戸跡、溝跡などが確認され、鎌倉時代の屋敷地と考えられている。



第4図 円田盆地周辺の中世城館(鳥瞰図)

このほか、宮地区の願行寺遺跡は中世-近世の寺院跡と推定されている。安永風土記に「役小角叔父山之坊願行寺跡」とあり、「宮本坊蓮蔵寺書出」によれば奥州藤原氏の保護を受けて最盛期には四十八坊を有したという。また、前述の白九頭龍古墳には、文治の役(1189)で源頼朝軍に討ち取られた藤原国衡の遺骸を埋葬して弔ったとの伝説が残り、墳頂部には白九頭龍大明神の祠が建てられている。

(7) 近世以降

小村崎地区の車地蔵遺跡では掘立柱建物跡、区画溝跡、水場遺構などが確認され、近世の有力者層の屋敷地の一部と考えられる(蔵王町教育委員会2006)。伊達家家臣の高野家が拝領した平沢地区の平沢要害跡は後世の改変で遺構が現存しないが、江戸期の絵図に本丸・二の丸・水堀と、南側に屈折する大手が見え、小規模ながらも近世城郭のような構造が窺える。また、遠刈田地区の岩崎山金竈跡では戦国末期には採掘が開始されていたとみられ、江戸初期には仙台藩主伊達家の命により採掘されていた。

現存する近世の建造物としては、平沢地区の日吉神社本殿(江戸中期)、宮地区の刈田嶺神社本殿(江戸中期、県指定文化財)、曲竹地区の我妻家住宅(写真7、江戸中期、国指定重要文化財)、小村崎地区の奥平家住宅(江戸後期、町指定文化財)などがある。日吉神社は高野家の領地替えの時に伊達部より遷座され、刈田嶺神社は刈田郡総鎮守として白石城主片倉家の保護を受けた。

また、近世には奥州街道が宮地区を通り、さらに宮宿から分かれて永野宿、猿鼻宿を経由し、四方峠、笹谷峠を越えて山形へ至る羽前街道が通っていた。平沢地区には羽前街道の古道の一部が保存され(旧羽前街道保存地区)、藩政時代の街道の景観を今に伝えている。

近代の遺構としては遠刈田地区の遠刈田製鉄所高炉跡などがある。遠刈田製鉄所高炉は明治時代後期に建設されたもので、近代製鉄遺構としては国内で唯一、基礎部分が現存している。



写真7 我妻家住宅(宝暦3年[1753年]建築)

第2章 調査に至る経緯

蔵王町北東部の円田盆地に広がる水田地帯を対象とした経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）では、昭和63年度に盆地南部（円田1期地区）の事業計画が策定され、同年に埋蔵文化財保存協議が実施された。この結果を受け、同年から平成2年度にかけて事業実施区域内に存在する埋蔵文化財包蔵地の遺構確認調査および事前調査が宮城県教育庁文化財保護課により実施された（宮城県教育委員会1989・1990・1991）。一方、盆地中・北部（円田2期地区）の事業計画は平成8年度に策定され、平成12年度には事業年次計画が提示された。約1,325,000㎡に及ぶ広大な事業実施予定区域には多数の埋蔵文化財包蔵地が含まれていたことから、平成8年度より文化財保護側の宮城県教育委員会、蔵王町教育委員会と原因者側の宮城県大河原地方振興事務所、蔵王町土地改良区の四者による埋蔵文化財保存協議が開始された。

平成11年度の協議において事業実施区域内における埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布調査が必要であるとの判断がなされたことを受けて、平成12年度に蔵王町教育委員会が分布調査を実施した結果、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲が大きく広がることが判明した。この結果を基に再協議を実施し、埋蔵文化財包蔵地が破壊される面積をできるだけ少なくするよう事業計画を大幅に見直すことが決定した。平成13年度には大河原地方振興事務所より、水田および畑地となる部分については、地下の遺構を保護するよう適宜盛土を行なうとともに、幹線農道以外の作業用道路については未舗装の砂利道として事前調査対象となる破壊範囲をできるだけ減少させる見直し案が提示され、合意に達した。

平成13・14年度には宮城県教育庁文化財保護課と蔵王町教育委員会によって事業実施区域内の遺構確認調査が実施された（宮城県教育委員会2002・2003）。平成12年度の分布調査で遺物の分布が確認された範囲を中心とした幅約2mのトレンチ333か所、計11,669㎡の調査により、事業実施区域内の遺構の分布状況が明らかとなった。この結果を踏まえた協議により、遺構の存在する部分については基本的に盛土による現状保存を行ない、計画田面が遺構面よりも下がる切土部分と、道路・水路の建設に伴って遺構面が掘削される部分について事前調査を実施すること、道路のうち未舗装の砂利道とする計画で遺構面に掘削が及ばない範囲については確認調査を実施した上で盛土による現状保存とすることが決定した。平成14年度には事業実施区域のうち県道の南側部分を平成15・16年度に、北側部分を平成17-21年度に順次施工する事業計画が提示され、これに先立って平成15年度に南側部分を、平成17-20年度に北側部分を対象とする計14遺跡の事前調査計画が策定された。なお、その後の事業計画見直しなどにより、北側部分の調査年度については平成23年度まで延長することで合意した。

蔵王町教育委員会は宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て、都遺跡、窪田遺跡（南部）、新城館跡（H15・16年度、蔵王町教育委員会2005）、車地蔵遺跡、鍛冶屋敷遺跡、原遺跡、上葉の木沢遺跡、中葉の木沢遺跡（H17年度、蔵王町教育委員会2006）、六角遺跡（H18・19年度、蔵王町教育委員会2008）、戸ノ内遺跡（H19・20年度、蔵王町教育委員会2009a）、窪田遺跡（北部、H20年度、蔵王町教育委員会2011b）、十部田遺跡（H19・20年度、蔵王町教育委員会2011d・e）の発掘調査を実施してきた。

本書で報告するのは、平成21年度に実施した西屋敷遺跡の事前調査と確認調査、および暗渠排水設備の施工に伴い平成22年度に実施した西小屋館跡の確認調査の結果である。

なお、このほかに前戸内遺跡（H20・21年度）、磯ヶ坂遺跡（H21年度）、六角・原遺跡（集落道部分、H23年度）の発掘調査を実施している。これらについては、平成24年度までに順次発掘調査報告書を刊行して本事業計画にかかわる遺跡の事前調査を終了する計画となっている。

第3章 調査の方法と経過

本遺跡は、円田盆地西側の高木丘陵の裾部から派生し、盆地北縁から南東方向に細長く伸びる低平な舌状丘陵上に立地する。西小屋館跡の西辺を区画する土塁の西側に位置している。遺跡の現況は畑および水田で、地表面に遺物の散布が見られた。

平成8年度に開始された県営ほ場整備事業計画に伴う埋蔵文化財保存協議（事業主側：宮城県大河原地方振興事務所・蔵王町土地改良区、文化財保護側：宮城県教育委員会・蔵王町教育委員会）において本遺跡範囲のほぼ全域が事業計画範囲に含まれることが判明したため、遺跡範囲における遺構分布状況と遺構面深度の把握を目的とした綿密な遺構確認調査を平成14年度に実施した。

この結果、南東方向に緩く傾斜する舌状丘陵の南西側平坦面（東西約200m、南北約300m、標高約93-99m）のうち西小屋館跡に隣接する南東部で中世に属する可能性のある掘立柱建物跡6棟以上のほか、溝跡38条、井戸跡1基、土坑6基などが確認された。また、西小屋館跡の西辺土塁の西側隣接地で大溝が確認された。堆積土から中世陶器が出土し、西小屋館跡の墟に相当するものと予想された。

平成17年度には最終的な事業設計案が提示され、田面となる部分は原則として盛土によって遺構面を保護し、止むを得ず切土が発生する道路・水路の予定範囲について事前調査を実施して文化財保護法上必要な措置としての記録保存を図るという基本方針で合意に達した。

本遺跡の事前調査については、平成21年度に業務委託契約（委託者：宮城県大河原地方振興事務所、受託者：蔵王町）を締結し、実施する運びとなったものである。

発掘調査は、道路・水路の整備によって遺構面が削平される範囲を対象としたものである。遺跡範囲



写真8 西屋敷遺跡・西小屋館跡遠景（南から）



写真9 西屋敷遺跡近景（5区周辺、南から）



写真10 表土掘削作業（5区）



写真11 遺構確認作業（6区）

内に計画された水路・作業道予定地に1-6区を設定し、順次調査を実施した(第5図)。確認した遺構のうち、工事で掘削の及ばない範囲(主に作業道予定地)については遺構の分布状況を記録するに留め、工事による破壊を免れない範囲(主に水路予定地)について遺構の精査を実施した。調査期間は平成21年4月16日-9月30日までの約5.5か月間を要した。調査面積は、事前調査分約40249㎡、確認調査分約2190.6㎡の合計約6.215㎡に及んだ。

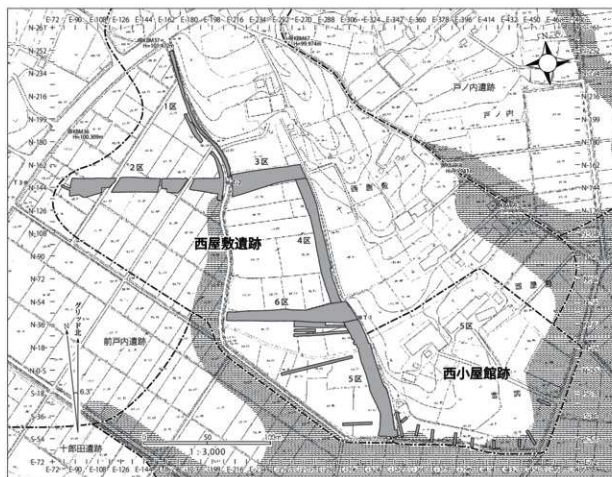
発掘調査では重機による表土除去の後、手作業による遺構確認と遺構精査を行なった。確認した遺構は掘立柱建物跡43棟、柱列跡26条、井戸跡8基、土坑33基、堀跡1条、溝跡62条、水溜め状遺構4基、焼成遺構13基、性格不明遺構2基、柱穴多数である(第6図)。本発掘調査の測量基準点は作業道計画路線上に打設された工事用基準杭を機械設置点および方位視準点として使用し、測量基準線に



写真12 遺構の精査(5区)



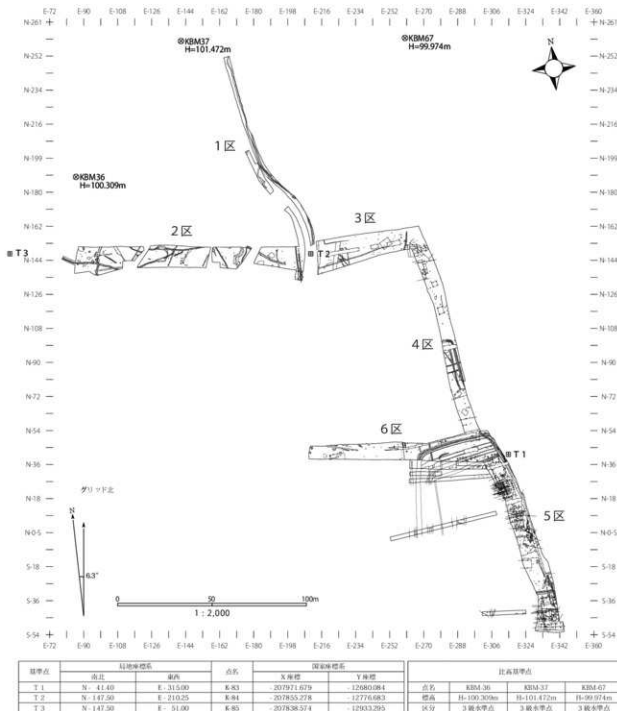
写真13 遺構の精査(6区)



第5図 現況測量図・調査区配置図

平行・直交する3mグリッドを設定した(第6図)。図面についてはトータルステーションを用いて設定した3mグリッドを利用してすべて手実測で作成し、遺構は必要に応じて1/20縮尺の平面図・断面図を作成した。また、デジタル一眼レフカメラおよび35mmモノクロームフィルムを用いて、必要に応じて遺構の検出状況と土層断面、完掘状況、遺物の出土状況および調査区全景などの記録写真を撮影した。デジタルデータについてはDVD-ROMに記録して保管した。出土遺物は調査区および遺構、出土層別別に取り上げた。

調査期間中の平成21年6月13日には住民向けの発掘調査成果見学会を開催し、町民および県内研究者など約50名の参加があった。見学会では本遺跡(5区)のほか、並行して発掘調査を進めていた前戸内遺跡(2区)の発掘調査現場と出土遺物を公開して調査成果の概要を説明した。



第6図 調査区設定図と主要な遺構の分布

また、平成22年度には本遺跡東側に隣接する西小屋館跡の水田で暗渠排水設備の施工計画が示されたことを受け、計画地約2,000㎡を対象に確認調査を実施した。調査は平成22年12月16日～24日に実施し、幅約1.6mのトレンチ10か所、計165㎡の調査で館跡南辺を区画する堀跡などを確認した。

整理作業は平成21年度に当該年度調査成果の基礎整理のための業務委託契約を締結し、平成21年11月2日～平成22年3月25日の約5か月間の工程で実施した。本遺跡の調査成果については出土遺物の洗浄と注記、接合と修復の作業を実施したほか、図面と写真などの記録類の基礎的な整理作業を実施した。また、SX63・65・66・71焼成遺構出土炭化物の一部について、株式会社加速器分析研究所に委託して放射性炭素年代測定を実施した。

平成23年度には平成19～21年度調査成果の本整理のための業務委託契約、および平成20・21年度調査成果の本整理と本書の作成のための業務委託契約を締結し、平成23年5月11日～平成24年3月23日の約10.5か月間の工程で実施した。本遺跡の調査成果については出土遺物の実測と写真撮影、遺物実測図・遺構図トレース、および本書の執筆・編集と印刷・製本を実施した。

遺構図については、手実測で作成した図面をイメージスキャナとビットマップ画像編集ソフトウェアを用いてデジタル画像化し、調査員が作成した遺構調書を参照しながらパソコン内でベクトル画像編集ソフトウェアを用いてデジタルトレースを行なった。遺物については、洗浄の後に注記を行ない、可能な限り接合と修復を行なった上で遺物調書を作成し、遺物の性格と残存状況などに応じて実測図あるいは拓本を作成した。遺物の実測図についてはすべて手作業により作成し、トレース図については手作業およびデジタルトレースにより作成した。実測図等の作成が終了した遺物については、デジタル一眼レフカメラを用いて写真撮影を行なった。

以上の経過を経て作成した遺構・遺物調書をもとに執筆した本文と、遺構・遺物の写真・図面等のレイアウトおよび編集作業をDTPソフトウェアを用いて実施し、本書の印刷・製本を完了した。



写真14 発掘調査成果見学会



写真15 発掘調査成果見学会



写真16 遺構実測作業（5区）



写真17 遺物実測作業

第4章 調査の結果

第1節 基本層序

調査区により立地条件と土層の堆積状況に違いが見られるが、基本層序はⅠ～Ⅷ層に大別される。Ⅰ層は表土ないしは現耕作土で、層厚は15～25cm程度である。Ⅱ層は旧表土ないしは旧耕作土で、層厚は10～30cm程度である。近世～近代の陶磁器片などを含む。Ⅲ層は黒ボクと称される黒色火山灰土で、層厚は20～40cm程度である。丘陵斜面部に堆積し、斜面下部では複数の再堆積層を形成する。Ⅳ層はⅢ層下部とⅤ層上部に形成された漸移層で、層厚は20cm程度である。Ⅴ層は黄褐色ローム層で、層厚は30～40cm程度、Ⅵ層は白色粘土層で、層厚は30～50cm程度である。Ⅶ層は猿岩と称される凝灰質シルトで、層厚は20～40cm程度である。川崎スコリア層(板垣1981)に相当するとみられる。Ⅷ層は砂礫を斜交ラミナ状に含む白色粘土層で、層厚は20cm以上である。

調査区内ですべての層序を確認した地点はなく、耕作および削平などによりⅠ層またはⅡ層の直下でⅢ層より下位の層を確認した地点が多かった。遺構はⅢ層上面あるいはⅣ～Ⅶ層の削平面で確認した。以上の状況を考慮すれば、確認した遺構の多くが本来はⅢ層上面から掘り込まれたものと考えられる。

第2表 基本層序

層名	土性	性格	層厚	備考
Ⅰ層	黒褐色シルト	表土・現耕作土	15-25cm	
Ⅱ層	黒色シルト	旧表土・旧耕作土	10-30cm	近世～近代の陶磁器片を含む
Ⅲ層	黒色シルト	黒色火山灰	20-40cm	古代～中世の遺構掘り込み面
Ⅳ層	暗褐色シルト	漸移層	20cm	
Ⅴ層	黄褐色粘土	黄褐色ローム	30-40cm	
Ⅵ層	白色粘土	水成堆積	30-50cm	
Ⅶ層	凝灰質シルト	川崎スコリア (Za-Kw)	20-40cm	2.6-3.1万年前
Ⅷ層	白色粘土	水成堆積	20cm-	砂礫を斜交ラミナ状に含む

第2節 発見された遺構と遺物

確認した遺構は、掘立柱建物跡43棟、柱列跡26条、井戸跡8基、土坑33基、堀跡1条、溝跡62条、水溜め状遺構4基、焼成遺構13基、性格不明遺構2基、柱穴多数である。遺構はすべての調査区で確認された。東側に西小屋館跡が隣接する5区から6区東部では、西小屋館跡に伴うとみられる堀跡のほか、複数時期にわたる区画溝跡と掘立柱建物跡を主体とする遺構群が特に密集して確認された。

遺物は主に井戸跡、土坑、溝跡などの遺構から出土し、中世陶磁器、近世陶磁器、ロクロ土師器、土師器、須恵器、かわらけ、瓦質土器、木製品、金属製品、弥生土器、石器などがある。中世陶磁器は堀跡・溝跡、ロクロ土師器は井戸跡・土坑、土師器は溝跡からややまとまって出土した。中世陶磁器は13世紀後半～15世紀前半頃(中世前半)、ロクロ土師器は9世紀中頃(平安時代前半)、土師器は7世紀末～8世紀初頭頃(飛鳥時代終末～奈良時代初頭)、須恵器は8世紀初頭頃、9世紀中頃のものがあがる。出土遺物の修復後総量は遺物収納コンテナ(44×60×15cm)で12箱分である。

出土した遺物の特徴と出土状況、放射性炭素年代測定結果などから、確認した遺構は7世紀末～8世紀初頭頃(飛鳥時代終末～奈良時代初頭)、9世紀中頃(平安時代前半)、13世紀後半～15世紀前半頃(中世前半)、16世紀頃(中世後半)に位置づけられるものがある。このうち、主体を占めるのは5区から6区東部で確認した13世紀後半～15世紀前半頃の区画溝跡と掘立柱建物跡を主体とする遺構群である。

以下、発見された遺構と遺物について調査区ごとに詳述する。

1.1区

遺跡範囲の北西部に位置し、丘陵麓に沿って東西50m、南北100mの範囲に延びる幅2-7mの調査区である。調査区内は南西へ向かって緩やかに傾斜する。遺構確認面は現地表面から深さ15-40cmのV-VI層上面である。遺構は土坑4基、溝跡3条を確認した(第8図、写真図版2)。

(1) 土坑

【SK94 土坑】(第7図、写真図版2)

〔位置〕1区南部/南西向緩斜面

〔重複〕SK94 = SD93

〔規模・形状〕SD93 溝跡の底面に掘られている。平面形が長軸116cm、短軸99cmの楕円形を呈し、断面形は深さ63cmの逆台形を呈する。底面は血状に窪んでいる。

〔堆積土〕黄褐色ロームブロックを含むオリーブ黒色粘質シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から磁器鉢が出土した。内外面に鉄軸を施している。

【SK95 土坑】(第7図、写真図版2)

〔位置〕1区南部/南西向緩斜面

〔重複〕SK95 = SD93

〔規模・形状〕SD93 溝跡の底面に掘られている。平面形が長軸75cm、短軸62cmの楕円形を呈し、断面形は

深さ21cmの皿形を呈する。底面は血状に窪んでいる。〔堆積土〕2層に細分される。1層は黄褐色ローム粒をごく少量含む黒褐色シルト、2層はφ3-5cmの礫を少量含む黒褐色砂で、いずれも自然流入土と考えられる。〔出土遺物〕なし

【SK96 土坑】(第7図、写真図版2・27)

〔位置〕1区南部/南西向緩斜面

〔重複〕SK96 = SD93

〔規模・形状〕SD93 溝跡の底面に掘られている。平面形が長軸62cm、短軸60cmの略円形を呈し、断面形は深さ97cmの逆台形を呈する。底面は凹凸が見られる。〔堆積土〕崩落のため作図できなかったが、2層に細分される。1層は砂・小礫を多量に含む黒褐色砂礫、2層は砂・小礫を含む黒褐色砂質シルトで、いずれも自然流入土と考えられる。

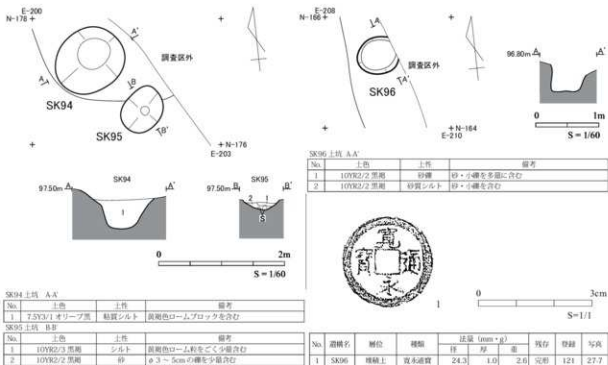
〔出土遺物〕堆積土から古銭(寛永通宝、第7図1)、陶器、瓦質土器、鉄鏝、鉄釘、煙管、不明銅製品が出土した。陶器は碗、甕または壺があり、いずれも灰釉を施す。瓦質土器は器種が不明で内面に炭化物の付着が見られる。煙管は銅製の雁首部分である。不明銅製品は薄い銅板を筒状に成形している。

【SK141 土坑】(第8図、写真図版2)

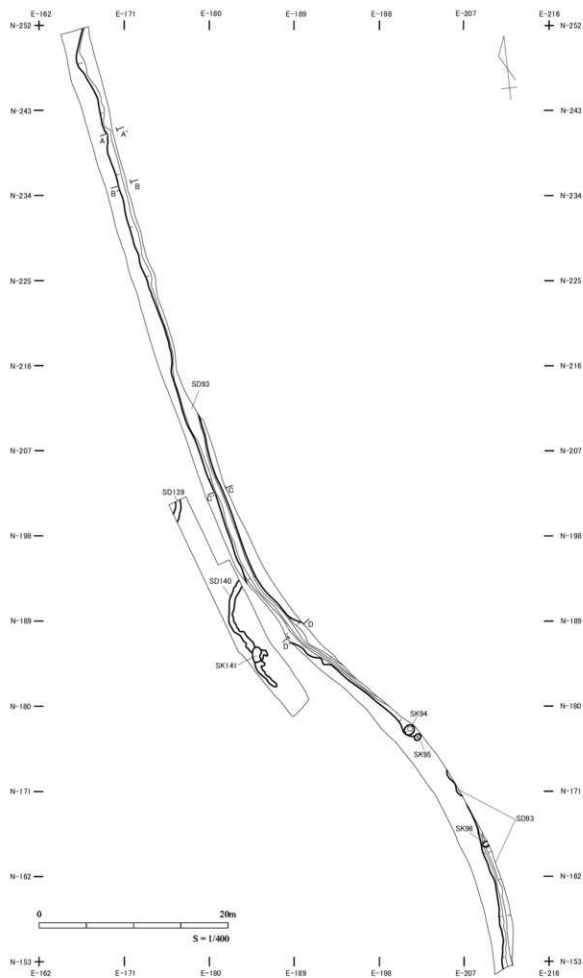
〔位置〕1区中央部/南西向緩斜面

〔重複〕SD140 → SK141

〔規模・形状〕平面形が長軸160cm、短軸90cmの不整楕円形を呈する。未精査である。



第7図 SK94・95・96土坑、SK96土坑出土遺物



第8図 1区遺構配置図

〔堆積土〕確認面はφ1cm以下の焼土ブロック・炭化物片を含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。〔出土遺物〕なし

(2) 溝跡

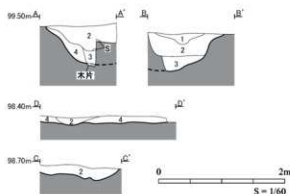
〔SD93 溝跡〕(第8-11図、写真図版2・27・28)

〔位置〕1区/南西向緩斜面

〔重複〕SD93 = SK94・SK95・SK96

〔規模・形状〕丘陵麓に沿ってやや蛇行しながら南北方向に延びる。長さ115.60mを確認し、さらに調査区外の南北へ延びている。南側は3区西端で確認したSD197溝跡と接続している可能性がある。上幅69-228cm、底幅10-125cmで、横断面形は深さ10-70cmの逆台形・皿形を呈する。

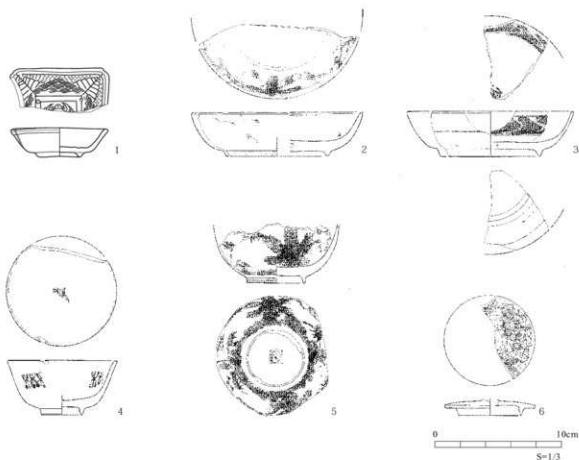
〔堆積土〕4層に細分される。砂・礫を多く含む黒褐色シ



SD93 溝跡 A.A, B.B, C.C, D.D

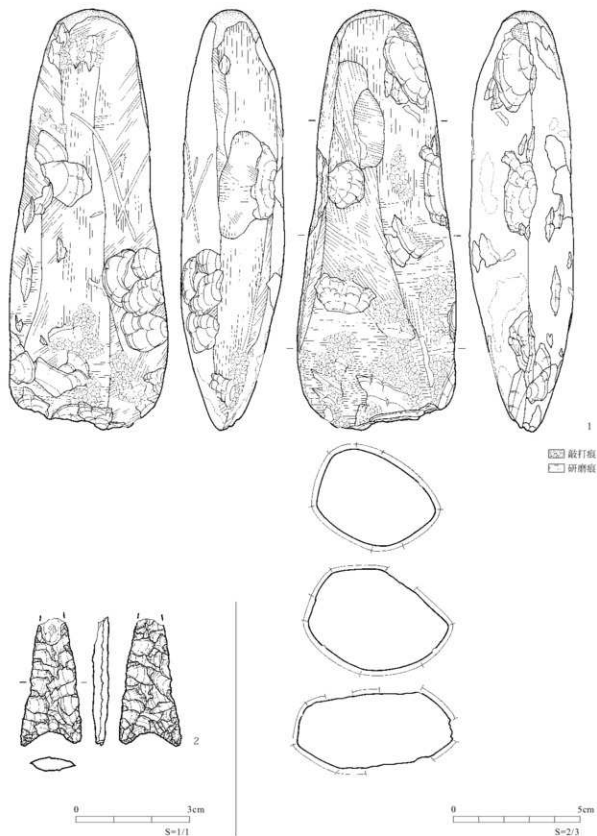
No.	上層	上層	備考
1	10YR2/2 黒層	シルト	均質土
2	10YR2/2 黒層	砂質シルト	砂粒を多数に含む φ3~8cmの礫を少量含む
3	10YR2/2 黒層	シルト質砂	φ1~15cmの礫、砂を多数に含む
4	10YR2/2 黒層	シルト	黄褐色ローム層を多く含む

第9図 SD93 溝跡



No.	遺物名	層位	種類	形制	特徴	部位	法量 (cm)			登録	写真
							上幅	底幅	高さ		
1	SD93	堆積土	縦筒 (白磁)	角小皿	内面: 高台部分から 内面: 空押し、透明釉、見込に銀華文 外口まじは肥後産 19世紀前半	11線~高台	(7.7)	(6.2)	2.3	090	27.2
2	SD93	堆積土	縦筒	皿	内面: 染付、透明釉、高台部分に砂付片、赤井文 内面: 染付、透明釉 肥前産 (波衣豆か) くらわんか手 17世紀末~18世紀前半	11線~高台	(13.6)	(8.3)	(3.3)	088	27.6
3	SD93	堆積土	陶胎染付付?	皿	内面: 染付、透明釉、内面: 染付銀華文、透明釉、見込に五弁花文 肥前産 17世紀末~18世紀前半	11線~高台	(13.2)	(8.0)	(3.6)	089	27.5
4	SD93	堆積土	縦筒	碗状横筒	内面: 11線部1線、染付、透明釉、銀華文 内面: 染付、透明釉、見込 に文様付片、銀華文、肥前産 19世紀前半~半	11線~高台	(8.7)	(3.3)	(4.4)	087	27.4
5	SD93	堆積土	縦筒	碗	内面: 染付、透明釉、高台内に角溝筋、高台部分に砂付片 内面: 透明釉、11線打ち欠きか 肥前産 17世紀末~18世紀後半	体~高台	-	(4.6)	(4.7)	091	27.3
6	SD93	堆積土	縦筒	鉢	内面: 染付、透明釉 内面: 透明釉	体~11線部	(7.2)	-	(1.3)	092	27.1

第10図 SD93 溝跡出土遺物 (1)



No.	遺構名	層位	種類	石材	特徴	質量 (mm・g)				保存	物番	写真
						長	幅	厚	重			
1	S003	埋藏上	磨製石斧	緑色片岩 または輝石	布巾織表材。両辺からの打撃による割離整形—敲打→研削 または射打	165.5	63.3	41.0	531.0	完形	103	28-1
2	-	表土	石鏝	輝緑白岩	凹縁無茎。両面に押打の痕による割物 先端部を破断による欠けはしけで欠陥	(34.0)	16.0	4.0	(1.9)	先端部欠陥	119	27-8

第11図 SD93溝跡出土遺物(2) 遺構外出土遺物

ルト～シルト質砂で、いずれも自然流入土と考えられる。[出土遺物] 堆積土から磁器皿(第10図2)・角小皿(第10図1)・碗(第10図5)・端反碗(第10図4)・蓋(第10図6)・陶胎染付とみられる皿(第10図3)・磨製石斧(第11図1)が出土した。磁器皿(第10図2)は肥前産(17世紀末～18世紀前半)のくらわんか手で、内外面に染付、透明釉を施し、高台畳付に離れ砂が付着している。外面は唐草文である。角小皿(第10図1)は切込または肥前産の白磁で、内面に型押し、透明釉を施し、高台は貼付による。見込は膨脹文である。碗(第10図5)は肥前産(17世紀末～18世紀後半)で、内面に透明釉、外面に染付、透明釉を施し、高台畳付に離れ砂が付着している。高台内は角満福文である。端反碗(第10図4)は瀬戸・美濃産(19世紀前半～中葉)で、内外面に染付、透明釉、口唇部に口錆を施す。外面は源氏香文である。蓋(第10図6)は外面に染付、透明釉、内面に透明釉を施す。陶胎染付とみられる皿(第10図3)は肥前産(17世紀末～18世紀前半)で、内外面に染付、透明釉を施す。外面に圏線を施し、見込は五弁花文である。磨製石斧(第11図1)は緑色片岩または砂岩製で垂円礫を素材とする。周縁からの打撃による剥離形成の後、敲打による整形を施し、研磨によって仕上げている。基端部に原礫面を残し、敲打・研磨の痕跡は剥離面の深部には及ばない。刃部両面に刃こぼれが見られる。

このほか、確認面・堆積土から須恵器杯・甕、磁器皿・小皿・角小皿・輪花皿・鉢・碗・袋物・急須・急須蓋・土瓶蓋・行平蓋・播鉢、陶胎染付袋物、鉄鎌、砥石、石硯、剥片などが出土した。須恵器杯は回転系切りによる底部の切り離し後に再調整を施さない。甕は内面に格子文アテ具痕、外面に平行タキ目が見ら

れる。磁器皿は瀬戸・美濃産(明治以降)、碗は肥前産のくらわんか手(17世紀末～18世紀前半)、瀬戸・美濃産、小野相馬産(18世紀)、内外面印版(明治以降)、高台内に「□質陶磁器」「□kusui」の刻印が見られるもの、角小皿は肥前産(19世紀前半)、急須蓋・行平蓋は大塚相馬産(19世紀)、鉢は肥前産(17世紀)のものがある。砥石は凝灰岩製、石硯は粘板岩製、剥片は頁岩製である。

【SD139 溝跡】(第8図、写真図版2)

[位置] 1区中央部/南西向緩斜面

[重複] なし

[規模・形状] 南北方向に弧状に延びる。長さ2.30mを確認し、さらに調査区外の南北へ延びている。上幅50～60cmである。未精査である。

[堆積土] 確認面は均質な黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

[出土遺物] なし

【SD140 溝跡】(第8図、写真図版2)

[位置] 1区中央部/南西向緩斜面

[重複] SD140→SK141

[規模・形状] 南北方向に弧状に延びる。長さ12.00mを確認し、さらに調査区外の南北へ延びている。上幅40～100cmである。未精査である。

[堆積土] 確認面は均質な黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

[出土遺物] なし

(3) 遺構外出土遺物

表土から石礫(第11図2)が出土した。珪質頁岩製の凹基無茎石礫で、両面に押圧剥離による調整を施す。先端部を被熱による焼けはじけで欠損する。

[重複] SA118a-b-c-d-e-f-g

[概要] SD117 溝跡の東側に沿って確認した柱列跡群で、a-gの7列が確認できる。2～4間の規模が確認でき、総長3.00～11.36mである。柱穴はいずれも小規模で、柱痕跡が確認されたものはごく少数であることから、打ち込み杭を主体とする欄干と考えられる。

【SA118a 柱列跡】(第14図、写真図版4)

[規模・形状] 南北4間(総長8.80m)

[方向] N-3°-W

[柱穴] 5か所確認した。掘方の平面形は長軸16～20cm、短軸13～18cmの楕円形・不整形円形を呈し、深さ10～31cmである。柱痕跡は確認されなかった。

[柱間寸法] 北から(210)・(235)・(220)・(215)cm

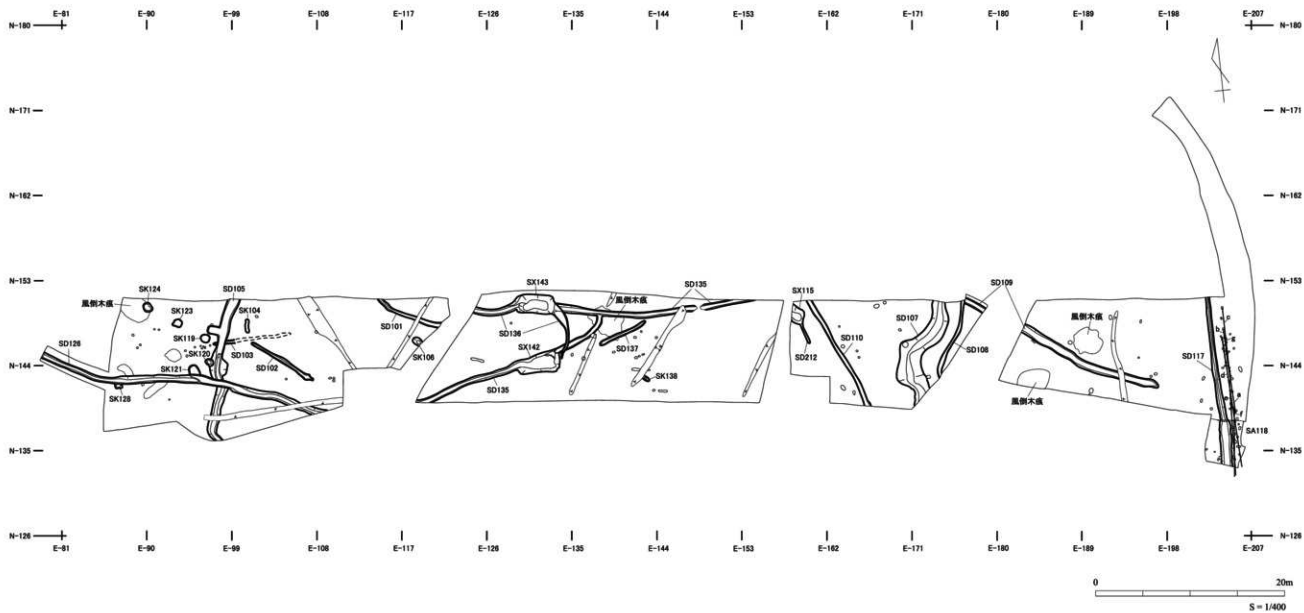
2.2区

遺跡範囲の西部に位置し、東西130m、南北48mの範囲にL字形に延びる幅2～15mの調査区である。調査区内は東へ向かって緩やかに傾斜する。遺構確認面は現地表面から深さ15～20cmのV～VI層上面である。遺構は柱列跡7条、土坑9基、溝跡14条、水溜め状遺構3基、散漫に分布する柱穴跡群を確認した(第12図、写真図版2・3)。

(1) 柱列跡

【SA118a-g 柱列跡】(第14図、写真図版4)

[位置] 2区東部/東向緩斜面



第 12 图 2 区建群配置图

〔出土遺物〕なし

【SA118b 柱列跡】(第14図、写真図版4)

〔位置〕2区東部/東向緩斜面

〔規模・形状〕南北2間(総長5.00m)

〔方向〕N-3°-W

〔柱穴〕3か所確認した。掘方の平面形は長軸24-28cm、短軸18-19cmの楕円形・不整楕円形を呈し、深さ13-25cmである。1か所で平面形が直径13cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北から(260) - (240) cm

〔出土遺物〕なし

【SA118c 柱列跡】(第14図、写真図版4)

〔位置〕2区東部/東向緩斜面

〔規模・形状〕南北2間(総長6.33m)以上

〔方向〕N-0°

〔柱穴〕3か所確認した。掘方の平面形は長軸13-23cm、短軸9-21cmの楕円形・不整楕円形を呈し、深さ6-19cmである。2か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北から(325) - (308) cm

〔出土遺物〕なし

【SA118d 柱列跡】(第14図、写真図版4)

〔位置〕2区東部/東向緩斜面

〔規模・形状〕南北7間(総長11.36m)以上

〔方向〕N-2°-W

〔柱穴〕8か所確認した。掘方の平面形は長軸10-23cm、短軸10-20cmの楕円形・不整楕円形を呈し、深さ7-22cmである。柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕北から(160) - (155) - (140) - (168) - (164) - (164) - (185) cm

〔出土遺物〕なし

【SA118e 柱列跡】(第14図、写真図版4)

〔位置〕2区東部/東向緩斜面

〔規模・形状〕南北3間(総長7.07m)以上

〔方向〕N-3°-E

〔柱穴〕4か所確認した。掘方の平面形は長軸15-27cm、短軸11-17cmの楕円形・不整楕円形を呈し、深さ10-22cmである。柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕北から(246) - (245) - (216) cm

〔出土遺物〕なし

【SA118f 柱列跡】(第14図、写真図版4)

〔位置〕2区東部/東向緩斜面

〔規模・形状〕南北2間(総長5.44m)以上

〔方向〕N-6°-E

〔柱穴〕3か所確認した。掘方の平面形は長軸

22-24cm、短軸20cmの楕円形・不整楕円形を呈し、深さ19-34cmである。柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕北から(274) - (270) cm

〔出土遺物〕なし

【SA118g 柱列跡】(第14図、写真図版4)

〔位置〕2区東部/東向緩斜面

〔規模・形状〕南北2間(総長3.00m)

〔方向〕N-2°-W

〔柱穴〕3か所確認した。掘方の平面形は長軸17-22cm、短軸8-14cmの楕円形・不整楕円形を呈し、深さ7-19cmである。柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕北から(145) - (155) cm

〔出土遺物〕なし

(2) 土坑

【SK104 土坑】(第13図、写真図版3)

〔位置〕2区西部/東向緩斜面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸140cm、短軸40cmの不整長方形を呈し、断面形は深さ12cmの皿形を呈する。底面は皿状に窪んでいる。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は黄褐色ロームブロック・粒を少量含む黒褐色粘質シルト、2層は白色粘土ブロックを主体とする褐色粘質シルトである。1層は自然堆積土、2層は人為的埋土と考えられる。

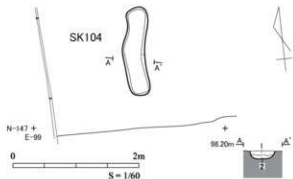
〔出土遺物〕なし

【SK106 土坑】(第16図)

〔位置〕2区西部/東向緩斜面

〔重複〕なし

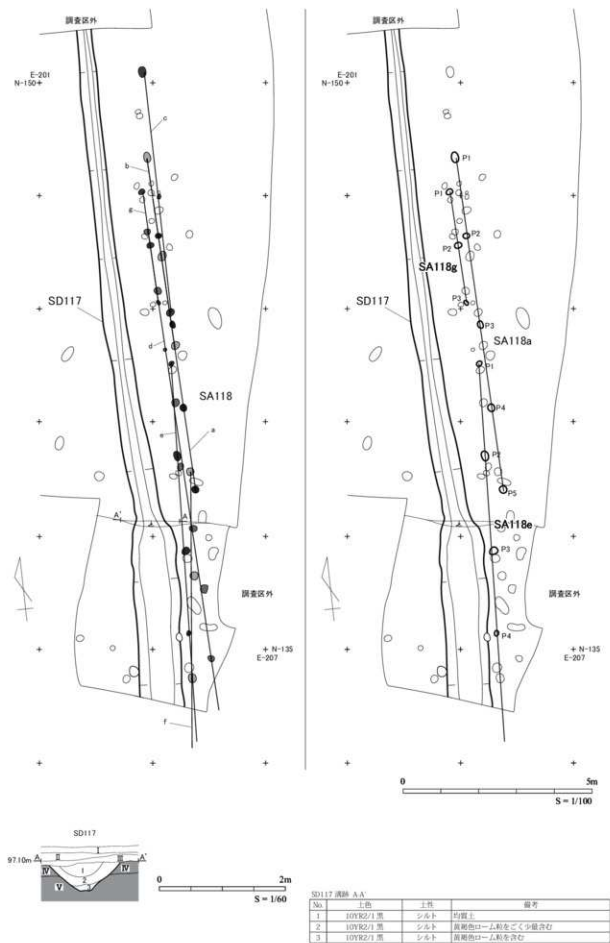
〔規模・形状〕平面形が長軸104cm、短軸74cmの楕円形を呈し、断面形は深さ31cmの楕円形を呈する。底面は皿状に窪んでいる。



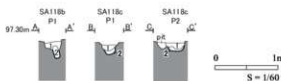
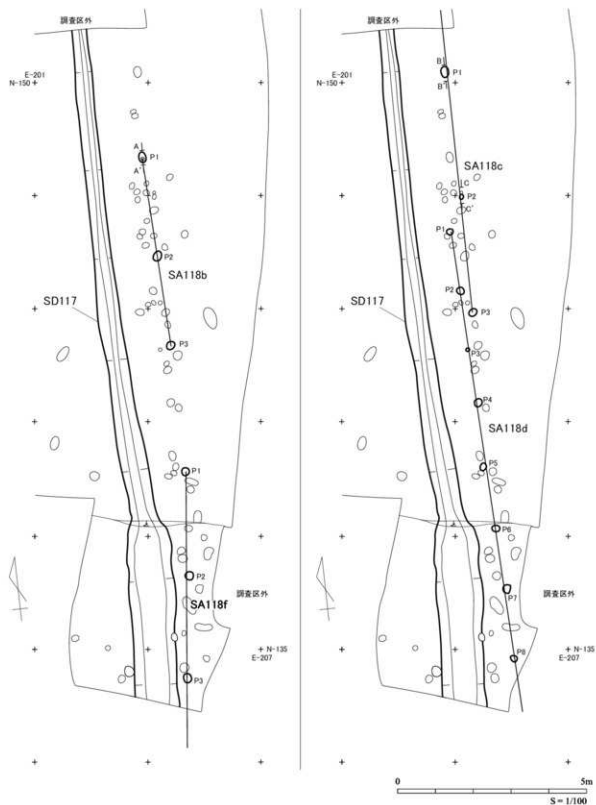
SK104 土坑 A-A

No.	土色	土質	備考
1	10YR5/1 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む
2	10YR4/1 褐色	粘質シルト	白色粘土ブロック主体

第13図 SK104 土坑



第14図(1) SA118a-g柱列跡・SD117溝跡



SA118b 柱列跡 P1 A.A.

No.	土色	土質	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	炭褐色ロームブロックを含む (柱脚)
2	10YR2/1 黒	シルト	炭褐色ローム粒を多量に含む (柱脚)

SA118c 柱列跡 P1 B.B.

No.	土色	土質	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	炭褐色ローム粒をごく少量含む (柱脚)
2	10YR3/2 黒褐色	粘質シルト	炭褐色ロームブロックを多量に含む (柱脚)

SA118c 柱列跡 P2 C.C.

No.	土色	土質	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	炭褐色ロームブロックを含む (柱脚)
2	10YR3/2 黒褐色	粘質シルト	炭褐色ロームブロックを多量に含む (柱脚)

第14図(2) SA118a-g 柱列跡・SD117溝跡

〔堆積土〕黄褐色ロームブロックを含む褐色砂質シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SK119 土坑】(第16図、写真図版4)

〔位置〕2区西部/東向緩斜面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸90cm、短軸80cmの円形を呈し、断面形は深さ10cmの皿形を呈する。底面は皿状に窪んでいる。

〔堆積土〕焼土・炭化物・黄褐色ローム粒、凝灰岩片を含む黒色粘質シルトで、自然堆積土と考えられる。SK120・121・123・124堆積土と類似する。

〔出土遺物〕確認面から土師器環が出土した。

【SK120 土坑】(第15・16図、写真図版28)

〔位置〕2区西部/東向緩斜面

〔重複〕SD105→SK120

〔規模・形状〕平面形が長軸90cm、短軸60cmの不整形円形を呈し、断面形は深さ4cmの皿形を呈する。底面は皿状に窪んでいる。

〔堆積土〕焼土・炭化物・黄褐色ローム粒、凝灰岩片を含む黒色粘質シルトで、自然堆積土と考えられる。SK119・121・123・124堆積土と類似する。

〔出土遺物〕確認面からかわらけ皿(第15図1)、堆積土から土師器が出土した。かわらけ皿(第15図1)は内面の口縁部にヨコナデ調整の後、体部にナデ調整、外面の体下部にヘラケズリ調整を施す。

【SK121 土坑】(第15・16図、写真図版28)

〔位置〕2区西部/東向緩斜面

〔重複〕SK121→SD126

〔規模・形状〕平面形が長さ109cm、幅100cmの楕円形を呈し、断面形は深さ15cmの皿形を呈する。底面は皿状に窪んでいる。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は凝灰岩片・白色粘土粒を含む黒色粘質シルト、2層は焼土粒を含む黒褐色粘質シルトで、いずれも自然堆積土と考えられる。2層はSK119・120・123・124堆積土と類似する。

〔出土遺物〕確認面から土師器環(第15図2)が出土した。体部が内湾し、口縁部が外傾する。内面の調整は磨減により不明で、外面の体部にヘラケズリ調整を施す。

【SK123 土坑】(第16図)

〔位置〕2区西部/東向緩斜面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸100cm、短軸84cmの不整形形を呈し、断面形は深さ8cmの皿形を呈する。底面は凹凸が見られる。

〔堆積土〕焼土ブロック・炭化物粒を多く含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。SK119・120・121・124堆積土と類似する。

〔出土遺物〕なし

【SK124 土坑】(第16図)

〔位置〕2区西部/東向緩斜面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸100cm、短軸85cmの隅丸方形を呈し、断面形は深さ29cmの逆台形を呈する。底面は凹凸が見られる。

〔堆積土〕黄褐色ロームブロック、小礫・砂を多量に含む黒色粘質シルトで、人為的埋土と考えられる。SK119・120・121・123堆積土と類似する。

〔出土遺物〕なし

【SK128 土坑】(第16図、写真図版4)

〔位置〕2区西部/東向緩斜面

〔重複〕SK128→SD126

〔規模・形状〕平面形が長軸80cm、短軸60cmの隅丸方形。断面形が深さ23cmの逆台形を呈するとみられる。底面は平坦である。

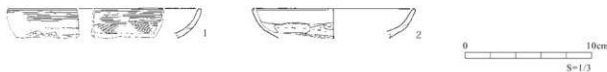
〔堆積土〕2層に細分される。白色粘土ブロック・粒を含む黒色・黒褐色粘質シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SK138 土坑】(第16図)

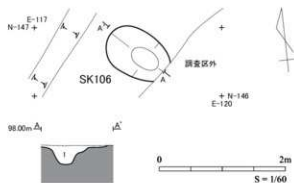
〔位置〕2区中央部/東向緩斜面

〔重複〕なし



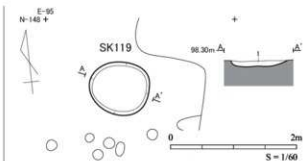
第15図 SK120・SK121土坑出土遺物

No.	遺構名	層位	種類	形状	断面調整・特徴		保存	登録	写真		
					1層	2層					
1	SK120	確認面	かわらけ	皿	内面:(体下)ヘラケズリ	内面:(口)ヨコナデ→(体)ナデ	(2.4)	一部	008	28.2	
2	SK121	確認面	土師器	環	内面:(体下)ヘラケズリ	内面:(磨減)により不明	(13.0)	(2.3)	一部	009	28.3



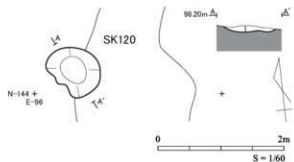
SK106 土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR4/1 黄灰	粘質シルト	黄褐色ローム、ブロックを含む



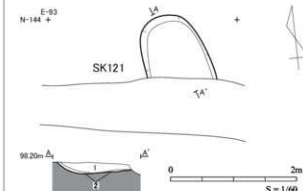
SK119 土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	焼土粒を上層部に多量に含む 炭化物・黄褐色ローム粒、凝灰質片を含む SK120・SK121・SK123・SK124と類似



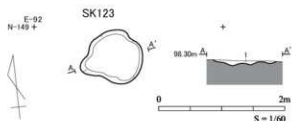
SK120 土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	焼土粒を上層部に多量に含む 炭化物・黄褐色ローム粒、凝灰質片を含む SK119・SK121・SK123・SK124と類似



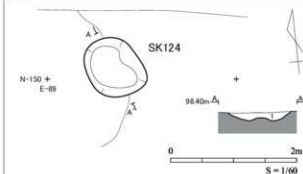
SK121 土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	凝灰質・白色焼土粒を含む
2	10YR3/1 黄黒	粘質シルト	焼土粒を含む SK119・SK120・SK123と類似



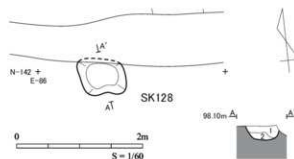
SK123 土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒黄	シルト	焼土ブロック・炭化物粒を多量に含む SK119・SK120・SK121・SK124と類似



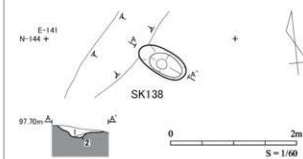
SK124 土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・小礫・砂を多量に含む



SK128 土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR1/1 黒	粘質シルト	白色粘土ブロックを含む (人込)
2	10YR3/1 黒黄	粘質シルト	白色粘土ブロック・粘を含む (人込)



SK138 土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒黄	シルト	黄褐色ローム粒を含む
2	10YR3/2 黒黄	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む

第16図 SK106・SK119・SK120・SK121・SK123・SK124・SK128・SK138 土坑

〔規模・形状〕平面形が長軸80cm、短軸30cmの楕円形を呈し、断面形は深さ29cmの皿形を呈する。底面は凹凸が見られる。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は黄褐色ローム粒を含む黒褐色シルト、2層は黄褐色ローム粒を多量に含む黒褐色シルトである。1層は自然堆積土、2層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

(3) 溝跡

〔SD101 溝跡〕(第18図)

〔位置〕2区西部/東向緩斜面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕緩やかに弧を描きながら東西方向に延びる。長さ7.00mを確認し、さらに調査区外の東西へ延びている。東側は2区中央部で確認したSD136溝跡と接続している可能性がある。上幅30-51cm、底幅18-38cmで、横断面形は深さ4-9cmの皿形を呈する。

〔堆積土〕黄褐色ロームブロック・粒を含む黒色粘質シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

〔SD102 溝跡〕(第18図)

〔位置〕2区西部/東向緩斜面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕北西から南東方向に直線的に延びる。長さ7.60mを確認した。上幅40cm、底幅10-25cmで、横断面形は深さ7-12cmの皿形を呈する。

〔堆積土〕黄褐色ローム粒を少量含む黒褐色粘質シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

〔SD103 溝跡〕(第18図)

〔位置〕2区西部/東向緩斜面

〔重複〕SD103→SD105

〔規模・形状〕東西方向に直線的に延びる。長さ8.40mを確認した。上幅26-34cm、底幅11cmで、横断面形は深さ3-10cmの逆台形を呈する。

〔堆積土〕黄褐色ローム粒を少量含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

〔SD105 溝跡〕(第18図)

〔位置〕2区西部/東向緩斜面

〔重複〕SD103→SD105→SK120・SD126

〔規模・形状〕やや蛇行しながら南北方向に延びる。長さ15.00mを確認し、さらに調査区外の南北へ延びている。西側の一部に張り出しを持つ。上幅226cm、

底幅27-80cm、深さ16-37cmで、横断面形は北半部で逆台形、南半部で椀形を呈する。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は焼土・黄褐色ローム粒を含む黒色粘質シルト、2層は黄褐色ロームブロックを多量に含む黒褐色粘質シルトである。1層は自然堆積土、2層は自然崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から土師器が出土した。

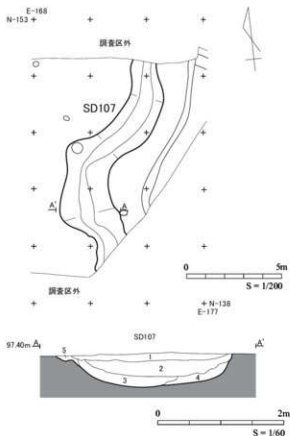
〔SD107 溝跡〕(第17・19図、写真図版4・29)

〔位置〕2区東部/東向緩斜面

〔重複〕なし

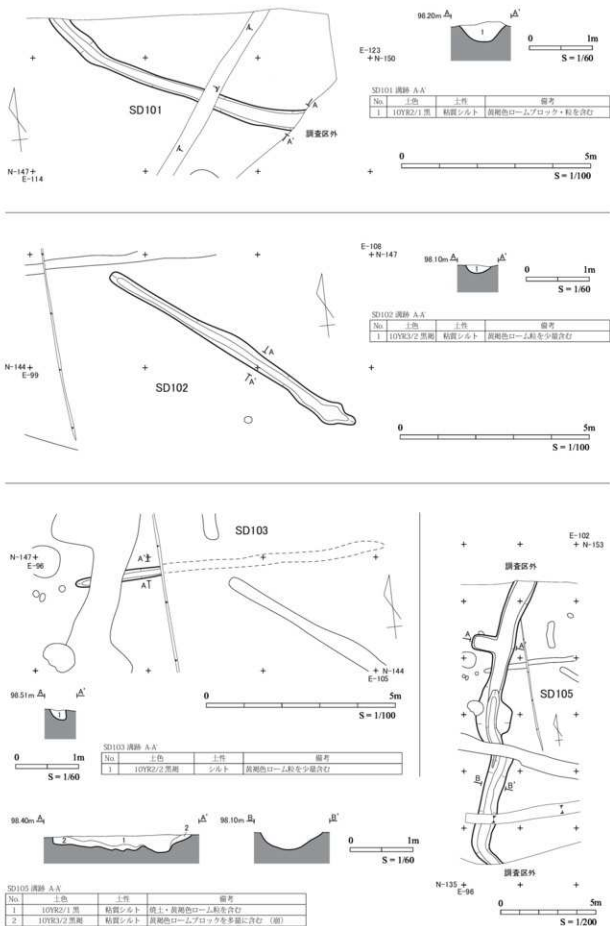
〔規模・形状〕大きく蛇行しながら南北方向に延びる。長さ13.70mを確認し、さらに調査区外の南北へ延びている。東側1.0-1.9mに沿うようにSD108溝跡が延びている。上幅130-295cm、底幅20-84cmで、横断面形は深さ46-54cmの椀形を呈する。

〔堆積土〕5層に細分される。1-3層は黄褐色ロームブロック・粒、白色粘土粒、炭化物粒、小礫を含む黒色・黒褐色粘質シルト、4・5層は黄褐色ローム・白



No.	土層	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 同色物粒をごく少量含む
2	10YR1.7/1 黒	粘質シルト	黄褐色ローム粒をごく少量含む
3	10YR3/1 黒黄	粘質シルト	白色粘土粒を極めて多量に含む 下部に砂粒を含む
4	10YR4/1 黒灰	粘質シルト	黄褐色ローム・白色粘土ブロックを含む (埋)
5	10YR3/4 暗黄	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 砂粒を少量含む (埋)

第17図 SD107 溝跡

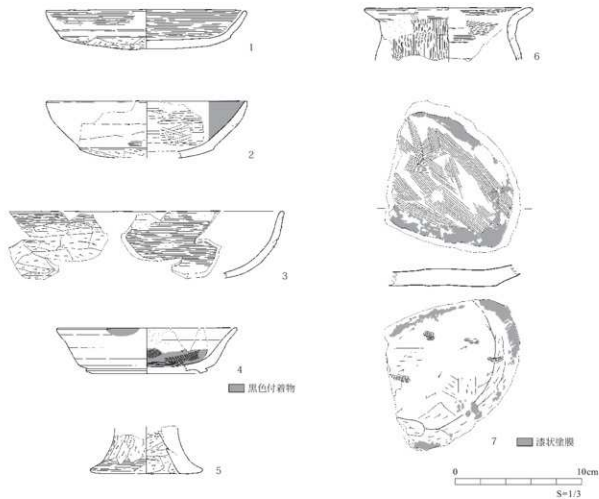


第18図 SD101・SD102・SD103・SD105 溝跡

色粘土ブロック・砂を含む暗褐色・褐灰色粘質シルトである。1-3層は自然流入土、4・5層は壁際の崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土上層から土師器環（第19図1・2）・高環（第19図5）・甕（第19図6）、須恵器高台付環（第19図4）、堆積土から土師器環（第19図3）・甕（第19図7）が出土した。土師器環は有段丸底環で内面に黒色処理を施すもの（第19図2）と、内面がヨコナデ調整で仕上げられ、黒色処理を施さないもの（第19図1）、無段丸底環で内面がヨコナデ調整で仕上げられ、黒色処理を施さないもの（第19図3）がある。第19図2は平底風の丸底で外面の体部下端に段を持ち、口縁-体部が内弯気味に外傾する。内面にヘラミ

ガキ調整→黒色処理を施し、外面の体部にナデ調整、底部にケズリ調整を施す。第19図1は平底風の丸底で口径に占める底径の割合が大きい盤状を呈する。外面の体部下端に段を持ち、口縁-体部が内弯気味に外傾する。内面の口縁-体部にヨコナデ調整、底部にナデ調整を施し、黒色処理を施さない。外面は口縁-体部にヨコナデ調整、底部にヘラケズリ調整を施す。第19図3は体部が内弯し、口縁部が直立気味に外反する。内面の口縁-体部にヨコナデ調整を施し、黒色処理を施さない。外面は口縁部にヨコナデ調整→体部にヘラケズリ調整を施す。高環（第19図5）は脚部が八字状に開く。脚部内面にヘラケズリ調整、外面の裾部にヨコナデ調整→柱状部にヘラケズリ調整を施す。



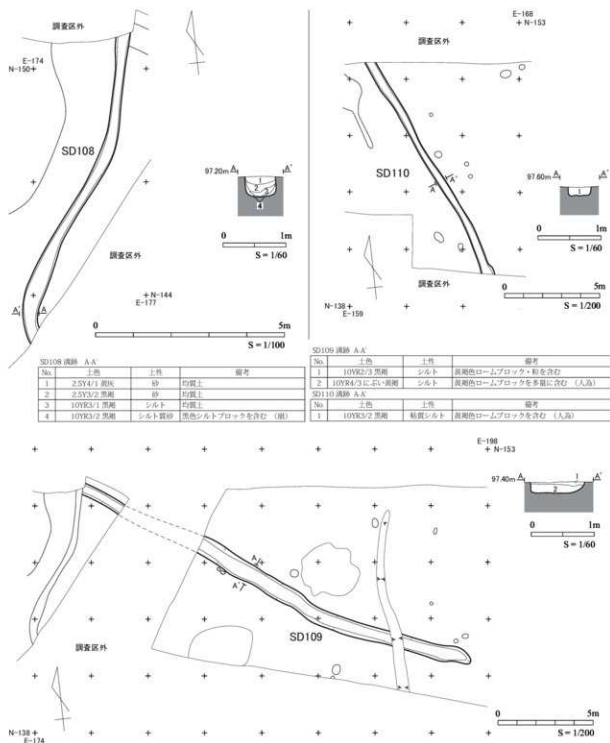
No.	遺構名	層位	種類	形態	断面調整・特徴	寸法 (cm)			現存	数量	写真
						口径	底径	高さ			
1	SD107	堆積土上層	土師器	環	外面：(白)ヨコナデ、(黒)ヘラケズリ 内面：(白)ヨコナデ、(黒)ナデ	16.0	-	3.2	3/4	001	29-1
2	SD107	堆積土上層	土師器	環	外面：(黒)ナデ、(黒)ケズリ 内面：ヘラミガキ→黒色処理	(16.0)	-	(4.5)	1/6	002	29-2
3	SD107	堆積土	土師器	環	外面：(白)ヨコナデ→(黒)ヘラケズリ 内面：(白)体ヨコナデ	-	-	(5.3)	一部	006	29-3
4	SD107	堆積土上層	須恵器	高台付環	外面：(黒)高台付環 内外面：(黒)高台付環の一部分、内面高台付環に黒色付着物	(14.4)	(9.6)	(3.6)	1/5	005	29-6
5	SD107	堆積土上層	土師器	高台付環	外面：(黒)高台付環ヨコナデ→ヘラケズリ 内面：(黒)高台付環	-	(8.0)	(3.8)	数量	003	29-5
6	SD107	堆積土上層	土師器	甕	外面：(黒)ハケメ→(白)ヨコナデ 内面：(白)ナデ	(13.4)	-	(4.3)	一部	004	29-4
7	SD107	堆積土	土師器	甕	外面：(黒)ヘラケズリ→漆状塗膜 内面：(黒)ナデ→漆状塗膜	-	-	(1.7)	一部	007	29-7

第19図 SD107 溝跡出土遺物

裏(第19図6)は頸部が直立し、口縁部が外傾する。外面の頸部に段を持たない。内面の口縁-胴部にナデ調整、外面の胴部にハケム調整→口縁部にヨコナデ調整を施す。第19図7は内底面にナデ調整、外底面にヘラケズリ調整を施し、内外面に漆状塗膜が付着している。須臾器高台(第19図4)は八字状に開く短い高台を持ち、体部が内湾し口縁部が外傾する。内外面ロクロナデ調整→内面体下部にナデ調整を施す。内

外面の口唇部と内底面に黒色付着物が見られる。口縁部内面に磨滅が見られる。

このほか、堆積土から土師器環・甕、ロクロ土師器環が出土した。土師器環は有段丸底のものと同段丸底のものがあり、いずれも内面に黒色処理を施す。ロクロ土師器環は内面に黒色処理を施し、回転糸切りによる底部の切り離し後に手持ちヘラケズリ調整を施すものがある。



第20図 SD108・SD109・SD110 溝跡

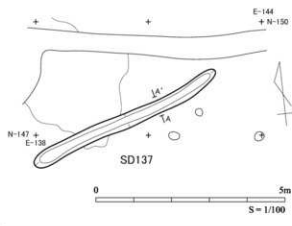
【SD108 溝跡】(第20図、写真図版4)

〔位置〕2区東部/東向緩斜面

〔重複〕SD109→SD108

〔規模・形状〕蛇行しながら南北方向に延びる。長さ10.50mを確認し、さらに調査区外の南北へ延びている。SD107 溝跡の東側1.0-1.9mに沿うように延びている。上幅27-52cm、底幅18-40cmで、横断面形は深さ17-30cmのU字形を呈する。

〔堆積土〕4層に細分される。1-3層は均質な黒褐色・黄灰色砂、黒褐色シルト、4層は黒色シルトブロックを含む黒褐色シルト質砂である。1-3層は自然流入土、4層は壁際の崩落土と考えられる。



〔出土遺物〕堆積土から土師器環・甕が出土した。環は内面に黒色処理を施し、甕は外面にハケメ調整を施す。

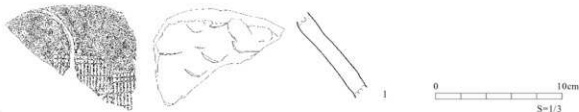
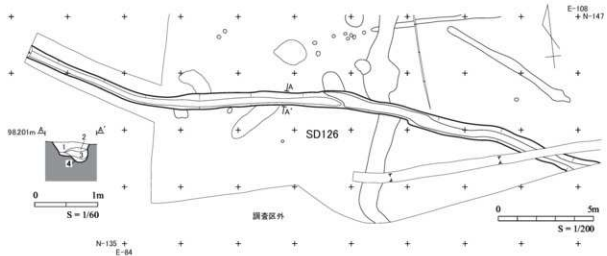
【SD109 溝跡】(第20図、写真図版4)

〔位置〕2区東部/東向緩斜面

〔重複〕SD109→SD108

〔規模・形状〕北西から南東方向にわずかに弧を描きながら延びる。長さ32.40mを確認し、さらに調査区外の北西側へ延びている。2区中央部で確認したSD135 溝跡と接続している可能性がある。上幅56-105cm、底幅39-70cmで、横断面形は深さ10-18cmの逆台形を呈する。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は黄褐色ロームブロック



No.	遺構	層位	種類	面積	時期	残存高 (cm)	部位	図録	写真
1	SD126	埋込面	中世陶器	環	内面：ナデ、縁状押印、菊花文押印、白文 内面：ナデ	7.3	胴部	083	28-4

第21図 SD126・SD137 溝跡、SD126 溝跡出土遺物

ク・粒を含む黒褐色シルト、2層は黄褐色ロームブロックを多量に含むにぶい黄褐色シルトである。1層は自然堆積土、2層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から土師器環が出土した。無段丸底で内面に黒色処理を施し、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にヘラケズリ調整を施す。

【SD110 溝跡】(第20図、写真図版4)

〔位置〕2区東部/東向緩斜面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕北西から南東方向に直線的に延びる。長さ14.20mを確認し、さらに調査区外の南北へ延びている。上幅29-69cm、底幅18-48cmで、横断面形は深さ13-17cmの箱形を呈する。

〔堆積土〕黄褐色ロームブロックを多く含む黒褐色粘質シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から土師器環が出土した。内面に黒色処理を施す。

【SD117 溝跡】(第14・22図、写真図版28)

〔位置〕2区東部/東向緩斜面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南北方向に直線的に延びる。長さ18.00mを確認し、さらに調査区外の南北へ延びている。東側0.2-1.2mに沿うようにSA118柱列跡群が位置する。上幅38-121cm、底幅5-77cmで、横断面形は深さ8-40cmの逆台形を呈する。

〔堆積土〕3層に細分される。均質または黄褐色ローム粒を含む黒色シルトで、いずれも自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から弥生土器(第22図2)、土師器環、ロクロ土師器環、須恵器裏、礫石器が出土した。弥生土器(第22図2)は内面にナデ調整、外面に墨糸文(R)を施文する。土師器環は内面に黒色処理を施すものと、無段丸底で内面にヨコナデ調整、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にヘラケズリ調整を施すものがある。ロクロ土師器環は内面に黒色処理を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。須恵器裏は外面に平行タキ調整を施す。礫石器は磨石の破片である。

【SD126 溝跡】(第21図、写真図版28)

〔位置〕2区西部/東向緩斜面

〔重複〕SK121・SK128・SD105→SD126

〔規模・形状〕東西方向に蛇行しながら延びる。長さ30.60mを確認し、さらに調査区外の東西へ延びている。東側は2区中央部で確認したSD135溝跡と接続している可能性がある。上幅50-80cm、底幅21-69cmで、

横断面形は深さ10-41cmの逆台形を呈する。

〔堆積土〕4層に細分される。1層は礫を含む黒色粘質シルト、2層は均質な暗褐色砂、3・4層は白色粘土ブロックを含む黒色粘質シルトである。1・2層は自然流入土、3・4層は自然崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から中世陶器裏(第21図1)、土師器裏が出土した。中世陶器裏(第21図1)は内外面にナデ調整を施し、外面に麁状押印・菊花文押印・円文を施文する。

【SD135 溝跡】(第22図、写真図版5)

〔位置〕2区中央部/東向緩斜面

〔重複〕SD135 = SX142→SD136・SX143

〔規模・形状〕東西方向に緩やかに弧を描きながら20.70m延び、中ほどでT字形に分岐して南西方向に24.30m延びる。南西へ延びる溝の中ほどにSX142水溜め状遺構が位置する。東西方向に延びる溝の東側はさらに調査区外へ延びており、2区東部で確認したSD109溝跡と接続している可能性がある。西側はSD136溝跡およびSX143水溜め状遺構に壊されている。溝は上幅50-84cm、底幅40-60cmで、横断面形は深さ2-23cmの逆台形または椀形を呈する。底面の一部は箱形に掘り下げた後に人為的に埋め戻して構築されている。

〔堆積土〕6層に細分され、1層はSX142堆積土と連続する。1-3層は均質な黒色砂質シルト、黄褐色ロームブロック・粒を含む黒色・黒褐色シルト、4-6層は黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む黒褐色シルトである。1-3層は自然流入土、4-6層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SD136 溝跡】(第22図、写真図版5)

〔位置〕2区中央部/東向緩斜面

〔重複〕SD135・SX142→SD136 = SX143

〔規模・形状〕東西方向に緩やかに弧を描きながら4.70m延び、東側でSX143水溜め状遺構と接続する。溝跡はさらにSX143水溜め状遺構の東端から南へ進路を変えて6.60m延びている。上幅20-60cm、底幅8-72cmで、横断面形は西側で深さ33-38cmの逆台形、東側で深さ3-13cmの皿形を呈する。

〔堆積土〕SX143水溜め状遺構の堆積土1層と連続する。黄褐色ロームブロック・炭化物粒を少量含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SD137 溝跡】(第21図、写真図版4)

〔位置〕2区中央部/東向緩斜面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕北東から南西方向に直線的に延びる。長さ5.40mを確認した。上幅30-43cm、底幅18-27cmで、横断面形は深さ8-26cmの逆台形を呈する。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は黄褐色ローム粒を含む黒色シルト、2層は黄褐色ロームブロックを多量に含む黒褐色シルトである。1層は自然堆積土、2層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SD212 溝跡】(第22図、写真図版4・5)

〔位置〕2区東部/東向緩斜面

〔重複〕SD212 = SX115

〔規模・形状〕北西から南東方向に直線的に2.40m延び、北側でSX115水溜め状遺構と接続している。上幅19-25cm、底幅16cmで、横断面形は深さ4cmの皿形を呈する。

〔堆積土〕SX115水溜め状遺構の堆積土1層と連続する。黄褐色ロームブロック・粒をごく少量含む黒褐色粘質シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

(4) 水溜め状遺構

【SX115 水溜め状遺構】(第22図、写真図版5)

〔位置〕2区東部/東向緩斜面

〔重複〕SD212 = SX115

〔規模・形状〕平面形が長軸200cm以上、短軸150cmの楕円形を呈し、横断面形は深さ35cmの皿形を呈する。底面は皿状に窪んでいる。南東隅にSD212溝跡が接続している。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は黄褐色ロームブロック・粒、炭化物粒を含む黒色粘質シルトで、SD212溝跡の堆積土と連続する。2層は黄褐色ロームブロック・粒、砂を含む黒褐色粘質シルトである。いずれも自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から土師器環が出土した。

【SX142 水溜め状遺構】(第22図、写真図版5・29)

〔位置〕2区中央部/東向緩斜面

〔重複〕SD135 = SX142 → SD136・SX143

〔規模・形状〕平面形が長軸460cm、短軸220cmの不整隅丸方形を呈し、横断面形は深さ27cmの皿形を呈する。底面は皿状に窪んでいる。北東隅と西隅にSD135溝跡が接続している。

〔堆積土〕SD135溝跡の堆積土1層と連続する。黄褐色ローム粒を少量含む黒色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から木製品(写真図版29-8)が出土した。長さ20.0cm、幅7.2cm、厚さ0.9-2.5cmで、用途不明の割材である。

【SX143 水溜め状遺構】(第22図、写真図版5・30)

〔位置〕2区中央部/東向緩斜面

〔重複〕SD135・SX142 → SD136 = SX143

〔規模・形状〕平面形が長軸400cm、短軸200cmの不整隅丸方形を呈し、横断面形は深さ64cmの逆台形を呈する。底面は皿状に窪んでいる。東西隅にSD136溝跡が接続している。

〔堆積土〕6層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒、砂を含む黒褐色シルト・砂質シルトで、いずれも自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から木製品(第22図1、写真図版30-2~4)、土師器甕が出土した。木製品は曲物盖板とみられる柁目板(第22図1)、用途不明の割材(写真図版30-1)がある。写真図版30-2は長さ14.0cm、幅5.9cm、厚さ1.0-2.0cm、写真図版30-3は長さ38.0cm、幅13.0cm、厚さ2.4-7.3cm、写真図版30-4は長さ27.5cm、幅10.0cm、厚さ2.3-5.3cmである。土師器甕は外面にヘラケズリ調整を施す。

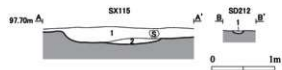
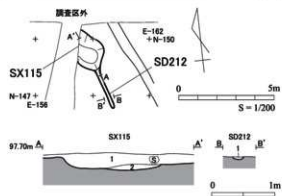
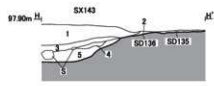
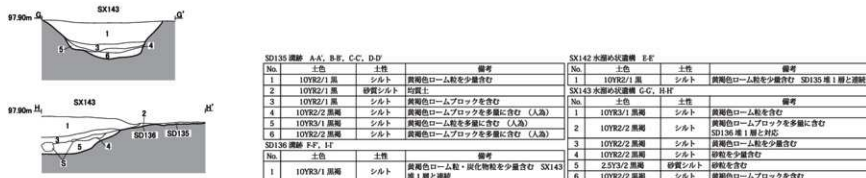
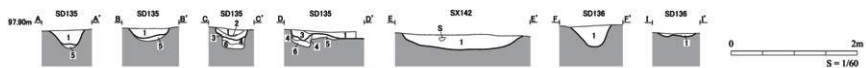
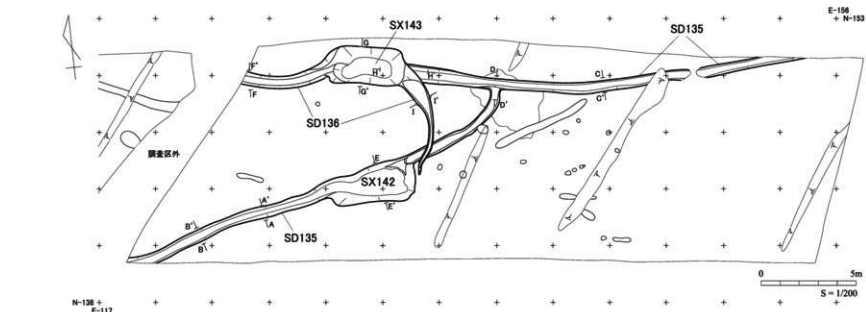
このほか、堆積土から木材2点が出土した。いずれも芯持材で一部に平滑な調整痕が見られるもの、樹皮が残存し両端に切断痕が見られるものがある。

(5) 組み合わせない柱穴跡

調査区全域にごく散漫に分布する。小規模なものも多く、柱痕跡が確認されたものはない。堆積土から土師器甕、石核が出土した。土師器甕は外面の頸部に痕跡的な段を持ち、口縁部にヨコナデ調整、胴部にハケメ調整を施す。石核は珪化木製である。

(6) 遺構外出土遺物

表土・遺構確認面から弥生土器(第22図3)、土師器環・甕、ロクロ土師器環、須恵器甕、中世陶器甕・甕または鉢、陶器碗、磁器皿が出土した。弥生土器(第22図3)は内面にナデ調整、外面に燃系文?を施文する。土師器環は無段平底で内面に黒色処理を施し、外面の口縁部にヨコナデ調整、体部にヘラケズリ調整を施す。甕は外面にハケメ調整を施す。ロクロ土師器環は内面に黒色処理を施し、底部の切り離しが回転系切りである。須恵器甕は内面に同心円文アテ具痕が見られ、外面に平行タタキ調整を施す。磁器皿は肥前産で高台内に「太明年製」の銘があるものと、瀬戸・美濃産で蛇ノ目高台のものがある。

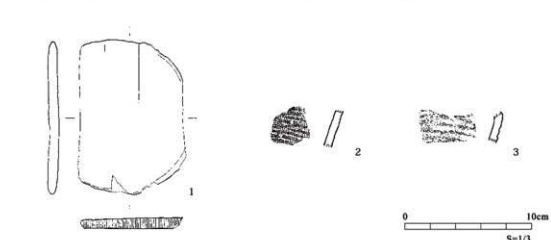


SD212 溝跡 B-F

No.	土色	土質	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粘をごく少量含む

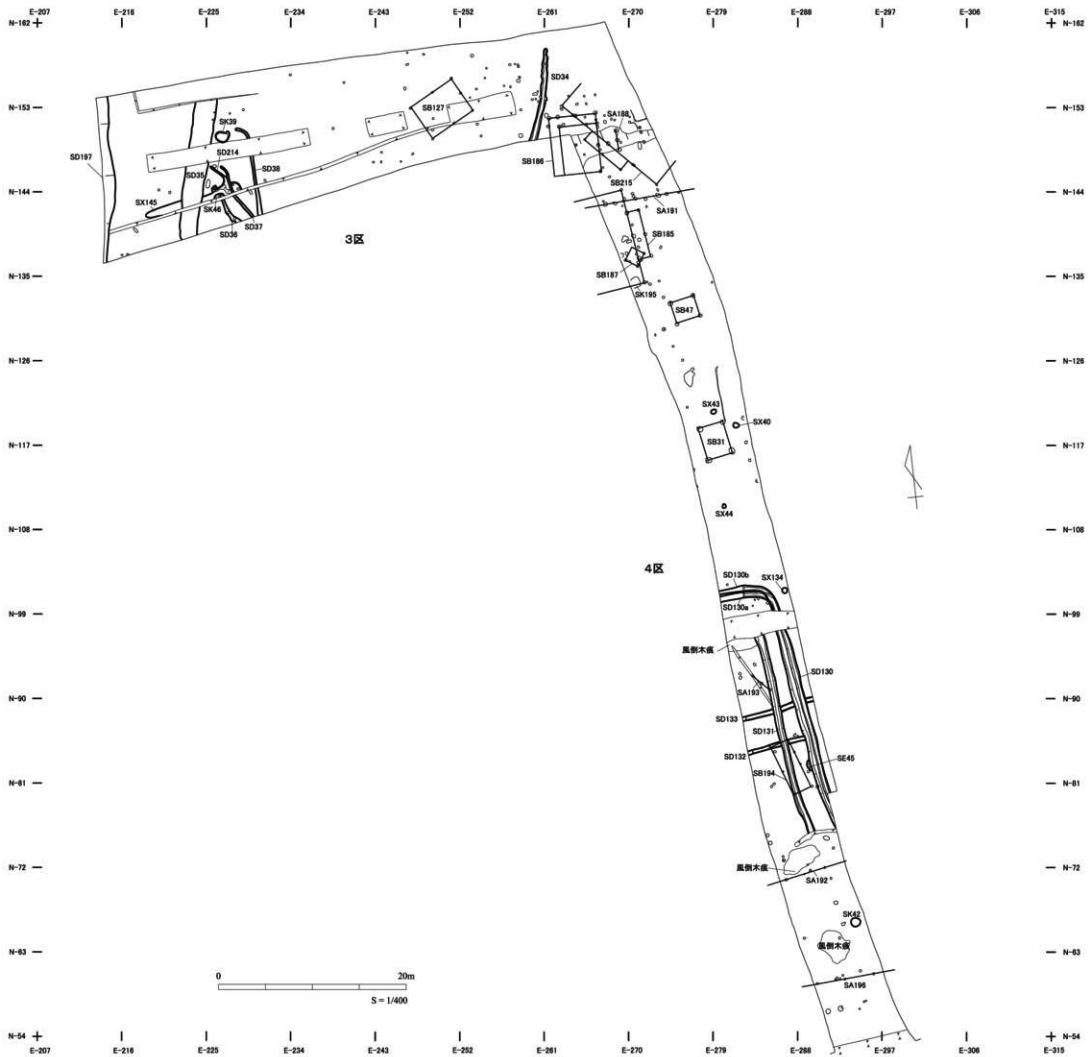
SX115 水溜め状遺構 A-A

No.	土色	土質	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粘を含む 固化物散在 ごく少量含む SD212 層と連続
2	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粘、砂を含む



No.	遺構名	層位	種類	遺構	備考	長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	数量	写真
1	SX143	埋没上	木製品	舟形棺付?		径 12.1	0.5	0.8	132	30-1
No.	遺構名	層位	種類	遺物	特徴	埋没深 (cm)	数量	写真		
2	SD117	埋没上	粘土土器	不明	ナゲ 断面 (B)	2.9	101	28-5		
3		埋没直前	粘土土器	不明	ナゲ 断面?	2.5	102	28-6		

第 22 図 SD135・SD136・SD212 溝跡、SX115・SX142・SX143 水溜め状遺構、SD117 溝跡・SX143 水溜め状遺構・遺構外出土遺物



第 23 図 3・4 区進捗配置図

3.3区

遺跡範囲の中央部に位置し、東西56m、南北18mの範囲に延びる幅10-18mの調査区である。調査区内は南西へ向かって緩やかに傾斜する。遺構確認面は現地表面から深さ15-40cmのV-VI層上面である。遺構は掘立柱建物跡1棟、土坑2基、溝跡7条、水溜め状遺構1基、散漫に分布する柱穴跡群を確認した(第23図、写真図版6)。

(1) 掘立柱建物跡

【SB127 掘立柱建物跡】(第24図、写真図版6)

〔位置〕3区東部/南西向緩斜面

〔重複〕なし

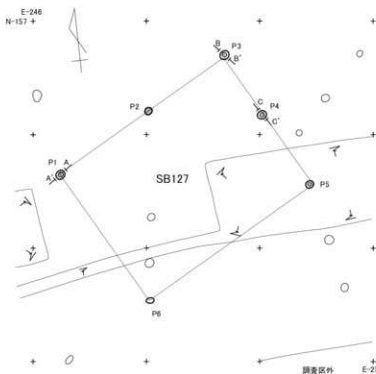
〔規模・形状〕桁行2間(総長5.40m)、梁行2間(総長4.10m)の東西棟掘立柱建物である。

〔柱穴〕6か所確認した。掘方の平面形は長軸20-25cm、短軸10-20cmの略円形・楕円形を呈し、深さ10-27cmである。4か所で平面形が直径12-22cmの楕円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕桁行(北側柱列):西から290-250cm、梁行(東側柱列):北から190-220cm

〔方向〕北側柱列:W-27°S

〔出土遺物〕なし



第24図 SB127 掘立柱建物跡

(2) 土坑

【SK39 土坑】(第25図)

〔位置〕3区西部/南西向緩斜面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が直径135cmの不整形を呈し、断面形は深さ25cmの不整形を呈する。底面は凹凸が見られる。

〔堆積土〕3層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒を含む黒褐色・暗褐色・明黄褐色シルト・粘質シルトで、いずれも自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SK46 土坑】(第25図)

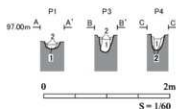
〔位置〕3区西部/南西向緩斜面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸110cm、短軸45cmの楕円形を呈し、断面形が深さ21cmの楕円形を呈する。底面は皿状に窪んでいる。

〔堆積土〕2層に細分される。黄褐色ローム粒を含む黒色・黒褐色粘質シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕なし



SB127 掘立柱建物跡 P1 A-A'

No.	土層	土性	備考
1	10VR2/1 Ⅲ	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 白色粘土粒をごく少量含む (柱組)
2	10VR2/1 Ⅲ	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に 含む (柱組)

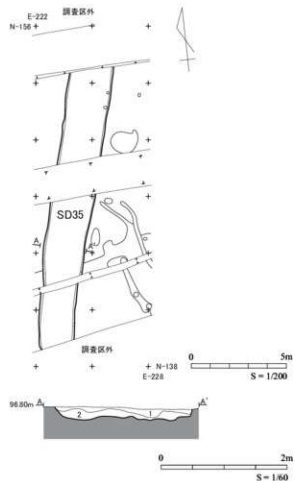
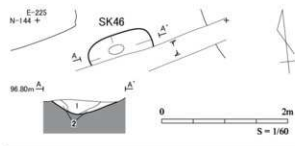
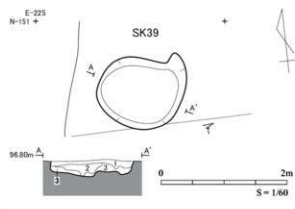
SB127 掘立柱建物跡 P3 B-B'

No.	土層	土性	備考
1	10VR2/1 Ⅲ	シルト	白色粘土ブロック・粘土をごく少 量含む (柱組)
2	10VR2/1 Ⅲ	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に 含む (柱組)

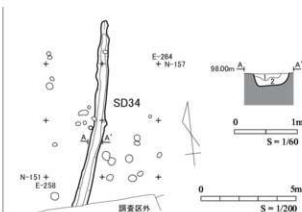
SB127 掘立柱建物跡 P4 C-C'

No.	土層	土性	備考
1	10VK3/2 Ⅲ	シルト	黄褐色ロームブロックを含む (柱組)
2	10VK3/2 Ⅲ	シルト	黄褐色ロームブロックを含む (柱組)





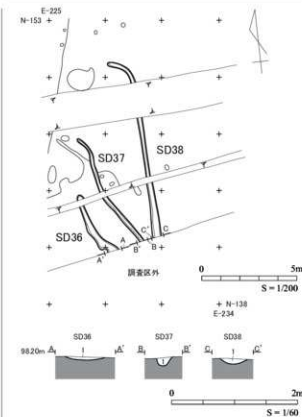
SK35 溝跡 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 炭化物をごく少量含む
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 白色粘土ブロックを含む (人高)



SK39 土坑 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粉を含む
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む
3	10YR6/6 明黄褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む

SK46 土坑 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ローム粉を含む (人高)
2	10YR2/3 暗褐色	粘質シルト	黄褐色ローム粉を含む (人高)

SD34 溝跡 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粉を含む
2	10YR3/4 暗褐色	粘質シルト	黄褐色ローム粘土 黄褐色シルトブロックを含む



SD36 溝跡 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	均質土

SD37 溝跡 B-B'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	均質土

SD38 溝跡 C-C'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	均質土

第25図 SK39・SK46土坑、SD34・SD35・SD36・SD37・SD38溝跡

(3) 溝跡

【SD34 溝跡】(第25図、写真図版6)

〔位置〕3区東部/南西向緩斜面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南北方向に直線的に延びる。長さ10.36mを確認し、さらに調査区外の南側へ延びている。上幅29-72cm、底幅22-36cmで、横断面形は深さ1-22cmの逆台形を呈する。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は黄褐色ローム粒を含む黒褐色シルト、2層は黄褐色ローム粒を主体として黒色シルトブロックを含む暗褐色粘質シルトである。1層は自然堆積土、2層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から土師器環・甕が出土した。環は内面に黒色処理を施し、外面の体部にヘラケズリ調整を施す。甕は外面の口縁部にヨコナデ調整、胴部にハケメ調整を施す。

【SD35 溝跡】(第25図、写真図版6)

〔位置〕3区西部/南西向緩斜面

〔重複〕SX145→SD35

〔規模・形状〕南北方向に直線的に延びる。長さ14.60mを確認し、さらに調査区外の南北へ延びている。上幅180-230cm、底幅160-210cmで、横断面形は深さ20cmの皿形を呈する。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は黄褐色ロームブロック・粒、炭化物粒を含む黒褐色シルト、2層は黄褐色ロームブロックを多量に含む暗褐色シルトである。1層は自然堆積土、2層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SD36 溝跡】(第25図、写真図版6)

〔位置〕3区西部/南西向緩斜面

〔重複〕SK46・SX145→SD36

〔規模・形状〕南北方向に弧状に延びる。長さ3.50mを確認し、さらに調査区外の南側へ延びている。上幅25-65cm、底幅17-40cmで、横断面形は深さ3-5cmの皿形を呈する。

〔堆積土〕均質な黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SD37 溝跡】(第25図、写真図版6)

〔位置〕3区西部/南西向緩斜面

〔重複〕SX145→SD37

〔規模・形状〕南北方向にやや蛇行しながら延びる。長さ6.50mを確認し、さらに調査区外の南側へ延びている。上幅15-30cm、底幅5-15cmで、横断面形は深さ12cmのU字形を呈する。

〔堆積土〕均質な黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SD38 溝跡】(第25図、写真図版6)

〔位置〕3区西部/南西向緩斜面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南北方向に直線的に延び、北端で西へ曲折する。長さ10.00mを確認し、さらに調査区外の南側へ延びている。上幅15-50cm、底幅10-30cmで、横断面形は深さ11cmの皿形を呈する。

〔堆積土〕均質な黒色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SD197 溝跡】(第23図)

〔位置〕3区西部/南西向緩斜面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南北方向に延びる。長さ17.62mを確認し、さらに調査区外の南北へ延びている。北側は1区で確認したSD93溝跡と接続していると考えられる。東側上端から幅36-135cmを確認したが、西側が調査区外へ延びているため上幅・底幅・断面形については不明である。

〔堆積土〕砂・礫を多く含む黒褐色砂質シルトである。

〔出土遺物〕堆積土から陶器鉢・碗・豆甕、瓦質土器火入が出土した。

【SD214 溝跡】(第26図)

〔位置〕3区西部/南西向緩斜面

〔重複〕SK46→SX145=SD214→SD35・SD36・SD37

〔規模・形状〕北西から南東方向へ直線的に2.00m延び、南側でSX145水溜め状遺構に接続している。上幅12-16cm、底幅10-14cmで、横断面形は深さ3-5cmの皿形を呈する。

〔堆積土〕SX145堆積土と連続する。黄褐色ローム粒を含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

(4) 水溜め状遺構

【SX145 水溜め状遺構】(第26図)

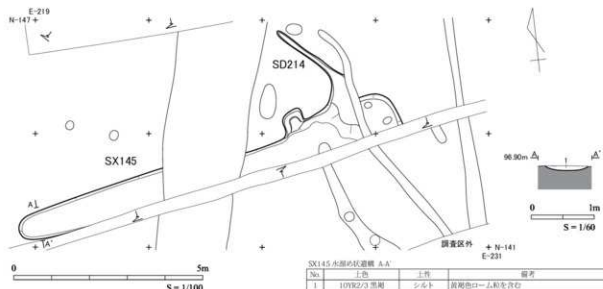
〔位置〕3区西部/南西向緩斜面

〔重複〕SK46→SX145=SD214→SD35・SD36・SD37

〔規模・形状〕平面形が長軸10.50m、短軸65-100cmの長楕円形を呈し、横断面形は深さ8-20cmの皿形を呈する。底面は平坦で、東側が一段高く階段状を呈する。北東隅にSD214溝跡が接続している。

〔堆積土〕SD214堆積土と連続する。黄褐色ローム粒を含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし



第26図 SD214 溝跡、SX145 水溜め状遺構

(5) 組み合わせない柱穴跡

調査区全域に散漫に分布し、東部でやや多く確認した。小規模なものが多く、柱痕跡が確認されたものはない。堆積土から土師器裏、ロクロ土師器環が出土した。土師器裏は外面にハケメ調整を施す。ロクロ土師器環は内面に黒色処理を施し、外面の体下・底部に手持ちヘラケズリ調整を施す。

(6) 遺構外出土遺物

表土・遺構確認面から土師器環・裏、須恵器環、中世陶器裏、陶器香炉が出土した。土師器環は内面に黒色処理を施す。須恵器環は外面の体下・底部に回転ヘラケズリ調整を施す。

4.4区

遺跡範囲の中央部に位置し、東西46m、南北100mの範囲に延びる幅7-9mの調査区である。調査区内は南西へ向かって緩やかに傾斜する。遺構確認面は現地表面から深さ15-60cmのV-VI層上面である。遺構は掘立柱建物跡7棟、柱列跡5条、井戸跡1基、土坑2基、溝跡5条、焼成遺構4基、散漫に分布する柱穴跡群を確認した(第23図、写真図版7)。

(1) 掘立柱建物跡

【SB31 掘立柱建物跡】(第27図、写真図版8)

〔位置〕4区北部/南西向緩斜面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕桁行1間(総長3.68m)、梁行1間(総長2.88m)の南北棟側柱建物である。

〔柱穴〕4か所確認した。掘方の平面形は長軸52-70cm、短軸46-58cmの不整楕円形・楕円形・隅丸方形を呈し、深さ36-44cmである。1か所で柱材の抜き取り痕跡を、3か所で平面形が直径14-24cmの円形・隅丸方形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕桁行(西側柱列):368cm、梁行(南側

柱列):288cm

〔方向〕西側柱列:N-11°-W

〔出土遺物〕なし

【SB47 掘立柱建物跡】(第27図、写真図版8)

〔位置〕4区北部/南西向緩斜面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕桁行1間(総長2.62m)、梁行1間(総長2.36m)の東西棟側柱建物である。

〔柱穴〕4か所確認した。掘方の平面形は長軸37-48cm、短軸32-46cmの隅丸方形、不整形を呈し、深さ15-30cmである。1か所で柱材の抜き取り痕跡、3か所で平面形が直径16-20cmの円形・楕円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕桁行(北側柱列):262cm、梁行(東側柱列):236cm

〔方向〕東側柱列:W-12°-S

〔出土遺物〕なし

【SB185 掘立柱建物跡】(第28図、写真図版8)

〔位置〕4区北部/南西向緩斜面

〔重複〕SB185-SB187-SA191-SK195

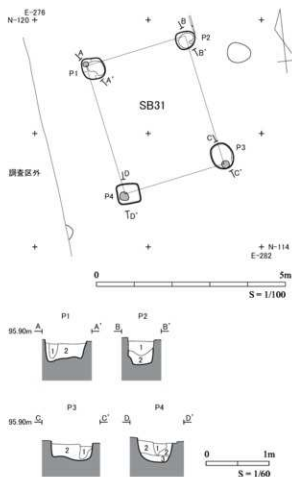
〔規模・形状〕桁行4間(総長10.19m)、梁行不明の東廂(緑)付建物である。廂(緑)の出は1.28mである。

〔柱穴〕8か所確認した。掘方の平面形は長軸30-65cm、短軸28-41cmの楕円形・隅丸方形・不整形方形を呈し、深さ22-44cmである。2か所で平面形が直径13～16cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。〔柱間寸法〕桁行(東側柱列):北から(256)・(261)・(248)・(254)cm、梁行:不明、南(緑):北から268-242cm〔方向〕東側柱列:N-9°-W〔出土遺物〕なし

【SB186 掘立柱建物跡】(第29図、写真図版8)

〔位置〕4区北部/南西向緩斜面

〔重複〕SB186—SB215

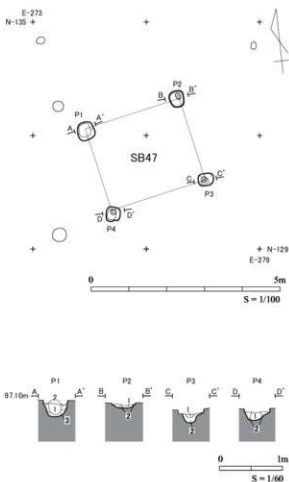


SB31 掘立柱建物跡 P1 A-A'			
No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム層を少量含む(柱底)
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ローム・小ブロックを多量に含む(柱壁)
SB31 掘立柱建物跡 P2 B-B'			
No	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ローム・小ブロックを多量に含む(柱底)
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む(柱壁)
SB31 掘立柱建物跡 P3 C-C'			
No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム層を少量含む(柱底)
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む(柱壁)
SB31 掘立柱建物跡 P4 D-D'			
No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム層を少量含む(柱底)
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム層を少量含む(柱壁)
3	10YR5/6 黄褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロック主体

〔規模・形状〕桁行2間(総長5.14m)、梁行1間(総長4.02m)の二面(北・西)南(緑)付南北棟側柱建物である。南(緑)の出は北面で1.04m、西面で1.06mである。

〔柱穴〕9か所確認した。掘方の平面形は長軸34-44cm、短軸27-40cmの不整形楕円形・隅丸方形を呈し、深さ36-59cmである。9か所で平面形が直径12-16cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕桁行(東側柱列):北から230-284cm、梁行(北側柱列):402cm、東南(緑):92cm、北南(緑):西から100-185-224cm



SB47 掘立柱建物跡 P1 A-A'			
No	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム層を少量含む(柱底)
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム層を含む(柱壁)
3	10YR3/3 暗褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む(柱壁)
SB47 掘立柱建物跡 P2 B-B'			
No	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロックを含む(柱底)
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む(柱壁)
SB47 掘立柱建物跡 P3 C-C'			
No	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロックを少量含む(柱底)
2	10YR4/3 にぶい・黄褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロック主体 黒色シルト・ブロックを含む(柱壁)
SB47 掘立柱建物跡 P4 D-D'			
No	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐色	シルト	黄褐色ローム層を少量含む(柱底)
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む(柱壁)

第27図 SB31・SB47 掘立柱建物跡

[方向] 東側柱列：N-1°-E

[出土遺物] なし

【SB187 掘立柱建物跡】(第29図)

[位置] 4区北部/南西向緩斜面

[重複] SB187 - SB185・SK195

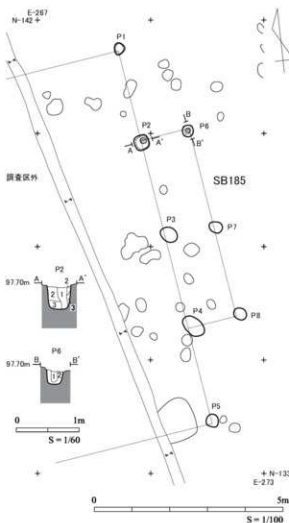
[規模・形状] 桁行1間(総長1.46m)、梁行1間(総長1.43m)の側柱建物である。

[柱穴] 3か所確認し、いずれも未精査である。掘方の平面形は長軸28-37cm、短軸21-28cmの不整楕円形を呈する。柱痕跡は確認されなかった。

[柱間寸法] 桁行(東側柱列)：(146)cm、梁行(北側柱列)：(143)cm

[方向] 東側柱列：N-34°-E

[出土遺物] なし



SB185 掘立柱建物跡 P2-A-A'

No.	土層	土質	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭酸鉄ローム粘土を多量に含む(柱間)
2	10YR2/3 黒褐色	シルト	炭酸鉄ローム粘土を含む(柱間)
3	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭酸鉄ロームプロックを多量に含む(柱間)

SB185 掘立柱建物跡 P6-B-B'

No.	土層	土質	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	炭酸鉄ローム粘土を含む(柱間)
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭酸鉄ローム粘土を多量に含む(柱間)

第28図 SB185 掘立柱建物跡

【SB194 掘立柱建物跡】(第23図)

[位置] 4区南部/南西向緩斜面

[重複] SB194 → SD131・SD132

[規模・形状] 桁行2間(総長5.82m)、梁行1間(総長1.99m)の南北棟側柱建物である。

[柱穴] 4か所確認した。掘方の平面形は長軸18-25cm、短軸17-23cmの略円形・楕円形を呈し、深さ11cmである。柱痕跡は確認されなかった。

[柱間寸法] 桁行(西側柱列)：北から(295)-(287)cm、梁行(南側柱列)：(199)cm

[方向] 東側柱列：N-21°-W

[出土遺物] なし

【SB215 掘立柱建物跡】(第30図、写真図版8)

[位置] 4区北部/南西向緩斜面

[重複] SB215 - SB186

[規模・形状] 桁行4間(総長13.09m)、梁行不明/南廂(縁)付南北棟側柱建物/廂(縁)の出：1.28m

[方向] N-44°-W

[柱穴] 身舎で5か所、廂(縁)で3か所確認した。掘方の平面形は長軸23-44cm、短軸16-36cmの楕円形・不整楕円形を呈し、深さ9-28cmである。廂(縁)ではやや規模が小さい。身舎の1か所で平面形が直径13cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

[柱間寸法] 桁行：西から(326)-(297)-(348)-(338)cm

[出土遺物] なし

(2) 柱列跡

【SA188 柱列跡】(第30図、写真図版8)

[位置] 4区北部/南西向緩斜面

[重複] なし

[規模・形状] 南北2間(総長2.10m)以上

[方向] N-3°-W

[柱穴] 3か所確認した。掘方の平面形は長軸40-45cm、短軸31-38cmの楕円形・不整楕円形を呈し、深さ17-32cmである。2か所で平面形が直径14-21cmの円形・楕円形を呈する柱痕跡を確認した。

[柱間寸法] 北から104-(106)cm

[出土遺物] なし

【SA191 柱列跡】(第30図、写真図版9)

[位置] 4区北部/南西向緩斜面

[重複] SA191 - SB185

[規模・形状] 東西2間(総長6.66m)

[方向] W-4°-S

[柱穴] 3か所確認した。掘方の平面形は長軸32-47cm、短軸26-36cmの不整楕円形を呈し、深さ

18-35cmである。1か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕西から (326) - (340) cm

〔出土遺物〕なし

【SA192 柱列跡】(第23図)

〔位置〕4区南部/南西向緩斜面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西2間(総長4.32m)以上

〔方向〕W-11°S

〔柱穴〕3か所確認し、2か所を精査した。掘方の平面形は長軸24-32cm、短軸14-24cmの楕円形を呈し、深さ14-17cmである。柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕西から (203) - (229) cm

〔出土遺物〕なし

【SA193 柱列跡】(第23図)

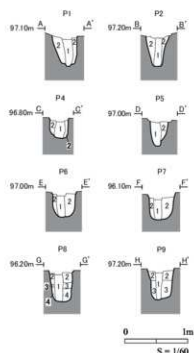
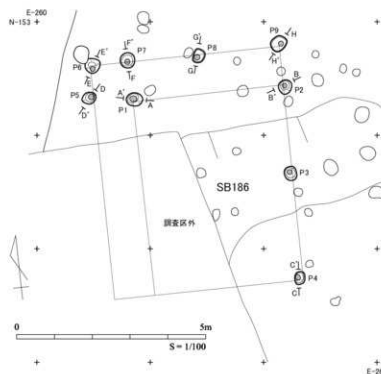
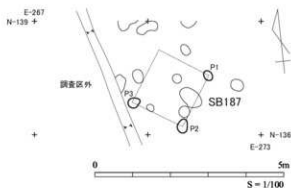
〔位置〕4区南部/南西向緩斜面

〔重複〕SA193→SD131

〔規模・形状〕南北2間(総長2.48m)

〔方向〕N-44°W

〔柱穴〕3か所確認し、1か所を精査した。掘方の平面



SB186 掘立柱建物跡 P1 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・炭化物粒を含む(柱底)
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 炭化物粒を少量含む(柱底)

SB186 掘立柱建物跡 P2 B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・炭化物粒を含む(柱底)
2	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)

SB186 掘立柱建物跡 P4 C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 黄褐色ローム・粒・炭化物粒をごく少量含む(柱底)
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 白色粘土ブロックをごく少量含む(柱底)

SB186 掘立柱建物跡 P5 D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む(柱底)
2	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)

SB186 掘立柱建物跡 P6 E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 黄褐色ローム・粒を少量含む 炭化物粒をごく少量含む(柱底)
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・炭化物粒を含む(柱底)

SB186 掘立柱建物跡 P7 F-F'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む(柱底)
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む(柱底)

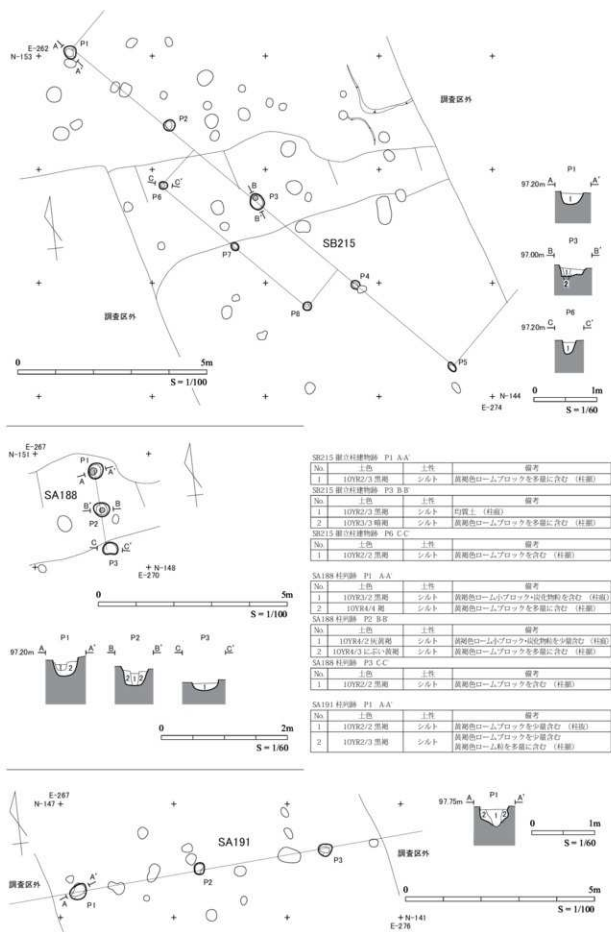
SB186 掘立柱建物跡 P8 G-G'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を含む(柱底)
2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	黄褐色ローム・粒を多量に含む(柱底)
3	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む(柱底)
4	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)

SB186 掘立柱建物跡 P9 H-H'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ローム小ブロック・炭化物粒を含む(柱底)
2	10YR4/4 暗褐色	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む(柱底)
3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	黄褐色ローム小ブロックを含む(柱底)

第29図 SB186・SB187 掘立柱建物跡



第30図 SB215 掘立柱建物跡、SA188・SA191 柱列跡

形は長軸 29-31cm、短軸 20-26cm の略円形・楕円形を呈し、深さ 16cm である。柱痕跡は確認されなかった。(柱間寸法) 北から (128) - (120) cm

(出土遺物) なし

【SA196 柱列跡】(第 23 図)

(位置) 4 区南部/南西向緩斜面

(重複) なし

(規模・形状) 東西 2 間(総長 6.10m) 以上

(方向) W-5°S

(柱穴) 3 か所確認し、1 か所を精査した。掘方の平面形は長軸 20-26cm、短軸 18-23cm の略円形・楕円形を呈し、深さ 10cm である。柱痕跡は確認されなかった。

(柱間寸法) 西から (300) - (310) cm

(出土遺物) なし

(3) 井戸跡

【SE45 井戸跡】(第 31・32 図、写真図版 9・31・32)

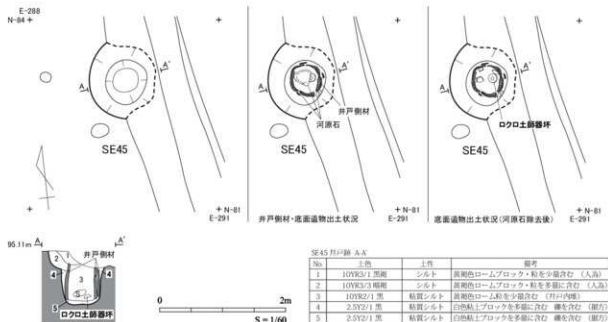
(位置) 4 区南部/南西向緩斜面

(重複) SE45→SD130a・SD130b

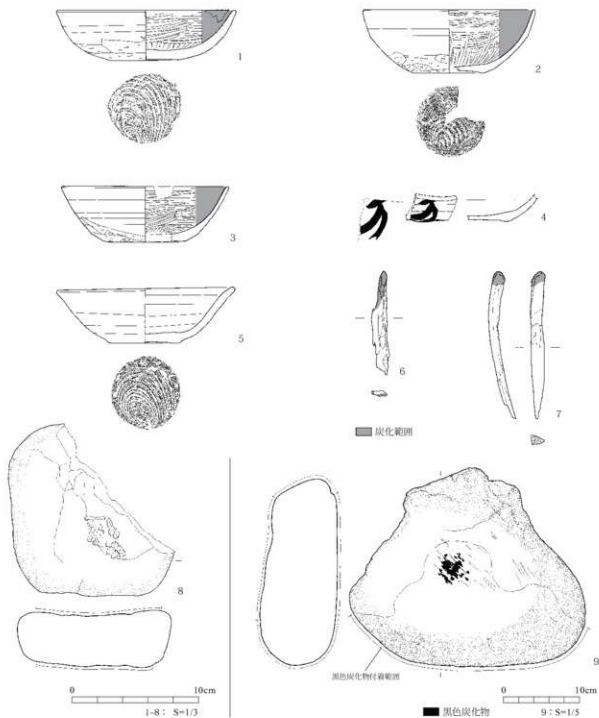
(規模・形状) 平面形が長軸 122cm、短軸 109cm の略円形を呈し、深さ 83cm である。断面形は下部が円筒形で上部が朝顔形に開く。掘方と井戸側、井戸側の抜き取り痕跡を確認した。掘方の平面形は直径 66cm の略円形を呈する。井戸側は厚さ 5-7cm の丸太削り抜き材で構築しており、内寸で平面形が直径 30-44cm の略円形を呈する。掘方底面を 5cm ほど平坦に埋め戻した後に井戸側を設置しており、水溜め部は持たない。井戸側は一木の丸太を素材としている

が、削り貫きの作業は四分割した上で行なわれている。組み合わせ時の接合部には外側から板材と河原石で止めと固定を施した上で掘方埋土を施している。(堆積土) 5 層に細分される。1 層は黄褐色ロームブロック・粒を少量含む黒褐色シルト、2 層は黄褐色ロームブロック・粒を多量を含む暗褐色シルト、3 層は黄褐色ローム粒を少量含む黒色粘質シルト、4・5 層は礫と多量の白色粘土ブロックを含む黒色粘質シルトである。いずれも人為的埋土で、1-3 層は井戸廃絶時以降の埋戻し土、4・5 層は掘方埋土と考えられる。

(出土遺物) 堆積土 3 層(井戸側内堆積土) からロクロ土師器環(第 32 図 1~3)、須恵器環(第 32 図 4・5)、礫石器(第 32 図 8・9、写真図版 32-1-3)、底面から木製品(第 32 図 6・7)が出土した。ロクロ土師器環は体部が内湾し、口縁部がわずかに外反するもの(第 32 図 1)、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部がそのまま外傾するもの(第 32 図 2)、体部が内湾し、口縁部が内湾気味に外傾するもの(第 32 図 3)がある。第 32 図 1 は内面に放射状ヘラミガキ調整→井桁状ヘラミガキ調整→黒色処理を施し、外面にロクロナデ調整を施す。回転系切りによる底部の切り離しの後、外面の体下部に手持ちヘラケズリ調整を施し、底部に再調整を施さない。口縁部に磨滅が見られる。第 32 図 2 は内面に横方向ヘラミガキ調整→放射状ヘラミガキ調整→黒色処理を施し、外面にロクロナデ調整を施す。回転系切りによる底部の切り離しの後、外面の体下部に手持ちヘラケズリ調整を施す。第 32 図 3 は内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施し、外面に



第 31 図 SE45 井戸跡



No.	遺構名	層位	種類	器種	断面調整・特徴	法量 (cm)			現存	登録	写真
						口径	底径	高さ			
1	SE45	埋藏土3層	ロクロ土製陶	杯	内面：ロクロナデマ（体下）手持ちヘラケズリ。（底）回転糸切り→無調整 内面：放射状ヘラミガキ→斜形ヘラミガキ→黒色処理 内面：扇形付足調整	14.3	5.4	4.0	破欠形	011	31-5
2	SE45	埋藏土3層	ロクロ土製陶	杯	内面：ロクロナデマ（体下）手持ちヘラケズリ。（底）回転糸切り→手持ちヘラケズリ 内面：縦方向ヘラミガキ→放射状ヘラミガキ→黒色処理	(13.8)	(5.6)	5.0	1/2	012	31-4
3	SE45	埋藏土3層	ロクロ土製陶	杯	内面：ロクロナデマ（体下）手持ちヘラケズリ。（底）回転糸切り→無調整 内面：ヘラミガキ→黒色処理	(13.3)	(6.6)	4.4	1/4	013	31-3
4	SE45	埋藏土3層	炭化器		内面：ロクロナデマ。（底）回転糸切り→無調整 内面：ロクロナデマ 外面：体部に直径で溝を「方」ウ	-	-	(2.2)	一部	015	31-2
5	SE45	埋藏土3層	炭化器	杯	内面：ロクロナデマ。（底）回転糸切り→無調整 内面：ロクロナデマ	14.2	5.7	4.4	完整	014	31-6

No.	遺構名	層位	種類	器種	備考	法量 (cm)			登録	写真
						長	幅	厚		
6	SE45	3層（底面）	木製品	つば木（手火）	端部が焼熱により炭化	8.2	1.2	0.4	137	32-0
7	SE45	3層（底面）	木製品	つば木（手火）	端部が焼熱により炭化	11.7	1.0	0.9	136	32-5

No.	遺構名	層位	種類	石材	特徴	法量 (mm・g)				現存	登録	写真
						長	幅	厚	重			
8	SE45	埋藏土3層	石皿	50山打	内面に平均的磨面 片歯磨打→研磨 焼熱により一部黒色化	(137.0)	(132.5)	(53.0)	(1084)	一部欠損	106	32-4
9	SE45	埋藏土3層	石皿	砂岩	内面に平均的磨面 磨面や中磨面 片面に炭化物付着	263.5	313.0	117.5	12700	完整	104	32-8

第32図 SE45 井戸跡出土遺物

ロクロナデ調整を施す。回転系切りによる底部の切り離しの後、外面の体下部に持ちヘラケズリ調整を施し、底部に再調整を施さない。須臾器環(第32図4・5)はいずれも内外面にロクロナデ調整を施し、底部は回転系切りによる切り離しの後は再調整を施さない。第32図5は体部が内湾気味に外傾し、口縁部が外反する。第32図4は体部外面に墨書「万」?が見られる。礫石器は磨石(写真図版32-2・3)と石皿(第32図8・9、写真図版32-1)がある。写真図版32-2は残存値で長さ9.5cm、幅9.3cm、厚さ7.3cm、重量1050gである。安山岩製で全体に磨痕が見られ、欠損後の被熱による黒色化が見られる。写真図版32-3は長さ13.2cm、幅12.3cm、厚さ6.7cm、重量1471gである。変成岩で片面に磨面がある。第32図9は砂岩製で両面に平坦な磨面があり、片面に炭化物の付着が見られる。写真図版32-1は長さ16.8cm、幅14.6cm、厚さ6.7cm、重量1558gである。安山岩製で片面が被熱により黒色化している。第32図8は安山岩製で両面に平坦な磨面がある。片面は敲打の後に研磨されている。木製品(第32図6・7)はつけ木(手火)で端部が被熱により炭化している。

このほか、堆積土3層(井戸側内堆積土)からロクロ土器器環、須臾器環が出土した。ロクロ土器器環は内面に放射状ヘラミガキ調整→黒色処理を施し、回転系切りによる底部の切り離し後に体下部-底部に持ちヘラケズリ調整を施す。また、底面から木材1点、不明薄板3点、植物種子1点(写真図版32-7)が出土した。木材は長さ6.0cm、幅2.1cm、厚さ1.8cmの棒状を呈する芯持材である。薄板は長さ3.3-8.7cm、幅1.9-2.6cm、厚さ0.4-0.5cmで、いずれも板目材である。種子は長さ2.84cm、幅2.13cm、厚さ1.47cmで、モモの核である。

(4) 土坑

【SK42土坑】(第33図、写真図版9)

〔位置〕4区南部/南西向緩斜面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が直径50cmの円形を呈し、断面形は深さ44cmの逆台形を呈する。底面は平坦である。〔堆積土〕黄褐色ローム粒を少量含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SK195土坑】(第23図)

〔位置〕4区南部/南西向緩斜面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸110cm、短軸89cmの隅丸方形を呈する。未精査である。

〔出土遺物〕なし

(5) 溝跡

【SD130a・b、SD131溝跡】(第34図、写真図版7・8・33)

〔位置〕4区南部/南西向緩斜面

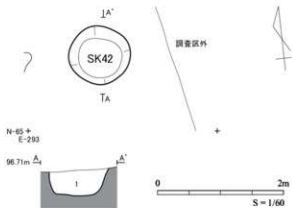
〔性格〕SD130a・SD131溝跡は横断面形が類似し、心々間で2.5-3.0mの間隔を保って平行することから、同時に機能した道路側溝の可能性が考えられる。東・北側はSD130bが掘りなおされている。なお、旧地表面は削平により消失しており、路面と考えられる硬化層などは確認できなかったことから、ここでは個別の溝跡として記載する。

【SD130a・b溝跡】(第34図、写真図版7・8・33)

〔重複〕SE45・SD132・SD133→SD130a→SD130b

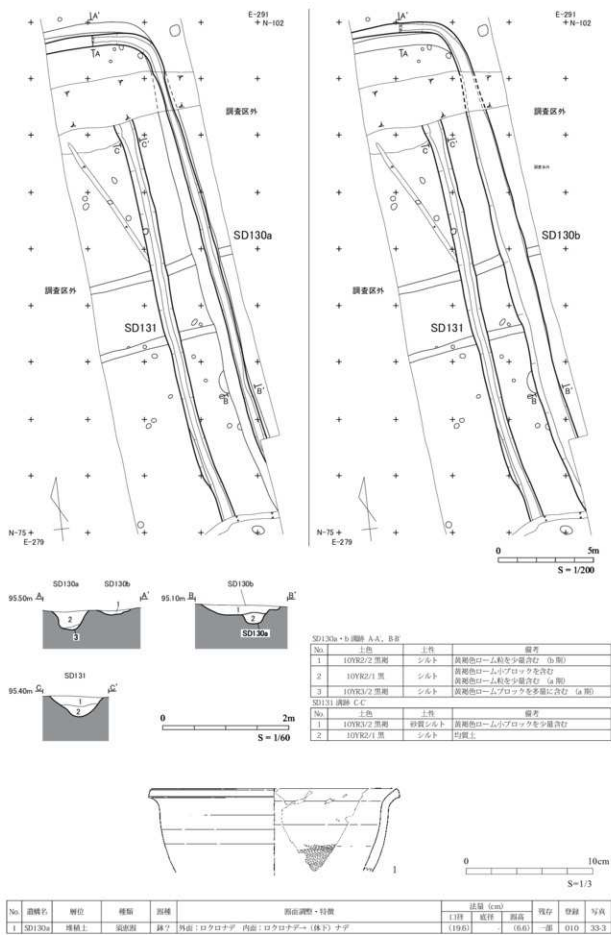
〔規模・形状〕SD130溝跡は東西・南北方向に逆L字形に延びる。検出長は31.20mで、東西方向に5.00m延び、東端で南へ折れて26.20m延びる。西側・南側はさらに調査区外に延びている。a・b期の二時期の変遷が認められ、北辺では位置を北側にずらして掘りなおされ、東辺では西側へ拡幅している。a期は上幅59-69cm、底幅25-35cmで、横断面形は深さ24-43cmの逆台形を呈する。b期は上幅38-116cm、底幅23-100cmで、横断面形は深さ8-16cmの皿形を呈する。

〔堆積土〕a期は2層に細分される。1層は黄褐色ロームブロックを含む黒色シルト、2層は黄褐色ロームブロックを多く含む黒褐色シルトである。1層は自然堆積土、2層は自然崩落土と考えられる。b期は黄褐色ロームブロックを少量含む黒褐色シルトである。



SK42土坑 AA			
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 25R	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む

第33図 SK42土坑



第34図 SD130a・b、SD131 溝跡、SD130a 溝跡出土遺物

No	遺物名	層位	種類	図様	断面測尺・特徴	法量 (cm)			現存	登録	写真
						口径	底径	深さ			
1	SD130a	埋積土	瓦破片	跡7	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ→(体下)ナデ	(19.6)	-	(8.6)	一部	010	33-3

〔出土遺物〕SD130a 堆積土から須恵器鉢（第34図1）が出土した。内外面にロクロナデ調整を施し、内面の体下部にナデ調整を施す。

このほか、SD130a・b 堆積土から土師器環・甕、ロクロ土師器環、須恵器環・蓋・甕、中世陶器甕が出土した。土師器環は内面に黒色処理を施す。甕は外面にハケメ調整を施し、底部に木葉痕が見られる。ロクロ土師器環は内面に黒色処理を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。須恵器環は静止糸切りによる底部の切り離し後は再調整を施さない。蓋は口縁部にかえりを持つ。甕は外面に平行タタキ調整を施す。

【SD131 溝跡】（第34図、写真図版7・8）

〔重複〕SB194・SA193・SD132・SD133→SD131

〔規模・形状〕SD131 溝跡は南北方向に直線的に延びる。長さ25.20mを確認し、北側は攪乱溝、南側は削平により消失している。北側は攪乱溝より北へは延びていないことから、西へ折れていた可能性がある。上幅63-110cm、底幅22-65cmで、横断面形は深さ17-30cmの逆台形を呈する。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は黄褐色ロームブロックを少量含む黒褐色砂質シルト、2層は均質な黒色シルトである。いずれも自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕SD131 溝跡堆積土から土師器環・甕、ロクロ土師器環、剥片が出土した。土師器環は内面に黒色処理を施す。土師器甕は外面にハケメ調整を施す。ロクロ土師器環は内面にロクロナデ調整、外面にナデ調整を施し、内外面に黒色処理を施す。剥片は流紋岩製である。

【SD132・SD133 溝跡】（第35図、写真図版8）

〔位置〕4区南部/南西向緩斜面

〔性格〕SD132・SD133 溝跡は横断面形が類似し、心々間で3.5-3.7mの間隔を保って平行することから、同時に機能した道路側溝の可能性が考えられる。なお、旧地表面は削平により消失しており、路面と考えられる硬化層などは確認できなかったことから、ここでは個別の溝跡として記載する。

【SD132 溝跡】（第35図、写真図版8）

〔重複〕SB194→SD132→SD130a・SD130b・SD131
〔規模・形状〕東西方向に直線的に延びる。長さ6.30mを確認し、さらに調査区外の西側へ延びている。上幅34-40cm、底幅26-37cmで、横断面形は深さ8-14cmの逆台形を呈する。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は黄褐色ローム粒を少量含む黒褐色砂質シルト、2層は黄褐色ロームブロックを多量に含む黒褐色シルトである。1層は自然堆積土、2層は自然崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

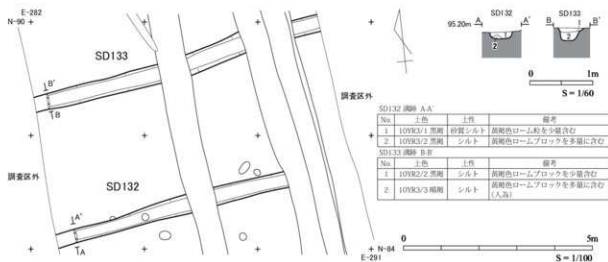
【SD133 溝跡】（第35図、写真図版8）

〔重複〕SD133→SD130a・SD130b・SD131

〔規模・形状〕東西方向に直線的に延びる。長さ7.80mを確認し、さらに調査区外の東西へ延びている。上幅40-60cm、底幅29-38cmで、横断面形は深さ14-30cmの逆台形を呈する。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は黄褐色ロームブロックを少量含む黒褐色シルト、2層は黄褐色ロームブロックを多量に含む暗褐色シルトである。1層は自然堆積土、2層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から土師器環が出土した。内面に黒色処理を施す。



第35図 SD132・SD133 溝跡

(6) 焼成遺構

【SX40 焼成遺構】(第36図)

[位置] 4区北部/南西向緩斜面

[重複] なし

[規模・形状] 平面形が長軸60cm、短軸50cmの楕円形を呈し、断面形は深さ22cmの皿形を呈する。底面には凹凸が見られる。掘方埋土により深さ3cmで断面形が皿形を呈する底面を構築している。

[堆積土] 3層に細分される。1層は黄褐色ロームブロック・焼土粒を含む黒褐色シルト、2層は炭化物層、3層は黄褐色ロームブロックを多量に含む黒褐色シルトである。1層は自然堆積土、2層は機能時堆積土、3層は掘方埋土と考えられる。

[出土遺物] なし

【SX43 焼成遺構】(第36図、写真図版9)

[位置] 4区北部/南西向緩斜面

[重複] なし

[規模・形状] 平面形は長軸55cm、短軸40cmの楕円形を呈し、断面形は深さ22cmの逆台形を呈する。底面は平坦である。掘方埋土により深さ4cmで断面形が皿形を呈する底面を構築している。

[堆積土] 2層に細分される。1層は黄褐色ローム粒

を少量含む黒褐色シルト、2層は黄褐色ローム粒を多量に含む黒褐色シルトである。1層は自然堆積土、2層は掘方埋土と考えられる。機能時堆積土は確認されなかった。

[出土遺物] 堆積土から土師器裏が出土した。外面にハケメ調整を施す。

【SX44 焼成遺構】(第36図、写真図版9)

[位置] 4区北部/南西向緩斜面

[重複] なし

[規模・形状] 平面形が長軸45cm、短軸35cmの不整楕円形を呈し、断面形は深さ21cmの皿形を呈する。底面は皿状に窪んでいる。掘方埋土により深さ2cmで断面形が皿形を呈する底面を構築している。

[堆積土] 2層に細分される。1層は焼土ブロックを主体として炭化物粒を含む褐色シルト、2層は焼土・炭化物粒を少量含む黒褐色シルトである。1層は機能時堆積土、2層は掘方埋土と考えられる。

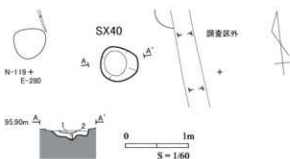
[出土遺物] なし

【SX134 焼成遺構】(第36図、写真図版9)

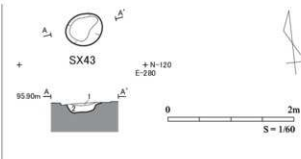
[位置] 4区南部/南西向緩斜面

[重複] なし

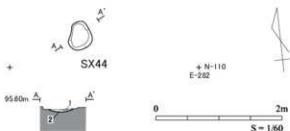
[規模・形状] 平面形が一辺50cmの隅丸方形を呈し、



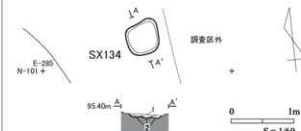
SX40 焼成遺構 A-A'			
No.	土層	土性	備考
1	10YR2/3黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロック、焼土粒を含む
2	10YR2/1黒	炭化物層(機能時堆)	
3	10YR2/3黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(掘)



SX43 焼成遺構 A-A'			
No.	土層	土性	備考
1	10YR2/2黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
2	10YR2/2黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む(掘)



SX44 焼成遺構 A-A'			
No.	土層	土性	備考
1	7.5YR4/4黄	シルト	焼土ブロック主体、炭化物粒を含む
2	10YR2/3黒褐色	シルト	炭化物層、焼土粒を少量含む(掘)



SX134 焼成遺構 A-A'			
No.	土層	土性	備考
1	10YR2/2黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒・焼土粒を多量に含む 炭化物粒を含む
2	10YR3/3黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(掘)

第36図 SX40・SX43・SX44・SX134 焼成遺構

断面形は深さ7cmの皿形を呈する。底面は凹凸が見られる。掘方埋土により深さ3cmで断面形が皿形を呈する底面を構築している。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は炭化物粒と多量の黄褐色ローム・焼土粒を含む褐色シルト、2層は黄褐色ロームブロックを多量を含む暗褐色シルトである。1層は機能時堆積土、2層は掘方埋土と考えられる。〔出土遺物〕なし

(7) 組み合わせない柱穴跡

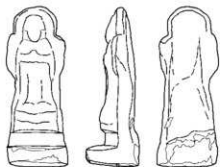
調査区全域に散漫に分布し、北部でやや多く確認した。小規模で柱痕跡が確認されないものが多いが、やや規模が大きく柱痕跡が確認されたものもある。確認面・堆積土から土師器環・甕、須恵器小型品、鉄釘が出土した。土師器環は内面に黒色処理を施し、外面の体部にヘラケズリ調整を施す。甕は外面の頸部に痕跡的な段を持ち、口縁部にヨコナデ、胴部にハケメ調整を施す。鉄釘は横断面が方形の角釘である。



0 10cm
S=1/3

(8) 遺構外出土遺物

攪乱から中世陶器壺? (第37図1)、遺構確認面から金属製の懐中仏 (第37図2) が出土した。中世陶器壺? は口縁部破片で内外面にロクロナデ調整を施す。口縁部は外反し口唇部下端が幅み出されて幅1.0cmの口縁緑帯部を形成する。懐中仏は高さ4.23cm、幅1.53cm、厚さ1.41cm、重量28.2gで、銅製とみられる。立像と光背、台座を一踏で鋳出した後、研磨による仕上げを施す。台座上部は切欠状となっており、別跡または異なる素材の蓮華座が嵌め込まれていた可能性がある。表面の風化が進行しており像種は判別できないが、如来形または菩薩形であろう。また、両手は胸の位置にあることから印相は合掌印の可能性が考えられる。



0 3cm
S=1/1

No.	遺構	層位	種類	遺構	特徴	現存高 (cm)	層位	図録	写真
1	攪乱	確認面	中世陶器 壺?	内外面: ロクロナデ	3.7	口縁部	OSO	33-2	
No.	遺構名	層位	種類	法量 (mm × mm × mm)			現存	図録	写真
2	-	確認面	懐中仏	42.3	14.1	28.2	欠形	126	33-1

第37図 遺構外出土遺物

5.5区

遺跡範囲の南部に位置し、東西42m、南北90mの範囲に延びる幅9-15mの調査区である。調査区内はほぼ平坦で、わずかに南へ向かって傾斜する。遺構確認面は現地表面から深さ15-20cmのV-VI層上面である。遺構は掘立柱建物跡32棟、柱列跡10条、井戸跡5基、土坑8基、堀跡1条、溝跡12条、焼成遺構9基、濃密に分布する柱穴跡群を確認した(第39図、写真図版10)。

(1) 掘立柱建物跡

〔SB74 掘立柱建物跡〕(第38図、写真図版11・15)

〔位置〕5区中央部/平坦面

〔重複〕SB74 - SB92・SB162・SB163・SX66

〔規模・形状〕桁行2間(総長4.60m)、梁行1間(総長3.00m)の東西棟掘立柱建物である。

〔柱穴〕5か所確認した。掘方の平面形は長軸30-35cm、短軸24-32cmの略円形・楕円形を呈し、深さ15-20cmである。4か所で平面形が直径15-20cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕桁行(南側柱列):西から230-230cm、

梁行（西側柱列）：300cm

〔方向〕南側柱列：W-2°-N

〔出土遺物〕なし

【SB77 掘立柱建物跡】（第43図、写真図版12・14・15・33）

〔位置〕5区北部／平坦面

〔重複〕SB180・SA76→SB77-SB78・SB79・SB156・SB157・SB158・SB159・SB160・SB181・SA98

〔規模・形状〕桁行3間（総長6.40m）、梁行2間（総長4.90m）の東西棟側柱建物である。

〔柱穴〕9か所確認した。掘方の平面形は長軸39-48cm、短軸32-44cmの楕円形・略円形・隅丸方形を呈し、深さ22-59cmである。1か所で柱材の抜き取り痕跡を、8か所で平面形が直径13-24cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕桁行（北側柱列）：西から200-210・(230)cm、梁行（西側柱列）：北から220-270cm

〔方向〕北側柱列：W-9°-S

〔出土遺物〕P2柱穴柱痕跡下部に柱材の一部が残存していた（写真図版33.4）。長さ22.4cm、幅15.6cm、厚さ10.5cmの割材（芯去材）がある。

【SB78 掘立柱建物跡】（第44図、写真図版11・15）

〔位置〕5区北部／平坦面

〔重複〕SB156→SB78→SB160・SB180-SB77・SB79・SB155・SB157・SB158・SB159・SB181・SA24

〔規模・形状〕桁行4間（総長8.30m）以上、梁行2間（4.60m）の東西棟側柱建物である。

〔柱穴〕11か所確認した。掘方の平面形は長軸34-54cm、短軸29-43cmの不整楕円形・楕円形を呈し、

深さ21-45cmである。3か所で柱材の抜き取り痕跡を、8か所で平面形が直径10-19cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕桁行（北側柱列）：西から(260)-170-170-(230)cm、梁行（東側柱列）：北から(150)-310cm

〔方向〕北側柱列：W-13°-S

〔出土遺物〕なし

【SB79 掘立柱建物跡】（第45図、写真図版15）

〔位置〕5区北部／平坦面

〔重複〕SB156→SB79-SB77・SB78・SB155・SB157・SB158・SB159・SB160・SB180・SB181・SA24・SA98

〔規模・形状〕桁行3間（総長6.40m）以上、梁行2間（総長4.10m）の東西棟側柱建物である。

〔柱穴〕8か所確認した。掘方の平面形は長軸32-50cm、短軸30-38cmの略円形・不整形を呈し、深さ30-37cmである。1か所で柱材の抜き取り痕跡を、6か所で平面形が直径14-17cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕桁行（北側柱列）：西から200-230-210cm、梁行（東側柱列）：北から160-250cm

〔方向〕北側柱列：W-6°-S

〔出土遺物〕なし

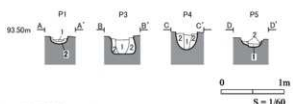
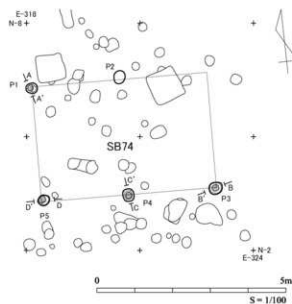
【SB80 掘立柱建物跡】（第45図、写真図版13・15）

〔位置〕5区南部／平坦面

〔重複〕SB166→SB80→SK55-SA81

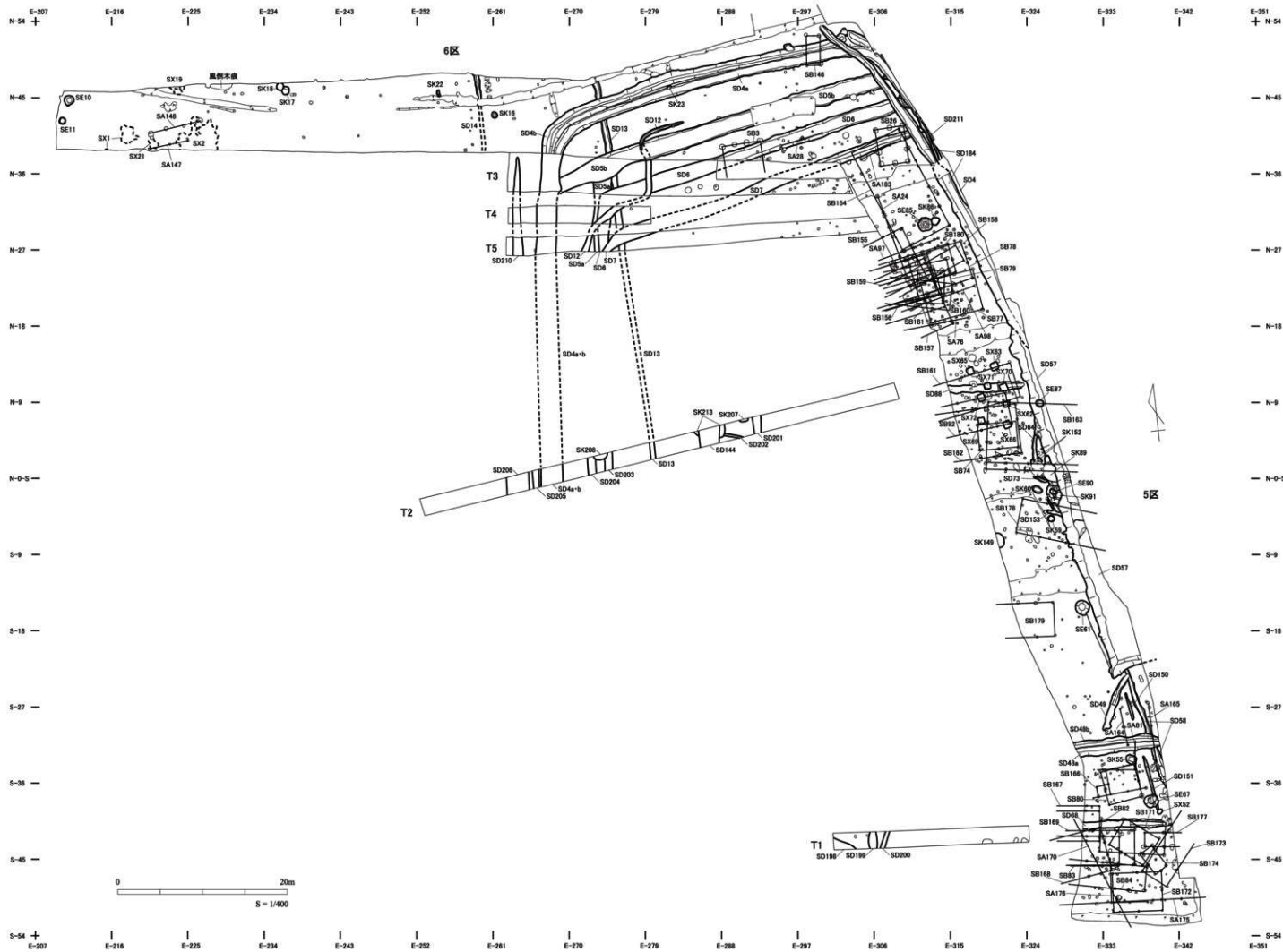
〔規模・形状〕桁行1間（総長4.10m）、梁行2間（総長4.00m）の東西棟側柱建物である。

〔柱穴〕6か所確認した。掘方の平面形は長軸

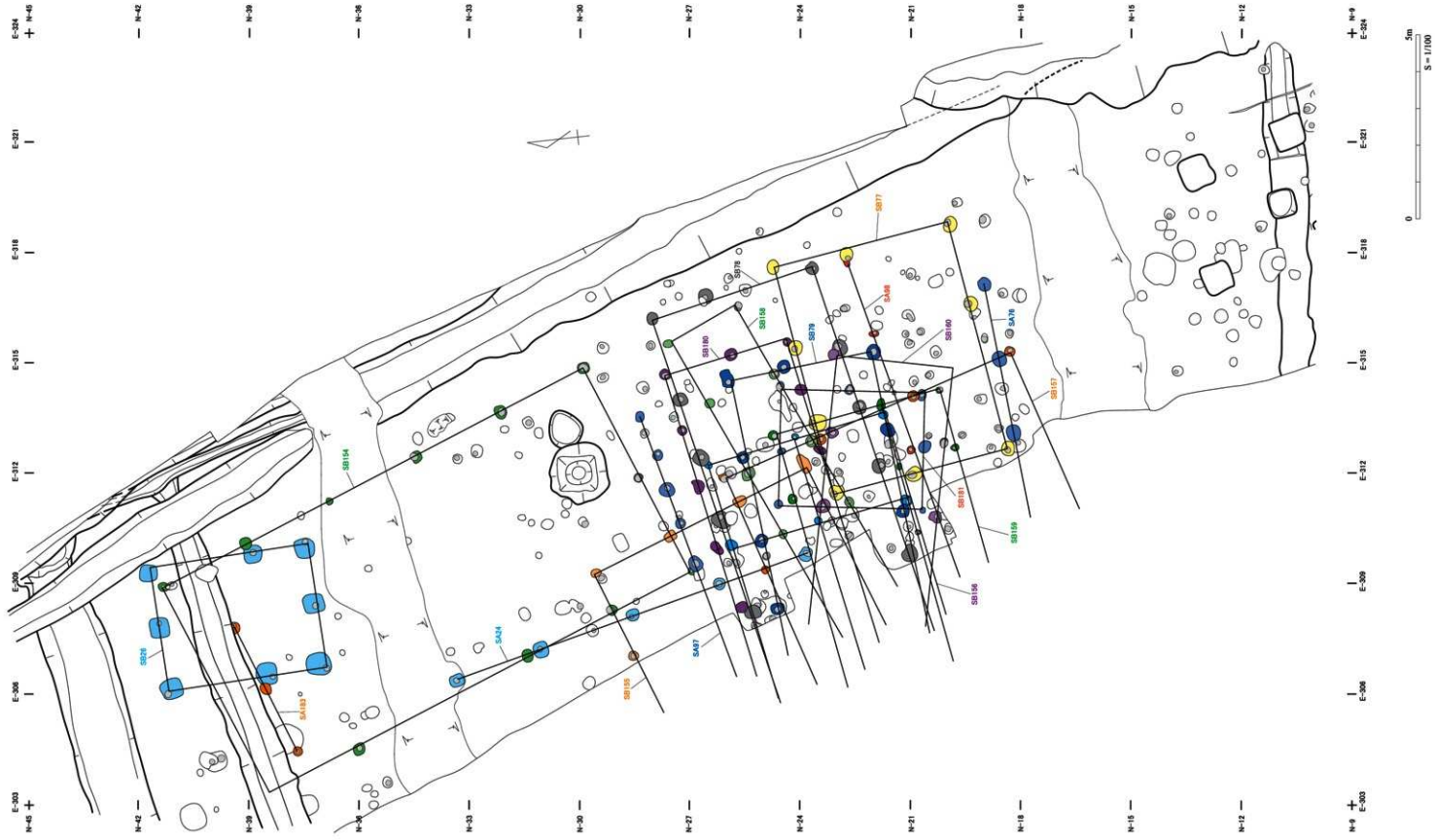


SB74 掘立柱建物跡 P1 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム土を少量含む 焼土粒を含む (柱底)
2	10YR4/4 黒	粘質シルト	黄褐色ローム土と黒色シルトブロックを含む (柱底)
SB74 掘立柱建物跡 P3 B-B'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒	シルト	黄褐色ローム土と焼土粒・炭化物粒をごく少量含む (柱底)
2	10YR4/6 黒	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 焼土粒をごく少量含む (柱底)
SB74 掘立柱建物跡 P4 C-C'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒	シルト	黄褐色ローム土を少量含む (柱底)
2	10YR4/4 黒	シルト	黄褐色ローム土を多量に含む (柱底)
SB74 掘立柱建物跡 P5 D-D'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム土を含む (柱底)
2	10YR4/4 黒	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・黒色シルトブロックを含む (柱底)

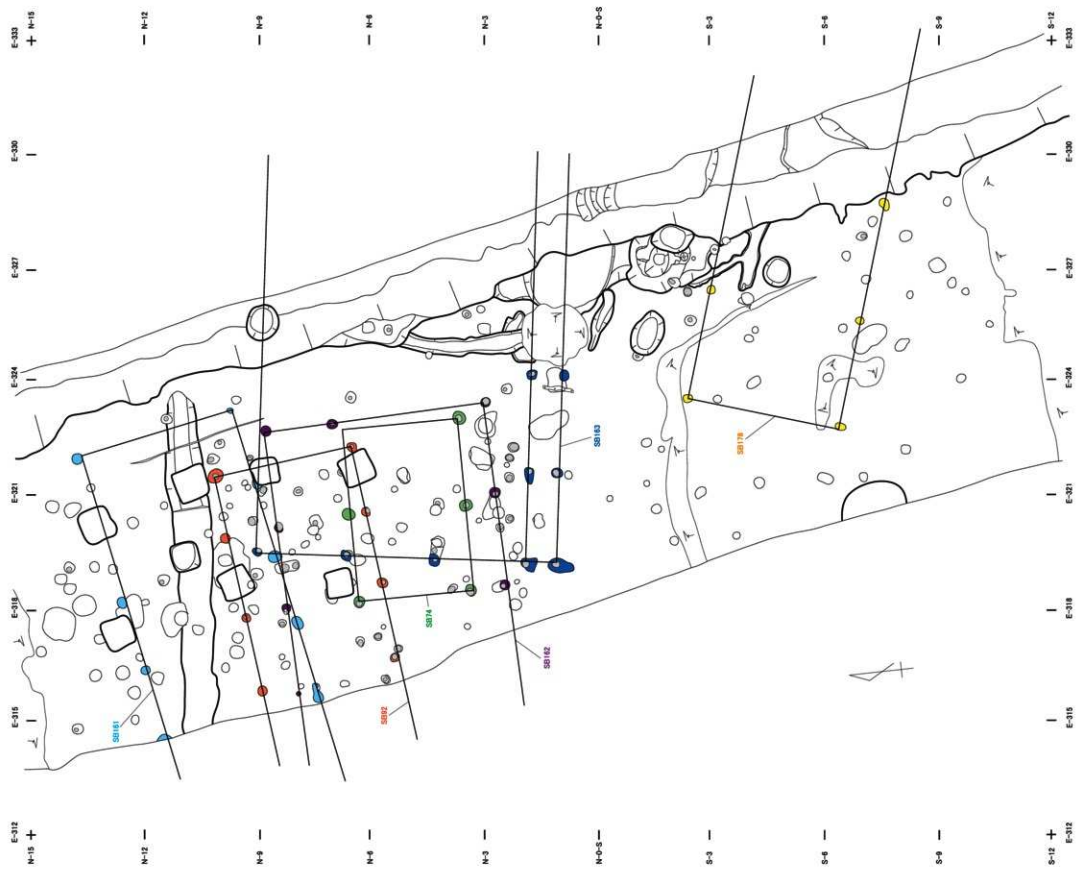
第38図 SB74 掘立柱建物跡



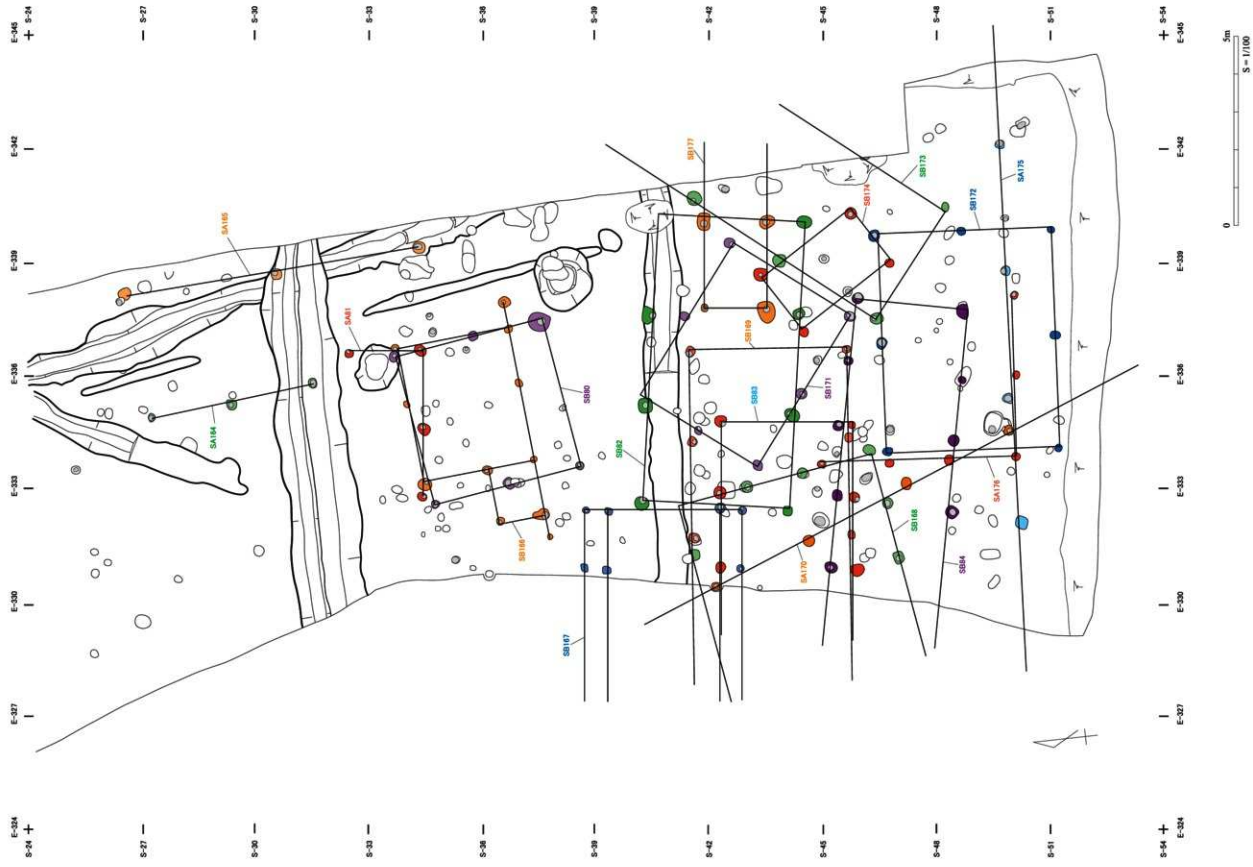
第 39 图 5・6 区連絡配置图



第40圖 6區東部・5區北部掘立柱建物群



第41圖 5區中央部獨立住屋佈局圖



第42图 S区南部直立柱状物群

22-60cm、短軸 20-54cm の略円形・楕円形を呈し、深さ 9-55cm である。5 か所で平面形が直径 9-18cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕 桁行（北側柱列）：410cm、梁行（西側柱列）：北から 200-200cm

〔方向〕 北側柱列：W-9°-S

〔出土遺物〕 なし

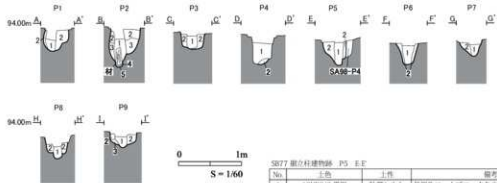
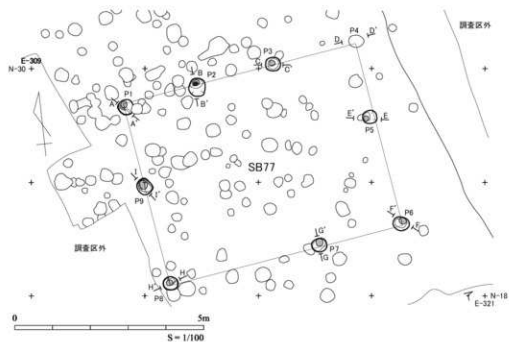
【SB82 掘立柱建物跡】（第 46 図、写真図版 12・15）

〔位置〕 5 区南部／平坦面

〔重複〕 SD68 → SB82 - SB83・SB167・SB168・SB169・SB171・SB173・SB174・SB177

〔規模・形状〕 桁行 3 間（総長 7.50m）、梁行 1 間（総長 3.90m）の東西棟掘立柱建物である。

〔柱穴〕 7 か所確認した。掘方の平面形は長軸



SB77 掘立柱建物跡 P1 A-A

No	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	粘質シルト	炭褐色ローム層を少量含む（柱層）
2	10YR3/2 黒褐色	粘質シルト	炭褐色ローム・ブロックを少量含む（柱層）

SB77 掘立柱建物跡 P2 B-B

No	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	炭褐色ローム層を含む（柱層）
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭褐色ローム・ブロックを多量に含む（柱層）
3	10YR3/3 暗褐色	粘質シルト	炭褐色ローム・小ブロックを少量含む（柱層）
4	10YR2/3 黒褐色	シルト	上面に、土間に柱材の腐食による空洞（柱層）
5	10YR2/1 黒	粘質シルト	炭褐色ローム・小ブロックをごく少量含む（柱層）

SB77 掘立柱建物跡 P3 C-C

No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭褐色ローム・ブロックをごく少量含む 上部に柱材の腐食による空洞（柱層）
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	炭褐色ローム・粘土粒を含む（柱層）

SB77 掘立柱建物跡 P4 D-D

No	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	炭褐色ローム・ブロックを少量含む（柱層）
2	10YR3/2 黒褐色	粘質シルト	炭褐色ローム・ブロックを多量に含む（柱層）

SB77 掘立柱建物跡 P5 E-E

No	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	炭褐色ローム・ブロックを少量含む（柱層）
2	10YR4/3 灰-黒褐色	粘質シルト	炭褐色ローム・ブロックを多量に含む（柱層）

SB77 掘立柱建物跡 P6 F-F

No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭褐色ローム・ブロックを少量含む（柱層）
2	10YR4/3 灰-黒褐色	シルト	炭褐色ローム・ブロックを多量に含む（柱層）

SB77 掘立柱建物跡 P7 G-G

No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭褐色ローム・ブロックを少量含む（柱層）
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	炭褐色ローム・ブロックを含む（柱層）

SB77 掘立柱建物跡 P8 H-H

No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭褐色ローム層をごく少量含む（柱層）
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭褐色ローム・ブロックを含む 焼土粒・炭化物粒をごく少量含む（柱層）

SB77 掘立柱建物跡 P9 I-I

No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭褐色ローム・ブロックを少量含む 上部に柱材の腐食による空洞（柱層）
2	10YR2/3 黒褐色	シルト	炭褐色ローム・ブロックを含む 焼土粒をごく少量含む（柱層）
3	10YR4/4 灰	シルト	炭褐色ローム・ブロックを多量に含む（柱層）

第 43 図 SB77 掘立柱建物跡

20-33cm、短軸20-33cmの略円形・不整円形を呈し、深さ28-55cmである。2か所で柱材の抜き取り痕跡、5か所で平面形が直径13-24cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕桁行(南側柱列):西から(250)・260・(240)cm、梁行(西側柱列):(390)cm

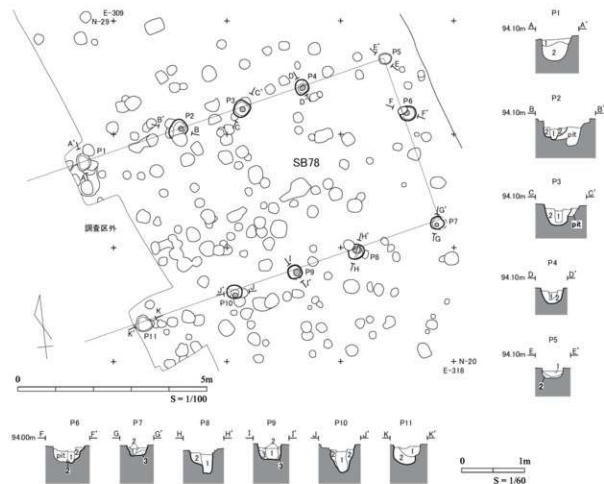
〔方向〕南側柱列:W-8・N

〔出土遺物〕P2柱穴堆積土から土師器が、P7柱穴堆積土から礫石器が出土した。礫石器は板状で両面に磨面が見られる。

〔SB83 掘立柱建物跡〕(第46図、写真図版12・15)

〔位置〕5区南部/平坦面

〔重複〕SB167→SB83・SB82・SB84・SB168・SB169・SB171・SA170・SA176



SB78 掘立柱建物跡 P1 A-A'

No.	土層	土質	備考
1	10YR2/1 黒土	粘質シルト	黄褐色ローム粒を少量含む(柱痕)
2	10YR3/1 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多数含む(柱痕)

SB78 掘立柱建物跡 P2 B-B'

No.	土層	土質	備考
1	10YR3/1 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム粒を少量含む(柱痕)
2	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む(柱痕)

SB78 掘立柱建物跡 P3 C-C'

No.	土層	土質	備考
1	10YR3/1 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む(柱痕)
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多数含む(柱痕)

SB78 掘立柱建物跡 P4 D-D'

No.	土層	土質	備考
1	10YR3/1 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む(柱痕)
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多数含む(柱痕)

SB78 掘立柱建物跡 P5 E-E'

No.	土層	土質	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む(柱痕)
2	10YR4/6 黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多数含む(柱痕?)

SB78 掘立柱建物跡 P6 F-F'

No.	土層	土質	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・炭土粒・炭化物粒をごく少量含む(柱痕)
2	10YR4/2 に近い黄褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを極めて多数含む(柱痕)

SB78 掘立柱建物跡 P7 G-G'

No.	土層	土質	備考
1	10YR3/1 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む(柱痕)
2	10YR3/3 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多数含む(柱痕)
3	10YR4/6 黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロック主体 黄褐色シルトブロックを少量含む(柱痕)

SB78 掘立柱建物跡 P8 H-H'

No.	土層	土質	備考
1	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックをごく少量含む(柱痕)
2	10YR2/3 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む(柱痕)

SB78 掘立柱建物跡 P9 I-I'

No.	土層	土質	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む(柱痕)
2	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む(柱痕)
3	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多数含む(柱痕)

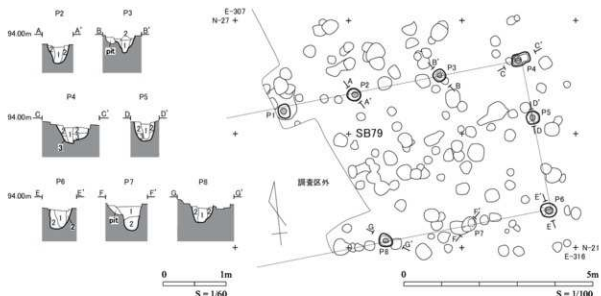
SB78 掘立柱建物跡 P10 J-J'

No.	土層	土質	備考
1	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム粒を少量含む(柱痕)
2	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む(柱痕)

SB78 掘立柱建物跡 P11 K-K'

No.	土層	土質	備考
1	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多数含む 黄褐色ローム粒を少量含む(柱痕)
2	10YR2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ローム粒を少量含む(柱痕?)

第44図 SB78 掘立柱建物跡



SB79 掘立柱建物跡 P2 A-A'

No	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む (柱間)
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱間)

SB79 掘立柱建物跡 P3 B-B'

No	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む (柱間)
2	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱間)

SB79 掘立柱建物跡 P4 C-C'

No	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む (柱間)
2	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを極めて多量に含む 焼土・炭化物をく少量含む (柱間)
3	10YR4/3 に近い黄褐	シルト	黄褐色ロームブロックを極めて多量に含む 炭化物をく少量含む (柱間)

SB79 掘立柱建物跡 P5 D-D'

No	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む (柱間)
2	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 炭化物を少量含む (柱間)
3	10YR4/4 暗	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱間)

SB79 掘立柱建物跡 P6 E-E'

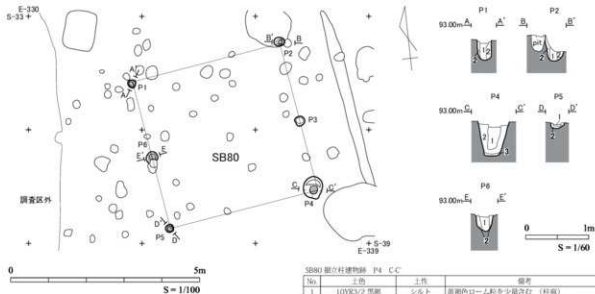
No	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームを少量含む (柱間)
2	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱間)

SB79 掘立柱建物跡 P7 F-F'

No	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱間)
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む (柱間)

SB79 掘立柱建物跡 P8 G-G'

No	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱間)
2	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む (柱間)



SB80 掘立柱建物跡 P1 A-A'

No	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを含む 焼土・炭化物ブロックを少量含む (柱間)
2	10YR5/4 に近い黄褐	シルト	黄褐色ロームブロックを極めて多量に含む (柱間)

SB80 掘立柱建物跡 P2 B-B'

No	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ローム大ブロックを含む (柱間)
2	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を含む (柱間)

SB80 掘立柱建物跡 P4 C-C'

No	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む (柱間)
2	10YR3/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム大ブロックを含む (柱間)
3	10YR4/1 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱間)

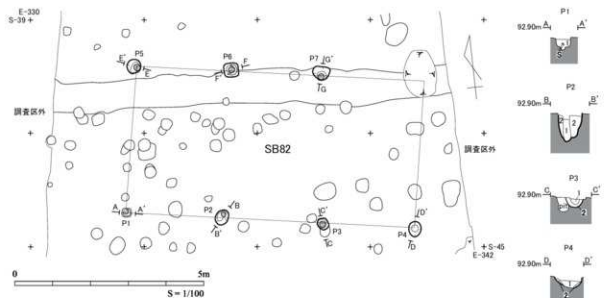
SB80 掘立柱建物跡 P5 D-D'

No	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	均質土 (柱間)
2	10YR4/4 暗	シルト	黒色土を含む (柱間)

SB80 掘立柱建物跡 P6 E-E'

No	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 炭化物を少量含む (柱間)
2	10YR4/3 に近い黄褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱間)

第45図 SB79・SB80 掘立柱建物跡



SB82 掘立柱建物跡 P1 A-A'

No.	土層	土性	備考
1	10YR3/3 褐相	シルト	黄褐色ローム・ブロックを含む (柱状)

SB82 掘立柱建物跡 P2 B-B'

No.	土層	土性	備考
1	10YR3/2 黄褐相	シルト	黄褐色ローム・粘をごく少量含む (柱状)
2	10YR3/3 褐相	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む (柱状)

SB82 掘立柱建物跡 P3 C-C'

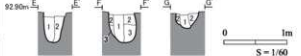
No.	土層	土性	備考
1	10YR3/4 褐相	粘質シルト	均質土 (柱状)
2	10YR3/1 黒相	粘質シルト	黄褐色ローム・粘を少量含む (柱状)

SB82 掘立柱建物跡 P4 D-D'

No.	土層	土性	備考
1	10YR3/2 黄褐相	シルト	黄褐色ローム・ブロックを含む (柱状)
2	10YR3/4 褐相	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む (柱状)

SB82 掘立柱建物跡 P5 E-E'

No.	土層	土性	備考
1	10YR3/3 褐相	粘質シルト	均質土 (柱状)
2	10YR3/3 褐相	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロックを少量含む (柱状)

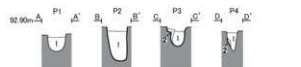
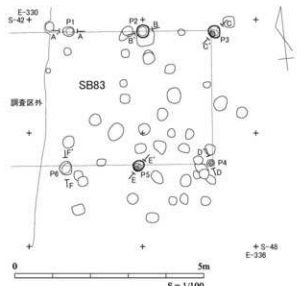


SB82 掘立柱建物跡 P6 F-F'

No.	土層	土性	備考
1	10YR3/3 褐相	シルト	黄褐色ローム・粘・礫・土粒・炭化物粒をごく少量含む (柱状)
2	10YR4/3 に近い黄褐相	粘質シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む (柱状)
3	10YR3/4 褐相	粘質シルト	黄褐色ローム・粘をごく少量含む (柱状)

SB82 掘立柱建物跡 P7 G-G'

No.	土層	土性	備考
1	10YR3/2 黄褐相	シルト	黄褐色ローム・粘を含む (柱状)
2	10YR3/3 褐相	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む (柱状)



SB83 掘立柱建物跡 P1 A-A'

No.	土層	土性	備考
1	10YR3/3 褐相	シルト	黄褐色ローム・小ブロック・粘、白色粘土粒をごく少量含む (柱状)

SB83 掘立柱建物跡 P2 B-B'

No.	土層	土性	備考
1	10YR2/2 黒相	粘質シルト	黄褐色ローム・粘を少量含む (柱状?)

SB83 掘立柱建物跡 P3 C-C'

No.	土層	土性	備考
1	10YR3/3 褐相	シルト	黄褐色ローム・小ブロック・粘、黄土粒・炭化物粒をごく少量含む (柱状)
2	10YR4/3 に近い黄褐相	シルト	黄褐色ローム・ブロックを含む (柱状)

SB83 掘立柱建物跡 P4 D-D'

No.	土層	土性	備考
1	10YR2/3 黒相	シルト	黄褐色ローム・粘をごく少量含む (柱状)
2	10YR4/3 に近い黄褐相	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む (柱状)

SB83 掘立柱建物跡 P5 E-E'

No.	土層	土性	備考
1	10YR3/3 褐相	シルト	黄褐色ローム・ブロックを少量含む (柱状)
2	10YR4/3 に近い黄褐相	シルト	黄褐色ローム・ブロックを多量に含む (柱状)

SB83 掘立柱建物跡 P6 F-F'

No.	土層	土性	備考
1	10YR3/2 黄褐相	シルト	黄褐色ローム・ブロックを含む (炭化物)を少量含む (柱状)

第 46 図 SB82・SB83 掘立柱建物跡

〔規模・形状〕桁行2間(総長3.80m)以上、梁行1間(総長3.50m)の東西棟側柱建物である。

〔柱穴〕6か所確認した。掘方の平面形は長軸20-33cm、短軸20-33cmの略円形・不整楕円形を呈し、深さ28-55cmである。3か所で柱材の抜き取り痕跡を、2か所で平面形が直径20-30cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕桁行(北側柱列):西から(190)-(190)cm、梁行(東側柱列):(350)cm

〔方向〕北側柱列:W-7°-N

〔出土遺物〕P6柱穴柱材抜き取り痕跡から土師器裏が出土した。外面にハケメ調整を施す。

【SB84 掘立柱建物跡】(第47図、写真図版12・13・15)

〔位置〕5区南部/平坦面

〔重複〕SB84-SB83・SB168・SB169・SB171・SB172・SB173・SA170・SA176

〔規模・形状〕桁行4間(総長7.10m)以上、梁行1間(総長2.90m)の東西棟側柱建物である。

〔柱穴〕9か所確認した。掘方の平面形は長軸

23-34cm、短軸23-34cmの略円形・隅丸方形を呈し、深さ23-34cmである。4か所で柱材の抜き取り痕跡を、3か所で平面形が直径10-18cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕桁行(北側柱列):西から(190)-(185)-170-(165)cm、梁行(東側柱列):(290)cm

〔方向〕北側柱列:W-12°-N

〔出土遺物〕P1柱穴方埋土から土師器裏が出土した。外面にハケメ調整を施す。

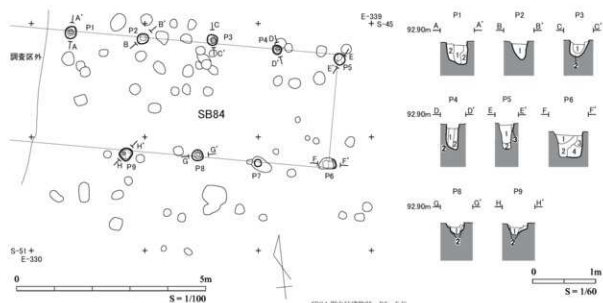
【SB92 掘立柱建物跡】(第48図、写真図版11・15・16)

〔位置〕5区中央部/平坦面

〔重複〕SB92→SX66-SB74・SB161・SB162・SB163・SX62・SX69・SX72

〔規模・形状〕桁行3間(総長5.70m)以上、梁行1間(総長3.80m)の東西棟側柱建物である。

〔柱穴〕8か所確認した。掘方の平面形は長軸22-38cm、短軸22-38cmの略円形・不整楕円形を呈し、深さ12-36cmである。6か所で平面形が直径8-15cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。



SB84 掘立柱建物跡 P1 A-A

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ローム層をごく少量含む(柱底)
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	均質シルト(柱底)

SB84 掘立柱建物跡 P2 B-B

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 焼土粒・炭化物粒をごく少量含む

SB84 掘立柱建物跡 P3 C-C

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	均質シルト(柱底)
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ローム層を含む(柱底)

SB84 掘立柱建物跡 P4 D-D

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム小ブロックを少量含む(柱底)
2	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム小ブロックを多量に含む(柱底)

SB84 掘立柱建物跡 P5 E-E

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム層を少量含む(柱底)
2	10YR4/4 黒	シルト	黄褐色ローム小ブロックを含む(柱底)
3	10YR3/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)

SB84 掘立柱建物跡 P6 F-F

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)
2	10YR3/1 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む(柱底)
3	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ローム層を多量に含む(柱底)
4	10YR4/1 黒灰	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)

SB84 掘立柱建物跡 P6 G-G

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム層を少量含む(柱底)
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム層を含む(柱底)

SB84 掘立柱建物跡 P9 H-H

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	均質シルト(柱底)
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む(柱底)

第47図 SB84 掘立柱建物跡

〔柱間寸法〕桁行（南側柱列）：西から200-190-180cm、梁行（東側柱列）：(380) cm

〔方向〕北側柱列：W-7°-S

〔出土遺物〕P3柱北掘方埋土からロクロ土師器環が出土した。内面に黒色処理を施す。

〔SB154 掘立柱建物跡〕(第49図、写真図版11・14・16)

〔位置〕5区北部／平坦面

〔重複〕SB26→SB154→SA97・SD7-SB155・SA24・SA183・SE85・SK86

〔規模・形状〕桁行5間（総長12.88m）、梁行2間（総長6.26m）の南北棟側柱建物である。

〔柱穴〕11か所確認した。掘方の平面形は長軸21-36cm、短軸20-32cmの隅丸方形・略円形・不整形を呈し、深さ16-44cmである。2か所で柱材の抜き取り痕跡、8か所で平面形が直径8-28cmの円形・楕円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕桁行（東側柱列）：北から(252)-(256)-(264)-(262)-254 cm、梁行（南側柱列）：西から292-334 cm

〔方向〕東側柱列：N-21°-W

〔出土遺物〕なし

〔SB155 掘立柱建物跡〕(第51図、写真図版10)

〔位置〕5区北部／平坦面

〔重複〕SB155-SB78・SB79・SB154・SB156・SB157・SB158・SB159・SB160・SB180・SB181・SA24・SA97

〔規模・形状〕桁行3間（総長6.56m）以上、梁行1間（総長2.49m）の南北棟側柱建物である。

〔柱穴〕5か所確認し、いずれも未精査である。掘方の平面形は長軸24-56cm、短軸22-27cmの略円形・不整形・不整形を呈する。1か所で平面形が直径16cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕桁行（東側柱列）：北から(236)-(212)-(208) cm、梁行（北側柱列）：(249) cm

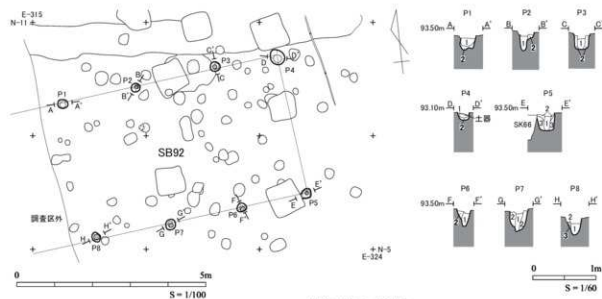
〔方向〕東側柱列：N-21°-W

〔出土遺物〕なし

〔SB156 掘立柱建物跡〕(第50図)

〔位置〕5区北部／平坦面

〔重複〕SB156→SB78・SB79-SB77・SB155・SB157・



SB92 掘立柱建物跡 P1 A-A

No.	土層	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	炭褐色ロームブロック・粘を多量に含む (柱面)
2	10YR4/6 黄	粘質シルト	炭褐色ロームブロックを多量に含む (柱面)

SB92 掘立柱建物跡 P2 B-B

No.	土層	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	炭褐色ローム粘を少量含む (柱面)
2	10YR4/6 黄	シルト	炭褐色ローム粘を多量に含む (柱面)

SB92 掘立柱建物跡 P3 C-C

No.	土層	土性	備考
1	10YR2/2 黒	粘質シルト	炭褐色ローム粘を含む (柱面)
2	10YR3/4 黄	粘質シルト	炭褐色ローム粘を多量に含む (柱面)

SB92 掘立柱建物跡 P4 D-D

No.	土層	土性	備考
1	10YR2/2 黒	粘質シルト	炭褐色ロームブロックを少量含む (柱面)
2	10YR4/6 黄	粘質シルト	炭褐色ロームブロックを多量に含む (柱面)

SB92 掘立柱建物跡 P5 E-E

No.	土層	土性	備考
1	10YR5/1 黒灰	粘質シルト	炭褐色ロームブロック・粘を含む (柱面)
2	10YR4/1 黒灰	シルト	炭褐色ロームブロック・粘を含む (柱面)
3	10YR4/2 灰黄	粘質シルト	炭褐色ロームブロックを多量に含む (柱面)

SB92 掘立柱建物跡 P6 F-F

No.	土層	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	炭褐色ローム粘を含む (柱面)
2	10YR2/2 黒	シルト	炭褐色ロームブロック・粘を含む (柱面)

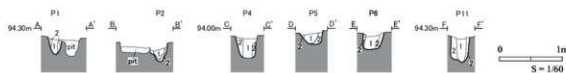
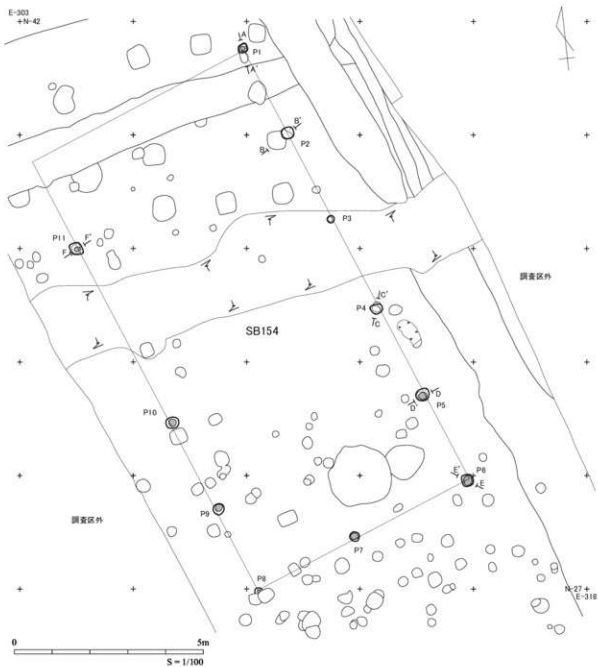
SB92 掘立柱建物跡 P7 G-G

No.	土層	土性	備考
1	10YR2/2 黒	粘質シルト	炭褐色ロームブロック・粘を少量含む (柱面)
2	10YR3/3 黄	シルト	炭褐色ロームブロックを多量に含む (柱面)

SB92 掘立柱建物跡 P8 H-H

No.	土層	土性	備考
1	10YR3/1 黒	粘質シルト	炭褐色ローム粘を多量に含む 炭化物粒をごく少量含む (柱面)
2	10YR3/4 黄	シルト	炭褐色ローム粘を含む (柱面)
3	10YR2/1 黒	粘質シルト	炭褐色ローム粘をごく少量含む (柱面)

第48図 SB92 掘立柱建物跡



SB154 掘立柱建物跡 P1 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	炭褐色ロームブロックを含む (柱底)
2	10YR2/3 黒褐	シルト	炭褐色ロームブロックを多量に含む (柱底)

SB154 掘立柱建物跡 P2 B-B'

No.	土色	土性	備考
1	7.5YR3/1 黒褐	シルト	打割土 (柱底)
2	7.5YR4/3 黒褐	シルト	炭褐色ロームブロックを含む (柱底)

SB154 掘立柱建物跡 P4 C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	炭褐色ロームブロックを少量含む (柱底)
2	10YR2/2 黒褐	シルト	炭褐色ロームブロックを多量に含む (柱底)

SB154 掘立柱建物跡 P5 D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	炭褐色ロームブロックを全く少量含む (柱底)
2	10YR3/3 黒褐	粘質シルト	炭褐色ロームブロックを多量に含む (柱底)

SB154 掘立柱建物跡 P6 E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	炭褐色ロームブロックを少量含む (柱底)
2	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	炭褐色ロームブロックを多量に含む (柱底)

SB154 掘立柱建物跡 P11 F-F'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	炭褐色ロームブロックを含む (柱底)
2	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	炭褐色ロームブロックを多量に含む (柱底)

第 49 図 SB154 掘立柱建物跡

SB158・SB159・SB160・SB180・SB181・SA24
 (規模・形状) 桁行2間(総長4.94m)、梁行2間(4.63m)
 以上の南北棟床東建物である。
 (柱穴) 側柱6か所、東柱1か所を確認し、いずれも未精査である。掘方の平面形は長軸20-32cm、短軸18-30cmの略円形・隅丸方形・不整楕円形を呈する。側柱の3か所で平面形が直径11-17cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

(柱間寸法) 桁行(東側柱列): 北から(244) - (250) cm、梁行(北側柱列): 西から(227) - (236) cm
 (方向) 東側柱列: N-10°-W
 (出土遺物) なし

【SB157 掘立柱建物跡】(第50図、写真図版10・14)

(位置) 5区北部/平坦面
 (重複) SB181→SB157→SB158 - SB77・SB78・SB79・SB155・SB156・SB159・SB160・SB180・SA24・SA76・SA98

(規模・形状) 桁行3間(総長8.54m)、梁行1間(総長2.72m)以上の南北棟側柱建物である。

(柱穴) 5か所確認し、いずれも未精査である。掘方の平面形は長軸22-30cm、短軸19-28cmの略円形である。2か所で平面形が直径14-16cmの楕円形を呈する柱痕跡を確認した。

(柱間寸法) 桁行(東側柱列): 北から(288) - (276) - (290) cm、梁行(北側柱列): (272) cm
 (方向) 東側柱列: N-18°-W
 (出土遺物) なし

【SB158 掘立柱建物跡】(第51図、写真図版10・14)

(位置) 5区北部/平坦面
 (重複) SB157→SB158 - SB77・SB78・SB79・SB155・SB156・SB159・SB160・SB180・SB181

(規模・形状) 桁行3間(総長6.15m)以上、梁行1間(総長2.03m)の東西棟側柱建物である。

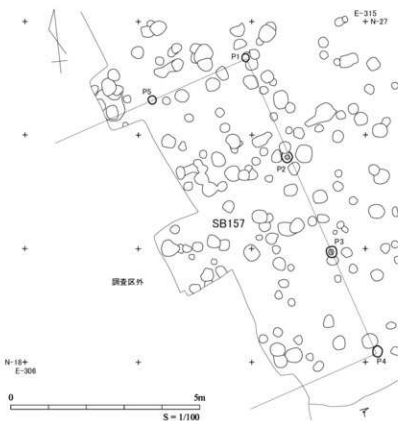
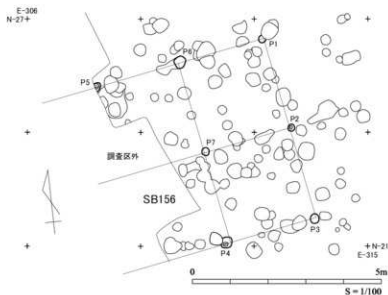
(柱穴) 8か所確認した。掘方の平面形は長軸24-37cm、短

軸20-34cmの略円形・不整楕円形を呈し、深さ24-32cmである。6か所で平面形が直径12-23cmの円形・楕円形を呈する柱痕跡を確認した。

(柱間寸法) 桁行(南側柱列): 西から196-207-212cm、梁行(東側柱列): (203) cm

(方向) 東側柱列: W-24°-S

(出土遺物) なし



第50図 SB156・SB157 掘立柱建物跡

【SB159 掘立柱建物跡】(第51図)

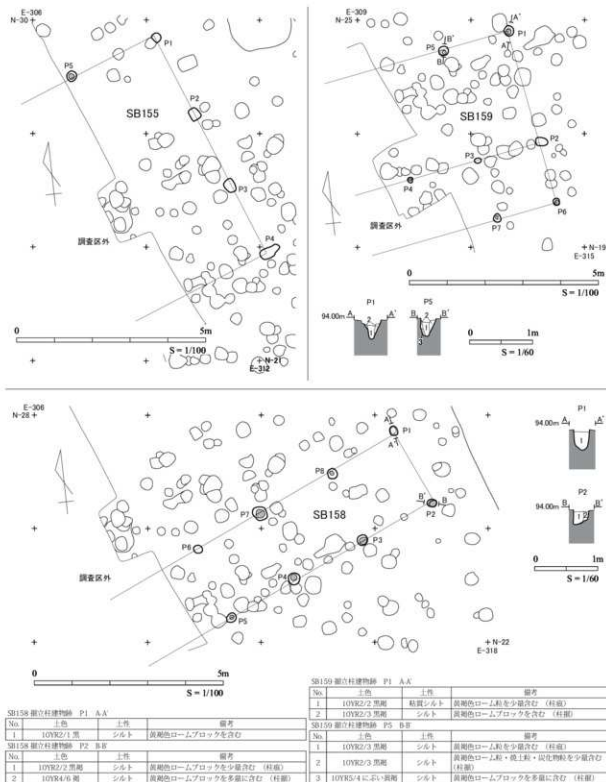
〔位置〕5区北部／平地面

〔重複〕SB159・SB77・SB78・SB79・SB155・SB156・SB157・SB158・SB160・SB180・SB181・SA24

〔規模・形状〕桁行2間(総長3.58m)以上、梁行1間(総長3.00m)の南廂(縁)付東西棟側柱建物である。廂

(縁)の出は1.62mである。

〔柱穴〕身舎で5か所、廂(縁)で2か所確認した。掘方の平面形は長軸16-30cm、短軸14-26cmの略円形・不整形円形を呈し、深さ31-32cmである。身舎の3か所、廂(縁)の2か所で平面形が直径9-15cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。



第51図 SB155・SB158・SB159 掘立柱建物跡

〔柱間寸法〕桁行（南側柱列）：西から（184）-（174）cm、梁行（東側柱列）：（300）cm、廂（縁）：168cm
〔方向〕東側柱列：W-10°-S

〔出土遺物〕なし

〔SB160 掘立柱建物跡〕（第52図、写真図版14）

〔位置〕5区北部／平坦面

〔重複〕SB78→SB160-SB77・SB79・SB155・SB156・SB157・SB158・SB159・SB180・SB181・SA98

〔規模・形状〕桁行2間（総長4.14m）以上、梁行1間（総長3.10m）の東西棟側柱建物である。

〔柱穴〕5か所確認し、いずれも未精査である。掘方の平面形は長軸28-42cm、短軸22-34cmの楕円形・不整形を呈する。4か所で平面形が直径15-24cmの円形・楕円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕桁行（北側柱列）：西から202-（212）cm、梁行（東側柱列）：310cm

〔方向〕東側柱列：W-10°-N

〔出土遺物〕なし

〔SB161 掘立柱建物跡〕（第52図、写真図版11）

〔位置〕5区中央部／平坦面

〔重複〕SB161→SX62-SB92・SB162・SB163・SX63・SX70・SX71・SX72・SD88

〔規模・形状〕桁行4間（総長7.96m）以上、梁行1間（総

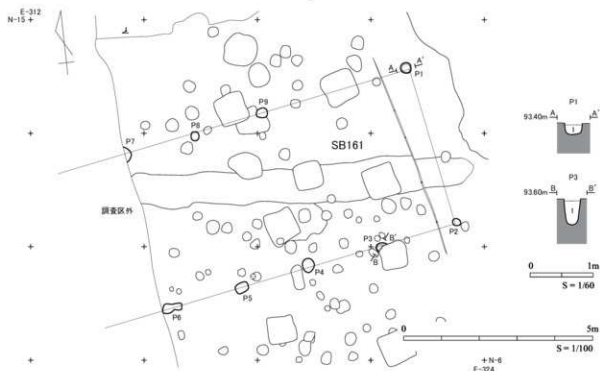
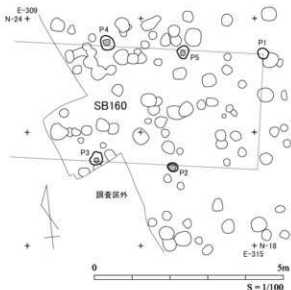
長4.31m）の東西棟側柱建物である。

〔柱穴〕9か所確認した。掘方の平面形は長軸22-38cm、短軸18-32cmの略円形・不整形楕円形・不整形を呈し、深さ21-41cmである。柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕桁行（南側柱列）：西から（204）-（184）-（200）-（208）cm、梁行（東側柱列）：（431）cm

〔方向〕東側柱列：W-11°-S

〔出土遺物〕なし



SB161 掘立柱建物跡 P1 A-A'				SB161 掘立柱建物跡 P3 B-B'			
No.	土色	土作	備考	No.	土色	土作	備考
1	10YR2/2黒黒	シルト	炭化物粒を含む	1	10YR2/2黒黒	シルト	黄褐色ローム粒、炭化物粒を含む

第52図 SB160・SB161 掘立柱建物跡

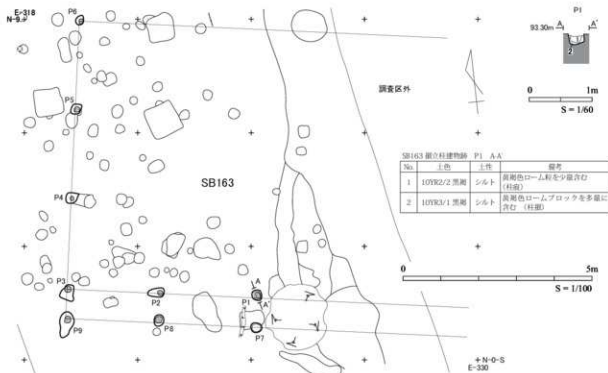
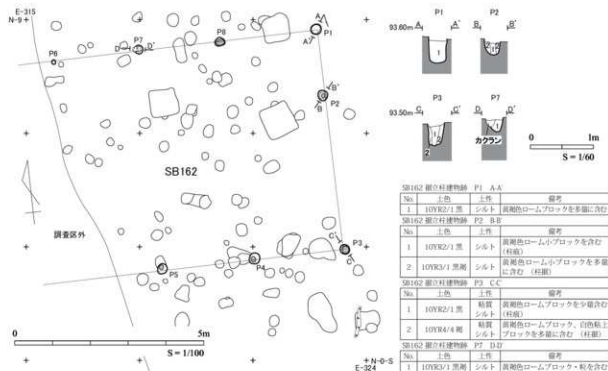
【SB162 掘立柱建物跡】(第53図、写真図版11)

〔位置〕5区中央部/平坦面

〔重複〕SB162 - SB74・SB92・SB161・SB163・SX62・SX66・SX69

〔規模・形状〕桁行3間(総長6.99m)以上、梁行2間(総長5.81m)の東西棟掘立柱建物である。

〔柱穴〕8か所確認した。掘方の平面形は長軸12-28cm、短軸10-27cmの略円形・不整形円形を呈し、深さ29-46cmである。5か所で平面形が直径12-25cmの円形・楕円形を呈する柱痕跡を確認した。〔柱間寸法〕桁行(北側柱列):西から(228)-(216)-(255)cm、梁行(東側柱列):北から(173)-408cm



第53図 SB162・SB163 掘立柱建物跡

[方向] 東側柱列: W-0°

[出土遺物] なし

[SB163 掘立柱建物跡] (第53図、写真図版11・16)

[位置] 5区中央部/平坦面

[重複] SB163 → SD57 - SB74・SB92・SB161・SB162・SX62・SX66

[規模・形状] 桁行2間(総長5.06m)以上、梁行3間(総長7.04m)の南廂(緑)付東西棟側柱建物である。廂(緑)の出は0.83mである。

[柱穴] 身舎で6か所、廂(緑)で3か所確認した。掘方の平面形は長軸27-68cm、短軸20-38cmの不整形・楕円形を呈し、深さ24-34cmである。身舎の6か所、廂(緑)の2か所で平面形が直径12-20cmの楕円形・略円形を呈する柱痕跡を確認した。

[柱間寸法] 桁行(西側柱列):北から236-232-236cm、梁行(南側柱列):西から248-258cm、廂(緑):西から248-260cm

[方向] 西側柱列: N-10°-E

[出土遺物] なし

[SB166 掘立柱建物跡] (第54図、写真図版13・16)

[位置] 5区南部/平坦面

[重複] SB166 → SB80・SK55 - SA81

[規模・形状] 桁行2間(総長3.62m)、梁行2間(総長3.00m)の西張出付東西棟側柱建物である。張出部は身舎南西隅に付属し、桁行1間(1.45m)、梁行1間(1.24m)である。また、身舎・張出南辺の東西に軒隅支柱を持つ。軒隅支柱の出は0.63-0.67mである。

[柱穴] 身舎で7か所、張出で2か所、軒隅支柱2か所を確認した。掘方の平面形は長軸17-34cm、短軸14-30cmの楕円形を呈し、深さ20-27cmである。身舎の3か所、張出の2か所、軒隅支柱の1か所で平面形が直径12-22cmの円形・楕円形を呈する柱痕跡を確認した。

[柱間寸法] 桁行(南側柱列):西から(210) - (152)cm、梁行(西側柱列):北から176 - (124)cm

[方向] 東側柱列: W-5°-S

[出土遺物] なし

[SB167 掘立柱建物跡] (第54図、写真図版13・16)

[位置] 5区南部/平坦面

[重複] SB167 → SB83 - SB82・SB168・SB169・SA170・SD68

[規模・形状] 桁行1間(総長1.60m)以上、梁行1間(3.00m)の二面(南・北)廂(緑)付東西棟側柱建物である。廂(緑)の出は南面で0.53m、北面で0.60mである。[柱穴] 身舎で3か所、廂(緑)で4か所確認した。

掘方の平面形は長軸18-29cm、短軸17-28cmの略円形・不整形を呈し、深さ31cmである。身舎の2か所、廂(緑)の3か所で平面形が直径10-16cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

[柱間寸法] 桁行(北側柱列):(160)cm、梁行(東側柱列):300cm、北廂(緑):153cm、南廂(緑):159cm

[方向] 東側柱列: N-7°-E

[出土遺物] なし

[SB168 掘立柱建物跡] (第54図、写真図版13)

[位置] 5区南部/平坦面

[重複] SB168 → SD68 - SB82・SB83・SB84・SB167・SB169・SA170・SA176

[規模・形状] 桁行3間(総長5.23m)、梁行2間(総長2.86m)以上の南北棟側柱建物である。

[柱穴] 6か所確認し、いずれも未精査である。掘方の平面形は長軸26-34cm、短軸26-31cmの略円形・隅丸方形を呈する。4か所で平面形が8-18cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

[柱間寸法] 桁行(東側柱列):北から(181)-144-(198)cm、梁行(南側柱列):西から148-(138)cm

[方向] 東側柱列: N-9°-W

[出土遺物] なし

[SB169 掘立柱建物跡] (第55図、写真図版13・16)

[位置] 5区南部/平坦面11

[重複] SB169 - SB82・SB83・SB84・SB167・SB168・SB171・SA170・SA176

[規模・形状] 桁行2間(総長4.92m)以上、梁行1間(総長4.12m)の東西棟側柱建物である。

[柱穴] 6か所確認した。掘方の平面形は長軸24-30cm、短軸18-26cmの略円形・楕円形を呈し、深さ42-52cmである。4か所で平面形が直径12-18cmの円形・楕円形を呈する柱痕跡を確認した。

[柱間寸法] 桁行(北側柱列):西から256-236cm、梁行(東側柱列):412cm

[方向] 東側柱列: W-4°-N

[出土遺物] なし

[SB171 掘立柱建物跡] (第55図、写真図版13・16)

[位置] 5区南部/平坦面

[重複] SB171 - SB82・SB83・SB84・SB169・SB174・SB177・SD68

[規模・形状] 桁行2間(総長4.65m)、梁行1間(総長3.69m)の東西棟側柱建物である。

[柱穴] 5か所確認した。掘方の平面形は長軸24-31cm、短軸20-28cmの略円形・楕円形・不整形を呈し、深さ17-43cmである。3か所で平面形が直

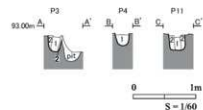
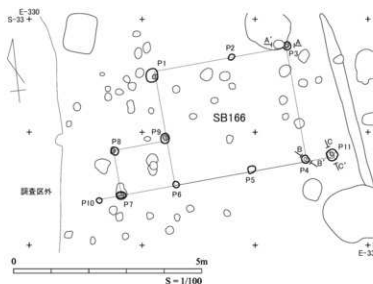
径12-24cmの円形・楕円形を呈する柱痕跡を確認した。
〔柱間寸法〕桁行(南側柱列):西から(228)
-237cm、梁行(西側柱列):369cm(二間分)
〔方向〕南側柱列:W-39°-N
〔出土遺物〕なし

【SB172 掘立柱建物跡】(第55図、写真図版12・13・16)
〔位置〕5区南部/平坦面
〔重複〕SB172 - SB84・SB173・SB174・SA170・
SA175・SA176
〔規模・形状〕桁行2間(総長5.76m)、梁行2間(総
長4.61m)の東西棟側柱建物である。

〔柱穴〕7か所確認した。掘方の平面形は長軸
18-32cm、短軸17-30cmの楕円形・不整楕円形を
呈し、深さ16-35cmである。2か所で平面形が直径
17-22cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕桁行(北側柱列):西から(290)-286cm、
梁行(東側柱列):北から(224)-(237)cm
〔方向〕東側柱列:W-5°-N
〔出土遺物〕なし

【SB173 掘立柱建物跡】(第56図、写真図版12・16)
〔位置〕5区南部/平坦面
〔重複〕SB173 - SB82・SB84・SB172・SB174・SB177



SB166 掘立柱建物跡 P3 A-A'

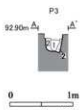
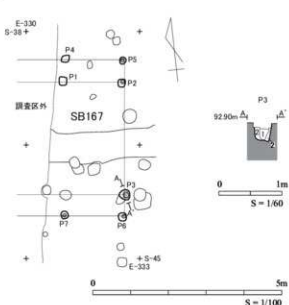
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1黒	粘質シルト	炭褐色ローム粒を少量含む(柱底)
2	10YR2/3黒黄	粘質シルト	炭褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)

SB166 掘立柱建物跡 P4 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3黒黄	シルト	均質土

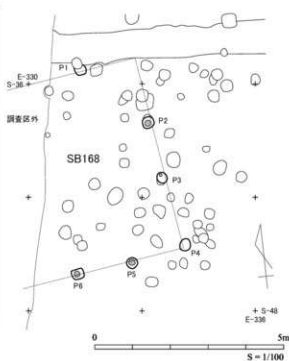
SB166 掘立柱建物跡 P11 C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2黒黄	シルト	炭褐色ローム中ブロック、炭化物粒を少量含む(柱底)
2	10YR2/3黒黄	粘質シルト	炭褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)

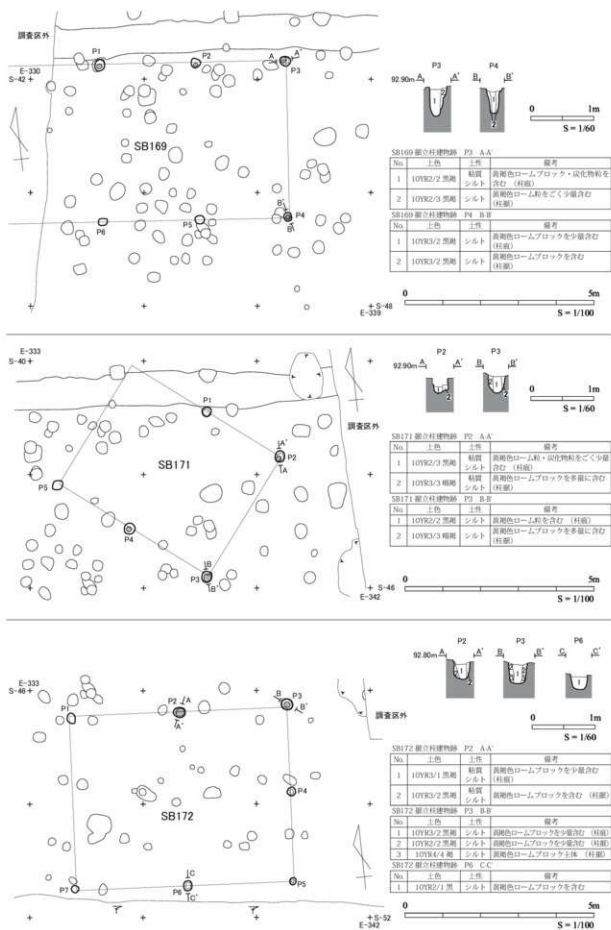


SB167 掘立柱建物跡 P3 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2黒黄	粘質シルト	炭褐色ロームブロックを少量含む(柱底)
2	10YR2/1黒	シルト	炭褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)



第54図 SB166・SB167・SB168 掘立柱建物跡



第55図 SB169・SB171・SB172 掘立柱建物跡

〔規模・形状〕桁行2間(総長5.73m)以上、梁行1間(総長3.48m)の南北棟側柱建物である。

〔柱穴〕5か所確認した。掘方の平面形は長軸26-38cm、短軸19-37cmの楕円形・不整形楕円形を呈し、深さ9-51cmである。2か所で平面形が14-16cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕桁行(西側柱列):北から(280)・(293)cm、梁行(南側柱列):(348)cm

〔方向〕西側柱列:N-39°E

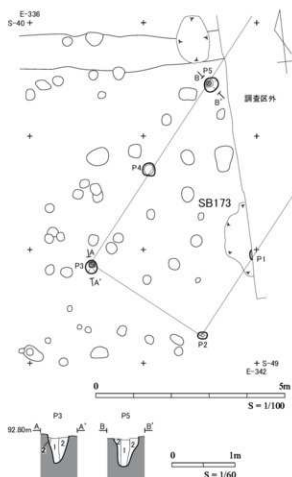
〔出土遺物〕なし

【SB174 掘立柱建物跡】(第56図、写真図版12・16)

〔位置〕5区南部/平坦面

〔重複〕SB174 - SB82・SB171・SB172・SB173・SB177

〔規模・形状〕桁行2間(総長2.92m)、梁行1間(総長1.74m)の南北棟側柱建物である。



SB173 掘立柱建物跡 P3 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む(柱底)
2	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)

SB173 掘立柱建物跡 P5 B-B'

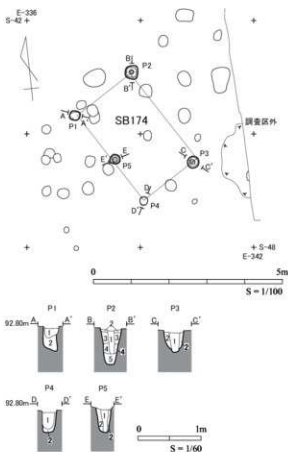
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む(柱底)
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)

〔柱穴〕5か所確認した。掘方の平面形は長軸24-36cm、短軸22-34cmの略円形・隅丸方形を呈し、深さ35-53cmである。2か所で柱材の抜き取り痕跡、3か所で平面形が直径12-15cmの円形・略円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕桁行(西側柱列):北から(160)・(132)cm、梁行(北側柱列):(174)cm

〔方向〕北側柱列:N-31°W

〔出土遺物〕なし



SB174 掘立柱建物跡 P1 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム土を少量含む(柱底)
2	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)

SB174 掘立柱建物跡 P2 B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む(柱底)
2	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む(柱底)
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)
4	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む(柱底)
5	10YR3/1 黒褐	シルト	均質土

SB174 掘立柱建物跡 P3 C-C'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む(柱底)
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)

SB174 掘立柱建物跡 P4 D-D'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム土を少量含む(柱底)
2	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)

SB174 掘立柱建物跡 P5 E-E'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む(柱底)
2	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)

第56図 SB173・SB174 掘立柱建物跡

【SB177 掘立柱建物跡】(第57図、写真図版12・16)

[位置] 5区南部/平坦面

[重複] SB177→SB82・SB171・SB173・SB174

[規模・形状] 桁行1間(総長2.28m)以上、梁行1間(総長1.66m)の東西棟側柱建物である。

[柱穴] 4か所確認した。掘方の平面形は長軸21-60cm、短軸18-44cmの楕円形・略円形・隅丸方形を呈し、深さ25-76cmである。1か所で柱材の抜き取り痕跡、4か所で平面形が直径10-20cmの円形・

隅丸方形を呈する柱痕跡を確認した。

[柱間寸法] 桁行(南側柱列): 228cm、梁行(西側柱列): 166cm

[方向] 西側柱列: W-7°-N

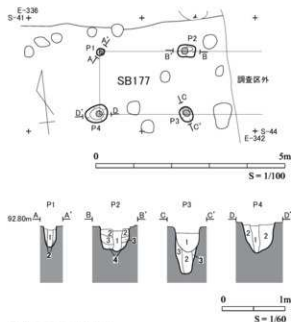
[出土遺物] なし

【SB178 掘立柱建物跡】(第57図)

[位置] 5区中央部/平坦面

[重複] SB178→SD57→SK59・SD153

[規模・形状] 桁行2間(総長6.08m)以上、梁行1間(総

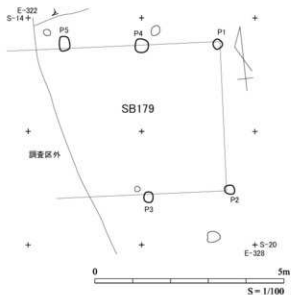


SB177 掘立柱建物跡 P1 A-A'

No.	土層	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐色	シルト	均質土(柱底)
2	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)

SB177 掘立柱建物跡 P2 B-B'

No.	土層	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む(柱底)
2	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・白色粘土ブロックを多量に含む(柱底)
3	10YR2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・白色粘土ブロックを含む(柱底)
4	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム・白色粘土ブロックを多量に含む(柱底)

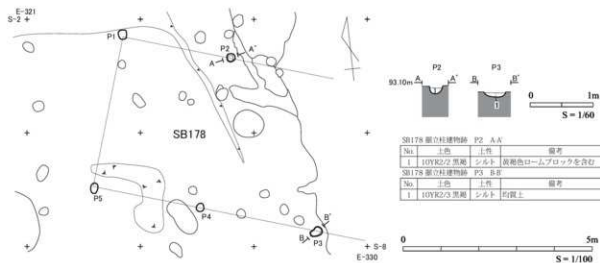


SB177 掘立柱建物跡 P3 C-C'

No.	土層	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む(柱底)
3	10YR4/3 灰褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)

SB177 掘立柱建物跡 P4 D-D'

No.	土層	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む(柱底)
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)



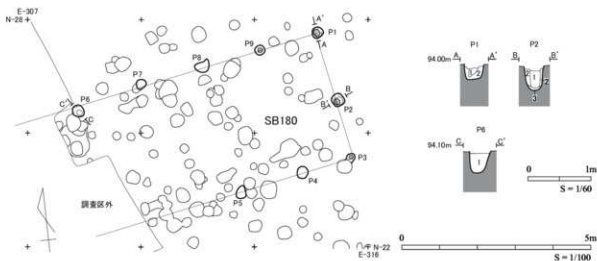
SB178 掘立柱建物跡 P2 A-A'

No.	土層	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む

SB178 掘立柱建物跡 P3 B-B'

No.	土層	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	均質土

第57図 SB177・SB178・SB179 掘立柱建物跡



長 4.08m) の東西棟側柱建物である。

〔柱穴〕5か所確認した。掘方の平面形は長軸 22-34cm、短軸 20-22cm の略円形・楕円形・隅丸方形を呈し、深さ 8-13cm である。柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕桁行(南側柱列):西から(288)・(320)

cm、梁行(西側柱列):(408) cm

〔方向〕南側柱列:W-18°-N

〔出土遺物〕なし

【SB179 掘立柱建物跡】(第 57 図)

〔位置〕5区中央部/平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕桁行2間(総長 4.10m)以上、梁行1間(総長 3.97m)の東西棟側柱建物である。

〔柱穴〕5か所確認し、いずれ也未精査である。掘方の平面形は長軸 24-37cm、短軸 24-35cm の不整形である。柱痕跡は確認されていない。

〔柱間寸法〕桁行(北側柱列):西から(206)・(204) cm、梁行(東側柱列):(397) cm

〔方向〕東側柱列:W-4°-N

〔出土遺物〕なし

【SB180 掘立柱建物跡】(第 58 図、写真図版 11・16)

〔位置〕5区北部/平坦面

〔重複〕SB78→SB180→SB77-SB79-SB155-SB156-SB157-SB158-SB159-SB160-SB181-SA24

〔規模・形状〕桁行4間(総長 6.61m)以上、梁行2間(総長 3.48m)の東西棟側柱建物である。

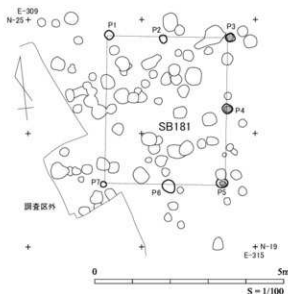
〔柱穴〕9か所確認した。掘方の平面形は長軸 22-40cm、短軸 21-36cm の不整形・隅丸方形を呈し、深さ 27-37cm である。4か所で平面形が直径 12-20cm の円形・楕円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕桁行(北側柱列):西から(180)・(172)・(157)・(152) cm、梁行(東側柱列):北から 192-156 cm

No.	土色	土質	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黒褐色ローム粒をごく少量含む(柱底)
2	10YR2/2 黒	シルト	黒褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)

No.	土色	土質	備考
1	10YR2/3 黒	シルト	黒褐色ロームブロックを少量含む(柱底)
2	10YR2/2 黒	シルト	黒褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)
3	10YR2/2 黒	シルト	黒褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)

No.	土色	土質	備考
1	10YR2/3 黒	シルト	黒褐色ローム粒を含む



第 58 図 SB180・SB181 掘立柱建物跡

〔方向〕東側柱列:W-11°-S

〔出土遺物〕なし

【SB181 掘立柱建物跡】(第 58 図、写真図版 14)

〔位置〕5区北部/平坦面

〔重複〕SB181→SB157-SB77-SB78-SB79-SB155-SB156-SB158-SB159-SB160-SB180-SA98

〔規模・形状〕桁行2間(総長 3.90m)、梁行2間(総長 3.24m)の南北棟側柱建物である。

〔柱穴〕7か所確認し、いずれ也未精査である。掘

方の平面形は長軸 15-36cm、短軸 14-31cm の不整楕円形・隅丸方形を呈する。3か所で平面形が直径 20-22cm の円形・隅丸方形を呈する柱痕跡を確認した。
〔柱間寸法〕桁行（東側柱列）：北から 188-202cm、梁行（南側柱列）：西から (172) - (152) cm

〔方向〕東側柱列：N-7°-E

〔出土遺物〕なし

(2) 柱列跡

【SA24 柱列跡】(第 59 図、写真図版 11・16)

〔位置〕5 区北部／平坦面

〔重複〕SA24 - SB78・SB79・SB154・SB155・SB156・SB157・SB159・SB180

〔規模・形状〕南北 4 間（総長 10.20m）

〔方向〕N-14°-W

〔柱穴〕5か所確認した。掘方の平面形は長軸 32-44cm、短軸 31-40cm の隅丸方形・不整形・略円形を呈し、深さ 33 ~ 57cm である。5か所で平面形が直径 11-15cm の円形・楕円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北から 250-260-260-250cm

〔出土遺物〕なし

【SA76 柱列跡】(第 59 図、写真図版 12・14・16)

〔位置〕5 区北部／平坦面

〔重複〕SA76 → SB77 - SB157

〔規模・形状〕東西 2 間（総長 4.10m）以上

〔方向〕W-7°-S

〔柱穴〕3か所確認した。掘方の平面形は長軸 37-40cm、短軸 37-40cm の略円形を呈し、深さ 21-28cm である。柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕西から (200) - (210) cm

〔出土遺物〕なし

【SA81 柱列跡】(第 59 図、写真図版 16)

〔位置〕5 区南部／平坦面

〔重複〕SA81 - SB80・SB166・SK55

〔規模・形状〕南北 1 間（総長 1.90m）・東西 2 間（総長 3.90m）／逆 L 字形

〔方向〕東側柱列：N-5°-E

〔柱穴〕4か所確認した。掘方の平面形は長軸 23-35cm、短軸 21-28cm の不整楕円形を呈し、深さ 26-37cm である。4か所で平面形が直径 10-15cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕東側柱列：190cm、南側柱列：西から 184-206cm

〔出土遺物〕なし

【SA97 柱列跡】(第 60 図、写真図版 11・17)

〔位置〕5 区北部／平坦面

〔重複〕SB154 → SA97 - SB155

〔規模・形状〕東西 4 間（総長 4.30m）以上

〔方向〕W-13°-S

〔柱穴〕5か所確認した。掘方の平面形は長軸 27-42cm、短軸 22-38cm の不整楕円形・略円形を呈し、深さ 17-45cm である。4か所で平面形が直径 12-22cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕西から 115-100-100 - (115) cm

〔出土遺物〕P3 柱穴堆積土から口クロ土師器環が出土した。内面に黒色処理を施す。

【SA98 柱列跡】(第 60 図、写真図版 14・17)

〔位置〕5 区北部／平坦面

〔重複〕SA98 - SB77・SB79・SB157・SB160・SB181

〔規模・形状〕東西 3 間（総長 5.40m）以上

〔方向〕W-13°-S

〔柱穴〕4か所確認した。掘方の平面形は長軸 22-26cm、短軸 15-20cm の不整形を呈し、深さ 16-31cm である。3か所で平面形が直径 15-20cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕西から 160-170 - (210) cm

〔出土遺物〕なし

【SA164 柱列跡】(第 61 図、写真図版 17)

〔位置〕5 区南部／平坦面

〔重複〕SA164 → SD48a・SD48b

〔規模・形状〕南北 2 間（総長 4.37m）

〔方向〕N-6°-W

〔柱穴〕3か所確認した。掘方の平面形は長軸 20-28cm、短軸 18-26cm の隅丸方形・楕円形を呈し、深さ 19-37cm である。3か所で平面形が直径 14-20cm の円形・楕円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北から 213-224cm

〔出土遺物〕なし

【SA165 柱列跡】(第 61 図、写真図版 17)

〔位置〕5 区南部／平坦面

〔重複〕SA165 → SD48a・SD48b・SD58

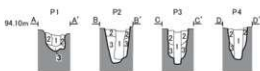
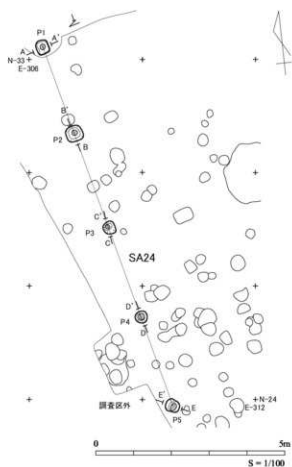
〔規模・形状〕南北 2 間（総長 7.92m）

〔方向〕N-2°-W

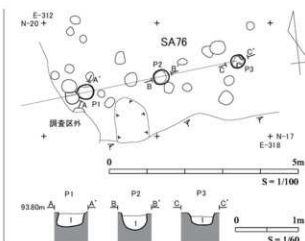
〔柱穴〕3か所確認した。掘方の平面形は長軸 27-34cm、短軸 26-32cm の隅丸方形を呈し、深さ 14-32cm である。2か所で平面形が直径 16-25cm の円形・隅丸方形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北から (404) -388cm

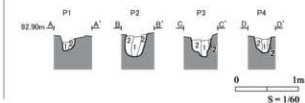
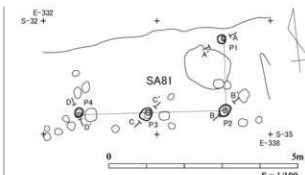
〔出土遺物〕なし



SA24 柱列跡 P1 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを含む 炭化物粒を少量含む (柱状)
2	10YR4/4 黄	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 炭化物粒を少量含む (柱状)
3	10YR4/3 に近い黄褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱状)
SA24 柱列跡 P2 B-B'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを含む 炭化物粒を少量含む (柱状)
2	10YR4/4 黄	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 炭化物粒を少量含む (柱状)
3	10YR4/3 に近い黄褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱状)
SA24 柱列跡 P3 C-C'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを含む 炭化物粒を少量含む (柱状)
2	10YR4/4 黄	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 炭化物粒を少量含む (柱状)
3	10YR4/3 に近い黄褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱状)
SA24 柱列跡 P4 D-D'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	炭化物粒を少量含む (柱状)
2	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを含む (柱状)
3	10YR3/3 暗褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱状)



SA76 柱列跡 P1 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 黒褐色シルトブロックを少量含む
SA76 柱列跡 P2 B-B'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む
SA76 柱列跡 P3 C-C'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 黒褐色シルトブロックを少量含む



SA81 柱列跡 P1 A-A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/1 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックをごく少量含む (柱状)
2	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱状)
SA81 柱列跡 P2 B-B'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを含む (柱状)
2	10YR3/3 暗褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを含む (柱状)
SA81 柱列跡 P3 C-C'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR4/3 黄	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粘を含む 炭化物粒を少量含む (柱状)
2	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 炭化物粒をごく少量含む (柱状)
SA81 柱列跡 P4 D-D'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・炭化物ブロックを含む (柱状)
2	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱状)

第59図 SA24・SA76・SA81 柱列跡

【SA170 柱列跡】(第61図、写真図版13)

〔位置〕5区南部/平坦面

〔重複〕SA170・SB83・SB84・SB167・SB168・SB169・SB172・SA175・SA176

〔規模・形状〕南北3間(総長8.80m)以上

〔方向〕N-22°-W

〔柱穴〕4か所確認し、いずれも未精査である。掘方の平面形は長軸23-33cm、短軸23-30cmの不整楕円形・隅丸方形を呈する。2か所で平面形が直径12-13cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕北から(274)-(298)-(308)cm

〔出土遺物〕なし

【SA175 柱列跡】(第62図、写真図版12・17)

〔位置〕5区南部/平坦面

〔重複〕SA175・SB172・SA170・SA176

〔規模・形状〕東西3間(総長10.00m)以上

〔方向〕W-2°-N

〔柱穴〕4か所確認した。掘方の平面形は長軸24-34cm、短軸22-32cmの不整形・隅丸方形を呈し、深さ23cmである。3か所で平面形が直径17-20cmの円形・楕円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕西から(330)-337-333cm

〔出土遺物〕なし

【SA176 柱列跡】(第61図、写真図版12・17)

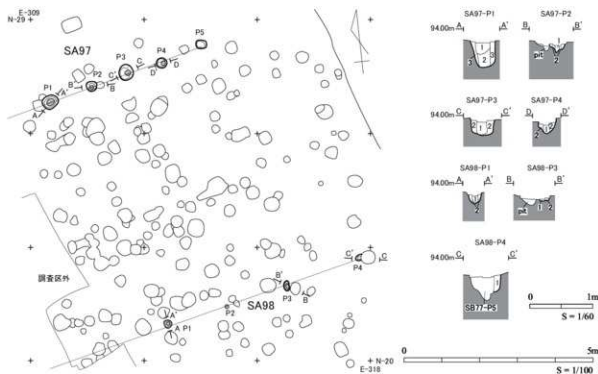
〔位置〕5区南部/平坦面

〔重複〕SA176・SB83・SB84・SB168・SB169・SB172・SA170・SA175

〔規模・形状〕南北3間(総長5.20m)・東西2間(総長4.30m) / L字形

〔方向〕西側柱列:N-5°-E

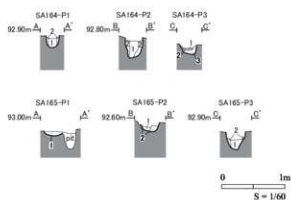
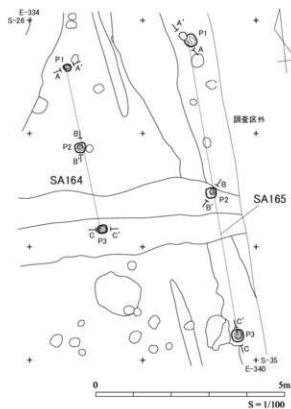
〔柱穴〕6か所確認した。掘方の平面形は長軸21-27cm、短軸17-25cmの楕円形・略円形を呈し、



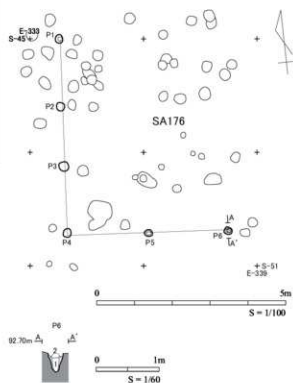
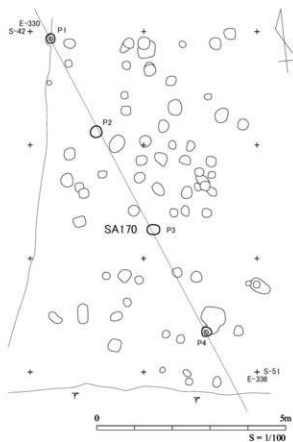
SA97 柱列跡 P1 A-A'			
No.	土層	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・粒・炭上粒・炭化物などを少量含む(柱底)
2	10YR3/1 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む(柱底)
3	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 炭化物粒を少量含む(柱底)
SA97 柱列跡 P2 B-B'			
No.	土層	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒・炭上粒・炭化物粒を少量含む(柱底)
2	10YR3/3 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む(柱底)
SA97 柱列跡 P3 C-C'			
No.	土層	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む 炭上粒・炭化物粒・粒を少量含む(柱底)
2	10YR4/4 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)

SA97 柱列跡 P4 D-D'			
No.	土層	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む(柱底)
2	10YR4/4 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを含む(柱底)
SA98 柱列跡 P1 A-A'			
No.	土層	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを含む(柱底)
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(柱底)
SA98 柱列跡 P2 B-B'			
No.	土層	土性	備考
1	10YR3/4 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む(柱底)
2	10YR3/6 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを極めて多量に含む(柱底)
SA98 柱列跡 P4 C-C'			
No.	土層	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム粒を少量含む(柱底)

第60図 SA97・SA98 柱列跡

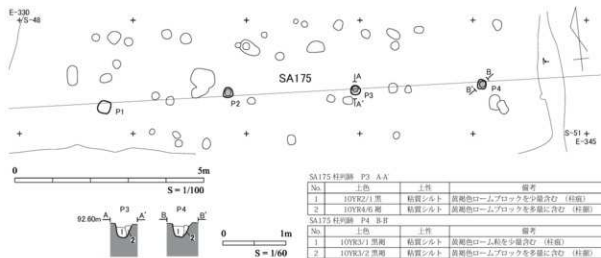


SA164 柱列跡 P1 A・A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒		黄褐色ロームブロックを含む (柱頭)
2	10YR2/2 黒褐		黄褐色ローム跡を含む (柱頭)
SA164 柱列跡 P2 B・B'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ローム跡を少量含む (柱頭)
2	10YR4/4 褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱頭)
SA164 柱列跡 P3 C・C'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックをごく少量含む (柱頭)
2	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む (柱頭)
3	10YR5/3 灰・黄褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む 灰化土粒をごく少量含む (柱頭)
SA165 柱列跡 P1 A・A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム跡を含む
SA165 柱列跡 P2 B・B'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ロームブロックをごく少量含む (柱頭)
2	10YR3/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱頭)
SA165 柱列跡 P3 C・C'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ローム跡を含む (柱頭)
2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ローム跡を含む (柱頭)



SA176 柱列跡 P6 A・A'			
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ローム跡を少量含む (柱頭)
2	10YR4/2 灰黄褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱頭)

第 61 図 SA164・SA165・SA170・SA176 柱列跡



第62図 SA175 柱列跡

深さ 25-33cm である。2 か所で平面形が直径 12cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕西側柱列：北から (180) - (160) - (180) cm、南側柱列：西から (218) - (212) cm

〔出土遺物〕なし

(3) 井戸跡

【SE61 井戸跡】(第 63・64 図、写真図版 17・33)

〔位置〕5 区南部／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が直径 165cm の円形を呈し、深さ 290cm である。下部が円筒形を呈し、上部が朝顔形に開く。井戸側は確認されなかった。

〔堆積土〕調査中に崩落したため一部不明であるが、6 層以上に細分される。上部の 1-3 層は黄褐色ロームブロックを多く含む黒褐色シルト、下部の 4 層は黄褐色ロームブロックを主体とする明緑灰色砂質シルト、5 層は黄褐色ロームブロックを主体として多量の植物遺体を含む黒色粘土、6 層は黄褐色ロームブロックを含む黒色粘土である。3-4 層の間は崩落により不明である。1-5 層は井戸廃絶時以降の埋め戻し土、6 層は井戸機能時の堆積土と井戸廃絶時以降の埋め戻し土の混和土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から石臼(下白、第 64 図 5)、木片、貝殻が出土した。石臼(下白)は安山岩製で磨面の摩耗が著しいが、若干の白目が確認できる。底面にはノミ痕が見られる。木片は手斧斫り痕のある追根目材、割材がある。

【SE67 井戸跡】(第 63・64 図、写真図版 17・34)

〔位置〕5 区南部／平坦面

〔重複〕SD151 → SE67

〔規模・形状〕平面形が長軸 163cm、短軸 142cm の楕円形を呈し、深さ 128cm である。下部が円筒形を呈し、上部が朝顔形に開く。掘方と井戸側の抜き取り痕跡を確認した。井戸側は確認されなかった。

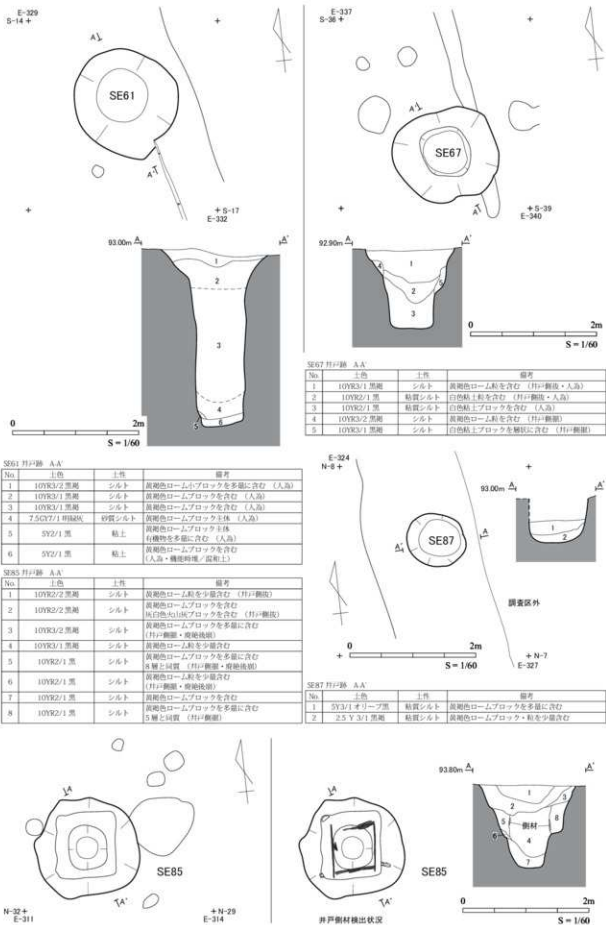
〔堆積土〕5 層に細分される。1 層は黄褐色ローム粒を含む黒褐色シルト、2 層は白色粘土粒を含む黒色粘質シルト、3 層は白色粘土ブロックを含む黒粘質シルト、4 層は黄褐色ローム粒を含む黒褐色シルト、5 層は白色粘土と黒褐色シルトの互層である。1・2 層は井戸側材抜き取り後の埋め戻し土、3 層は井戸廃絶時以降の埋め戻し土、4・5 層は掘方埋土と考えられる。〔出土遺物〕堆積土から中世陶器片口跡(第 64 図 1)、石鎌、堆積土下層から木材が出土した。中世陶器片口跡は内外面にコルクナデ調整を施す。石鎌は玉髄製で剥片の一端に鎌部を作出し、鎌部先端が折損している。木材は縦木地の芯持材である。

【SE85 井戸跡】(第 63・64 図、写真図版 18・34)

〔位置〕5 区北部／平坦面

〔重複〕SK86 → SE85 - SB154

〔規模・形状〕平面形が長軸 168cm、短軸 164cm の円形を呈し、深さ 135cm である。中位に段を有する楕円形を呈する。掘方と井戸側、水溜め部、井戸側の抜き取り痕跡を確認した。掘方の平面形は上部と下部が略円形を呈し、中位の段は隅丸方形を呈する。井戸側は掘方中位の段に板材を井桁状に設置しており、横板を積み上げて構築されていたと考えられる。木材の劣化が著しく、仕口形状は不明であるが、内寸で平面形が一边 77-80cm の方形を呈する。井戸側が設置された段より下部の掘方は平面形が長軸 73cm、短軸 63cm の略円形、断面形は深さ 55cm の逆台形を呈し、水溜め部として機能したと考えられる。

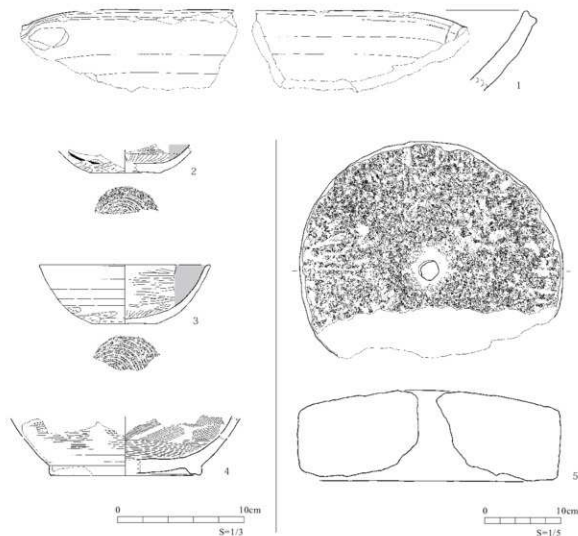


第63図 SE61・SE67・SE85・SE87 井戸跡

〔堆積土〕8層に細分される。1層は黄褐色ローム粒を少量含む黒褐色シルト、2層は黄褐色ローム・灰白色火山灰ブロックを含む黒褐色シルト、3層は黄褐色ロームブロックを多量に含む黒褐色シルト、4層は黄褐色ローム粒を少量含む黒褐色シルト、5層は黄褐色ロームブロックを含む黒色シルト、6層は黄褐色ロームブロックを多量に含む黒色シルト、7層は黄褐色ローム粒を少量含む黒色シルト、8層は黄褐色ロームブロックを含む黒色シルト（5層と同質）である。1・

2層は井戸側材抜き取り後の自然堆積土、4・7層は井戸廃絶時以降の自然堆積土、3・5・6層は掘方埋土由来で井戸埋設中の自然崩落土、8層は掘方埋土と考えられる。

〔出土遺物〕側材内堆積土（4層）からロクロ土師器環（第64図2）、堆積土上層から須恵器壺（第64図4）、掘方埋土からロクロ土師器環（第64図3）が出土した。第64図2は体部が内湾し、内面に放射状ヘラミガキ→横方向ヘラミガキ→黒色処理、外面にロクロナ



No.	遺物名	層位	種類	素材	特徴	現存高 (cm)		部位	数量	写真		
						1層	2層					
1	SE67	埋積土	中世陶器	石1鉢	内外面：ロクロナデ→片1部付芯ナデ	0.5	1.8	底面	081	34-1		
2	SE85	側材内堆積土	ロクロ土師器	環	外面：ロクロナデ→(体下) 手持ちヘラケズリ、(底) 須恵赤切り→手持ちヘラケズリ 内面：放射状ヘラミガキ→横方向ヘラミガキ→黒色処理、外面縁上部に準直	法量 (cm)		現存	数量	写真		
						1層	2層					
3	SE85	掘方埋土	ロクロ土師器	環	外面：ロクロナデ→(底付面) 手持ちヘラケズリ、(底) 須恵赤切り→無調整 内面：ヘラミガキ→黒色処理	(13.6)	(5.1)	4.8	1/3	027	34-2	
4	SE85	埋積土上層	須恵器	壺	外面：ハケメウ→ロクロナデ 内面：ロクロナデ→ナデ※内外面に自然釉	(12.0)	(4.8)			028	34-4	
5	SE61	埋積土	石1 (PEI)	安山岩	側面→一部付現存 底面にノミ痕 輪径：21.0～27.0mm	法量 (mm・g)		現存	数量	写真		
						径	重					
						345.0	~351.0	124.0	16100	一部欠損	117	33-5

第64図 SE61・SE67・SE85 井戸跡出土遺物

デ調整を施し、回転系切りによる底部の切り離し後に外面の体下-底部に手持ちヘラケズリ調整を施す。外面体下部に墨書が見られる。第64図3は体部が内湾し、口縁部がそのまま外傾する。内面にヘラミガキ調整→黒色処理、外面にロクロナデ調整を施す。回転系切りによる底部の切り離し後に外面の体下部に手持ちヘラケズリ調整を施し、底部に再調整を施さない。第64図4は短い高台を持ち、内面にロクロナデ調整、外面にハケメ?→ロクロナデ調整を施す。内外面に自然釉が見られる。

井戸側板は15点出土し、木取りの判別できるものは板目材8点、柾目材2点がある。

このほか、堆積土上層からロクロ土器器環、堆積土から須恵器環・甕・高台付甕が出土した。ロクロ土器器環は回転系切りまたは静止系切りによる底部の切り離しの後、外面の体下部または体下-底部に手持ちヘラケズリ調整を施す。須恵器環は回転系切りによる底部の切り離しの後、外面の体下部にヘラナデ調整を施す。甕は内外面ロクロナデ調整の後、体下部に回転ヘラケズリ調整を施す。高台付甕は内外面に自然釉が見られる。

【SE87 井戸跡】(第63図、写真図版17)

〔位置〕5区中央部/平坦面

〔重複〕SE87→SD57

〔規模・形状〕平面形が長軸95cm、短軸83cmの楕円形を呈し、深さ71cmである。断面形はU字形を呈

する。井戸側は確認されなかった。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は黄褐色ロームブロックを多量に含むオリブ黒色シルト、2層は黄褐色ロームブロック・粒を少量含む黒褐色粘質シルトである。いずれも自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SE90 井戸跡】(第65図、写真図版18・34)

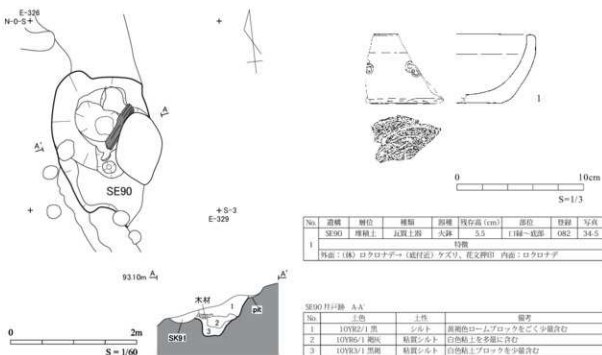
〔位置〕5区中央部/平坦面

〔重複〕SK89・SD153→SE90→SK91・SD57

〔規模・形状〕平面形が長軸180cm、短軸150cmの不整隅丸方形を呈し、深さ83cmである。断面形は逆台形を呈し、中位に段を持つ。井戸側は確認されなかったが、中位の段に設置されていたと考えられる。段より下部は平面形が上端で直径40cm、底面で直径28cmの円形を呈し、水溜め部として機能したと考えられる。

〔堆積土〕3層に細分される。1層は黄褐色ロームブロックをごく少量含む黒色シルト、2層は白色粘土を多量に含む褐色粘質シルト、3層は白色粘土ブロックを少量含む黒褐色粘質シルトである。いずれも井戸廃絶時以降の堆積土で、1・3層は自然堆積土、2層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から瓦質土器火鉢(第65図1)、須恵器蓋、磨石、碎片が出土した。瓦質土器火入れは内外面にロクロナデ調整を施し、外面の底部外周に手持ちヘラケズリ調整を施す。外面の体部に花文押印を施す。磨石は長軸10.3cm、短軸8.8cm、厚さ2.1cm



第65図 SE90 井戸跡・出土遺物

で両面に磨面を持ち、周縁に敲打・剥離痕が見られる。碎片は珪質石材製で被熱により白色化している。

このほか、堆積土2層上面から木材が出土した。長さ80cm、幅16cm、厚さ5cmの割材で、端部の一方は斜めに切断されている。劣化が著しく仕口などの加工は不明なため、井戸側材として使用されたものかどうかは判断できない。

(4) 土坑

【SK55 土坑】(第66図、写真図版18)

〔位置〕5区南部／平坦面

〔重複〕SB80・SB166→SK55 - SA81

〔規模・形状〕平面形が長軸130cm、短軸110cmの楕円形を呈し、断面形は深さ29cmの皿形を呈する。底面は凹凸が見られる。

〔堆積土〕黄褐色ローム粒を少量含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SK59 土坑】(第66・67図、写真図版18・34)

〔位置〕5区中央部／平坦面

〔重複〕SK59 - SB178

〔規模・形状〕平面形が直径80cmの円形を呈し、断面形は深さ45cmの箱形を呈する。底面は平坦である。〔堆積土〕2層に細分される。1層は少量の焼土・炭化物粒と多量の黄褐色ロームブロックを含む黒褐色シルト、2層は黄褐色ロームブロック・炭化物粒を少量含む黒褐色シルトである。1層は人為的埋土、2層は自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から底石(第67図8)が出土した。頁岩製で8面の底面があり、上・下端に剥離痕がある。

【SK60 土坑】(第66図、写真図版18)

〔位置〕5区中央部／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸120cm、短軸80cmの楕円形を呈し、断面形は深さ7cmの皿形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕黄褐色ローム小ブロックを含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SK86 土坑】(第66図、写真図版18)

〔位置〕5区北部／平坦面

〔重複〕SK86→SE85 - SB154

〔規模・形状〕平面形が長軸100cm、短軸90cmの不整四角形を呈し、断面形は深さ64cmの逆台形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕3層に細分される。黄褐色ロームブロックを多量に含む黒色・黒褐色シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土1層からロクロ土師器環、堆積土から須恵器壺が出土した。ロクロ土師器環は内面に黒色処理を施し、外面の体下・底部に手持ちヘラケズリ調整を施す。

【SK89 土坑】(第66・67図、写真図版35)

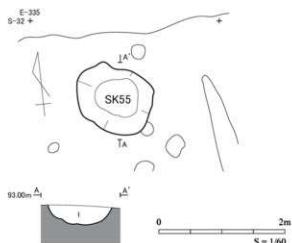
〔位置〕5区中央部／平坦面

〔重複〕SK89→SE90・SD57・SD73

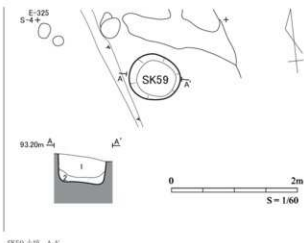
〔規模・形状〕平面形が長軸400cm、短軸260cmの不整形を呈し、断面形は深さ10cmの皿形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕2層に細分される。黄褐色ローム・白色粘土ブロック、炭化物粒を多量に含む黒色シルト・黒褐色粘質シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。

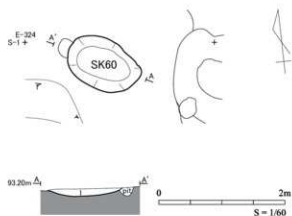
〔出土遺物〕堆積土からロクロ土師器環(第67図1～6)、須恵器長頸瓶または壺(第67図7)が出土した。ロクロ土師器環は体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの(第67図1)、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部がそのまま外傾するもの(第67図5)、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部が反外気味に外傾するもの(第67図2)、体部が内湾し、口縁部が直線的に外傾するもの(第67図6)、体部から口縁部にかけて内湾するもの(第67図3・4)がある。第67図1は内面の体部に横方向・底部に放射状ヘラミガキ調整→体下部に斜め方向ヘラミガキ調整→黒色処理を施し、外面にロクロナデ調整を施す。回転?糸切りによる底部の切り離しの後、外面の体部下端・底部に手持ちヘラケズリ調整を施す。第67図5は内面に放射状?ヘラミガキ調整→黒色処理を施し、外面にロクロナデ調整を施す。底部の切り離し方法は不明で、切り離し後に外面の体・底部に手持ちヘラケズリ調整を施す。第67図2は内面の体部に横方向・体下部に斜め方向・底部に放射状ヘラミガキ調整→黒色処理を施し、外面にロクロナデ調整を施す。回転糸切りによる底部の切り離しの後、外面の体下・底部に手持ちヘラケズリ調整を施す。第67図6は内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施し、外面にロクロナデ調整を施す。底部の切り離し方法はヘラ切り?で、切り離し後に外面の体部下端・底部に回転ヘラケズリ調整?を施す。内面の体部～口縁部付近を中心に全体が磨削されている。第67図3は内面に放射状→横方向→井桁状ヘラミガキ→黒色処理を施し、外面にロクロナデ調整を施す。回転糸切り?による底部の切り離しの後、外面の体下・底



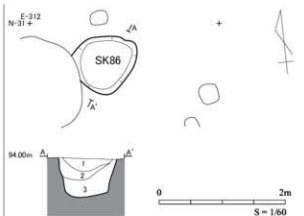
SK55 土坑 A-A'			
No.	土色	土作	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色ローム土を少量含む



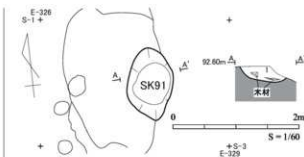
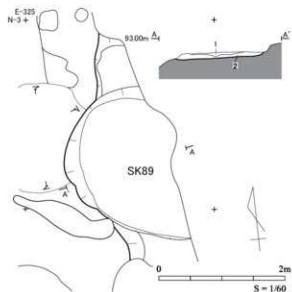
SK59 土坑 A-A'			
No.	土色	土作	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (人海)
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・同化物を少量含む



SK60 土坑 A-A'			
No.	土色	土作	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ローム小ブロックを含む



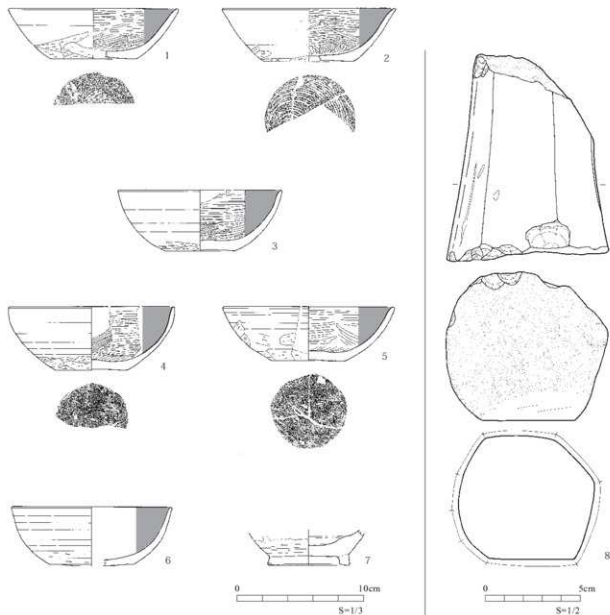
SK86 土坑 A-A'			
No.	土色	土作	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (人海)
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (人海)
3	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む (人海)



SK91 土坑 A-A'			
No.	土色	土作	備考
1	10YR1.7/1 黒	粘質シルト	木材片を含む 均質土

SK89 土坑 A-A'			
No.	土色	土作	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム・白色粘土ブロックを含む
2	10YR3/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム・白色粘土ブロックを多量に含む 同化物を少量含む

第66図 SK55・SK59・SK60・SK86・SK89・SK91 土坑



No.	遺構名	層位	種類	形状	器面調整・特徴	法量 (cm)				現存	図録	写真
						口径	底径	器高	底厚			
1	SK89	埋積土	ロクロ土解面	片	外面：ロクロナデ+（底）手持ちヘラケズリ。（底）器縁の糸切リ→手持ちヘラケズリ 内面：（株）横方向ヘラミガキ+（底）放射状ヘラミガキ+（底）斜め方向ヘラミガキ→黑色処理	(13.0)	(6.8)	4.0	1/2	016	35-1	
2	SK89	埋積土	ロクロ土解面	片	外面：ロクロナデ+（底）手持ちヘラケズリ。（底）器縁の糸切リ→手持ちヘラケズリ 内面：（株）横方向ヘラミガキ+（底）放射状ヘラミガキ+（底）斜め方向ヘラミガキ→黑色処理	(13.8)	(7.0)	4.2	1/3	017	35-2	
3	SK89	埋積土	ロクロ土解面	片	外面：ロクロナデ+（底）手持ちヘラケズリ。（底）器縁の糸切リ→手持ちヘラケズリ 内面：放射状ヘラミガキ+（底）横方向ヘラミガキ→斜め方向ヘラミガキ→黑色処理	(13.1)	(5.6)	4.8	3/5	018	35-3	
4	SK89	埋積土	ロクロ土解面	片	外面：ロクロナデ+（底）手持ちヘラケズリ。（底）切り離し4割→手持ちヘラケズリ 内面：ヘラミガキ+（底）放射状ヘラミガキ→黑色処理	(13.2)	(5.8)	5.0	1/4	019	35-4	
5	SK89	埋積土	ロクロ土解面	片	外面：ロクロナデ+（底）手持ちヘラケズリ。（底）切り離し4割→手持ちヘラケズリ 内面：ヘラミガキ+（底）放射状ヘラミガキ→黑色処理	(13.7)	5.8	4.3	1/3	020	35-5	
6	SK89	埋積土	ロクロ土解面	片	外面：ロクロナデ+（底）手持ちヘラケズリ。（底）へら切り→斜めヘラケズリ 内面：ヘラミガキ→黑色処理 全体が磨滅、1箇所は斜め付着している	(12.8)	(6.7)	(4.7)	1/2	021	35-6	
7	SK89	埋積土	実産物	長方形または巻	外面：斜めヘラケズリ。（底）糸切リ→斜めヘラケズリ→斜め付着→一部ロクロナデ 内面：ロクロナデ 器台外面・内面底部に自然釉	-	6.5	(2.8)	底面	022	35-7	
No.	遺構名	層位	種類	石材	特徴	法量 (mm・g)				現存	図録	写真
8	SK59	埋積土	礎石	石灰	砥石数8 上下両面に砥石にのり着 下底面は砥石の研磨面	長	幅	厚	重			

第 67 図 SK59・SK89 土坑出土遺物

部に手持ちヘラケズリ調整を施す。第67図4は内面にヘラミガキ調整→黒色処理を施し、外面にロクロナデ調整を施す。底部の切り離し方法は不明で、切り離し後に外面の体下-底部に手持ちヘラケズリ調整を施す。須恵器長頸瓶または壺(第67図7)は内面にロクロナデ調整を施し、糸切り?による底部の切り離し後に外面の体下部に回転ヘラケズリ調整→高台部付加→ロクロナデ調整を施す。

このほか、堆積土からロクロ土師器環、須恵器甕が出土した。ロクロ土師器環は内面に放射状ヘラミガキ→黒色処理を施し、回転糸切りによる底部の切り離しの後、外面の体下-底部に手持ちヘラケズリ調整を施す。須恵器甕は外面に平行タタキ調整を施す。

【SK91 土坑】(第66図)

〔位置〕5区中央部/平坦面

〔重複〕SE90→SK91→SD57

〔規模・形状〕平面形が長軸100cm、短軸70cmの楕円形を呈し、断面形は深さ24cmの皿形を呈する。底面は皿状に窪んでいる。

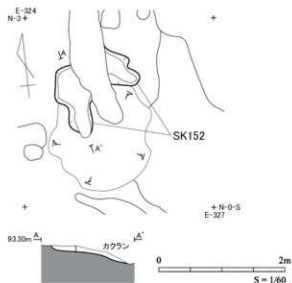
〔堆積土〕均質な黒色粘質シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から土師器、漆器、木材が出土した。漆器は黒色漆容器の破片である。木材は手斧研り痕の見られる板目材、柾目材である。

【SK149 土坑】(第39図)

〔位置〕5区中央部/平坦面

〔重複〕なし



SK152 土坑 A-A'

No	土坑	土質	備考
1	109R2/3	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む(人込)

第68図 SK152土坑

〔規模・形状〕平面形が長軸170cm、短軸53cmの楕円形を呈する。未精査である。

〔出土遺物〕なし

【SK152 土坑】(第68図)

〔位置〕5区中央部/平坦面

〔重複〕SK152→SD64

〔規模・形状〕平面形が長軸134cm、短軸120cmの不整形を呈し、断面形は深さ2-14cmの皿形を呈する。底面は皿状に窪み、南向きに傾斜している。

〔堆積土〕黄褐色ロームブロックを多量に含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

(5) 堀跡

【SD57 堀跡】(第69-72図、写真図版19・35-37)

〔位置〕5区中央部/平坦面

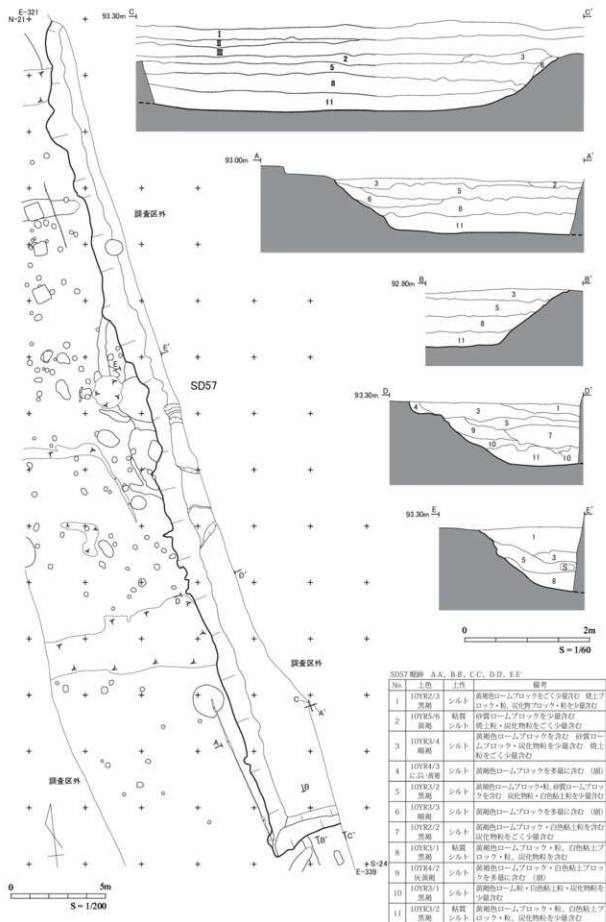
〔重複〕SB163・SB178・SE87・SE90・SK89・SK91・SD58・SD64・SD88・SD153→SD57→SD184

〔規模・形状〕西小屋館跡西辺土塁の西側堀部に平行して延びる堀跡である。北西から南東方向に長さ46.00mを確認した。両端でコーナー部を確認し、北側は北東方向、南側は東方向へ屈折して延びていると考えられる。西側上端から幅120-400cm、下端から幅40-300cm、深さ77-94cmを確認した。横断面形は逆台形を呈し、底面は平坦であるが中ほどで階段状に落ち込んでいる。

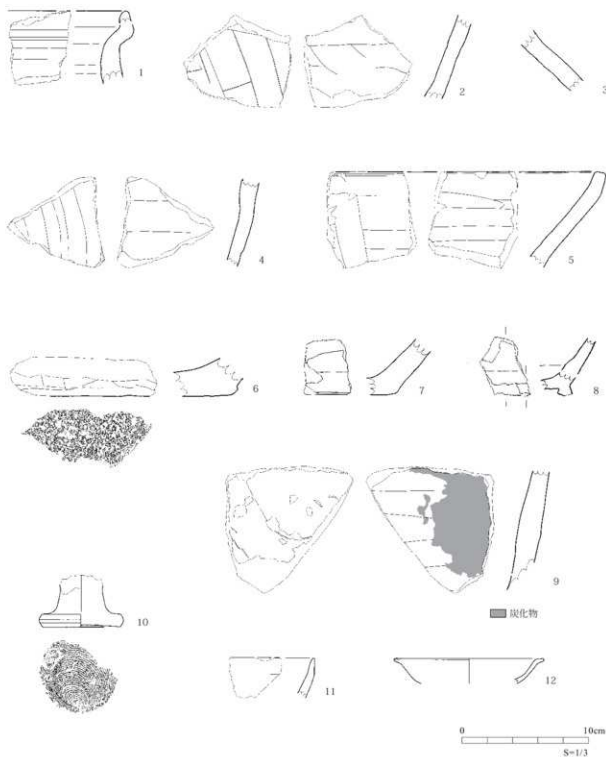
〔堆積土〕11層に細分される。1-3・5・7・8・10・11層は黄褐色ローム・白色粘土・焼土・炭化物のブロック・粒を少量含む黒褐色・暗褐色シルト、黒褐色・黄褐色粘質シルトで、自然堆積土と考えられる。また、4・6・9層は黄褐色ローム・白色粘土ブロックを多量に含むにぶい暗褐色・黄褐色・灰黄褐色シルトで、自然崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕確認面からロクロ土師器環(第71図1)、須恵器壺(第71図2)・須(第71図3)、堆積土2層上面から茶臼(下白、第72図1)、堆積土2層から中世陶器鉢(第70図6)、堆積土から中世陶器甕(第70図1~4)・片口鉢(第70図5)・鉢(第70図7)・高台付鉢(第70図8)・鉢(第70図9)・花瓶(第70図10)・茶碗(第70図11)・小杯(第70図12)、木製品(第71図5)、硯(第71図6)、礮石器(第72図2~4)、古銭(洪武通寶、第71図4)が出土した。

ロクロ土師器環(第71図1)は体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。内面にヘラミガキ調整→黒色処理、外面にロクロナデ調整を施し、回転糸切り

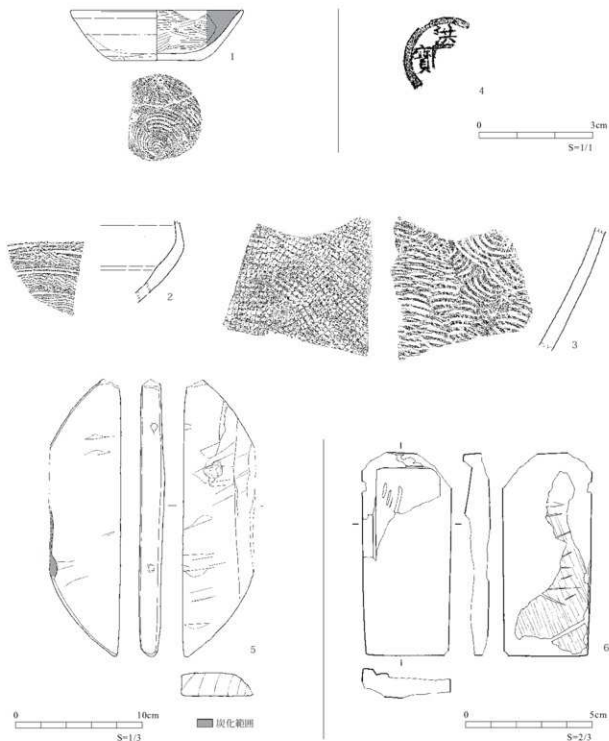


第69図 SD57 地層



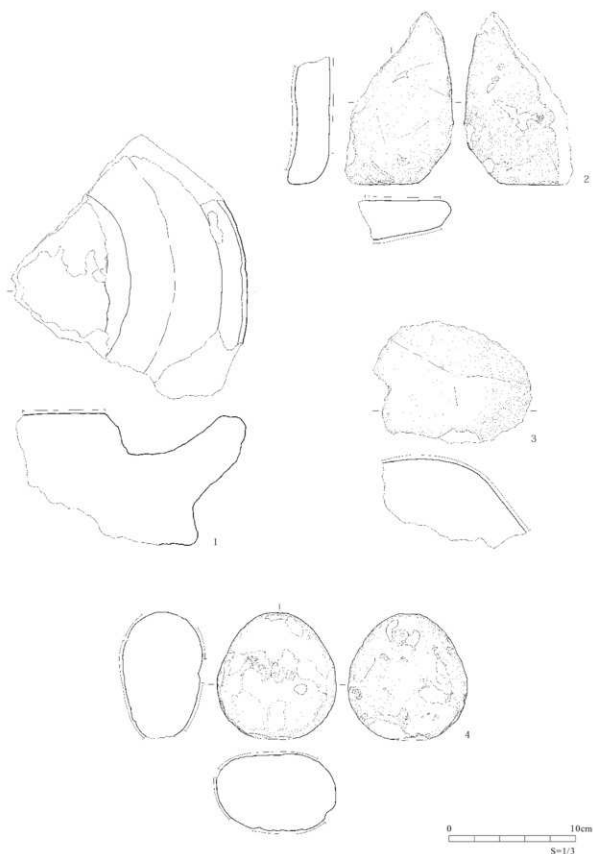
No	遺構	層位	種類	高	特徴	残存高 (cm)	部位	登録	写真
1	SD57	埋藏土	中世陶器	甕	内外面：ロクロナデ 器底編年5型式刷	5.8	口縁部	063	36-5
2	SD57	埋藏土	中世陶器	甕	内外面：ヘラナデ	7.3	胴部	067	36-6
3	SD57	埋藏土	中世陶器	甕	内外面：ナデ	4.9	胴部	068	36-2
4	SD57	埋藏土	中世陶器	甕	内外面：ナデ	7.2	胴部	070	36-1
5	SD57	埋藏土	中世陶器	片口鉢	内外面：ロクロナデ→ナデ	7.6	口縁部	062	36-4
6	SD57	之解	中世陶器	鉢	外面：ナデ 内面：磨耗により不明	3.1	底部	065	36-8
7	SD57	埋藏土	中世陶器	鉢	外面：ロクロナデ 内面：磨耗により不明	4.5	底部	066	36-7
8	SD57	埋藏面	中世陶器	高付付鉢	内外面：ロクロナデ	4.6	底部	064	36-10
9	SD57	埋藏土	中世陶器	鉢	外面：ケズリ 内面：ナデ 外面に磨耗、内面に炭化物付着	10.1	体部	069	36-3
10	SD57	埋藏土	中世陶器	花瓶	外面：鉄輪 底面：回転糸切り一輪調整、輪 底径：(6.7) cm 頸部表面中実線状 古瀬戸産 色花紙	4.1	頸部	073	36-9
11	SD57	埋藏土	中世陶器	茶碗	内外面：鉄輪 古瀬戸産 大目茶碗	3.2	口縁部	071	36-11
12	SD57	埋藏土	中世陶器	小鉢	内外面：灰輪 1冊：(11.9) cm 断面に付着物（漆喰？） 古瀬戸産？	2.0	口縁部	072	36-12

第70図 SDS7 埋跡出土遺物 (1)



No.	遺構名	層位	種類	器種	断面調整・特徴	法量 (cm)				現存	登録	写真
						口径	底径	高さ	厚			
1	SD57	埋藏面	ロケロ土製器	杯	外面：ロケロナデ+（底付足）手持ちヘウケズリ、（底）糸切り→手持ちヘウケズリ 内面：ヘウケズリ→滑石処理	(13.8)	(7.0)	4.0	1/4	025	35-9	
2	SD57	埋藏面	瓦曲器	壺	外面：ロケロナデ+華道瓦瓦文・瓦線文・手持ちヘウケズリ 内面：ロケロナデ	-	-	(6.5)	一部	023	35-8	
3	SD57	埋藏面	瓦曲器	甕	外面：粘土タタキ 内面：同心円文ア字瓦肌	-	-	(9.8)	一部	024	35-10	
No.	遺構名	層位	種類	器種	備考	法量 (mm・g)				現存	登録	写真
4	SD57	埋藏土	洪武磁甕			径	厚	重	容			
5	SD57	埋藏土	木製品	円筒形四角底瓶	複数枚の板を突き合わせ木釘で接合、側面に木釘2本現存 破断により表面の一部が炭化	(21.5)	(5.7)	2.0	1.38	37-3		
No.	遺構名	層位	種類	石材	特徴	法量 (mm・g)				現存	登録	写真
6	SD57	埋藏土	瓦	瓦石	長方形 裏面に長軸方向の彫痕	長	幅	厚	重			

第71図 SDS7埋跡出土遺物(2)



No	遺構名	層位	種類	石材	特徴	質量 (mm・g)			残存	図録	写真	
						長	幅	厚				
1	SD57	芝罘土面	灰白(下付)	玄武岩	側面が磨石により平滑化	(189.0)	(188.0)	(112.0)	(2598)	一部	115	37.6
2	SD57	埋積土	石皿	玄武岩	両面に磨面 一部破損により黒色化	(132.0)	(81.0)	(35.0)	(465.0)	一部	112	37.5
3	SD57	埋積土	磨石	石馬玄武岩	片面・側面に磨面	(94.0)	(121.0)	(62.0)	(841.5)	一部	114	37.2
4	SD57	埋積土	磨石	玄武岩	両面・側面に磨面	(101.0)	(94.5)	(60.5)	(799.0)	完形	113	37.4

第72図 SDS7 堀跡出土遺物 (3)

よる底部の切り離し後に外面の体下-底部に手持ちヘラケズリ調整を施す。須恵器甕(第71図2)は体部がく字状に屈曲し、内外面にロクロナデ調整→外面に楕円波状文・沈線文・手持ちヘラケズリ調整を施す。甕(第71図3)は内面に同心円文アテ具痕が見られ、外面に格子タタキ調整を施す。中世陶器甕(第70図1)は口縁部が断面L字形の受口状を呈し、口縁帯部の幅は(1.4)cmである。内外面にロクロナデ調整を施す。第70図2~4は内外面にナデ・ヘラナデ調整を施す。片口鉢(第70図5)は内外面にロクロナデ→ナデ調整を施す。鉢(第70図6・7)は底部破片で外面にナデ・ロクロナデ調整を施し、内面が磨滅している。高台付鉢(第70図8)は内外面にロクロナデ調整を施す。鉢(第70図9)は内面にナデ調整、外面にケズリ調整を施す。内面に炭化物の付着が見られる。花瓶(第70図10)は底面に回転糸切り痕が見られ、柱状部に鉄軸を施す。古瀬戸産の仏花瓶である。茶碗(第70図11)は内外面に鉄軸を施す。古瀬戸産の天目茶碗である。小坏(第70図12)は内外面に灰軸を施し、断面に漆接によるものとみられる付着物が見られる。木製品(第71図5)は円筒形容器の底板とみられる柾目板で、複数枚の板を突き合わせ木釘によって接合している。側面に木釘2本が残存する。被熱により表面の一部が炭化している。硯(第71図6)は頁岩製で平面形が長さ8.05cm、幅35.5cmの長方形を呈し、裏面に擦痕が見られる。茶臼(下臼、第72図1)は玄武岩製で磨面が摩耗し平滑化している。礫石器は石皿(第72図2)と磨石(第72図3・4)がある。第72図2は玄武岩製で両面に磨面があり、片面と側面が被熱により黒色化している。第72図4は玄武岩製、第72図3は石英玄武岩製で、片面と側面に磨面がある。

このほか、堆積土から土師器高坏・甕、ロクロ土師器环、須恵器甕、磨石、焼骨片が出土した。土師器高坏は環部内面に黒色処理、脚部外面にヘラケズリ調整を施す。甕は球胴形で外面の頸部に段を持ち、口縁部にヨコナデ、胴部にハケメ調整を施す。ロクロ土師器环は内面に黒色処理を施し、回転糸切りによる底部の切り離し後に外面の体下-底部に手持ちヘラケズリ調整を施す。須恵器甕は内外面に平行タタキ調整を施す。磨石は長軸13.8cm、短軸11.3cm、厚さ8.7cmの三角柱状を呈し、3つの側面に磨面を持つ。また、堆積土・底面から木材が出土した。柾目板、炭化した芯持材、砲とみられる調整痕のある木片、手斧切り痕のある芯持材の木片などがある。

(6) 溝跡

【SD48a・b溝跡】(第73・75図、写真図版38)

〔位置〕5区南部/平坦面

〔重複〕SA164・SA165・SD58→SD48a→SD48b

〔規模・形状〕東西方向に直線的に延びる。長さ10.20mを確認し、さらに調査区外の東西へ延びている。a・b期の二時期の変遷が認められ、北側に位置をずらし一部重複して掘りなおされている。a期は上幅50-116cm、底幅36-56cmで、横断面形は深さ15-21cmの皿形を呈する。b期は上幅50-100cm、底幅18-36cmで、横断面形は深さ8-18cmの皿形を呈する。

〔堆積土〕a期は黄褐色ロームブロックをごく少量含む暗褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。b期は黄褐色ローム粒をごく少量含む黒褐色粘質シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕SD48a・b確認面から中世陶器片口鉢(第75図1)、砥石(第75図4)が出土した。片口鉢は内外面にナデ調整を施す。砥石は凝灰岩製で4面の砥面があり、擦痕が見られる。

【SD49溝跡】(第73図)

〔位置〕5区南部/平坦面

〔重複〕SD58→SD49

〔規模・形状〕南西から北東方向へ延びる。長さ7.30mを確認した。上幅56-89cm、底幅48-92cmで、横断面形は深さ11-14cmの皿形を呈する。

〔堆積土〕均質な黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から土師器が出土した。

【SD58溝跡】(第73・75図、写真図版38)

〔位置〕5区南部/平坦面

〔重複〕SA165→SD58→SD48a・SD48b・SD49・SD57

〔規模・形状〕南北方向に直線的に延びる。長さ15.00mを確認し、さらに調査区外の南側へ延びている。北側はSD57堀跡に壊されている。上幅40-94cm、底幅22-42cmで、横断面形は深さ10-36cmの逆台形を呈する。

〔堆積土〕3層に細分される。1・2層は黄褐色ロームブロック・粒、砂質シルトブロック、焼土・炭化物粒を含む黒褐色シルト、3層は黄褐色ロームブロックを多量に含むにぶい黄褐色粘質シルトである。1・2層は自然堆積土、3層は自然崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から中国青磁碗(第75図3)、土師器高坏、須恵器甕が出土した。中国青磁碗は外面に蓮弁文を施し、内外面に青磁軸を施す。土師器高坏は環部

内外面にヘラミガキ調整→赤彩を施す。須恵器裏は内面に無文アテ具痕が見られ、外面に平行タキ調整を施す。

【SD64 溝跡】(第74図、写真図版20)

〔位置〕5区中央部/平坦面

〔重複〕SK152→SD64→SD57

〔規模・形状〕緩やかに弧を描いて南北方向に延びる。長さ4.40mを確認し、北側はSD57堀跡、南側は攪乱に壊されている。南側で確認したSD73溝跡と接続していた可能性がある。上幅36-58cm、底幅20-39cmで、横断面形は深さ15-28cmの逆台形を呈する。

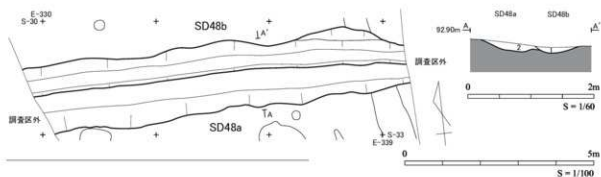
〔堆積土〕2層に細分される。1層は黄褐色ローム粒と少量の黄褐色ロームブロックを含む黒褐色シルト、2層は黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む黒褐色シルトである。1層は自然堆積土、2層は自然崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕確認面から剥片が出土した。珪化木製で両端を折損する。

【SD68 溝跡】(第74・75図、写真図版20・38)

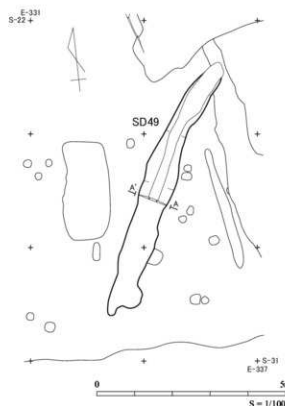
〔位置〕5区南部/平坦面

〔重複〕SB168→SD68→SB82→SB167・SB171



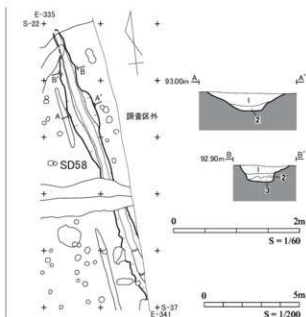
SD48a・b 溝跡 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	黄褐色ローム粒をごく少量含む (b 層)
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロックをごく少量含む (a 層)



SD49 溝跡 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	砂質土



SD58 溝跡 A-A', B-B'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 暗褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 黄褐色ローム・粘土粒・同色物質を含む 砂質シルトブロックを少量含む
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を含む 粘土粒をごく少量含む
3	10YR5/3 に近い 黄褐色	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (b 層)

第73図 SD48a・SD48b・SD49・SD58 溝跡

〔規模・形状〕東西方向に直線的に延びる。長さ10.40mを確認し、さらに調査区外の東西へ延びている。上幅80-90cm、底幅32-46cmで、横断面形は深さ43-55cmの逆台形を呈する。

〔堆積土〕3層に細分される。1・2層は黄褐色ロームブロック・粒、炭化物粒を少量含む黒色・黒褐色シルト、3層は黄褐色ロームブロックを多量に含む黒褐色粘質シルトである。1・2層は自然堆積土、3層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から中世陶器鉢（第75図2）、土師器甕が出土した。中世陶器鉢は内外面にロクロナデ調整を施す。土師器甕は外面にハケム調整を施す。

〔SD73 溝跡〕（第74図）

〔位置〕5区中央部／平坦面

〔重複〕SK89→SD73

〔規模・形状〕北西から南東方向に延びる。長さ1.70mを確認した。北側で確認したSD64溝跡と接続していた可能性がある。上幅40cm、底幅26cmで、横断面形は深さ10cmの箱形を呈する。

〔堆積土〕3層に細分される。1層は黄褐色ローム粒を少量含む黒褐色シルト、2層は褐色シルトと黒色シルトの互層、3層は黄褐色ローム粒を少量含む黒色シルトである。いずれも自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

〔SD88 溝跡〕（第74図、写真図版20）

〔位置〕5区中央部／平坦面

〔重複〕SD88→SX70・SX71・SD57-SB161

〔規模・形状〕東西方向に直線的に延びる。長さ8.60mを確認した。西側はさらに調査区外へ延びており、東側は削平により消失している。上幅80-100cm、底幅35-58cmで、横断面形は深さ17-22cmの逆台形を呈する。

〔堆積土〕3層に細分される。1層は黄褐色ロームブロック・粒、焼土粒を含む黒褐色シルト、2・3層は黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む黒褐色・暗褐色シルトである。1層は自然堆積土、2・3層は自然崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

〔SD150 溝跡〕（第75図）

〔位置〕5区南部／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕北西から南東方向に直線的に延びる。長さ3.27mを確認し、両端が削平により消失している。南側で確認したSD151溝跡と接続していた可能性がある。上幅16-28cm、底幅12-24cmで、横断面形は深さ13cmの皿形を呈する。

〔堆積土〕黄褐色ローム粒を含む黒色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

〔SD151 溝跡〕（第75図）

〔位置〕5区南部／平坦面

〔重複〕SD151→SE67

〔規模・形状〕北西から南東方向に直線的に延びる。長さ6.52mを確認し、両端が削平により消失している。北側で確認したSD150溝跡と接続していた可能性がある。上幅20-34cm、底幅9-22cmで、横断面形は深さ9cmの皿形を呈する。

〔堆積土〕黄褐色ローム粒を含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

〔SD153 溝跡〕（第74図）

〔位置〕5区中央部／平坦面

〔重複〕SD153→SE90・SD57-SB178

〔規模・形状〕東西方向に1.88m延び、中ほどでT字形に分岐して北西へ1.70m延びる。上幅52-78cm、底幅12-68cmで、横断面形は深さ8-18cmの楕円形を呈する。

〔堆積土〕黄褐色ロームブロックを含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

〔SD211 溝跡〕（第75図、写真図版20）

〔位置〕5区北部／平坦面

〔重複〕SD4a・SD7→SD211→SD184

〔規模・形状〕北西から南東方向に直線的に延びる。長さ22.36mを確認し、さらに調査区外の南北に延びている。上幅24-76cm、底幅20-48cmで、横断面形は深さ24cmのU字形を呈する。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は黄褐色ローム粒を含む黒色シルト、2層は黄褐色ロームブロックを多量に含む黒褐色シルトである。1層は自然堆積土、2層は人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

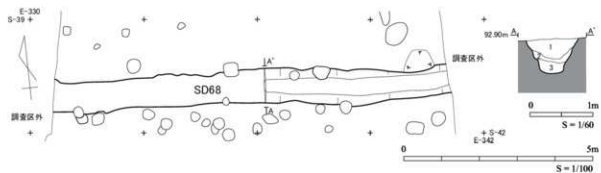
(7) 焼成遺構

〔SX52 焼成遺構〕（第75図、写真図版20・38）

〔位置〕5区南部／平坦面

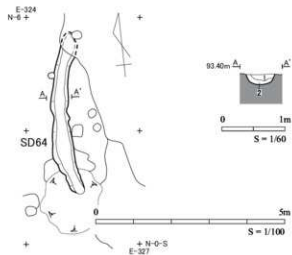
〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸70cm、短軸50cmの楕円形を呈し、断面形は深さ21cmの逆台形を呈する。底面は平坦である。掘方埋土により深さ18cmで断面形が逆台形を呈する底面を構築している。



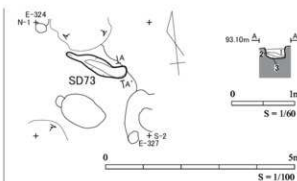
SD68 溝跡 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒・炭化物粒を少量含む
2	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を含む
3	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む



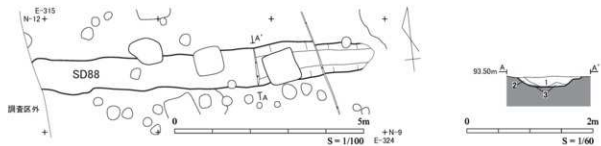
SD64 溝跡 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 黄褐色ローム粒を含む
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を多量に含む (部)



SD73 溝跡 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む
2	10YR4/6 黒	シルト	黒色シルトブロックを互層に含む
3	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む

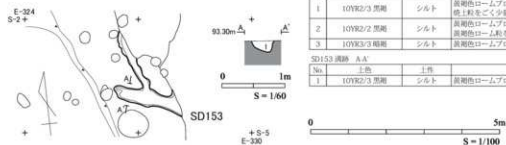


SD88 溝跡 A-A'

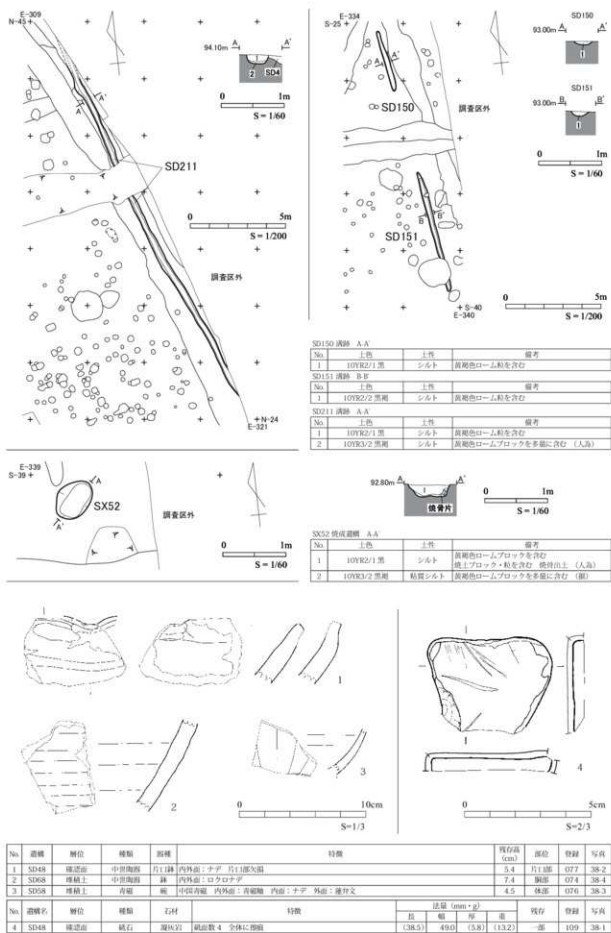
No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を含む 焼土粒をごく少量含む
2	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む
3	10YR3/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む

SD153 溝跡 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロックを含む



第74図 SD64・SD68・SD73・SD88・SD153 溝跡



第75図 SD150・SD151・SD211 溝跡、SX52 焼成遺構、SD48・SD58・SD68 溝跡出土遺物

〔堆積土〕2層に細分される。1層は黄褐色ロームブロック、焼土ブロック・粒、焼骨片を含む黒色シルト、2層は黄褐色ロームブロックを多量に含む黒褐色粘質シルトである。1層は人為的埋土、2層は掘方埋土と考えられる。機能時堆積土は確認されなかった。

〔出土遺物〕堆積土下層から焼骨片15点（写真図版38-9）、礫石器が出土した。焼骨片は長さ1.6-7.1cm、厚さ4.0-2.1cm、重さ0.2-13.6gで、切痕跡の見られるものが1点ある。礫石器は破片で被熱痕跡が認められる。

【SX62 焼成遺構】（第76・77図、写真図版20）

〔位置〕5区中央部／平坦面

〔重複〕SB161→SX62-SB92・SB162・SB163

〔規模・形状〕平面形が一辺68cmの隅丸方形を呈し、断面形は深さ37cmの箱形を呈する。底面は平坦で、壁面の三方が被熱により赤色硬化している。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は黄褐色ロームブロックを多量に含む黒褐色シルト、2層は炭化物層である。1層は廃絶時以降の人為的埋土、2層は機能時堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SX63 焼成遺構】（第76・77図、写真図版20）

〔位置〕5区中央部／平坦面

〔重複〕SX63-SB161

〔規模・形状〕平面形が一辺87cmの隅丸方形を呈し、断面形は深さ29cmのU字形を呈する。底面は皿状を呈する。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は黄褐色ロームブロックを極めて多量に含む黒褐色シルト、2層は植物遺体を含む炭化物層である。1層は廃絶時以降の人為的埋土、2層は機能時堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から土師器が出土した。

【SX65 焼成遺構】（第76・77図、写真図版20・38）

〔位置〕5中央部／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が一辺80cmの隅丸方形を呈し、断面形は深さ27cmの箱形を呈する。底面は平坦で、壁面の三方が被熱により赤色硬化している。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は黄褐色ロームブロック、焼土・炭化物粒を含む黒褐色シルト、2層は炭化した草本類植物遺体と少量の焼土粒を含む炭化物層である。1層は廃絶後の人為的埋土、2層は機能時堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から古銭（永楽通寶、第76図1）が出土した。

【SX66 焼成遺構】（第76・77図、写真図版20）

〔位置〕5区中央部／平坦面

〔重複〕SB92→SX66-SB74・SB162・SB163

〔規模・形状〕平面形が一辺82cmの隅丸方形を呈し、断面形は深さ47cmの逆台形を呈する。底面は平坦で、壁面の三方が被熱により赤色硬化している。

〔堆積土〕4層に細分される。1・3層は炭化物粒と多量の黄褐色ロームブロックを含む黒褐色シルト、2・4層は炭化した草本類植物遺体を多量に含む炭化物層である。1・3層は人為的埋土で、1層はb期焼成面廃絶後の埋め戻し土、3層はb期焼成面の構築土と考えられる。また、2層はb期焼成面、4層はa期焼成面に伴う機能時堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土上層から土師器が出土した。

【SX69 焼成遺構】（第76・77図、写真図版21）

〔位置〕5区中央部／平坦面

〔重複〕SX69-SB92・SB162

〔規模・形状〕平面形が一辺70cmの隅丸方形を呈し、断面形は深さ28cmの箱形を呈する。底面は平坦で、壁面のほぼ全周が被熱により赤色硬化している。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は黄褐色ロームブロック、焼土ブロック・粒を含む黒褐色シルト、2層は炭化した草本類植物遺体を少量含む炭化物層である。1層は廃絶後の人為的埋土、2層は機能時堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SX70 焼成遺構】（第76・77図）

〔位置〕5区中央部／平坦面

〔重複〕SD88→SX70-SB161

〔規模・形状〕平面形が一辺85cmの隅丸方形を呈し、断面形は深さ29cmの箱形を呈する。底面は平坦で、壁面の一部が被熱により赤色硬化している。

〔堆積土〕2層に細分される。1層は黄褐色ロームブロック・炭化物粒を含む黒褐色シルト、2層は炭化した草本類植物遺体を主体とする炭化物層である。1層は廃絶後の人為的埋土、2層は機能時堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

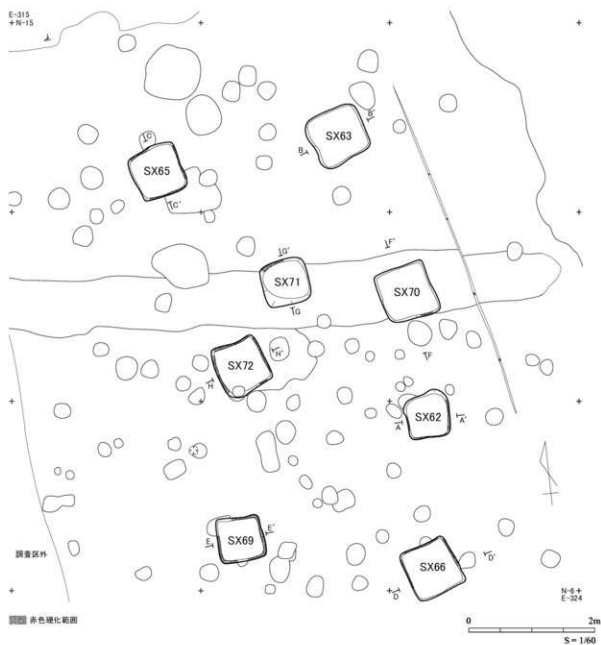
【SX71 焼成遺構】（第76・77図、写真図版21）

〔位置〕5区中央部／平坦面

〔重複〕SD88→SX71-SB161

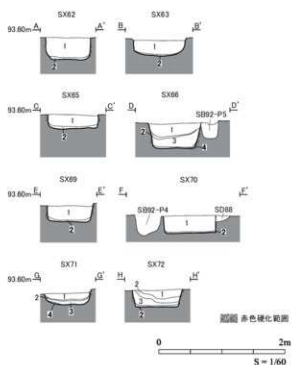
〔規模・形状〕平面形が一辺73cmの隅丸方形を呈し、断面形は深さ27cmのU字形を呈する。底面は平坦で、壁面の一部が被熱により赤色硬化している。

〔堆積土〕4層に細分される。1・3層は黄褐色ロームブロック・焼土ブロック・炭化物粒を含む黒褐色シル



No.	遺構名	層位	種類	備考	注量 (mm・g)			現存	数量	写真
					径	厚	重			
1	SX65	埋積土	赤染透貫		24.3	1.9	3.4	完好	122	38-6
2	SX72	1層	赤染透貫		24.0	1.1	1.8	完好	123	38-7
3	SX72	1層	赤染透貫		29.9	1.4	2.3	完好	124	38-8

第76図 SX62・SX63・SX65・SX66・SX69・SX70・SX71・SX72 焼成遺構(1)・出土遺物



SX62 焼成遺構 A/A			
No	土層	土性	備考
1	10YR3/2黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (人込)
2	10YR2/1黒	-	炭化物層 (機能時埋)
SX63 焼成遺構 B/B			
No	土層	土性	備考
1	10YR3/2黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (人込)
2	10YR2/1黒	-	炭化物層 (機能時埋)
SX65 焼成遺構 C/C			
No	土層	土性	備考
1	10YR3/2黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (人込)
2	10YR1.7/1	-	炭化物層 (機能時埋)
SX66 焼成遺構 D/D			
No	土層	土性	備考
1	10YR3/2黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 焼土層・炭化物層を少量含む (人込)
2	10YR2/1黒	-	炭化した草本植物遺体を多量に含む 焼土層を少量含む 炭化物層 (機能時埋)
SX69 焼成遺構 E/E			
No	土層	土性	備考
1	10YR3/2黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 炭化物層を少量含む (人込)
2	10YR2/1黒	-	炭化した草本植物遺体を多量に含む 炭化物層 (機能時埋)
SX70 焼成遺構 F/F			
No	土層	土性	備考
1	10YR3/2黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 炭化物層を少量含む (人込)
2	10YR2/1黒	-	炭化した草本植物遺体を多量に含む 炭化物層 (機能時埋)
SX71 焼成遺構 G/G			
No	土層	土性	備考
1	10YR3/2黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・焼土ブロックを含む 炭化物層を少量含む (人込)
2	10YR2/1黒	-	炭化した草本植物遺体を多量に含む 炭化物層 (機能時埋)
3	10YR3/2黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・焼土ブロックを含む 炭化物層を少量含む (人込)
4	10YR2/1黒	-	炭化した草本植物遺体を多量に含む 炭化物層 (機能時埋)
SX72 焼成遺構 H/H			
No	土層	土性	備考
1	10YR3/2黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・焼土ブロック・炭化物層を含む (人込)
2	10YR3/2黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 焼土ブロックを含む (人込)
3	10YR3/2黒褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (人込)
4	10YR2/1黒	-	炭化した草本植物遺体を多量に含む 炭化物層 (機能時埋)

第77図 SX62・SX63・SX65・SX66・SX69・SX70・SX71・SX72 焼成遺構 (2)

ト、2・4層は炭化した草本類植物遺体を含む炭化物層である。1・3層は人為的埋土で、1層はb期焼成面廃絶後の埋め戻し土、3層はb期焼成面の構築土と考えられる。また、2層はb期焼成面、4層はa期焼成面に伴う機能時堆積土と考えられる。

[出土遺物] なし

【SX72 焼成遺構】(第76・77図、写真版21・38)

[位置] 5区中央部/平坦面

[重複] SX72 - SB92・SB161

[規模・形状] 平面形が一辺80cmの隅丸方形を呈し、断面形は深さ27cmの逆台形を呈する。底面は平坦で、壁面のほぼ全周が被熱により赤色硬化している。

[堆積土] 4層に細分される。1-3層は黄褐色ローム・焼土ブロック、炭化物粒を含む黒褐色シルト、4層は炭化した草本類植物遺体を主体とする炭化物層である。1-3層は廃絶後の人為的埋土、4層は機能時堆積土と考えられる。

[出土遺物] 堆積土1層から古銭(永楽通寶、第76図2・3)、不明鉄製品、土師器が出土した。土師器は内外面にナデ調整を施し、内面の端部に粘土紐貼付時の刻み目が見られる。

(8) 組み合わせない柱穴跡

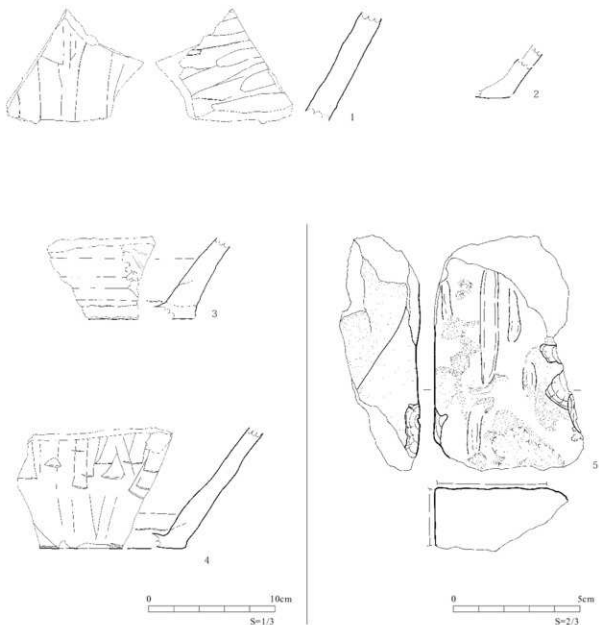
調査区全域に多数分布し、SD57溝跡南端部付近で散漫となるほかは濃密である。小規模で柱痕跡が確認されないものが多いが、やや規模が大きく柱痕跡が確認されたものもある。確認面・堆積土から中世陶器(第78図4)、土師器環・甕、ロクロ土師器環、須恵器甕、銅銭が出土した。中世陶器(第78図4)は胴下-底部破片で内面にナデ調整、外面にヘラナデ調整を施す。内面胴下部・外底面に漆状付着物が見られる。土師器・ロクロ土師器環は内面に黒色処理を施す。土師器甕は外面にハケメ調整を施す。須恵器甕は外面に自然軸が見られる。銅銭は小破片で銭銘は不明である。また、2か所で柱痕跡下部に柱材が残存していた。芯持材とみられるもの、半割材で2か所に沿による溝状の切筋痕跡が見られるものがある。

(9) 遺構外出土遺物

表土・遺構確認面・攪乱などから中世陶器(第78図1・2)・鉢(第78図3)、ロクロ土師器環、須恵器環・甕、砥石(第78図5)、茶臼、刺刀、焼骨片が出土した。中世陶器(第78図1)は胴部破片で内面にナデ調整、外面にヘラナデまたはヘラケズリ調整を施す。第78図2は外面にナデ調整を施す。鉢(第

78 図3) は体下・底部破片で内外面にロクロナデ調整を施す。外面の一部が磨滅している。ロクロ土師器環は内面に黒色処理を施し、回転系切りによる底部の切り離し後に外底面に手持ちヘラズリ調整を施す。須恵器環は底部の切り離しが不明で外底面に手持ちヘラズリ調整を施すもの、回転系切りによる底部の切り離し後に再

調整を施さないものがある。甕は外面に平行タキ調整を施す。砥石(第78 図5)は凝灰質砂岩製で2面の砥面があり、1面には溝状の研磨痕がみられる。茶臼は受部の小破片である。剥片は玉鬚製、珪質頁岩製のものがある。



No.	器種名	部位	種類	石材	特徴	法量 (mm・g)				現存	登録	写真
						長	幅	厚	重			
1	甕底	埴積土	中洲陶器	甕	外面：ヘラズリ 内面：ナデ	9.1	側部?	075	39.4			
2	甕底	埴積土	中洲陶器	甕	外面：ナデ 内面：欠陥のため不明	4.2	側部?	079	39.3			
3	甕底	埴積土	中洲陶器	鉢	内外面：ロクロナデ 外面の一部に研磨痕(丸形か?)	0.6	体～底部	078	39.2			
4	P154	埴積土	中洲陶器	甕	外面：ヘラズリ 内面：ナデ 内面側下部・外底面に遺状付着物	0.6	側～底部	085	38.5			
5	-	埴積土	砥石	凝灰質砂岩	砥面数2(正面・側面) 片面に溝状研磨痕	(92.0)	(59.0)	(27.0)	(147.0)	一部	110	39.1

第78 図 柱穴跡・遺構外出土遺物

6.6区

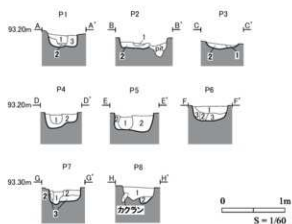
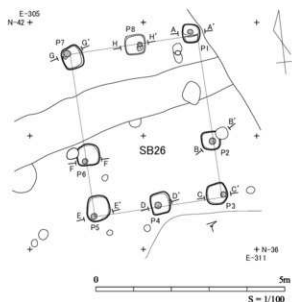
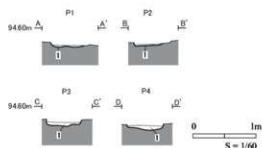
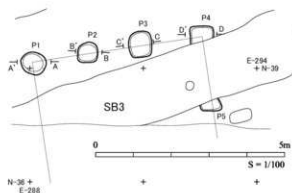
遺跡範囲の南部に位置し、東西110m、南北16mの範囲に延びる幅7-16mの調査区である。調査区内はほぼ平坦で、わずかに西へ向かって傾斜する。遺構確認は現地表面から深さ15-20cmのV-VI層上面である。遺構は掘立柱建物跡3棟、柱列跡4条、井

戸跡2基、土坑5基、溝跡10条、性格不明遺構2基、散漫に分布する柱穴跡群を確認した(第39図、写真図版21)。

(1) 掘立柱建物跡

【SB3 掘立柱建物跡】(第79図、写真図版23)

〔位置〕6区東部/平坦面



SB3 掘立柱建物跡 P1 A-A			
No.	土色	土色	磁器
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む
SB3 掘立柱建物跡 P2 B-B			
No.	土色	土色	磁器
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む
SB3 掘立柱建物跡 P3 C-C			
No.	土色	土色	磁器
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロック・和を含む
SB3 掘立柱建物跡 P4 D-D			
No.	土色	土色	磁器
1	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロック・和を含む
SB26 掘立柱建物跡 P1 A-A			
No.	土色	土色	磁器
1	7.5YR3/1 黒黄	シルト	黄褐色ロームブロックを含む (柱礎)
2	7.5YR2/1 黒	粘土	白色粘土ブロック主体 (柱礎)
3	7.5YR4/4 黄	シルト	黄褐色ロームブロック主体 (柱礎)
SB26 掘立柱建物跡 P2 B-B			
No.	土色	土色	磁器
1	7.5YR3/1 黒黄	シルト	均質土 (柱礎)
2	7.5YR4/4 黄	シルト	黄褐色ロームブロック・黄褐色シルトブロックを含む (柱礎)
SB26 掘立柱建物跡 P3 C-C			
No.	土色	土色	磁器
1	7.5YR3/1 黒黄	シルト	均質土 (柱礎)
2	7.5YR4/4 黄	シルト	黄褐色ロームブロック・黄褐色シルトブロックを含む (柱礎)
SB26 掘立柱建物跡 P4 D-D			
No.	土色	土色	磁器
1	7.5YR3/1 黒黄	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む (柱礎)
2	7.5YR4/3 黄	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱礎)
SB26 掘立柱建物跡 P5 E-E			
No.	土色	土色	磁器
1	7.5YR3/1 黒黄	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む (柱礎)
2	7.5YR3/3 黒黄	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱礎)
SB26 掘立柱建物跡 P6 F-F			
No.	土色	土色	磁器
1	7.5YR3/1 黒黄	シルト	黄褐色ロームブロック・炭化物を含む (柱礎)
2	7.5YR3/1 黒黄	シルト	炭化物を少量含む (柱礎)
3	7.5YR4/4 黄	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱礎)
SB26 掘立柱建物跡 P7 G-G			
No.	土色	土色	磁器
1	10YR2/2 黒	シルト	黄褐色ローム・和を多量に含む (柱礎)
2	10YR2/3 黒	シルト	黄褐色ローム・少ブロックを多量に含む (柱礎)
3	10YR3/2 黒	粘質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱礎)
SB26 掘立柱建物跡 P8 H-H			
No.	土色	土色	磁器
1	7.5YR3/1 黒黄	シルト	黄褐色ロームブロック・炭化物を含む (柱礎)
2	7.5YR4/3 黄	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱礎)

第79図 SB3・SB26 掘立柱建物跡

〔重複〕SB3→SD6

〔規模・形状〕桁行3間(総長4.54m)、梁行1間(総長1.76m)以上の東西棟側柱建物である。

〔柱穴〕5か所確認した。掘方の平面形は長軸54-68cm、短軸40-60cmの隅丸方形・楕円形・不整形を呈し、深さ4-15cmである。柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕桁行(北側柱列):西から(148)-(142)-(164)cm、梁行(東側柱列):(176)cm

〔方向〕北側柱列:W-4°-S

〔出土遺物〕なし

〔SB26 掘立柱建物跡〕(第79図、写真図版23)

〔位置〕6区東部/平坦面

〔重複〕SB26→SB154・SA183・SD7

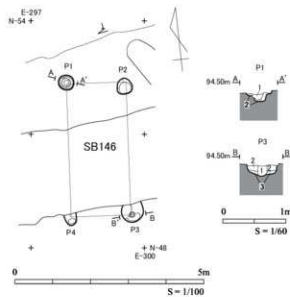
〔規模・形状〕桁行3間(総長4.10m)、梁行2間(総長3.50m)の南北棟側柱建物である。

〔柱穴〕8か所確認した。掘方の平面形は長軸48-66cm、短軸44-60cmの隅丸方形・不整形を呈し、深さ14-36cmである。3か所で柱材の抜き取り痕跡、8か所で平面形が直径14-20cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕桁行(西側柱列):北から284(2間分)

-126cm、梁行(南側柱列):西から174-176cm

〔方向〕西側柱列:N-3°-W

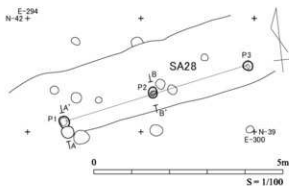


SB146 掘立柱建物跡 P1 A-A'			
No.	土層	土性	備考
1	10YR2/3 黒期	シルト	黄褐色ロームブロックを少量含む 黄褐色ローム粒を含む (柱底)
2	10YR2/2 黒期	シルト	黄褐色ロームブロックを極めて少量含む (柱底)
SB146 掘立柱建物跡 P3 B-B'			
No.	土層	土性	備考
1	10YR2/2 黒期	シルト	黄褐色ローム粒をごく少量含む (柱底)
2	10YR2/2 黒期	シルト	黄褐色ロームブロックを含む (柱底)
3	10YR2/2 黒期	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (柱底)

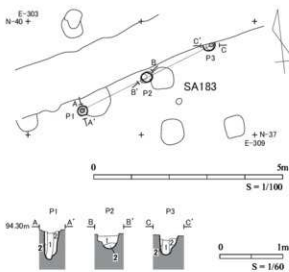
〔出土遺物〕P2 堆積土、P6 柱痕跡・堆積土、P8 掘方埋土から土師器、ロクロ土師器環、須恵器襷が出土した。ロクロ土師器環は内面に黒色処理、外面の体下・底部に手持ちへラズリ調整を施す。

〔SB146 掘立柱建物跡〕(第80図、写真図版23)

〔位置〕6区東部/平坦面



SA28 柱列跡 P1 A-A'			
No.	土層	土性	備考
1	10YR2/2 黒期	シルト	黄褐色ロームブロックを含む 黄褐色ローム粒を含む (柱底)
SA28 柱列跡 P2 B-B'			
No.	土層	土性	備考
1	10YR2/3 黒期	粘質シルト	黄褐色ローム粒をごく少量含む 出化物粒を少量含む (柱底)
2	10YR2/2 黒期	シルト	黄褐色ローム粒を少量含む (柱底)



SA183 柱列跡 P1 A-A'			
No.	土層	土性	備考
1	10YR2/1 黒	粘質シルト	黄褐色ローム粒をごく少量含む (柱底)
2	10YR2/2 黒期	粘質シルト	黄褐色ロームブロック粒をごく少量含む (柱底)
SA183 柱列跡 P2 B-B'			
No.	土層	土性	備考
1	10YR2/3 黒期	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を含む (柱底)
2	10YR2/2 黒期	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む (柱底)
SA183 柱列跡 P3 C-C'			
No.	土層	土性	備考
1	10YR2/2 黒期	粘質シルト	黄褐色ローム粒を少量含む (柱底)
2	10YR2/3 黒期	粘質シルト	黄褐色ロームブロック・粒を少量含む (柱底)

第80図 SB146 掘立柱建物跡、SA28・SA183 柱列跡

〔重複〕SB146→SD4a・SD4b

〔規模・形状〕桁行1間(総長3.58m)、梁行1間(総長1.62m)以上の側柱建物である。

〔柱穴〕4か所確認した。掘方の平面形は長軸42-59cm、短軸30-48cmの楕円形・不整楕円形を呈し、深さ9-23cmである。1か所で柱材の抜き取り痕跡、1か所で平面形が直径14cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕桁行(東側柱列):(358)cm、梁行(北側柱列):(162)cm

〔方向〕東側柱列:N-5°-E

〔出土遺物〕なし

(2) 柱列跡

【SA28 柱列跡】(第80図、写真図版24)

〔位置〕6区東部/平坦面

〔重複〕SD6→SA28

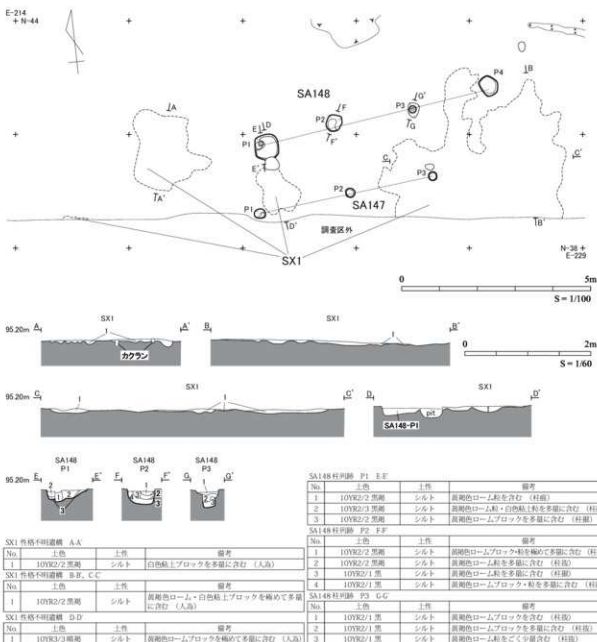
〔規模・形状〕東西2間(総長5.11m)

〔方向〕W-11°-S

〔柱穴〕3か所確認した。掘方の平面形は長軸26-28cm、短軸24-26cmの楕円形を呈し、深さ22-38cmである。1か所で平面形が直径17cmの楕円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕西から(247)-(264)cm

〔出土遺物〕なし



第81図 SA147・SA148 柱列跡、SX1 性格不明遺構

【SA147 柱列跡】(第81図)

〔位置〕6区西部／平坦面

〔重複〕SX1→SA147

〔規模・形状〕東西2間(総長4.67m)

〔方向〕W-6°-S

〔柱穴〕3か所確認した。掘方の平面形は長軸23-28cm、短軸22-25cmの略円形を呈し、深さ9-21cmである。2か所で柱材の抜き取り痕跡を確認した。柱痕跡は確認されなかった。

〔柱間寸法〕西から(242)-(225)cm

〔出土遺物〕なし

【SA148 柱列跡】(第81図、写真図版24)

〔位置〕6区西部／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕東西3間(総長6.22m)

〔方向〕W-8°-S

〔柱穴〕4か所確認した。掘方の平面形は長軸20-66cm、短軸17-60cmの不整楕円形・隅丸方形を呈し、深さ13-32cmである。2か所で柱材の抜き取り痕跡、2か所で平面形が直径12cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕西から(200)-(212)-(210)cm

〔出土遺物〕なし

【SA183 柱列跡】(第80図、写真図版24)

〔位置〕6区東部／平坦面

〔重複〕SB26→SA183→SD7-SB154

〔規模・形状〕東西2間(総長3.84m)

〔方向〕W-21°-S

〔柱穴〕3か所確認した。掘方の平面形は長軸25-32cm、短軸24cmの略円形を呈し、深さ23-52cmである。1か所で柱材の抜き取り痕跡、2か所で平面形が直径11-12cmの円形を呈する柱痕跡を確認した。

〔柱間寸法〕(187)-(197)cm

〔出土遺物〕なし

(3) 井戸跡

【SE10 井戸跡】(第82図、写真図版24)

〔位置〕6区西部／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸122cm、短軸114cmの不整円形を呈し、深さ67cmである。断面形は逆台形を呈する。井戸側は確認されなかった。

〔堆積土〕5層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒、白色粘土ブロック、炭化物粒を含む黒色・黒褐色シルト、均質な黒色シルトで、いずれも人為的埋土と

考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SE11 井戸跡】(第82図、写真図版24)

〔位置〕6区西部／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸84cm、短軸76cmの円形を呈し、深さ89cmである。断面形は箱形を呈する。井戸側は確認されなかった。

〔堆積土〕3層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒、白色粘土ブロック、炭化物粒を含む黒褐色シルト・砂質シルト・粘質シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土3層上面から木材が出土した。桎目板で表面に黒色付着物が見られる。

(4) 土坑

【SK16 土坑】(第82図)

〔位置〕6区東部／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸76cm、短軸64cmの楕円形を呈し、断面形は深さ33cmの楕錐形を呈する。底面は皿状を呈する。

〔堆積土〕2層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒を含む黒色・黒褐色シルトで、いずれも自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕確認面から土師器環が出土した。内面に黒色処理を施す。

【SK17 土坑】(第82図、写真図版24)

〔位置〕6区西部／平坦面

〔重複〕SK17→SK18

〔規模・形状〕平面形が長軸98cm、短軸88cmの円形を呈し、断面形は深さ45cmの箱形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕3層に細分される。1層は黄褐色ロームブロック・粒を含む黒色シルト、2層は均質な黒褐色粘質シルト、3層は黄褐色ロームブロックを多量に含む褐色粘質シルトである。1層は人為的埋土、2層は自然堆積土、3層は壁際の自然崩落土と考えられる。

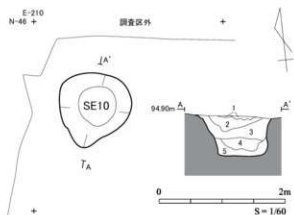
〔出土遺物〕堆積土からロクロ土師器環、小型甕が出土した。ロクロ土師器環は内面に黒色処理を施す。

【SK18 土坑】(第82図、写真図版24)

〔位置〕6区西部／平坦面

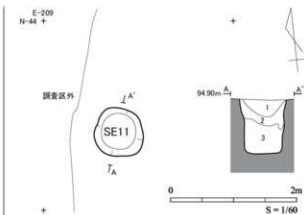
〔重複〕SK17→SK18

〔規模・形状〕平面形が長軸88cm、短軸80cmの円形を呈し、断面形は深さ24cmの逆台形を呈する。底



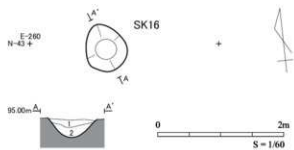
SE10 井戸跡 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	黒褐色ロームブロックを多数に含む
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	炭化物粉を含む (人海)
3	10YR2/2 黒褐色	シルト	黒褐色ロームブロック・粉を少量含む (人海)
4	10YR2/1 黒	シルト	均質土 (人海)
5	10YR2/1 黒	粘質シルト	白色粘土ブロックを多数に含む (人海)



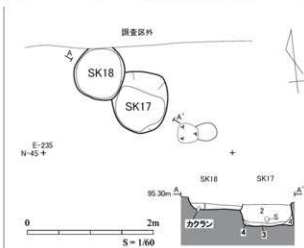
SE11 井戸跡 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	黒褐色ロームブロックを含む 黒褐色ローム粉を少量、炭化物粉をごく少量含む (人海)
2	10YR2/3 黒褐色	シルト	黒褐色ロームブロックを含む 炭化物粉をごく少量含む (人海)
3	10YR2/1 黒	粘質シルト	黒褐色ローム・白色粘土ブロックを含む 炭化物粉をごく少量含む (人海)



SK16 土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	黒褐色ローム粉をごく少量含む
2	10YR2/1 黒	シルト	黒褐色ロームブロック・粉を含む

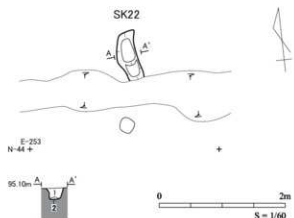


SK17 土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
2	10YR2/1 黒	シルト	黒褐色ロームブロック・粉を含む
3	10YR2/2 黒褐色	粘質シルト	均質土
4	10YR4/4 黄	粘質シルト	黒褐色ロームブロックを多数に含む (順)

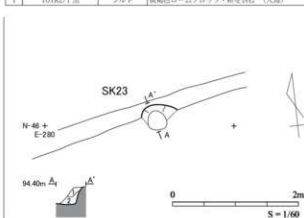
SK18 土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黒褐色ロームブロック・粉を含む (人海)



SK22 土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒	シルト	黒褐色ロームブロック・粉を少量含む (人海)
2	10YR5/6 黄褐色	粘土	黒褐色ロームブロック主体 (順)



SK23 土坑 A-A'

No.	土色	土性	備考
1	10YR2/1 黒褐色	シルト	黒褐色ロームブロックを含む (人海)
2	10YR2/1 黒	シルト	黒褐色ローム粉を含む (人海)

第 82 図 SE10・SE11 井戸跡、SK16・SK17・SK18・SK22・SK23 土坑

面は平坦である。

〔堆積土〕黄褐色ロームブロック・粒を含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から土師器が出土した。

〔SK22 土坑〕(第 82 図)

〔位置〕6 区西部／平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕平面形が長軸 76cm、短軸 32cm の不整形長方形を呈し、断面形は深さ 24cm の逆台形を呈する。底面は平坦で北側が低い階段状を呈する。

〔堆積土〕2 層に細分される。1 層は黄褐色ロームブロック・粒を少量含む黒色シルト、2 層は黄褐色ロームブロックを主体とする黄褐色粘土である。1 層は人為的埋土、2 層は自然崩落土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

〔SK23 土坑〕(第 82 図)

〔位置〕6 区東部／平坦面

〔重複〕SK23 → SD4a・SD4b

〔規模・形状〕平面形が長軸 58cm、短軸 14cm の楕円形を呈し、断面形は深さ 33cm の逆台形を呈する。底面は平坦である。

〔堆積土〕2 層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒を含む黒色・黒褐色シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

(5) 溝跡

〔SD4a・b 溝跡〕(第 83・84 図、写真図版 21・22・24・40)

〔位置〕5 区北部・6 区東部・T2-5／平坦面

〔重複〕SB146・SK23・SD5b・SD6・SD7・SD13 → SD4a → SD4b・SD184・SD211

〔規模・形状〕方形区画を形成するとみられる溝跡で、北辺と東・西辺の一部を確認した。南側はさらに調査区外へ延びている。a・b 期の二時期の変遷が認められ、外側に位置をずらし一部重複して掘りなおされている。a 期は北辺で 38m を測り、両端がそれぞれ約 110° の角度で南へ折れている。東辺は 22m、西辺は 40m を確認した。外側の上端を b 期の溝に壊されるが、上幅 110-130cm を確認でき、底幅 60-70cm である。横断面形は深さ 14-58cm の逆台形を呈する。

b 期は北辺で 39m を測り、西端が 110° の角度で南へ折れている。西辺は 41m を確認した。上幅 90-150cm、底幅 35-50cm で、横断面形は深さ 15-72cm の椀形を呈する。北辺と東辺の接する北東コーナー付近で底面が土橋状の高まりを持ち、長さ

30cm、幅 18cm、深さ 5cm の小溝で接続されていた。

溝の水位を調節する堰状施設の可能性が考えられる。

〔堆積土〕a 期は 5 層に細分される。1 層は砂を多量に含む黒褐色砂質シルト、2 層は青灰色砂層と黒褐色砂質シルトの互層、3 層は砂を多量に含む黒色粘質シルト、4・5 層は黄褐色ロームブロック・粒を含む黒色粘質シルトである。1-3 層は自然流入土、4・5 層は機能時の自然堆積土と考えられる。

b 期は 6 層に細分される。1 層は砂を多量に含む黒褐色砂質シルト、2-3 層は黄褐色ローム粒を含む黒色・黒褐色シルト・砂質シルト・粘質シルト、4 層は均質な黒褐色粘質シルト、6 層は黄褐色ロームブロックを多量に含むオリーブ褐色砂質シルトである。1 層は自然流入土、2-4 層は自然堆積土、5 層は機能時の自然堆積土、6 層は人為的埋土と考えられる。

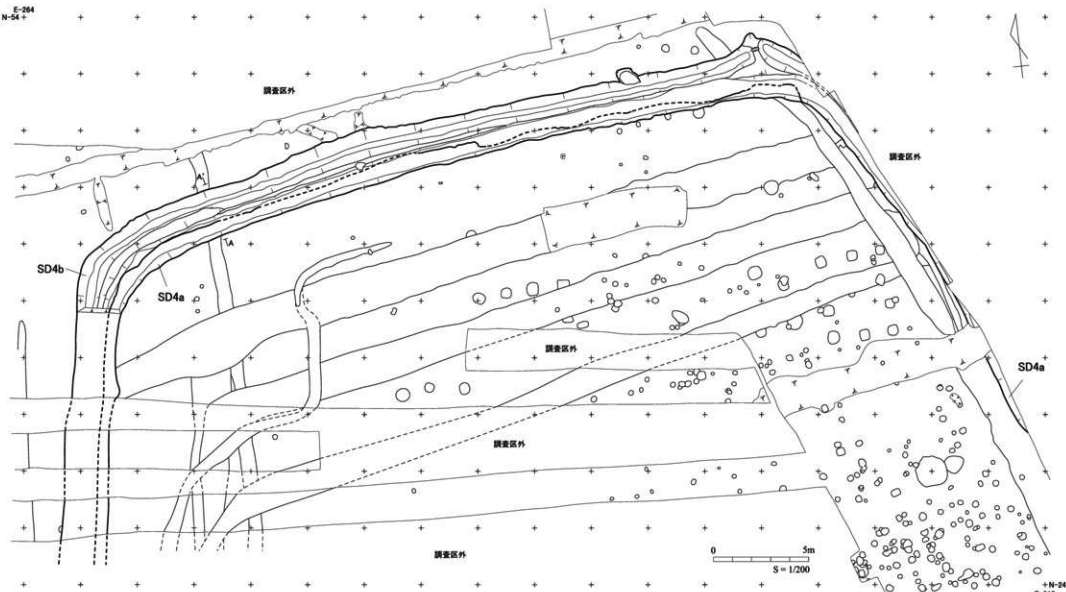
〔出土遺物〕SD4a 溝跡堆積土から中世陶器甕(第 84 図 4・5)・壺(第 84 図 10)・鉢(第 84 図 9)、ロクロ土師器環、須恵器甕が出土した。中世陶器甕(第 84 図 5)は胴部破片で内面にナデ調整、外面に礫状押印?→ケズリ調整を施す。甕(第 84 図 4)は頸部破片で内外面にナデ調整を施す。壺(第 84 図 10)は体下-底部破片で内外面にロクロナデ調整を施す。古瀬戸産である。鉢(第 84 図 9)は体部破片で内外面にナデ調整を施す。ロクロ土師器環は内面に黒色処理を施し、底部の切り離しは回転系切りである。

SD4b 溝跡確認面から中世陶器甕(第 84 図 6)、土師器環・甕、ロクロ土師器環が出土した。中世陶器甕は胴下-底部破片で内面にナデ調整、外面にヘラナデ調整を施す。土師器環は無段丸底で内面に黒色処理を施し、外面の口縁部にヨココナデ調整、体部にヘラケズリ調整を施す。

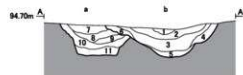
SD4a・b 溝跡確認面・堆積土から中世陶器甕(第 84 図 1~3・7・8)・皿(第 84 図 11)が出土した。中世陶器甕は口縁部(第 84 図 1~3)・胴下-底部(第 84 図 7・8)の破片がある。第 84 図 1・2 は口縁部が断面し字形の受口状を呈し、口縁部帯部の幅は第 84 図 1 が 1.6cm、第 84 図 2 が 1.8cm である。内外面にナデ調整を施し、第 84 図 2 は頸部外面にタタキ工具痕が見られる。第 84 図 3 は内面にロクロナデ調整→口唇部にヘラケズリ調整、外面にヘラケズリ調整を施す。第 84 図 7 は内外面にナデ調整を施す。第 84 図 8 は内面にナデ調整、外面にヘラナデ調整を施す。皿(第 84 図 11)は内外面にロクロナデ調整を施す。

このほか、SD4a・b 溝跡確認面・堆積土から土師器環・甕、ロクロ土師器環、須恵器甕、不明鉄製品が出土し

E-204
N-04



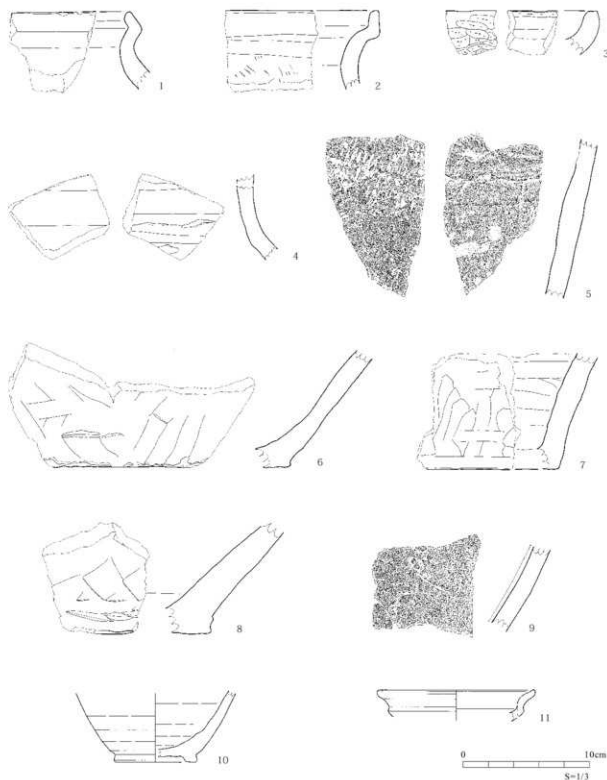
+N-04
E-218



SD4a-b 溝跡 A-A'

No.	土色	土質	説明	No.	土色	土質	説明
1	2.5Y3/1 黒褐	砂質シルト	砂を多量に含む (a 期 1 層)	7	2.5Y3/1 黒褐	砂質シルト	砂を多量に含む (a 期 1 層)
2	10YR3/1 黒褐	シルト	黄褐色ローム殻を少量含む (b 期 2 層)	8	2.5Y2/2 黒褐	砂質シルト	黄褐色砂礫と黒泥シルトの互層 (a 期 2 層)
3	2.5Y2/1 黒	粘板シルト	黄褐色ローム殻を少量含む (b 期 3 層)	9	2.5Y2/1 黒	粘板シルト	砂礫を多量に含む (a 期 3 層)
4	10YR2/2 黒褐	粘板シルト	黄褐色ローム殻を含む (b 期 4 層)	10	10YR2/1 黒	粘板シルト	黄褐色ロームブロック・殻を含む (a 期 4 層・機能母地)
5	2.5Y3/1 黒褐	粘板シルト	均質土 (b 期 5 層)	11	2.5Y2/1 黒	粘板シルト	黄褐色ロームブロックを含む (a 期 5 層・機能母地)
6	2.5Y4/3 オリーブ褐	砂質シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む (b 期 6 層・人込)				

第 83 図 SD4a・b 溝跡



No.	遺構	部位	種類	図種	特徴	残存高 (cm)	部位	図録	写真
1	SD4	縁部	中世陶器	器	外面：ナデ、自然釉 内面：ナデ、体部焼物による暗けはじけ著しい 梁沼編年5型式別	6.2	1脚部	051	40.6
2	SD4	縁部	中世陶器	器	外面：ナデ、体部にタタキ土付 内面：ナデ 梁沼編年5型式別	6.3	1脚部	052	40.7
3	SD4	縁部	中世陶器	器	外面：タタキ 内面：ロクロナデ、タタキ	3.5	1脚部	054	40.10
4	SD4a	縁部	中世陶器	器	内外面：ナデ	6.8	脚部	057	40.1
5	SD4a	縁部	中世陶器	器	外面：黒豆釉(黄?)→タタキ 内面：ナデ	12.7	脚部	055	40.2
6	SD4a	縁部	中世陶器	器	外面：ヘラナデ 内面：ナデ	8.5	脚~底部	061	40.5
7	SD4	縁部	中世陶器	器	内外面：ナデ	8.9	脚~底部	053	40.8
8	SD4	縁部	中世陶器	器	外面：ヘラナデ 内面：ナデ	8.6	脚~底部	060	40.9
9	SD4a	縁部	中世陶器	鉢	内面：ナデ 外面：ナデ 内面に磁層付	6.8	体部	059	40.3
10	SD4a	縁部	中世陶器	器	内外面：ロクロナデ 底径：(6.5) cm 古瀬戸産	5.4	体~底部	058	40.4
11	SD4	縁部	中世陶器	器	内外面：ロクロナデ (H：(12.6) cm 古瀬戸産? 厚縁器)	2.4	1脚部~体部	056	40.11

第84図 SD4a・b 溝跡出土遺物

た。土師器環は有段丸底・無段丸底のものがあり、いずれも内面に黒色処理を施し、外面の口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリ調整を施す。甕は内外面にナデ調整を施し、外底面に木葉痕を持つもの、外面にハケメ調整を施すものがある。ロクロ土師器環は内面に黒色処理を施し、回転糸切りによる底部の切り離し後に外面の体下-底部に手持ちヘラケズリ調整を施す。須恵器甕は内面にロクロナデ調整、外面に平行タタキ調整→ロクロナデ調整を施す。

【SD5a・b 溝跡】(第85・86図、写真図版21-23・39)

〔位置〕6区東部/平坦面

〔重複〕SD13・SD5a→SD5b→SD4a・SD4b・SD12・SD184
〔規模・形状〕方形区画を形成するとみられる溝跡で、北辺と西辺の一部を確認した。a・b期の二時期の変遷が認められ、西辺を外側に位置をずらして掘りなおされたと考えられるが、拡張後の西辺はSD4a・b溝跡に壊されている。

a期は西辺9.20mを確認し、さらに調査区外の南側へ延びている。b期北辺との角度は約110°である。未精査であるが上幅220cmが確認できる。

b期は北辺40.40mを確認した。東西両端をSD4a・b溝跡に壊されているが、これより外側へは延びていないことから、b期を踏襲してSD4a・b溝跡が掘られたと考えられる。上幅170-240cm、底幅150-160cmで、横断面形は深さ34-51cmの逆台形を呈する。北辺の東端で底面が土橋状の高まりを持ち、長さ90cm以上、幅22-43cm、深さ10cmの小溝で東辺と接続されていたと考えられる。溝の水位を調節する堰状施設の可能性が考えられる。

〔堆積土〕b期は6層に細分される。1-4層は黄褐色ロームブロック・粒、炭化物粒を多く含む黒色・黒褐色・暗褐色シルト、5・6層は黄褐色ロームブロック・粒を含む黒褐色粘質シルトである。1-4層は廃絶後の人為的埋め戻し土、5・6層は機能時の自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕b期の堆積土から中世陶器甕(第86図1)、茶臼(下臼、第86図2)が出土した。中世陶器甕は胴部破片で内外面にナデ調整を施す。茶臼(下臼)は受皿口縁部の一部に被熱による黒化が見られる。

このほか、b期の確認面・堆積土・底面から土師器甕、ロクロ土師器環、須恵器環・甕、磁石、礫石器が出土した。土師器甕は頸部に痕跡的な段を持ち、外面の口縁部にヨコナデ調整、胴部にハケメ調整を施す。ロクロ土師器環は内面に黒色処理を施し、回転糸切りによる底部の切り離し後に外面の体下部に手持ちヘラケズ

リ調整を施す。須恵器環は内外面にロクロナデ調整を施す。須恵器甕は内面にロクロナデ調整、外面に平行タタキ調整→ロクロナデ調整を施す。礫石器は破片で被熱痕跡が見られる。

【SD6 溝跡】(第85図、写真図版21・22)

〔位置〕6区東部/平坦面

〔重複〕SB3・SD5a・SD13→SD6→SA28・SD4a・SD7・SD12・SD184

〔規模・形状〕方形区画を形成するとみられる溝跡で、北辺と西辺の一部を確認した。北辺は37.60mを確認し、西端は約110°の角度で南へ折れている。西辺は5.60mを確認し、さらに調査区外の南側へ延びている。上幅160-180cm、底幅80-140cmで、横断面形は深さ31-55cmの逆台形を呈する。北辺の東端で底面が幅50cmの土橋状の高まりを持ち、東辺と接している。溝の水位を調節する堰状施設の可能性が考えられる。

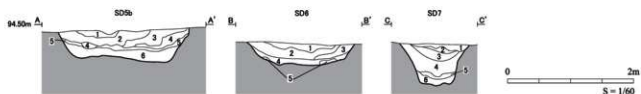
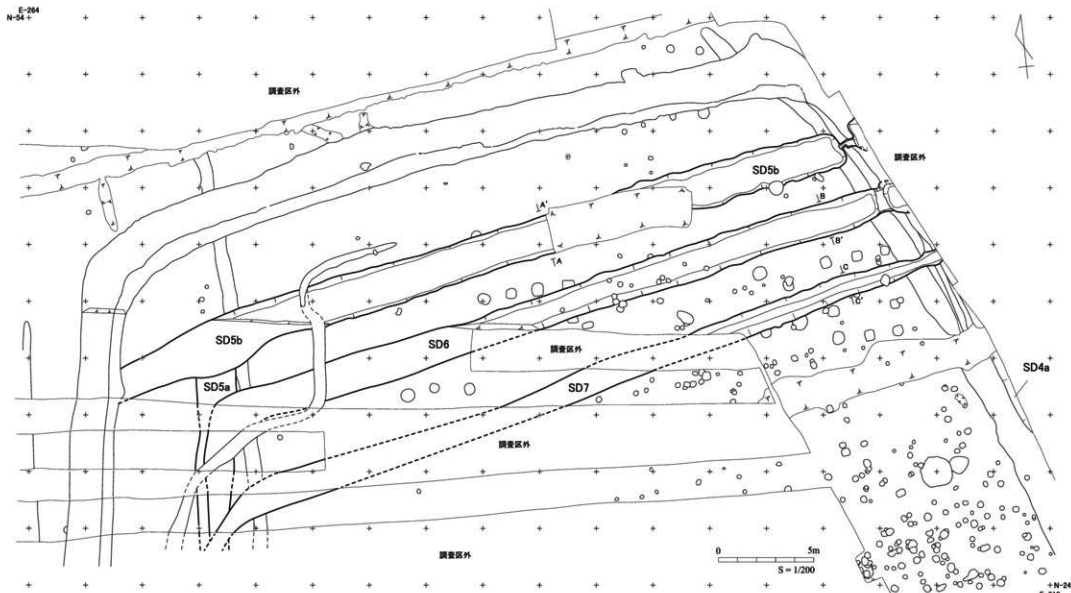
〔堆積土〕5層に細分される。1-3層は黄褐色ロームブロック・粒を多く含む黒褐色シルト、4層は黄褐色ローム粒を少量含む黒色粘質シルト、5層は黄褐色ロームブロック・粒を主体とするふい黄褐色粘土である。1-3層は廃絶後の人為的埋め戻し土、4層は機能時の自然堆積土、5層は機能時の自然崩落土と考えられる。〔出土遺物〕確認面・堆積土から土師器、ロクロ土師器環、須恵器甕、堆積土下層から木材が出土した。ロクロ土師器環は内面に黒色処理を施し、回転糸切りによる底部の切り離し後に外面の体下-底部に手持ちヘラケズリ調整を施す。須恵器甕は内面に同心円文アテ具痕が見られ、外面に平行タタキ調整を施すもの、内外面にロクロナデ調整を施し、外面に自然軸のみられるものがある。木材は板目材の破片である。

【SD7 溝跡】(第85・86図、写真図版21-23・39)

〔位置〕6区東部/平坦面

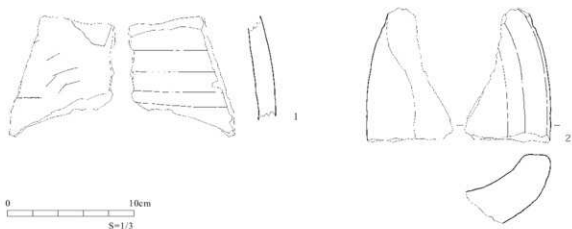
〔重複〕SB26・SB154・SA183・SD6・SD13→SD7→SD4a・SD184・SD211

〔規模・形状〕方形区画を形成するとみられる溝跡で、北辺の40.30mを確認した。上幅50-140cm、底幅30-50cmで、横断面形は深さ22cmの逆台形を呈する。〔堆積土〕6層に細分される。1層は黄褐色ローム・炭化物粒を多く含む黒色砂質シルト、2・3層は黄褐色ロームブロック・粒を多く含む黒褐色シルト、4層は黄褐色ローム粒を多く含む黒色粘質シルト、5・6層は黄褐色ロームブロック・粒、白色粘土ブロックを含む黒褐色粘質シルトである。1層は自然流入土、2・3層は廃絶後の人為的埋め戻し土、4層は機能時の自然堆積土、5・6層は機能時の自然崩落土と考えられる。

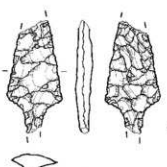
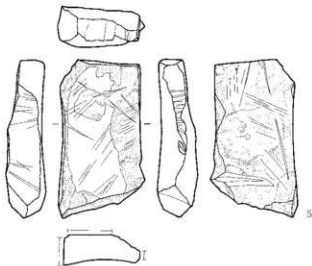


SD5b 遺跡 A-A'			SD6 遺跡 B-B'			SD7 遺跡 C-C'		
No.	土質	備考	No.	土質	備考	No.	土質	備考
1	10YR2/2 黒褐	シルト	1	10YR5/1 黒褐	シルト	1	10YR2/1 黒	粘質シルト
2	10YR2/1 黒	粘質シルト	2	10YR2/2 黒褐	シルト	2	10YR2/2 黒褐	粘質シルト
3	10YR2/3 黒褐	シルト	3	10YR2/3 黒褐	シルト	3	10YR2/2 黒褐	シルト
4	10YR4/4 暗褐	粘質シルト	4	10YR2/1 黒	粘質シルト	4	10YR2/1 黒	粘質シルト
5	10YR2/3 黒褐	シルト	5	10YR2/1 黒	粘質シルト	5	10YR2/2 黒褐	粘質シルト
6	10YR2/3 黒褐	シルト	5	10YR4/3 灰・黄褐	粘土	6	10YR2/3 黒褐	粘質シルト

第 85 図 SD5a・SD5b・SD6・SD7 遺跡



No.	遺構名	部位	種類	素材	特徴	法量 (mm・g)				現存	登録	写真
						長	幅	厚	重			
1	SD5b	埋藏土	中世陶器	土	内外面：十字					9.6	製部	084 39-5
2	SD5b	埋藏土	茶臼 (F.F.D)	灰石	受皿・環状部の一部に焼物による黒色化	(106.5)	(68.5)	(33.0)	(222.5)	一部	118	39-6



No.	遺構名	部位	種類	素材	特徴	法量 (cm)			現存	登録	写真	
						口径	底径	高さ				
3	SD7	埋藏土	ロクロ土製陶	土	外面：ロクロナデ→(底付近) 手持ちヘラケズリ。(底) 回転糸切り→無調整 内面：ヘラミガキ→黒色処理 (全体的に艶減著しい)	12.9	5.6	4.9	2/5	029	39-8	
No.	遺構名	部位	種類	素材	特徴	法量 (mm・g)				現存	登録	写真
						長	幅	厚	重			
4	SD7	埋藏土	石器	朽木	先端部・基端部欠損 基端部付近 一部焼物により黒色化	(300)	15.0	4.5	(1.4)	先端部・ 基端部欠損	107	39-9
5	SD7	埋藏土	磁石	瀬戸石	紙面数3 全体に磨痕	63.0	34.5	15.0	38.4	完形	108	39-10

第86図 SDSb・SD7 溝跡出土遺物

〔出土遺物〕 堆積土からロクロ土師器環（第86図3）、石罫（第86図4）、砥石（第86図5）が出土した。ロクロ土師器環は体部から口縁部にかけて内湾する。内面にヘラミガキ調整→黒色処理、外面にロクロナデ調整を施し、回転系切りによる底部の切り離し後に外面の体下部に手持ちヘラケズリ調整を施し、底部に再調整を施さない。石罫は珪化木製の凸基有基石罫で、両面に押し剥離による調整を施す。先端部と基部を欠損する。基部側は被熱により赤色化している。砥石は凝灰岩製で3面の砥面があり、全体に擦痕が見られる。

このほか、堆積土から土師器環、ロクロ土師器環が出土した。いずれも内面に黒色処理を施し、ロクロ土師器環は底部の切り離しが回転系切りのもの、底部の

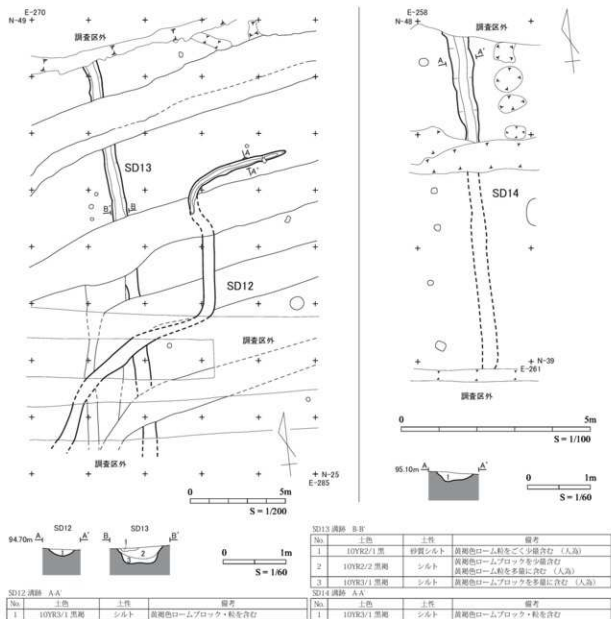
切り離し方法が不明で外面の体下-底部に手持ちヘラケズリ調整を施すものがある。

【SD12 溝跡】（第87図、写真図版22・24）

〔位置〕 6区東部/平坦面

〔重複〕 SD5a・SD5b・SD6・SD13→SD12

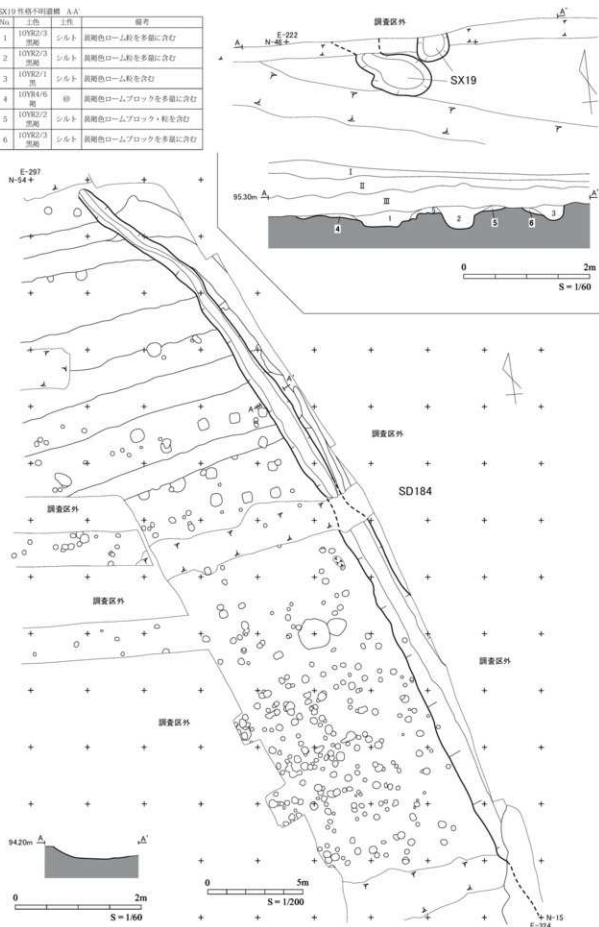
〔規模・形状〕 北東から南西方向に蛇行しながら延びる。長さ21.00mを確認し、さらに調査区外の南側へ延びている。東から西へ5.0m延びて南へ折れ、6.0m延びて西へ折れる。さらに弧を描きながら南西へ10.0m以上延びている。上幅22-50cm、底幅6-26cmで、横断面形は深さ3-7cmの皿形を呈する。〔堆積土〕 黄褐色ロームブロック・粒を含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。



第87図 SD12・SD13・SD14 溝跡

SX19 性格不明遺構 A-A'

No	土色	土質	備考
1	10YR2/3 黄褐色	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む
2	10YR2/3 黄褐色	シルト	黄褐色ローム粒を多量に含む
3	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒を含む
4	10YR4/6 赤	砂	黄褐色ロームブロックを多量に含む
5	10YR2/2 黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロック・粒を含む
6	10YR2/3 黄褐色	シルト	黄褐色ロームブロックを多量に含む



第88回 SD184溝跡・SX19性格不明遺構

〔出土遺物〕なし

【SD13 溝跡】(第 87 図、写真図版 22・25)

〔位置〕6 区東部/平坦面

〔重複〕SD13 → SD4a・SD4b・SD5a・SD5b・SD6・SD7・SD12

〔規模・形状〕南北方向に直線的に延びる。長さ 44.90m を確認し、さらに調査区外の南北へ延びている。上幅 60-78cm、底幅 28-70cm で、横断面形は深さ 20-35cm の逆台形を呈する。

〔堆積土〕3 層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒を多く含む黒色砂質シルト、黒褐色シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕確認面から土師器環が出土した。内面に黒色処理を施す。

【SD14 溝跡】(第 87 図、写真図版 25)

〔位置〕6 区東部/平坦面

〔重複〕なし

〔規模・形状〕南北方向に直線的に延びる。長さ 9.00m を確認し、さらに調査区外の南北へ延びている。上幅 28-60cm、底幅 20-24cm で、横断面形は深さ 13cm の逆台形を呈する。南側は残存状況が良好でないが、底面に連続する鋤痕跡が確認された。

〔堆積土〕黄褐色ロームブロック・粒を含む黒褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

【SD184 溝跡】(第 88 図)

〔位置〕5 区北部・6 区東部/平坦面

〔重複〕SD4a・SD4b・SD5b・SD6・SD7・SD57・SD211 → SD184

〔規模・形状〕北西から南東方向へわずかに弧を描きながら延び、さらに南東方向へ直線的に延びる。長さ 44.90m を確認し、南側は調査区外へ延びている。北側は削平により消失しているが、4 区南部で確認した SD130a・b 溝跡または SD131 溝跡と接続していた可能性がある。上幅 70-260cm、底幅 20-110cm で、

横断面形は深さ 30-36cm の皿形を呈する。

〔出土遺物〕なし

(6) 性格不明遺構

【SX1 性格不明遺構】(第 81 図、写真図版 25)

〔堆積土〕黄褐色ロームブロック・白色粘土を多量に含む黒褐色・暗褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から土師器、ロクロ土師器環が出土した。ロクロ土師器環は内面に黒色処理を施し、回転糸切りによる底部の切り離し後に外面の体下-底部に手持ちヘラケズリ調整を施す。

【SX19 性格不明遺構】(第 88 図)

〔堆積土〕6 層に細分される。黄褐色ロームブロック・粒を多く含む黒色・黒褐色シルト、褐色砂で、いずれも人為的埋土と考えられる。

〔出土遺物〕なし

(7) 組み合わせない柱穴跡

調査区全域にごく散漫に分布し、東部でやや多く確認した。小規模で柱痕跡が確認されないものが多いが、やや規模が大きく柱痕跡が確認されたものもある。確認面・堆積土・掘方埋土から土師器環、ロクロ土師器環、須恵器甕、破片が出土した。土師器・ロクロ土師器環は内面に黒色処理を施す。破片は珪質石材製で被熱により白色化している。

(8) 遺構外出土遺物

表土・遺構確認面・捜乱から土師器環・甕、ロクロ土師器環、須恵器鉢・甕が出土した。土師器環は内面に黒色処理を施す。甕は外面にハケメ調整を施す。ロクロ土師器環は内面に黒色処理を施し、回転糸切りによる底部の切り離し後に外面の体下-底部に手持ちヘラケズリ調整を施す。須恵器甕は内面に同心円文アテ具痕が見られ、外面に平行タタキ調整を施すもの、ロクロナデ調整を施すものがある。

7. 遺構確認調査区

(1) 西屋敷遺跡

5区北部から6区東部にかけて確認した遺構群の広がりを確認することを目的に、5区西側から6区東部の南側で遺構確認調査を実施した。対象地は本発掘調査の排土置場として利用していたことなどからトレンチ配置に制約があったものの、6区東部で確認した溝跡群の新旧関係及び西辺を確認した。調査では幅2.0-4.6m、長さ16.8-57.6mのトレンチ5か所(T1-T5区)を設定して遺構確認作業を実施した。確認した遺構は土坑3基、溝跡19条、柱穴跡多数で、いずれも掘り下げは行っていない。このうち、6区東部で確認したSD4a・b、SD5a・b、SD6、SD7、SD12、SD13溝跡の延長とみられる溝跡については既述のとおりである。これ以外の遺構について、以下に概要を述べる。

① 土坑

【SK207 土坑】T2区の平坦面で確認した。重複は見られない。長軸100cmで調査区外の北側へ延びている。遺物は出土していない。

【SK208 土坑】T2区の平坦面で確認した。SD203→SK208の重複がある。長軸170cmで調査区外の北側へ延びている。遺物は出土していない。

【SK213 土坑】T2区の平坦面で確認した。SK213・SD202→SD144の重複がある。長軸370cmで調査区外の北側へ延びている。遺物は出土していない。

② 溝跡

【SD144 溝跡】T2区の平坦面で確認した。SK213・SD202→SD144の重複がある。上幅230-260cmで、南北方向に2.00m以上延びる。遺物は堆積土から中世陶器類(第89図1)が出土した。口縁部-胴上部の破片で、

内外面にナデ調整を施す。口縁部が断面L字形の受口状を呈し、口縁部幅は1.2cmである。

【SD198 溝跡】T1区の平坦面で確認した。重複は見られない。上幅140cm以上で、北西から南東方向へ3.20m以上延びる。遺物は出土していない。

【SD199 溝跡】T1区の平坦面で確認した。重複は見られない。上幅70-80cmで、南北方向に2.00m以上延びる。遺物は出土していない。

【SD200 溝跡】T1区の平坦面で確認した。重複は見られない。上幅60-65cmで、北東から南西方向へ2.40m以上延びる。遺物は出土していない。

【SD201 溝跡】T2区の平坦面で確認した。重複は見られない。上幅90-110cmで、南北方向に2.00m以上延びる。遺物は出土していない。

【SD202 溝跡】T2区の平坦面で確認した。SD202→SK213・SD144の重複がある。上幅35cmで、東西方向に2.40m以上延びる。遺物は出土していない。

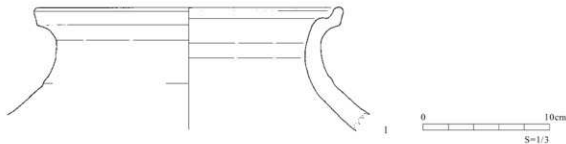
【SD203 溝跡】T2区の平坦面で確認した。SD203→SK208の重複がある。上幅80cmで、南北方向に2.00m以上延びる。遺物は出土していない。

【SD204 溝跡】T2区の平坦面で確認した。SD204→SK208の重複がある。上幅80cmで、南北方向に2.00m以上延びる。遺物は出土していない。

【SD205 溝跡】T2区の平坦面で確認した。重複は見られない。上幅70-90cmで、南北方向に2.00m以上延びる。遺物は出土していない。

【SD206 溝跡】T2区の平坦面で確認した。重複は見られない。上幅280cmで、南北方向に2.00m以上延びる。遺物は出土していない。

【SD210 溝跡】T3-5区の平坦面で確認した。重複は見られない。上幅130cmで、南北方向に14.80m以上延びる。北側は削平により消失している。遺物は出土していない。



No.	遺構	層位	種類	器種	特徴	残存高 (cm)	部位	登録	写真
1	SD144	埋積土	中世陶器	甕	内外面にナデ調整を施す。口縁部が断面L字形の受口状を呈し、口縁部幅は1.2cmである。	9.8	口縁-胴部	086	39-7

第89図 SD144 溝跡出土遺物

③ 遺構外出土遺物

確認面からロクロ土師器坪が出土した。内面に黒色処理を施し、回転糸切りによる底部の切り離し後に外面の体下部に手持ちヘラズリ調整を施し、底部に再調整を施さない。

(2) 西小屋館跡

西小屋館跡南辺を一字形に囲む幅 10-20m の水田約 2,000㎡を対象として、暗渠排水工事の施工に先立つ遺構確認調査を実施した。対象地の現況は水田で、西小屋館跡の現存土塁西西南端部の延長上に小溜池を挟んで南へ約 20m、く字形に屈曲して東へ約 100m、さらにく字形に屈曲して北東へ約 40m 延びる。館跡内部の畑地と 40-100cm の比高差を持ち、館跡南部を区画した堀跡と推定されていた(吉井 1994)。調査は幅 1.6m、長さ 5.0-20.0m のトレンチ 10 か所(T1-T10 区)を設定して遺構確認作業を実施した。

調査区内の基本層序は Ⅰ層:現代の耕作土・盛土(層厚約 40cm)、Ⅱ層:旧耕作土(0-20cm)、Ⅲ層:湿地性黒色土、Ⅳ層:白色粘土層となる。遺構確認面はⅡ層直下に露出したⅣ層の削平面である。対象範囲の南部-東部にかけてはⅢ層がⅣ層を侵食して発達し、旧地形が丘陵辺縁部であったことが確認された。遺構は大溝跡、溝跡、土坑、井戸跡、柱穴跡を確認した。いずれも平面プランを記録し、掘り下げは行っていない。遺物は表土から陶磁器片が出土した。以下に確認した遺構の概要を述べる。

【SD301 堀跡】T1・2・3・5・10 区で確認した。T3 区で土坑、T10 区で溝跡と重複し、これより新しい。T1 から T5 まで蛇行しながら東西方向に 65m 以上延びるとみられる。上幅は T3 で 3.8m、T5 で 4.1m 以上を確認した。遺物は出土していない。

【SD302・SD303・SD304 溝跡】T1 区で 2 条、T10 区で 1 条を確認した。T1 区の溝跡 2 条はやや蛇行しながら南北方向にそれぞれ延びる。SD302 溝跡で 9.0m、SD303 溝跡で 2.2m を確認した。上幅 40-60cm である。T10 区の SD304 溝跡は大溝跡と重複し、これより古い。北東から南西方向に 2.8m 以上延びる。上幅 70cm 以上である。遺物は出土していない。

【SE305 井戸跡】T4 区で確認した。平面形が長軸 200cm 以上の円形または楕円形を呈すると見られる。確認面で河原石が弧状に並んで露出しており、河原石積みの井戸側を持つ可能性があることから井戸跡とした。遺物は出土していない。

【SK306 土坑】T3 区で確認した。SD301 堀跡と重複し、これより古い。平面形は長軸 150cm 以上、短軸 120cm 以上の隅丸方形または楕円形を呈するとみられる。遺物は出土していない。

【組み合わせない柱穴跡】T1 区で 3 か所、T8・T10 区で各 1 か所を確認した。T10 区では大溝跡と重複し、これより新しい。T1 区の西側に隣接する西屋敷遺跡 5 区南部では掘立柱建物跡群が確認されており、これと関連する建物跡の一部である可能性が考えられる。遺物は出土していない。



第90図 西小屋館跡遺構確認調査区遺構配置図

第8表 遺構総表(6) 堀跡

区	遺構名	位置	方向	距離			備考	時期	図
				幅(m)	長さ(m)	深さ(m)			
5区	S0107	中田堀	NW-SE	46.00	1.20 ~ 4.00	49 ~ 300	77 ~ 94		遺構位置 S0103・S0174・S0197・S0200・S280B・S281・S282・S283・S284・S285・S286・S288・S0103より南、S0184より北

第9表 遺構総表(7) 溝跡(1)

区	遺構名	位置	方向	距離			備考	時期	図
				幅(m)	長さ(m)	深さ(m)			
1区	S003	堀内堀跡	N-S	115.00	69 ~ 228	10 ~ 125	10 ~ 70		遺構位置
	S0139	堀内堀跡	NE-SW	2.30	50 ~ 60	-	-		遺構位置
	S0140	堀内堀跡	N-S	12.00	40 ~ 100	-	-		SK11より南
	S0141	堀内堀跡	N-S	20.00	20 ~ 31	18 ~ 28	4 ~ 9		遺構位置
	S0102	堀内堀跡	NW-SE	7.60	10 ~ 25	10 ~ 25	3 ~ 12		遺構位置
	S0103	堀内堀跡	N-S	8.40	26 ~ 34	11	3 ~ 10		遺構位置
	S0105	堀内堀跡	N-S	15.00	278	27 ~ 80	16 ~ 37		遺構位置
	S0108	堀内堀跡	N-S	13.70	130 ~ 295	20 ~ 84	40 ~ 54		遺構位置
	S0109	堀内堀跡	N-S	10.50	27 ~ 52	18 ~ 43	17 ~ 30		遺構位置
	S0110	堀内堀跡	NW-SE	32.40	50 ~ 105	20 ~ 70	10 ~ 18		遺構位置
	S0111	堀内堀跡	NW-SE	14.20	29 ~ 69	18 ~ 48	13 ~ 17		遺構位置
	S0112	堀内堀跡	N-S	10.00	10 ~ 11	10 ~ 11	10 ~ 11		遺構位置
	S0126	堀内堀跡	EW	30.60	50 ~ 80	21 ~ 60	10 ~ 41		遺構位置
	S0135	堀内堀跡	EW・S-W (T字)	EW: 20.70 S-W: 24.30	30 ~ 84	40 ~ 60	EW: 2 ~ 34 S-W: 2.7		遺構位置
S0136	堀内堀跡	EW・S-W (T字)	EW: 4.70 S-W: 16.60	20 ~ 60	8 ~ 72	EW: 3.30 ~ 38 S-W: 3.3 ~ 13		遺構位置	
S0137	堀内堀跡	N-S	10.00	30 ~ 43	18 ~ 27	8 ~ 28		遺構位置	
S0138	堀内堀跡	NW-SE	2.40	10 ~ 25	16	-		遺構位置	
S014	堀内堀跡	N-E	10.36	29 ~ 72	22 ~ 36	1 ~ 22		遺構位置	
S015	堀内堀跡	N-S	14.60	180 ~ 270	100 ~ 210	20		遺構位置	
S016	堀内堀跡	N-S	6.50	25 ~ 65	17 ~ 40	3 ~ 5		遺構位置	
S017	堀内堀跡	N-S	3.50	15 ~ 30	5 ~ 15	12		遺構位置	
S018	堀内堀跡	N-S	10.00	15 ~ 50	10 ~ 30	11		遺構位置	
S0197	堀内堀跡	N-S	17.62	26 ~ 135	-	-		遺構位置	
S0214	堀内堀跡	NW-SE	12 ~ 10	10 ~ 14	3 ~ 5	-		遺構位置	
S0130	堀内堀跡	N-S・E-W (L字)	EW: 206.20 E-W: 15.00	59 ~ 69	25 ~ 35	24 ~ 43		遺構位置	
S0120	堀内堀跡	N-S・E-W (L字)	S-W: 262.20 E-W: 15.00	38 ~ 116	23 ~ 100	8 ~ 16		遺構位置	
S0131	堀内堀跡	N-S	23.20	63 ~ 110	22 ~ 65	17 ~ 30		遺構位置	
S0132	堀内堀跡	N-S	8.00	14 ~ 30	10 ~ 20	10 ~ 20		遺構位置	
S0133	堀内堀跡	EW	7.80	40 ~ 60	20 ~ 38	15 ~ 21		遺構位置	
S0186	中田堀	EW	10.20	50 ~ 116	38 ~ 56	15 ~ 21		遺構位置	
S248	中田堀	EW	10.20	50 ~ 100	18 ~ 36	8 ~ 18		遺構位置	
S049	中田堀	NE-SW	7.30	56 ~ 80	48 ~ 62	11 ~ 14		遺構位置	
S068	中田堀	N-W・E-E	15.00	60 ~ 94	22 ~ 42	10 ~ 30		遺構位置	
S069	中田堀	N-S	4.40	36 ~ 58	20 ~ 29	13 ~ 28		遺構位置	
S068	中田堀	EW	10.40	80 ~ 90	32 ~ 46	43 ~ 55		遺構位置	
S069	中田堀	EW	8.00	80 ~ 100	32 ~ 58	17 ~ 22		遺構位置	
S0160	中田堀	EW	3.27	16 ~ 26	12 ~ 24	13		遺構位置	
S0151	中田堀	N-S	6.52	20 ~ 34	9 ~ 22	9		遺構位置	
S0153	中田堀	EW・N-W (T字)	EW: 1.70 N-W: 1.88	52 ~ 78	12 ~ 68	8 ~ 18		遺構位置	

第 10 表 遺構観察表 (8) 溝跡 (2)

区	遺構名	位置	方向	幅 (cm)	長さ (cm)	断面 (cm)	構造形状	山上遺物	遺留物	備考	時期	図
5区	S011	中庭跡	N-S	22-30	24	24 ~ 70	U字形	なし	S04a・S07より直、S018より直	中庭	中-6世紀	75
	S014	中庭跡	N-S	44-50	30 ~ 30	70 ~ 200	直形	なし	S04a・S08b・S09b・S09c・S07・S07・S07・S021より直	中庭	中-6世紀	88
5・6区	S04a	中庭跡	N-S・E-W	N.S. 103・120.00 N.S. 103・120.00	11 ~ 58	60 ~ 70	直形	ロウロの上縁・直造跡・中庭跡	38146・3823・S05b・S06・S07・S013より直、 S04b・S0184・S021より直	中庭	中-6世紀	84
	S04b	中庭跡	N-S・E-W	E-W: 20.00 N.S. 103・141.00	35 ~ 50	90 ~ 150	直形	上縁部・ロウロの上縁・中庭跡	38146・3823・S04a・S05b・S013より直、S0184より直	中庭	中-6世紀	84
6区	S014	中庭跡	N-S	9.00	13	28 ~ 60	直形	なし	なし	(B) 87	(B) 87	
	S013	中庭跡	N-S	44.50	20 ~ 35	60 ~ 78	直形	上縁部	S04a・S04b・S05a・S06・S07・S012より直	(B) 87	(B) 87	
6区	S014	中庭跡	N-S	44.50	20 ~ 35	60 ~ 78	直形	上縁部	S04a・S04b・S05a・S06・S07・S012より直	(B) 87	(B) 87	
	S013	中庭跡	N-S	44.50	20 ~ 35	60 ~ 78	直形	上縁部	S04a・S04b・S05a・S06・S07・S012より直	(B) 87	(B) 87	
6区	S06	中庭跡	N-S・E-W	E-W: 37.60 N.S. 103・150.00	31 ~ 55	80 ~ 140	直形	上縁部・ロウロの上縁・直造跡・木材	S03c・S05a・S013より直、S03b・S04a・S07・ S020b・S0134・S0135・S04b・S012より直、S04a・ S0184・S021より直	中庭	中-6世紀	85
	S07	中庭跡	N-S	40.30	22	80 ~ 140	直形	上縁部・ロウロの上縁部・直造跡・木材	S03b・S020b・S020c・S013より直	中庭	中-6世紀	87
T1	S0108	中庭跡	N-S	3.20	140 ~	8 ~ 76	直形	なし	なし	中庭	中-6世紀	86
	S0109	中庭跡	N-S	2.00	70 ~ 80	70 ~ 80	直形	なし	なし	中庭	中-6世紀	86
7区	S0103	中庭跡	N-S	2.40	60 ~ 65	60 ~ 65	直形	なし	なし	中庭	中-6世紀	86
	S0114	中庭跡	N-S	2.00	200 ~ 300	200 ~ 300	直形	中庭跡	S0123・S0202より直	中庭	中-6世紀	86
T2	S0202	中庭跡	E-W	2.40	35	35	直形	なし	なし	中庭	中-6世紀	86
	S0203	中庭跡	N-S	2.00	80	80	直形	なし	なし	中庭	中-6世紀	86
T3・4・5	S0204	中庭跡	N-S	2.00	90	90	直形	なし	なし	中庭	中-6世紀	86
	S0205	中庭跡	N-S	2.00	70 ~ 90	70 ~ 90	直形	なし	なし	中庭	中-6世紀	86
T3・4・5	S0206	中庭跡	N-S	2.00	280	280	直形	なし	なし	中庭	中-6世紀	86
	S0210	中庭跡	N-S	9.20	220 ~	220 ~	直形	なし	なし	中庭	中-6世紀	86
T3・4・5	S0210	中庭跡	N-S	14.00	1020 ~ 1300	1020 ~ 1300	直形	なし	なし	中庭	中-6世紀	86

第 11 表 遺構観察表 (9) その他の遺構

区	遺構名	位置	幅 (cm)	長さ (cm)	断面 (cm)	構造形状	山上遺物	遺留物	備考	時期	図
2区	SX115	東向儀柱	幅不明	150	200	幅不明	直形	なし	S012 土師焼物群?	中-6世紀	22
	SX142	東向儀柱	幅不明	460	200	27	直形	木製品	S0135 土師焼物群、S0136・SXI43より直	中-6世紀	22
3区	SX143	東向儀柱	幅不明	600	200	64	直形	土師器・木製品・木材	S0136 土師焼物群、S0139・SXI43より直	中-6世紀	22
	SX145	東向儀柱	幅不明	1050	65 ~ 100	8 ~ 20	直形	なし	SX46より直、S015・S016・S027より直	中-6世紀	26
4区	SX103	東向儀柱	幅不明	60	30	22	直形	なし	なし	(B) 36	36
	SX104	東向儀柱	幅不明	45	30	21	直形	なし	なし	(B) 36	36
4区	SX134	東向儀柱	幅不明	50	50	7	直形	なし	なし	(B) 36	36
	SX134	東向儀柱	幅不明	50	50	7	直形	なし	なし	(B) 36	36
5区	S002	中庭跡	幅不明	70	50	21	直形	直造跡・板石	なし	(B) 75	75
	S003	中庭跡	幅不明	68	68	37	直形	土師器	SX181より直	(B) 75	75
5区	S004	中庭跡	幅不明	87	87	29	直形	なし	なし	(B) 75	75
	S006	中庭跡	幅不明	80	80	27	直形	土師器	S002より直	(B) 75	75
5区	S009	中庭跡	幅不明	82	82	47	直形	土師器	S002より直	(B) 75	75
	S010	中庭跡	幅不明	70	70	28	直形	土師器	S008より直	(B) 75	75
5区	S017	中庭跡	幅不明	73	73	27	直形	土師器	S008より直	(B) 75	75
	S022	中庭跡	幅不明	80	80	27	直形	土師器・直造跡・中庭跡	S008より直	(B) 75	75
6区	SX1	中庭跡	幅不明	1300	300	2 ~ 14	直形	土師器・ロウロの上縁部	SX147より直	(B) 81	81
	SX10	中庭跡	幅不明	134	52	5 ~ 28	直形	なし	なし	(B) 81	81

第5章 自然科学的分析

第1節 放射性炭素年代 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

1. 測定対象試料

西屋敷遺跡は、宮城県刈田郡蔵王町大字小村崎字西屋敷(北緯 38° 7' 33", 東経 140° 41' 19") に所在し、円田盆地北西部の低平な舌状丘陵上に立地する。測定対象試料は、SX63 焼成遺構出土木炭(試料 21: IAAA-103296)、SX65 焼成遺構出土木炭(16: IAAA-103297)、SX66 焼成遺構出土木炭(17: IAAA-103298、18: IAAA-103299)、SX71 焼成遺構出土木炭(19: IAAA-103300、20: IAAA-103301)の合計6点である(第12表)。

2. 測定の意義

測定対象試料が出土した遺構を含め、SX62・63・65・66・69-72 焼成遺構は西小屋館跡西側に隣接する本遺跡5区中央部でまとまって確認された。隅丸方形の掘り込みを持ち、壁面が被熱により赤色硬化し、底面に炭化物層が堆積しており、木炭焼成施設と考えられる。これらの遺構の年代を明らかにすることで、遺跡の性格を考察する材料とする。

3. 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸(HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「Aa」と第12表に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C) を生成させる。

- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4. 測定方法

3MV タンデム加速器(NEC Pelletron 9SDH-2) をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置を使用し、¹⁴C の計数、¹³C 濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C 濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST) から提供されたシュウ酸(HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 算出方法

- (1) δ ¹³C は、試料炭素の ¹³C 濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰) で表した値である(第12表)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ¹⁴C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C 年代は δ ¹³C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第12表に、補正していない値を参考値として第13表に示した。¹⁴C 年代と誤差は、下1桁を四捨五入して10年単位で表示される。また、¹⁴C 年代の誤差(±1σ) は、試料の ¹⁴C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ¹⁴C 濃度の割合である。pMC が小さい (¹⁴C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (¹⁴C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この場合も δ ¹³C によって補正が必要があるため、補正した値を第12表に、補正していない値を参考値として第13表に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差(1σ=68.2%)あるいは2標準偏差(2σ=95.4%)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ¹⁴C補正を行い、下一桁を四捨五入しない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース(Reimer et al. 2009)を用い、OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第13表に示した。暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

6. 測定結果

試料の¹⁴C年代は、SX63 焼成遺構堆積土出土木炭試料 21 が 350 ± 30yrBP、SX65 焼成遺構堆積土下層出土木炭 16 が 360 ± 30yrBP、SX66 焼成遺構堆積土上層出土木炭 17 が 440 ± 30yrBP、同堆積土下層出土木炭 18 が 310 ± 30yrBP、SX71 焼成遺構堆積土出土木炭 19 が 460 ± 30yrBP、同堆積土上層出土木炭 20 が 390 ± 30yrBP である。SX66 焼成遺構の2点の値には年代差が認められ、層位の上下関係と逆転している。SX71 焼成遺構の2点の値は誤差(±1σ)の範囲でわずかに重ならないもの、ある程度近接した年代値である。暦年較正年代(σ)は、試料 21 が 1478 ~ 1628cal AD の間に2つの範囲、16 が 1471 ~ 1625cal AD の間に3つの範囲、17 が 1433 ~ 1460cal AD の範囲、18 が 1521 ~ 1642cal AD の間に2つの範囲、19 が 1428 ~ 1448cal AD の範囲、20 が 1447 ~ 1615cal AD の間に2つの範囲で示される。

なお、一般に木炭を試料とする場合、もとの樹木の最外年輪より内側に当たる試料が測定されると、樹木の枯死・伐採年よりも古い年代値を示す可能性があることを考慮する必要がある。

試料の炭素含有率はすべて50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

第12表 試料一覧および¹⁴C年代

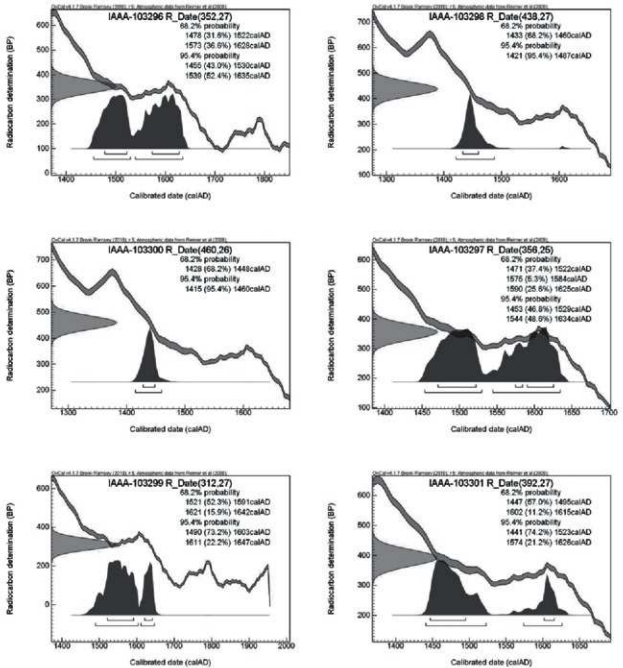
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ¹⁴ C (‰) (AMS)	δ ¹⁴ C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-103296	21	SX63 焼成遺構 堆積土	木炭	AaA	-27.39 ± 0.50	350 ± 30	95.70 ± 0.32
IAAA-103297	16	SX65 焼成遺構 堆積土下層	木炭	AAA	-29.27 ± 0.66	360 ± 30	95.66 ± 0.31
IAAA-103298	17	SX66 焼成遺構 堆積土上層	木炭	AaA	-24.61 ± 0.36	440 ± 30	94.69 ± 0.32
IAAA-103299	18	SX66 焼成遺構 堆積土下層	木炭	AAA	-26.86 ± 0.47	310 ± 30	96.18 ± 0.33
IAAA-103300	19	SX71 焼成遺構 堆積土	木炭	AAA	-22.67 ± 0.55	460 ± 30	94.42 ± 0.31
IAAA-103301	20	SX71 焼成遺構 堆積土上層	木炭	AaA	-28.00 ± 0.52	390 ± 30	95.23 ± 0.32

[#4215]

第13表 ¹⁴C年代と暦年較正年代

測定番号	δ ¹⁴ C 補正なし		暦年較正年代 (yrBP)	1σ 暦年代範囲		2σ 暦年代範囲	
	Age (yrBP)	pMC (%)		1478calAD - 1628calAD (31.6%)	1573calAD - 1628calAD (36.6%)	1455calAD - 1530calAD (43.0%)	1539calAD - 1635calAD (52.4%)
IAAA-103296	390 ± 30	95.23 ± 0.30	352 ± 27	1471calAD - 1522calAD (37.4%)	1575calAD - 1584calAD (5.3%)	1453calAD - 1529calAD (46.8%)	1544calAD - 1634calAD (48.6%)
IAAA-103297	430 ± 20	94.82 ± 0.28	356 ± 25	1590calAD - 1625calAD (25.6%)	1428calAD - 1448calAD (68.2%)	1415calAD - 1460calAD (95.4%)	
IAAA-103298	430 ± 30	94.77 ± 0.32	438 ± 27	1433calAD - 1460calAD (68.2%)	1490calAD - 1603calAD (73.2%)	1415calAD - 1460calAD (95.4%)	
IAAA-103299	340 ± 30	95.82 ± 0.31	312 ± 27	1602calAD - 1642calAD (15.9%)	1447calAD - 1495calAD (57.0%)	1441calAD - 1523calAD (74.2%)	
IAAA-103300	420 ± 30	94.88 ± 0.30	460 ± 26	1428calAD - 1448calAD (68.2%)	1602calAD - 1615calAD (11.2%)	1574calAD - 1626calAD (21.2%)	
IAAA-103301	440 ± 30	94.64 ± 0.30	392 ± 27				

[参考値]



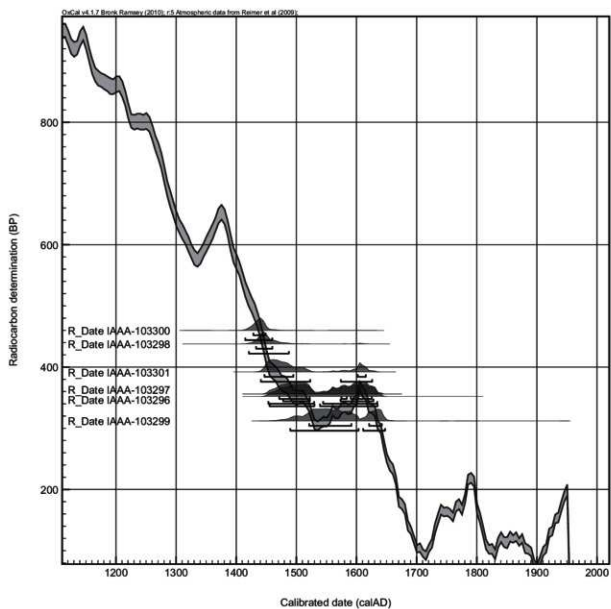
第 91 図 [参考] 暦年較正年代グラフ

文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363.

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360.

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150.



第92図 [参考] 暦年較正年代グラフ (カーブプロット図)

第6章 考 察

第4章で記載した本遺跡の発掘調査結果と第5章で記載した自然科学的分析結果を踏まえて、あらためて遺構と遺物について検討を加え、遺構の時期と変遷、遺跡の性格などについて考察する。

第1節 遺物の特徴と編年的位置づけ

遺物は主に井戸跡、土坑、溝跡などの遺構から出土し、中世陶磁器、近世陶磁器、ロクロ土師器、土師器、須恵器、かわらけ、瓦質土器、木製品、金属製品、弥生土器、石器などがある。まとまった出土状況を示す遺構は限られていることから、ここでは中世陶器・ロクロ土師器・土師器について遺構ごとに検討を加える。

1. SE45 井戸跡

ロクロ土師器環、須恵器環が出土している（第32図）。ロクロ土師器環は体部が内湾し、口縁部がわずかに外反するもの、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部がそのまま外傾するもの、体部が内湾し、口縁部が内湾気味に外傾するものがある。いずれも内面に黒色処理を施す。いずれも底部の切り離しは回転糸切りで、外面の体下部に手持ちヘラケズリ調整を施す。切り離し後の外底面には手持ちヘラケズリ調整を施すものと、再調整を施さないものがある。須恵器環は体部が内湾気味に外傾し、口縁部が外反する。回転糸切りによる底部の切り離し後は再調整を施さない。

ロクロ土師器環は表杉ノ入式（氏家 1957）の範疇に含まれる。村田晃一氏（1994）による編年では1-3群土器段階（8世紀第4四半期-9世紀第3四半期）、柳澤和明氏（1994）による編年では9世紀第2四半期-第3四半期頃に位置づけられる。須恵器環は柳澤編年で9世紀中葉頃の基準資料とされている多賀城跡SK2167土坑（宮城県多賀城跡調査研究所 1992）、9世紀第3四半期に位置づけられている石巻市須江窟跡群の関ノ入遺跡28号窟跡（河南町教育委員会 1993）、仙台市台原・小田原窟跡群の堤町窟跡B地点1号土坑（仙台市教育委員会 1982）などに類例が見られる。以上のことから、本遺構出土土器は9世紀中頃（平安時代前葉）に位置づけられるものと考えられる。

2. SE85 井戸跡

ロクロ土師器環、須恵器壺が出土している（第64図）。ロクロ土師器環は体部が内湾し、口縁部がそのまま外傾する。内面に黒色処理を施す。底部の切り離しは回転糸切りで、外面の体下部に手持ちヘラケズリ調整を施す。切り離し後の外底面には手持ちヘラケズリ調整を施すものと、再調整を施さないものがある。須恵器壺は短い高台を持つ底部破片である。

資料数が少ないため具体的な年代の検討は難しいが、SE45井戸跡出土土器と共通する特徴を持つことから、本遺構出土土器についても9世紀中頃（平安時代前葉）に位置づけられる可能性が考えられる。

3. SK89 土坑

ロクロ土師器環がややまとまって出土している（第67図）。体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部がそのまま外傾するもの、体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部が外反気味に外傾するもの、体部が内湾し、口縁部が直線的に外傾するもの、体部から口縁

部にかけて内湾するものがある。いずれも内面に黒色処理を施す。底部の切り離しが回転系切りで、切り離し後に外面の体下部～底部に手持ちヘラケズリ調整を施すものが主体で、ヘラ切り?による切り離し後に体下部～底部に回転ヘラケズリ調整を施すものもある。また、直立気味の短い高台をもつ須恵器長頸瓶または壺の底部破片がある。

ロクロ土師器環は表杉ノ入式(氏家 1957)の範疇に含まれる。村田晃一氏(1994)による編年では2-3群土器段階(9世紀第1四半期後半～第3四半期)、柳澤和明氏(1994)による編年では9世紀第2四半期～第3四半期頃に位置づけられる。また、須恵器が共存しているSE45出土土器とも共通する特徴が見られる。以上のことから、本遺構出土土器は9世紀中頃(平安時代前葉)に位置づけられるものと考えられる。

4. SD4a・b 溝跡

中世陶器皿・鉢・壺・甕が出土している(第84・93図)。いずれも破片で全体の器形が明らかでない。壺・皿は古瀬戸産の可能性が考えられ、皿(折縁皿)の形態は14世紀前半頃に位置づけられているものと類似する。甕は断面L字形の受口状口縁で幅2cm弱の狭い口縁縁部を持ち、SD57 堀跡出土中世陶器と共通する特徴を持つ。このことから、本遺構出土中世陶器については13世紀後半～14世紀前半頃(鎌倉時代後半～南北朝時代前半)に位置づけられるものと考えられる。

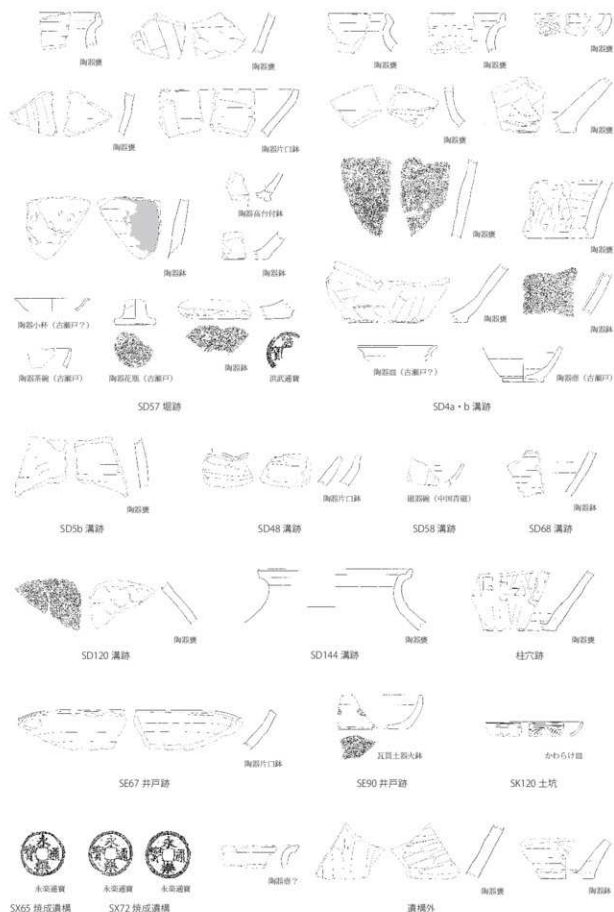
5. SD57 堀跡

中世陶器小杯・茶碗・花瓶・片口鉢・鉢・高台付鉢・甕、陶器碗・鉢類が出土している(第70・93図)。いずれも破片で全体の器形が明らかでない。小杯は内外面に灰釉が見られ、体部が内湾し口縁端部が外反する。茶碗は内外面に鉄釉が見られ、口縁部外面が緩やかに屈曲する。花瓶は中実棒状の脚部で外面に鉄釉が見られ、底面に回転系切り痕がある。甕は断面L字形の受口状口縁で幅2cm弱の狭い口縁縁部を持つ。鉢は体部が直線的に外傾し、口縁部付近に緩やかな屈曲を持つ。

鉢・甕の口縁部形態は白石市白石古窯跡群の一本杉窯跡群(宮城県教育委員会 1996)に類似が見られ、赤羽一郎・中野晴久両氏(1995)による愛知県知多市常滑窯跡群の編年では5型式期(1220-1250年)に位置づけられているものと類似する。甕・壺・片口鉢などを在地で生産した一本杉窯跡群では甕の口縁部形態などが常滑編年5-6a型式期に類似することから、操業年代は13世紀後半頃と考えられている。また、茶碗・花瓶は古瀬戸産の天目茶碗・仏花瓶と考えられ、小杯についても古瀬戸産の可能性もある。藤澤良祐氏(2005)による古瀬戸編年では、天目茶碗の口縁部形態は14世紀中頃～15世紀前半、仏花瓶の脚部形態は14世紀前半頃に位置づけられているものと類似する。以上のことから、本遺構出土中世陶器は13世紀後半～15世紀前半頃(鎌倉時代後半～室町時代前半)に位置づけられるものと考えられる。

6. SD107 溝跡

土師器環・高坏・甕、須恵器高台付環が出土している(第19図)。土師器環は有段丸底環で内面に黒色処理を施すものと、内面がヨコナデ調整で仕上げられ、黒色処理を施さないもの、無段丸底環で内面がヨコナデ調整で仕上げられ、黒色処理を施さないものがある。内面に黒色処理を施す有段丸底環は平底風の丸底で外面の体部下端に段を持ち、口縁～体部が内湾気味に外傾する。内面がヨコナデ調整で仕上げられるもののうち、有段丸底環は平底風の丸底で口径に占める底径の割合が大きい盤状を呈する。外面の体部下端に段を持ち、口縁～体部が内湾気味に外傾する。無段丸底環は体部が内湾し、口縁部が直立気味に外反する。高坏は脚部が八字状に開く。甕は頸部が直立し、口縁部が外傾する。外面の胴部にハケメ調整を施し、頸部に段を持たない。須恵器環は八字状に開く短い高台を持ち、体部が内湾し口縁部が外傾する。



第93図 中世の出土遺物

陶器類：S-1/6 古銭：S-1/2

土師器環・高環・襷は栗園式-国分寺下層式(氏家 1957、桑原 1976)の範疇に含まれる。環は村田晃一氏(2007)による宮城県中・南部の編年で環Bとされた有段丸底環に該当し、形態的特徴から村田編年5-6段階(7世紀末-8世紀前半)との共通性が高い。高環は村田編年5段階(7世紀末-8世紀初頭)で消失するとされている。須恵器高台付環は色麻町日の山窟跡C地点第2号竪穴住居跡(色麻町教育委員会 1993)、いわき市五反田A遺跡3号竪穴住居跡(いわき市教育委員会 1999)などに類例が見られ、8世紀第1四半期に位置づけられている。以上のことから、本道構出土土器は7世紀末-8世紀初頭頃(飛鳥時代終末-奈良時代初頭)に位置づけられるものと考えられる。

また、内面がヨコナデ調整で仕上げられる土師器環は在地の土師器と異なる製作技法あるいは形態的特徴を有するものであり、外來の土師器と考えられる。有段丸底環は在地の栗園式を基調とした形態であるが、内面がヨコナデ調整で仕上げられ、東北地方に伝統的なヘラミガキ調整→黒色処理技法を用いない。こうした調整技法は在地の栗園式には認められないものであり、関東地方の当該期土師器に特徴的である。深身の半球形を呈する無段丸底環は在地の栗園式には認められない形態である。銅鏡などの金属器を模倣したものと考えられ、関東地方に広く分布する。同様の特徴を持つ土師器は蔵王町十郎田遺跡(蔵王町教育委員会 2011d)、六角遺跡(蔵王町教育委員会 2006)、魁の内遺跡(蔵王町教育委員会 1997)などに類例が見られる。これらの多くは仙台平野以北で広く認められ、東関東から北関東地域に出自が求められる関東系土師器とは異なる特徴を持つ。福島県本宮市高木遺跡(福島県教育委員会 2002)などにも類例が見られるが、関東地方の中で特定の地域の土師器と個別に比定ができないものであり、円田盆地北部の7世紀後半-8世紀前半の集落跡に特徴的な関東系土師器の一例と考えられる。

第2節 遺構の特徴と機能時期

確認した遺構は掘立柱建物跡43棟、柱列跡26条、井戸跡8基、土坑33基、堀跡1条、溝跡62条、水溜め状遺構4基、焼成遺構13基、性格不明遺構2基、柱穴多数である。これらの遺構について、第1節で検討した出土遺物の年代と、出土炭化物の放射性炭素年代、および各遺構の新旧関係などから機能時期を推定し、その性格について検討する。

1. 区画施設の様相と機能時期

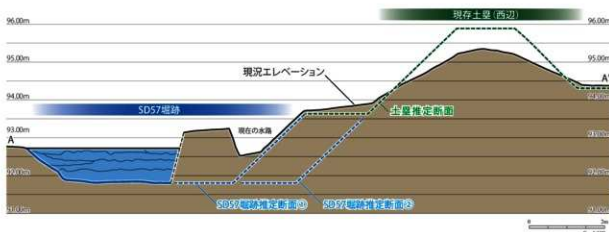
(1) SD4a・4b・SD5a・5b・6・7溝跡

5区-6区東部で確認したSD4a・b溝跡(第94図)は、出土遺物の特徴から13世紀後半-14世紀前半頃(鎌倉時代後半-南北朝時代前半)に機能したと考えられる。東西方向に直線的に約40m延び、両端がそれぞれ110°の角度で南へ折れる。東辺は約20m、西辺は約40mを確認した。上幅90-150cm、底幅35-70cmで横断面形が深さ最大72cmの逆台形または椀形を呈する。SD4b溝跡は北辺と東辺の接続部の底面に土橋状の高まりを持ち、標高の高い北辺の水位を調節する堰状施設と考えられる。溝が水溜として機能したと考えられることと、溝によって区画された範囲に掘立柱建物跡が濃密に分布することから、掘立柱建物跡群を中心に構成される屋敷地を区画した区画溝と考えられる。

SD4a・b溝跡と平行するSD5a・5b・6・7溝跡(第94図)についても同様の性格を持つものと考えられ、SD5b・6溝跡では北辺と東辺の接続部の底面にSD4b溝跡と同様の堰状施設が確認されている。重複関係から、区画の形成(SD5a)→西側拡張(SD5b)→西・北側縮小(SD6)→北側縮小(SD7)→西・北側拡張(SD4a)→掘り直し(SD4b)という複雑な変遷をたどったことが確認できる。区画施設内の掘立柱建物跡群についても重複が著しいことから、区画施設の改変に伴って内部の施設群についても再配置・改修が加えられたことが窺われる。

(2) SD57・SD301 堀跡

5区で確認したSD57堀跡(第94図)からは、13世紀後半頃と考えられる中世陶器のほか、14世紀前半~15世紀前半頃と考えられる古瀬戸産陶器、14世紀後葉以降に流通した洪武通寶が少数出土している。少数の出土遺物から堀跡の機能時期を推定することは難しいが、現状では出土遺物の年代観から13世紀後半~15世紀前半頃(鎌倉時代後半~室町時代前半)と考えておきたい。堀跡は西小屋館跡西辺土塁の西側裾部に平行して、北西から南東方向に直線的に46m延び、両端でコーナー部を確認した。幅4m以上で横断面形が深さ最大94cmの逆台形を呈する。また、西小屋館跡南部の遺構確認調査区では幅4.1m以上でやや蛇行しながら小溜池付近から東に65m以上延びるSD301堀跡(第94図)を確認した。



第94図 西屋敷遺跡・西小屋館跡の区画施設(土塁測量図:吉井1994を合成)

西小屋館跡について、『小村崎村 風土記御用書出』は志津戸(摩)信濃守の家臣村上左近が館主であると記している。現在西小屋館跡の北側に居を構える奥平家は村上氏末裔とされ、村上氏に関わる知行安堵状ほか(奥平家文書)が伝えられている(小柴ほか 1987)。また、『磐城国刈田郡地誌』は現在の西屋敷が西屋敷・牛館屋敷の二つの地名に分かれていたことを記しており、土塁が現存するのはこのうち北半の西屋敷側である。周辺には館前・館脇・館東・館東脇・堀の内といった城館に関わる可能性のある地名が残されている(鹿島 1993)。

西小屋館跡に現存する土塁については、東北福祉大学によって現存土塁周辺の測量調査が行なわれており、現存幅 7-10m、比高差 1-3m の規模が明らかにされた(第 94 図)。土塁は西辺約 45m、北辺約 90m が残存し、約 105° の角度でく字形に屈曲する。北辺土塁の外側には幅 5m 程度の窪地が確認され、堀跡の痕跡と考えられている。また、西辺土塁南端部の延長上に小溜池を挟んで南へ約 20m、く字形に屈曲して東へ約 100m、さらにく字形に屈曲して北東へ 40m 延びる幅 10-20m の帯状の水田部分の標高は館跡内部の畑地よりも 40-100cm 低く、小溜池付近で屈曲して館跡南部を区画した堀跡と推定されている。こうした現存土塁や堀跡と推定される痕跡の位置関係から、西小屋館は一町(約 109m)前後を基準として、やや変形した五角形に近い平面形を呈する縄張りを持つ方形館跡と考えられ、「方一町の地頭館」の可能性が指摘されている(吉井 1994)。

SD57 堀跡は横断面形が逆台形の整った形状で、西小屋館跡西辺土塁に沿って延びることから館跡西辺を区画した堀跡と考えられる(第 94 図)。南端部で確認したコーナー部は、小溜池付近で堀跡が屈曲するとして上述の吉井宏氏の推定を裏付けるものと考えられる。また、SD57 堀跡と西辺土塁の横断面(第 94 図)から、①左右非対称な断面形を示す現在の水路が堀の一部である可能性と、②土塁裾から堀底まで一連の斜面を形成していた可能性が考えられる。前者の場合、堀幅は 7.5m 程度と推定され、土塁裾と堀との間に幅 2.0m 程度の犬走り状のステップを形成することになる。後者の場合、堀幅は 9.5m 程度となる。土塁周辺の地形はあまり大きな変化を受けていないと推定されることから、前者の可能性が高いと考えられる。土塁は堀の掘削土で構築された可能性が考えられるが、現存土塁は西辺よりも北辺でより大規模となり、高さ 3m に達する。周辺の地形は北西から南東方向に傾斜しており、水堀としての機能を確保するために北辺でより深く掘削された可能性が考えられるであろう。

館跡南部で確認した SD301 堀跡についても、堀跡の一部と考えられる(第 94 図)。ただし、館跡西辺を区画したと考えられる SD57 堀跡は平面プランが直線的で断面逆台形となる整った形状であるのに対して、確認した大溝跡の平面プランは幅が一定せず、やや蛇行するという異なった特徴が見られた。遺構確認面が削平面であることや館跡内部との連続的な断面観察を行っていないため不明点が多いものの、堀跡が後世に水田として利用される過程で何らかの造成が行なわれ、堀底面の深部のみが残存した可能性も考えられる。また、SD301 堀跡の確認面は西辺土塁に沿って確認した SD57 堀跡の底面とほぼ同じか低い。SD301 堀跡については掘り下げを行っていないため底面の標高は不明であるが、丘陵頂部に近い館跡北半(SD57)と丘陵裾部の南半(SD301)で堀の底面および水面の標高が異なっていたと考えられる。このことから、SD57 堀跡と SD301 堀跡との間は、堀の水位調節を行なう環状の施設を介して接続されていた可能性が考えられる。

2. 掘立柱建物跡の特徴と機能時期

掘立柱建物跡は 43 棟を確認した。3 区東部-4 区北部、6 区東部、5 区中央-北部、5 区南部にそれぞれまとまって分布する。5 区では重複が著しく、固定的な土地利用の中で建て直しが繰り返されたことを示している。確認した掘立柱建物跡は柱穴の規模・形状と建物の構造、分布状況などから以下に述べるように A 群・B 群に分類できる。

(1) 掘立柱建物跡A群

4区北部のSB31・SB47、6区東部のSB3・SB26掘立柱建物跡がある。これらは柱穴規模がやや大型で平面形が隅丸方形を基調とする。建物の主軸方向は4区でN-11-12°W、6区でN-3-4°Wである。なお、SB31掘立柱建物跡南西側の調査区壁で確認した2基の柱穴(写真図版8-6)についても同様の特徴を持つことから、周辺に複数の掘立柱建物跡が分布していると見られる。遺物はSB26掘立柱建物跡の柱穴掘方埋土などからロクロ土師器環、須恵器裏が出土していることから、建物の機能時期は平安時代と考えられる。平安時代の遺構で機能時期が明らかなものとしては4区SE45井戸跡、5区SE85井戸跡、SK89土坑があり、いずれも9世紀中頃と考えられる。これらの遺構と掘立柱建物跡A群の分布はある程度一致することから、掘立柱建物跡A群の機能時期についても9世紀中頃(平安時代前葉)と考えられる。

(2) 掘立柱建物跡B群

A群に分類されない掘立柱建物跡である。これらは柱穴規模が中～小規模なものが主体で平面形が円形を基調とする。廂(縁)を付設するものが見られる。3区東部-4区北部に5棟、5区北部13棟、5区中央部に6棟、5区南部に13棟がそれぞれまとまって分布する。これらの分布域では組み合わない柱穴跡が多数確認されており、周辺にさらに多くの掘立柱建物跡が分布していると見られる。遺物は柱穴掘方埋土などから土師器・ロクロ土師器・須恵器が出土しているが、いずれも微小な破片で混入の可能性を排除できない。5区の組み合わない柱穴跡からは中世陶器裏の破片が出土している。

建物の主軸方向は5区北部・中央部でN-10°W前後のものが多く、これらは5区-6区東部のSD4a・4b・SD5a・5b・6・7溝跡で形成される区画の北辺とほぼ方向を合わせ、東側を区画するSD57堀跡と重複関係を持たない。このことから、5区北部・中央部の掘立柱建物跡の多くはSD4a・4b・SD5a・5b・6・7溝跡で形成される区画や、SD57堀跡で区画される西小屋館跡と同時に機能していたと考えられる。なお、5区中央部のSB163・SB178掘立柱建物跡は主軸方向がN-10-18°Eと上述の区画とは無関係の方向を示し、東側に展開してSD57堀跡に壊されていることから、これらの区画が形成される以前に機能していたと考えられる。また、区画との関係は不明であるが、5区南部の掘立柱建物跡は主軸方向がN-7°E前後のものが多く。

このように、掘立柱建物跡B群については重複関係が著しいことや、主軸方向、溝跡・堀跡で形成される区画との位置関係・前後関係、などから複数時期にわたって機能したことが窺われるが、区画と同時に機能したものが主体的と考えられる。区画を形成する溝跡は13世紀後半-14世紀前半頃、堀跡は13世紀後半-15世紀前半頃と考えられることから、掘立柱建物跡B群の機能時期についても13世紀後半-15世紀前半頃(鎌倉時代後半-室町時代前半)を中心とした時期と考えられる。

3. 井戸跡の構造と構築方法

井戸跡は8基確認した。このうち出土遺物の特徴から機能時期の明らかなものはSE45・SE85井戸跡があり、9世紀中頃(平安時代前葉)と考えられる。また、中世陶器・石白などが出土しているSE61・SE67井戸跡は出土遺物の特徴と遺構配置から中世と考えられる。

(1) SE45井戸跡

井戸側は厚さ5-7cmの丸太削り抜き材で構築しており、内寸で平面形が直径30-44cmの略円形を呈する。残存高は43cmである。掘方底面を5cmほど平坦に埋め戻した後に井戸側を設置しており、水溜め部は持たない。井戸側は一木の丸太を素材としているが、削り貫きの作業は不均等に四分割した上で行なわれている。井戸側材をあらかじめ縄などで結束した痕跡は確認されないことから、井戸掘方内で各部材を組み上げたと考えられる。これらの井戸側材を組み合わせて設置した接合部には、外側から板材と河原石で目止めと固定を施した上で掘方埋土を施している。接合部のうち2か所は板材、1か

所は礫、1か所は礫と板材で閉塞されている。礫は掘方の壁に接しており、井戸側材の位置を決め固定する役割も兼ねていたと考えられる。接合部の閉塞に用いられている板材はいずれも柵目板で、長さ22.0-40.5cm、幅10.5-16.5cm、厚さ1.6-3.1cmである。礫はいずれも磨石の転用品である。

井戸側材の残存状況から、SE45井戸跡は丸太分割割り貫き井戸と考えられる。丸太割り抜き井戸は、日本では弥生時代中期以降、古代を通じて構築され、一部は中世まで認められる。弥生時代中期初めに出現した一木割り貫きのものが古代以降減少傾向にあったのに対して、やや遅れて中期後半に出現する分割割り貫きのものは古代に増加するという(鐘方2003)。

丸太分割割り貫き井戸は多賀城市山王遺跡千刈田地区SE504井戸跡(10世紀前半、多賀城市埋蔵文化財調査センター1991)、同多賀前地区SE1434・SE2267井戸跡(9世紀中葉、宮城県教育委員会1995)、市川橋遺跡城南地区SE2132井戸跡(9-10世紀前葉、多賀城市教育委員会2004)などで確認されている。山王遺跡SE1434・SE2267井戸跡などは、側材が内側に押し出されるのを防ぐ目的とみられる横木が側材同士の接合部に取り付けられている。市川橋遺跡SE2132井戸跡はこうした横木を持たず、分割した側材の接合部を外側から板材で閉塞するもので、SE45井戸跡の構築方法と類似している。

(2) SE85 井戸跡

井戸側は平面形が隅丸方形となる掘方中位の段に板材を桁状に設置しており、横板を積み上げて構築されていたと考えられる。木材の劣化が著しく、仕口形状は不明であるが、東・南・西辺は原位置に近い状態を留めていると考えられ、内寸で平面形が一辺77-80cmの方形を呈する。東辺の板材は両木口が斜めに整形されており、東・西辺の板材の両端が南辺の板材よりも長く張り出していることから、相欠き仕口型であった可能性が考えられる。側板は最下段の一段分のみが残存し、東・南・西辺は板目材である。北辺は柵目材で残存長も短いことから最下段を構成するものではなかった可能性がある。他に側内堆積土中から板目板1点、柵目板4点が出土している。また、木材は残存していなかったが、掘方の南西・北西隅に平面半円形の凹部があり、井戸側支柱の痕跡の可能性が考えられる。井戸側が設置された段より下部の掘方は平面形が長軸73cm、短軸63cmの略円形、断面形は深さ55cmの逆台形を呈し、水溜め部として機能したと考えられる。

井戸側材の残存状況から、SE85井戸跡は積み上げ式横板組み井戸と考えられる。積み上げ式井戸は、桶状木製品や土器を使用したものが弥生時代中期以降に散見されるが、横板組みのものが本格的に普及するのは7世紀以降であり、13世紀頃まで構築された(鐘方2003)。

積み上げ式横板組み井戸は山王遺跡多賀前地区SE50(9世紀後葉)・SE3026井戸跡(10世紀前半代、宮城県教育委員会1995)、市川橋遺跡八幡地区SE6770井戸跡(9世紀第2四半期、宮城県教育委員会2009)、市川橋遺跡城南地区SE1672・SE1673・SE2149井戸跡(9-10世紀前葉、多賀城市教育委員会2004)などで確認されている。

4. SE45 井戸跡廃絶時の状況と祭祀

SE45井戸跡は廃絶後に人為的に埋め戻されており、側内の埋め戻し土(3層)下部からは完形のロクロ土師器環と須恵器環が重ねて伏せた状態で出土し、この直上から重さ12.7kgの大型の礫石器(石皿)が出土した。他に2点の環の周辺からロクロ土師器環の破片4点が出土した。また、底面からつけ木2点と桃核などが出土した。土層堆積と遺物出土状況から、つけ木と桃核などは井戸の機能時または廃絶直後に、2点の環と石皿は廃絶後の埋め戻しの初期段階で入り込んだものと考えられる。

井戸跡の底面付近での遺物の出土例を見ると、山王遺跡SE504井戸跡(10世紀前半)では井戸側内の底面付近から斎串12点、櫛2点、立体人形1点などが出土している。蔵王町窪田遺跡SE113井戸跡(7世紀末-8世紀前葉)では底面で略完形の土師器甕1点、SE22井戸跡(中世前半)では底面付近で鉄鎌2点、

曲物3点が出土している（蔵王町教育委員会 2011b）。こうした事例は多岐に及ぶが、出土した遺物が井戸の構築から廃絶に至る過程のどの段階に帰属するものか不明な場合が多い。

大阪府高槻市嶋上部衝跡6-J・K・N・O地区井戸跡（平安時代中頃）では、石組の井戸側内の底面から墨書のある土師質土器皿2点、斎串1点、柘櫛の破片20点、桃核13点、つけ木1点などが出土している（高槻市教育委員会 1981）。これらは遺物を多く含む井戸機能時の堆積層に覆われていることから、井戸を新しく構築した際の祭祀に関わって納められたものと考えられている（水野 1981）。

SE45井戸跡と嶋上部衝井戸跡では、いずれも井戸側内の下層で2点の環（皿）やつげ木、桃核などが出土している点で共通し、井戸祭祀に関わって納められたものと考えられる。ただし、嶋上部衝井戸跡では井戸構築時の祭祀と推定されるのに対して、SE45井戸跡ではつけ木と桃核については井戸機能時の可能性もあるが、少なくとも2点の環と石皿は井戸廃絶時の祭祀であったと考えられる。井戸祭祀については、①構築時、②機能時、③機能終了時（廃絶時）の三段階での祭祀が想定可能であり（鐘方 2003）、SE45井戸跡は井戸廃絶時における祭祀の一例と考えられる。

5. 焼成遺構の性格と機能時期

焼成遺構はA類8基（SX62・63・65・66・69・70・71・72）とB類5基（SX40・43・44・52・134）に分類できる。A類は5区中央部の東西5m、南北8mほどの範囲に集中的に分布している。平面形が一边68-87cmの隅丸方形を呈し、断面形が深さ27-37cmの箱形・逆台形・U字形を呈する。底面は平坦で、壁面に被熱による赤色硬化が認められる。壁面最下部と底面に赤色硬化は認められず、底面直上に炭化した草本植物遺体を多量に含む炭化物層が形成されている。炭化物層は機能時の堆積層と考えられ、廃絶後は人為的に埋め戻されている。B類は4区中央部に4基、5区南部に1基が分布する。平面形が長軸45-70cm、短軸35-50cmの不整形・楕円形を呈し、断面形が深さ7-22cmの皿形・逆台形を呈する。底面は掘方埋土で構築されており、皿状を呈する。底面に赤色硬化は認められず、炭化物層が形成されている。炭化物層は機能時の堆積層と考えられ、焼土ブロック・粒を含む場合がある。廃絶後は人為的に埋め戻されている。

焼成遺構A類は平面形が一边70-90cm程度の隅丸方形を呈し、底面直上に機能時の炭化物層を形成し、側壁部分のみが被熱により赤色硬化しているという特徴を持つ。これと類似する特徴を持つ遺構は栗原市大境山遺跡1-3・5・7・11・17・19・20・28・41-43号小竪穴遺構（瀬峰町教育委員会 1983）、岩石1遺跡第4次調査1号土坑（瀬峰町教育委員会 2004）、四ツ壇遺跡3号土坑（栗原市教育委員会 2006）、多賀城市柏木遺跡SX01・02特殊遺構（多賀城市埋蔵文化財調査センター 1989）などで確認されている。また、福島県新地町武井地区製鉄遺跡群（福島県教育委員会 1989など）で70基、南相馬市金沢製鉄遺跡群（福島県教育委員会 1995など）で700基以上が確認されている（飯村 2005）。これらはいずれも古代の遺構と推定されており、焼成実験の結果などから木炭焼成施設と考えられている（飯村 2005・安達 2006）。武井地区・金沢製鉄遺跡群では、炭化物の樹種がナラ・クスギを主体としてクリを多く含むことから鍛冶炭の可能性が示唆されている。また、四ツ壇3号土坑でも、隣接する1号住居の炉で鍛冶が行われていることから鍛冶炭を生産した施設と考えられている。これらの類例はいずれも古代のもので推定されており、後述するように中世後半と考えられる焼成遺構A類とは年代的な隔りがあるものの、特徴が極めて良く類似することからほぼ同様の機能を持つ施設であったと考えられる。

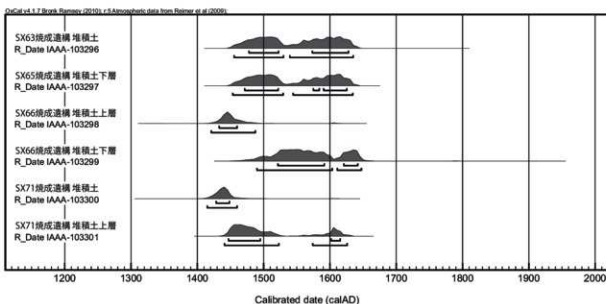
遺物はA類のSX63・66・72堆積土から土師器片、SX65・72堆積土から古銭（永楽通宝）、B類のSX43堆積土から土師器片、SX52堆積土から焼骨片が出土している。土師器片についてはいずれも小片であり、詳細な時期を特定できない。永楽通宝は15世紀後半以降に大量に流通し、寛永通宝が本格的

に鑄造される17世紀後半頃まで流通した銭貨である。

A類のSX63・65・66・71堆積土から出土した炭化物を試料として実施した放射性炭素年代測定（AMS測定、第5章第1節）の結果、 ^{14}C 年代は $310 \pm 30\text{--}460 \pm 30\text{yrBP}$ であり、各試料の ^{14}C 年代を基にした暦年較正年代は15世紀中葉～17世紀前葉の間に複数の範囲で示された（第95図）。測定結果には ^{14}C 年代の中央値で150年、暦年較正年代範囲で最大214年の開きがある。山田しょう氏（加速器分析研究所）のご教示によれば、福島県浜通り地方で多数確認されている古代の木炭焼成遺構についても相当数の放射性炭素年代測定が行なわれているが（福島県教育委員会2007など）、100～200年程度の測定値の開きは普通に見られ、同時に伐採された樹木の最外輪部の年輪を測定したと仮定した場合には埋没中の試料の劣化や分析時の誤差を考慮しても大きすぎるといふ。今回の測定試料が出土した木炭焼成遺構は近接して分布し、ほぼ同時期の所産と考えられることから、測定値の開きは、測定試料となった木炭がいずれも小片であり、樹木の様々な年輪の年代が測定されたためと考えられる。前述の福島県浜通り地方の事例についても、このようないわゆる「古木効果」（注：樹木は年輪ごとに形成時の炭素情報が記録されていくため、樹皮側の最外輪部が伐採・死滅時の炭素年代を示し、芯部に近づくにつれて古い年代を示す。また、伐採・死滅から使用・廃棄までの間に貯木・再利用などを経た場合、炭素年代が使用された年代よりも古い値を示す）が原因として考えられるという。

近世以降の里山管理のあり方から、一般に燃料となる薪は、樹木の萌芽更新を繰り返すことによって得られた小径木が中心であったと考えられている。こうした伝統的な樹木の利用形態は合理的であり、近世以前にも行なわれていた可能性は高いと考えられるが、日常的な生活行為としての煮炊きなどで火を使用する場合と、ある程度組織的な生産行為として焼成を行なう場合とでは、燃料となる薪や炭材の調達の方法が異なっていた可能性も考えられる。前述の福島県浜通り地方の事例や今回の測定結果からは、木炭生産において100年以上の樹齢を持つ樹木が伐採されて炭材として利用された可能性を考察することが可能であり、古代～中世の木炭生産における樹木利用形態の一端を示すものと考えられる。

以上のことから、A類の機能時期については永楽通宝の流通年代と炭化物の放射性炭素年代から15世紀中葉～17世紀前葉の可能性が示されたが、放射性炭素年代の古木効果などを考慮すれば概ね16世紀頃（戦国時代）を中心とした年代が考えられる。B類については土師器片が出土していることから古代以降と考えられるが、具体的な時期は不明である。



第95図 焼成遺構A類出土炭化物の暦年較正年代範囲

第3節 遺跡の性格

前節までの検討から、本遺跡では少なくとも7世紀末-8世紀初頭頃、9世紀中頃、13世紀中頃-15世紀前半、16世紀頃の4時期の遺構期が設定できると考えられる。ここでは、各時期の様相について概観し、遺跡の性格を考察する。

1. I期：7世紀末～8世紀初頭頃（飛鳥時代終末～奈良時代初頭）

2区東部のSD107溝跡があり、土師器環・高環・甕、須恵器高台付環が出土している。土師器環には関東系土師器と考えられるものが含まれており、その特徴は円田盆地北部の7世紀後半-8世紀前半にかけての複数の遺跡で出土しているものと共通する。SD107溝跡は蛇行しながら南北に延びる溝跡であり、自然流路跡の可能性も考えられる。調査区内で同時期の遺構は確認されていないことから、これらの遺物は北西側の丘陵部に当該期の集落が存在した可能性を示すと考えられる。

2. II期：9世紀中頃（平安時代前葉）

掘立柱建物跡A群（4区北部のSB31・SB47、6区東部のSB3・SB26掘立柱建物跡）、4区南部のSE45、5区北部のSE85井戸跡などで構成される。また、掘立柱建物跡の主軸方向と一致する4区南部のSD132・SD133、6区東部のSD13・14溝跡、分布範囲が一致する焼成遺構B類（4区中央部のSX40・43・44・134、5区南部のSX52）についてもII期の遺構の可能性がある。

掘立柱建物跡は小規模ながら主軸方向に斉性が認められ、約45m以上を確認したSD13溝跡は南北方向に直線的に延びるなど施設配置に計画性が窺える。SD132・SD133溝跡は東西方向に並行して延び、道路跡の可能性が考えられる。また、井戸跡では井戸側の構築方法が多賀城周辺と共通し、井戸の廃絶に伴う祭祀的行為の痕跡も確認された。

以上のように、断片的ながらも同時期の一般的な集落とは異なる様相が窺われ、何らかの政治的あるいは宗教的施設が存在した可能性を示すと考えられる。

3. III期：13世紀後半～15世紀前半頃（鎌倉時代後半～室町時代前半）

3区東部-4区北部に5棟、5区北部13棟、5区中央部に6棟、5区南部に13棟がそれぞれまとまって分布する掘立柱建物跡B群の大部分と、5区-6区東部のSD4a・4b・SD5a・5b・6・7溝跡、西小屋館跡遺構確認調査区のSD301溝跡、5区のSD57堀跡、5区南部のSE61・SE67井戸跡などで構成される。

SD57堀跡は西小屋館跡の西辺、SD301堀跡は南辺を区画したものと考えられる。これまで存在が推定されてきた位置で堀跡を確認したことにより、西小屋館は一町（約109m）を基準とした縄張りを持つ方形館であることが判明した。平面形は方形館としてはやや変形した五角形に近い形状を呈すると推定され、外側をめぐる堀（水堀）を持ち、内側に土塁を備える。

SD4a・4b・SD5a・5b・6・7溝跡は西小屋館跡の西側に隣接して方形区画を形成した溝跡で、内部に配置された掘立柱建物跡群や井戸跡などともに屋敷を構成したと考えられる。溝跡は区画の拡張と縮小、掘り直しに伴う複雑な変遷が見られた。区画内の掘立柱建物跡群についても重複が著しいことから、区画施設の変更に伴って内部の施設群についても再配置・改修が行われながら存続したと考えられる。

これらの遺構群の機能時期を推定できる材料は多くないが、SD4a・b溝跡では13世紀後半頃と考えられる中世陶器、14世紀前半頃と考えられる古瀬戸産陶器が出土している。SD57堀跡では13世紀後半頃と考えられる中世陶器のほか、14世紀前半-15世紀前半頃と考えられる古瀬戸産陶器、14世紀後半以降に流通した洪武通寶が少数出土している。これらの出土遺物の年代観に従えば、SD4a・b溝跡は

13世紀後半~14世紀前半頃、SD57 堀跡は13世紀後半~15世紀前半頃の機能時期を考察することが可能である。館を囲郭する土塁のさらに外側に位置する堀跡の出土遺物が館そのものの機能時期を正しく反映したものであるかどうかについてはなお検討が必要と考えられる。遺構配置の点から見ると、今回の調査では西小屋館を区画する堀跡と屋敷地を区画する溝跡との新旧関係を明らかにすることはできなかったものの、屋敷の東辺が西小屋館西辺の延長線上に沿うことや、出土遺物の年代観、掘立柱建物跡の配置から、機能時期が重複していた可能性は高いと考えられる。また、周辺の微地形から見れば西小屋館が丘陵尾根筋上に位置し、その南西斜面部に近い位置に屋敷が位置する。立地条件としては西小屋館が優位な位置にあり、屋敷は西小屋館の地割りに規制されて形成されたと考えるのが妥当であろう。このことから、13世紀後半頃に西小屋館とそれに付随する形で屋敷が成立し、少なくとも15世紀前半頃までは存続していたものと考えられる。

中世の発掘調査例が多い仙台市では、12世紀後半~13世紀初め頃に一辺25-50m程度の方形の敷地を幅1-2m程度の溝で区画する屋敷が見られるようになる。こうした屋敷は13世紀中頃~14世紀前半頃には普遍化し、屋敷を区画する溝は幅3-3.5mと防衛機能を持ち、半町四方もしくはこれを超える規模の敷地を持つ屋敷が出現する。14世紀中頃~16世紀末には幅8-16mの大規模な堀をめぐらし、一町から二町四方に及ぶ敷地を有する城館が出現し、15-16世紀の間に土塁を整備している(田中1995)。川崎利夫氏(2001)は、山形県置賜地方では12世紀前半には米沢市木和田館(米沢市史編纂委員会ほか1987)などで土塁と堀を備えた半町四方程度の規模の方形館が既に見られ、13世紀に入ると地頭クラスの居館には一町を超える規模のものが出現したと考えている。

14世紀中頃以降に見られる方形館についてはその規模の大小から、二町あるいは一町四方の守護所を頂点として、地頭層から発生して複数村落を支配した有力国人は一町四方の居館、一村落到基盤を置いた土豪(地侍)は半町四方の屋敷を構えたとされる(千田ほか1993)。このような方形館の規範的なあり方を、前川要氏は方形館体制と位置づけ、当時の守護領国体制の支配権力を方形館の規模によって地域空間に具現化したものと考えている(前川2000)。この考え方を前提とすれば、当時の西小屋館の館主は小村崎地域周辺における有力国人層であったと推定される。隣接する約半町の規模を持つ屋敷には西小屋館の館主ときわめて密接なかかわりを持つ人物が居住したものと考えられ、国人領主の家臣クラスの屋敷の可能性が考えられる。

なお、前述の仙台市の調査事例を考慮すれば、13世紀後半頃の成立が考えられる西小屋館は当初は敷地を溝のみで区画して土塁を伴わない居館として造営され、15世紀頃に大規模な土塁と堀が整備された可能性が考えられる。隣接する屋敷で確認された溝や建物の度重なる改修・再配置についても、主体となる館の段階的な変遷過程と連動して行なわれた可能性が高い。このような地域有力者の居館の再整備には、地頭層から発生した有力な在地領主が14世紀中頃以降、より広範な地域支配者としての国人領主へ転換していったことが背景として考えられる。今後の調査によって西小屋館の詳細な遺構変遷が明らかにされれば、円田盆地周辺における中世村落構造の解明につながる事が期待される。

4. IV期：16世紀頃(戦国時代)

5区中央部に分布する焼成遺構A類(SX62・63・65・66・69・70・71・72)がある。これらはⅢ期の屋敷内に位置しており、Ⅲ期に位置つけた西小屋館と屋敷がIV期まで存続していた可能性を示すと考えられる。重複関係のある掘立柱建物跡はいずれも焼成遺構A類よりも古く、16世紀代と考えられる出土遺物も確認されていないことから、ここでは焼成遺構A類のみをIV期の遺構として扱う。

焼成遺構A類は、木炭焼成施設と考えられる。同様の施設は鍛冶遺構に近接して営まれる事例が見られることから、本遺構で鍛冶炭が生産され、周辺で鍛冶が行われた可能性が考えられる。

第7章 総 括

1. 西屋敷遺跡・西小屋館跡は、宮城県南部の刈田郡蔵王町大字小村崎字西屋敷・宮前地内に所在する。遺跡は蔵王町東部の円田盆地北西部に形成された標高約94mの低平な舌状丘陵上に立地している。
2. 今回の発掘調査は県営ほ場整備事業を原因とする事前調査として実施した。西屋敷遺跡の調査区は遺跡範囲を東西・南北方向に横断・縦断する道路・水路予定地であり、発掘調査面積は6215.5㎡である。西小屋館跡の調査区は遺跡南部の暗渠排水設備予定地内の165㎡である。
3. 西屋敷遺跡で確認した遺構は掘立柱建物跡43棟、柱列跡26条、井戸跡8基、土坑33基、堀跡1条、溝跡62条、水溜め状遺構4基、焼成遺構13基、性格不明遺構2基、柱穴多数である。西小屋館跡では井戸跡1基、土坑1基、堀跡1条、溝跡3条、柱穴5か所を確認した。
4. 西屋敷遺跡で出土した遺物は、中世陶磁器、近世陶磁器、ロクロ土師器、土師器、須恵器、木製品、金属製品、弥生土器、石器などがある。このうち、ややまとまった出土状況が見られたのは7世紀末～8世紀初頭（飛鳥時代終末～奈良時代初頭頃）の溝跡から出土した土師器（栗匣式～国分寺下層式）、9世紀中頃（平安時代前葉）の井戸跡・土坑から出土したロクロ土師器（表杉ノ入式）、13世紀後半～15世紀前半頃（鎌倉時代後半～室町時代前半）の溝跡・堀跡・井戸跡から出土した中世陶磁器などである。
5. 発掘調査結果を検討した結果、下記のことが明らかとなった。
 - ・西小屋館西辺・南辺を区画した堀跡を確認し、西小屋館がやや変形した一町四方を基調とした縄張りを持ち、土塁と堀を備えた方形館であることが判明した。また、西小屋館の西側に隣接して、約半町四方の敷地を溝で区画して掘立柱建物群と井戸などを配置した屋敷が形成されていたことが判明した。溝跡や建物跡群は複雑に重複し、再配置・改修が繰り返されたことが窺える。
 - ・出土遺物の年代観や遺構配置から、13世紀後半頃（鎌倉時代後半）に西小屋館とそれに付随する形で西隣に屋敷が成立し、少なくとも15世紀前半頃（室町時代前半）までは存続したと考えられる。西小屋館の大規模な土塁と堀は15世紀頃に整備された可能性がある。西小屋館の当時の館主は有力国人層で、西隣には国人領主の家臣クラスの屋敷が形成されていたと推定される。
 - ・方形の掘り込みを持ち、壁面が被熱により赤色硬化し、底面に炭化物層が堆積した焼成遺構がまとまって確認され、木炭焼成施設と考えられる。出土遺物と放射性炭素年代測定結果などから機能時期は概ね16世紀頃（戦国時代）と推定される。西小屋館西隣の屋敷内に位置することから、西小屋館と屋敷が16世紀頃まで存続した可能性を示唆するものと考えられる。
 - ・9世紀中頃（平安時代前葉）の掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡などを確認した。建物と溝は主軸方向を合わせており一定の計画性が窺えることから、同時期の一般的な集落とは異なる性格を持つ施設が存在した可能性がある。井戸跡では廃絶に伴う祭祀的行為の痕跡が確認された。
 - ・溝跡から7世紀末～8世紀初頭頃（飛鳥時代終末～奈良時代初頭）の土師器・須恵器が出土し、北西側の丘陵部に集落跡が存在する可能性がある。土師器には関東系土師器と考えられるものが含まれ、円田盆地北部の複数の集落跡で出土しているものと共通する特徴を持つ。
6. 今回の発掘調査成果は、円田盆地周辺に居住した当時の人びとの具体的な暮らしを知る上で貴重な手がかりとなるものである。

引用・参考文献

- 赤羽一郎・中野晴久 1995「中世常滑焼の生産地編年」『常滑焼と中世社会』永原慶二編 小学館
- 安達訓仁 2006「考察」『四ツ墳遺跡』『四ツ墳遺跡ほか』栗原市文化財調査報告書 3 栗原市教育委員会 2006
- 伊東信雄 1955「各地域の弥生式土器—東北—」『日本考古学講座 4』河出書房
- 飯村均 2005「律令国家の対蝦夷政策 - 相馬の製鉄遺跡群 -」シリーズ「遺跡を学ぶ」21
- いわき市教育委員会 1999『五反田A遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告書 57
- 氏家典和 1957「東北土師器の型式分類とその編年」歴史 14 東北大学史学会
- 大阪府近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさし』大阪府近つ飛鳥博物館図録 40
- 奥田直栄 1972『古瀬戸』陶磁体系 6 平凡社
- 鹿島茂 1993「地名」『蔵王町史 民俗生活編』蔵王町史編纂委員会
- 河南町教育委員会 1993『須江窯跡群 関ノ入遺跡』河南町文化財調査報告書 7
- 鐘方正樹 2003『井戸の考古学』ものが語る歴史シリーズ 8 同成社
- 川崎利夫 2001「方形居館の出現と展開—出羽南部を中心として—」『山形考古』7-1
- 栗原市教育委員会 2006『四ツ墳遺跡』『四ツ墳遺跡ほか』栗原市文化財調査報告書 3
- 桑原滋郎 1976「東北地方北部および北海道の所謂第1型式の土師器について」考古学雑誌 61-4
- 小紫敏・猪岡近男・風間観静 1987「中世資料」『蔵王町史 資料編Ⅰ』蔵王町史編纂委員会
- 蔵王町史編纂委員会 1987『蔵王町史 資料編Ⅰ』
- 蔵王町史編纂委員会 1989『蔵王町史 資料編Ⅱ』
- 蔵王町史編纂委員会 1993『蔵王町史 民俗生活編』
- 蔵王町史編纂委員会 1994『蔵王町史 通史編』
- 蔵王町教育委員会 1990『堀ノ内遺跡』蔵王町文化財調査報告書
- 蔵王町教育委員会 1997『堀の内遺跡』蔵王町文化財調査報告書 1
- 蔵王町教育委員会 2002『諏訪館前遺跡』蔵王町文化財調査報告書 2
- 蔵王町教育委員会 2005『都遺跡ほか（都遺跡・窪田遺跡・新城館跡）』蔵王町文化財調査報告書 3
- 蔵王町教育委員会 2006『車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡ほか』蔵王町文化財調査報告書 4
- 蔵王町教育委員会 2007『中沢A遺跡』蔵王町文化財調査報告書 5
- 蔵王町教育委員会 2008『六角遺跡—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査—』蔵王町文化財調査報告書 6
- 蔵王町教育委員会 2009a『戸ノ内遺跡—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査—』蔵王町文化財調査報告書 8
- 蔵王町教育委員会 2009b『青竹遺跡』蔵王町文化財調査報告書 9
- 蔵王町教育委員会 2009c『蔵王町前戸内遺跡—県営ほ場整備事業に伴う発掘調査の概要—』『平成 21 年度宮城県遺跡調査成果発表会 発表要旨』
- 蔵王町教育委員会 2011a『西浦 B 遺跡—商業施設出店計画に伴う緊急発掘調査—』蔵王町文化財調査報告書 10
- 蔵王町教育委員会 2011b『窪田遺跡—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査—』蔵王町文化財調査報告書 11
- 蔵王町教育委員会 2011c『小原遺跡—特別養護老人ホーム増床事業に伴う緊急発掘調査—』蔵王町文化財調査報告書 12
- 蔵王町教育委員会 2011d『十部田遺跡 1 - 経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査 -』蔵王町文化財調査報告書 13
- 蔵王町教育委員会 2011e『十部田遺跡 2 - 経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査 - SE66 井戸跡出土木製遺物編 附 十部田遺跡出土木製遺物に関する自然科学的分析』蔵王町文化財調査報告書 14
- 色麻町教育委員会 1993『日の出山窯跡群』色麻町文化財調査報告書 1
- 瀬峰町教育委員会 1983『大境山遺跡』瀬峰町文化財調査報告書 4
- 瀬峰町教育委員会 2004『岩石 I 遺跡第 4 次調査』『清水山 I 遺跡ほか』瀬峰町文化財調査報告書 22
- 仙台市教育委員会 1982『堤町窯跡 B 地点』『仙台平野の遺跡群 I』仙台市文化財調査報告書 37
- 高槻市教育委員会 1981『鶴上郡銚跡発掘調査概要・5 - 高槻市郡家本町・郡家新町・清福寺町・川西町・今城町所在 -』高槻市文化財調査概要
- 多賀城市教育委員会 2004『市川橋遺跡 - 城南区土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ -』多賀城市文化

- 財調査報告書 75
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター 1989『柏木遺跡Ⅰ・Ⅱ』多賀城市文化財調査報告書 17
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター 1991『山王遺跡 - 第9次発掘調査報告書 - 』多賀城市文化財調査報告書 26
- 田中則和 1995『中世 - 解説 - 』『仙台市史 特別編2 考古資料』仙台市史編纂委員会
- 千田嘉博・小島道裕・前川要 1993『城館調査ハンドブック』新人物往来社
- 辻秀人編 2007『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』「東北・北海道における6～8世紀の土器変遷と地域の相互関係」平成15-18年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書
- 東北古代土器研究会 2005a『東北古代土器集成-古墳後期-奈良・集落編<福島>』研究報告 1
- 東北古代土器研究会 2005b『東北古代土器集成-古墳後期-奈良・集落編<宮城>』研究報告 2
- 東北古代土器研究会 2008a『東北古代土器集成-須恵器・窯跡編<陸奥>』研究報告 3
- 東北古代土器研究会 2008b『東北古代土器集成-須恵器・窯跡編<出羽>』研究報告 4
- 日本考古学協会 2001年度盛岡大会実行委員会事務局 2001『北海道・東北地方出土古代末・中世初期陶磁器集成』
- 『都市・平泉一成立とその構成』日本考古学協会 2001年度盛岡大会研究発表資料集
- 福島県教育委員会 1989『相馬開発関連遺跡調査報告書Ⅰ』福島県文化財調査報告書 215
- 福島県教育委員会 1995『原町火力発電所関連遺跡調査報告書Ⅴ』福島県文化財調査報告書 310
- 福島県教育委員会 2002『阿武隈川右岸堤遺跡発掘調査報告書2 高木・北ノ脇遺跡』福島県文化財調査報告書 401
- 藤沢敦 2000『阿武隈川下流域の前方後円墳(その1)』宮城考古学 2 宮城県考古学会
- 藤澤良祐 2005『施軸陶器生産技術の伝播』全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集 全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
- 前川要 2000『日本中世後期の地域支配体制論序説 - 方形館体制の提唱 - 』日本史研究会 2000年3月例会発表要旨 日本史研究会
- 水野正好 1981『鎮井祭の周辺』奈良大学紀要 10
- MIHO MUSEUM・茨城県陶芸美術館・愛知県陶磁資料館・福井県陶芸館・山口県立萩美術館・浦上記念館 2010『古陶の譜 中世のやきもの-六古窯とその周辺-』
- 宮城県教育委員会 1980『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ(伊原沢下遺跡・大橋遺跡・持長地遺跡)』宮城県文化財調査報告書 80
- 宮城県教育委員会 1981『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ(東山遺跡)』宮城県文化財調査報告書 81
- 宮城県教育委員会 1984『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅹ(二屋敷遺跡)』宮城県文化財調査報告書 99
- 宮城県教育委員会 1989『互理町三十三間堂遺跡ほか(戸ノ内脇遺跡・台遺跡)』宮城県文化財調査報告書 131
- 宮城県教育委員会 1990『寂光寺跡ほか(白山遺跡ほか)』宮城県文化財調査報告書 135
- 宮城県教育委員会 1991『合戦原遺跡ほか(中組遺跡ほか)』宮城県文化財調査報告書 140
- 宮城県教育委員会 1995『山王遺跡Ⅱ - 多賀前地区遺構編 - 』宮城県文化財調査報告書 167
- 宮城県教育委員会 1996『一本杉遺跡群』宮城県文化財調査報告書 172
- 宮城県教育委員会 2002『名生館遺跡ほか(窪田遺跡・都遺跡・新城館跡)』宮城県文化財調査報告書 188
- 宮城県教育委員会 2003『壇の越遺跡ほか(十郎田遺跡ほか)』宮城県文化財調査報告書 195
- 宮城県教育委員会 2009『市川橋遺跡の調査(伏石・八幡地区) - 県道「泉 - 塩釜線」関連調査報告書Ⅶ - 』宮城県文化財調査報告書 218
- 宮城県教育委員会 2010『鍛冶沢遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 222
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1992『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報 1992
- 村田晃一 1994『土器からみた宮衙の終末-東北地方の場合-』『第3回東日本埋蔵文化財研究会 古代宮衙の終末をめぐる諸問題 第1分冊 問題提起・各地方の概要』東日本埋蔵文化財研究会
- 村田晃一 2007『宮城県中部から南部』「東北・北海道における6-8世紀の土器変遷と地域の相互関係」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』辻秀人編
- 柳澤和明 1994『東北の施軸陶器-陸奥を中心に-』『古代の土器研究 - 律令的土器様式の西・東 3 施軸陶器 - 』『古代の土器研究会 第3回シンポジウム』古代の土器研究会
- 吉井宏 1994『蔵王町の中世城館』『蔵王町史 通史編』蔵王町史編纂委員会
- 米沢市埋蔵文化財調査委員会・米沢市教育委員会 1987『木和田館跡第1次発掘調査報告書』

写真図版



1. 円田盆地北部 航空写真



2. 円田盆地北部 航空写真 (1956年米軍撮影)



3. 西屋敷遺跡 全景 (南から)



4. 西小屋館跡 全景 (南から)



1. SK141 土坑・SD140 溝跡 確認状況 (中央部・南から)



2. SD139 溝跡 確認状況 (中央部・北から)



3. SD93 溝跡 完掘状況 (北部・北から)



4. SD93 溝跡 完掘状況 (中央部・南から)



5. SD93 溝跡 完掘状況 (南部・南から)



6. SD93 溝跡断面 (北から)



7. SK94 土坑 完掘状況 (南から)



8. SK95 土坑 完掘状況 (西から)



9. SK96 土坑 完掘状況 (西から)



10. 2区遺構確認状況 (拡張前西部・西から)



11. 2区遺構確認状況 (拡張後西部・東から)



12. 2区調査風景 (東部・西から)



13. 2区調査風景 (東部・東から)



1. 2区遺構確認状況(拡張後西部・西から)



2. 2区遺構確認状況(東部・東から)



3. 2区遺構確認状況(東部・西から)



4. 2区遺構確認状況(中央部・東から)



5. 2区遺構確認状況(中央部・西から)



6. 2区遺構確認状況(東部・東から)



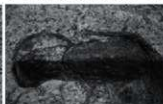
7. 2区遺構確認状況(東部・西から)



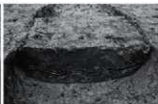
8. SA11b 圓立柱建物跡 P2 断面(西から)



9. SA11b 圓立柱建物跡 P1 断面(西から)



10. SA11c 圓立柱建物跡 P2 断面(西から)



11. SK104 土坑断面(南から)

写真図版 4



1. SK119 土坑 完掘状況 (北から)



2. SK119 土坑断面 (南から)



3. SK128 土坑断面 (東から)



4. SA118 柱列跡・SD117 溝跡 完掘状況 (南から)



5. SD110 溝跡 完掘状況 (南東から)



6. SD109 溝跡 完掘状況 (西から)



6. SD117 溝跡断面 (北から)



7. SD110 溝跡断面 (北西から)



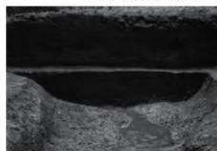
9. SD107・SD108 溝跡 確認状況 (南から)



10. SD107・SD108 溝跡 完掘状況 (南から)



11. SD109 溝跡断面 (西から)



12. SD107 溝跡断面 (北から)



13. SD108 溝跡断面 (北から)



14. SD137 溝跡断面 (東から)



15. SD212 溝跡断面 (北から)



16. SD107 溝跡 調査風景 (南から)



1. SD212 溝跡・SX115 水溜め状遺構 完掘状況 (東から)



2. SX115 水溜め状遺構 断面 (東から)



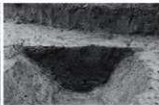
3. SD135 溝跡断面 (西部・北東から)



4. SD135 溝跡断面 (西端部・北東から)



5. SD135 溝跡断面 (東部・西から)



6. SD136 溝跡断面 (西部・東から)



7. SD135 溝跡断面 (接続部・西から)



8. SD136 溝跡・SX143 断面 (南から)



9. SX143 水溜め状遺構 掘出土状況



10. SX142 水溜め状遺構 完掘状況 (東から)



11. SX142 水溜め状遺構 断面 (西から)



12. SX143 水溜め状遺構 完掘状況 (東から)



13. SX143 水溜め状遺構 断面 (西から)



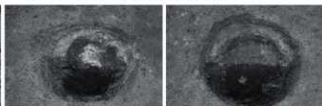
1. 3区遺構確認状況(東から)



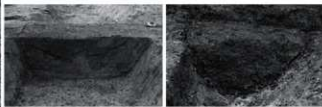
2. SD36・SD37・SD38 溝跡完掘状況(南から)



3. SD35 溝跡完掘状況(南から)



4. SB127 竪立柱建物跡P3断面(西から) 5. SB127 竪立柱建物跡P4断面(西から)



6. SD34 溝跡断面(南から)

7. SD37 溝跡断面(北から)



8. SD35 溝跡断面(南から)



9. SD38 溝跡断面(北から)



10. SD7 調査風景



11. 4区遺構確認作業風景(北から)



12. 4区遺構確認作業風景(北西から)



1. 4区遺溝確認状況（北から）



2. 4区遺溝確認状況（南から）



3. SD130a・SD130b・SD131 溝跡 完掘状況（北から）



4. SD130a・SD130b・SD131 溝跡 完掘状況（南から）

写真図版 8



1. SD130a・SD130b 溝跡断面 (南から)

2. SD130a・SD130b 溝跡断面 (東から)

3. SD131 溝跡断面 (南から)



4. SD132 溝跡断面 (東から)

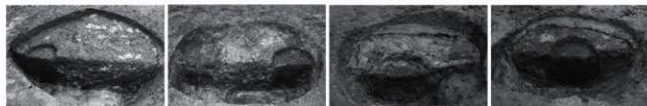
5. SD133 溝跡断面 (東から)

6. 4区基本層序 (東から)



7. SB31 掘立柱建物跡 確認状況 (南から)

8. SB47 掘立柱建物跡 確認状況 (南から)

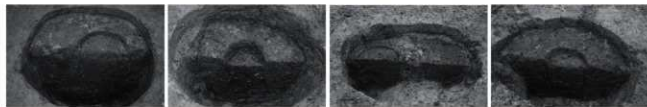


9. SB31 掘立柱建物跡 P1 断面 (西から)

10. SB31 掘立柱建物跡 P3 断面 (西から)

11. SB47 掘立柱建物跡 P3 断面 (東から)

12. SB47 掘立柱建物跡 P4 断面 (南から)

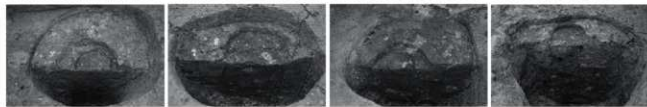


13. SB185 掘立柱建物跡 P2 断面 (東から)

14. SB185 掘立柱建物跡 P6 断面 (西から)

15. SB215 掘立柱建物跡 P3 断面 (西から)

16. SA188 柱列跡 P2 断面 (北から)



17. SB186 掘立柱建物跡 P2 断面 (北から)

18. SB186 掘立柱建物跡 P4 断面 (東から)

19. SB186 掘立柱建物跡 P6 断面 (東から)

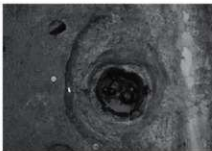
20. SB186 掘立柱建物跡 P9 断面 (北から)



1. SA191 柱列跡 P1 断面 (南から)



2. SE45 井戸跡 完備状況 (南から)



3. SE45 井戸跡 遺物出土状況 (南から)



4. SE45 井戸跡断面 (南から)



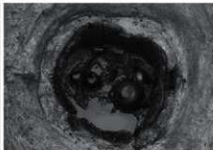
5. SE45 井戸跡 遺物出土状況 (南から)



6. SE45 井戸跡 遺物出土状況 (南から)



7. SE45 井戸跡 遺物出土状況 (南から)



8. SE45 井戸跡 遺物出土状況 (南から)



9. SE45 井戸跡 倒壊出土状況 (北東から)



10. SE45 井戸跡 調査風景



12. SE45 井戸跡 調査風景



13. SE45 井戸跡 調査風景



11. SK42 土坑断面 (東から)



12. SE45 井戸跡 調査風景



13. SE45 井戸跡 調査風景



14. SX43 焼成遺構断面 (南から)



15. SX44 焼成遺構断面 (南から)



16. SX134 焼成遺構断面 (西から)



1. 5区遺構確認状況 (南から)



2. 5区遺構確認状況・西小屋船跡南西部 (南から)



3. 西小屋船跡南西部推定地跡 (南西から)



4. SB155・SB157・SB158 掘立柱建物跡確認状況 (南から)



1. SB78・SB154・SB180 掘立柱建物跡、SA24・SA97・SA183 柱列跡 発掘状況 (南から)



2. SB74・SB92・SB161・SB162・SB163 掘立柱建物跡 確認状況 (南から)



1. SB77 掘立柱建物跡、SA76 柱列跡 確認状況 (南から)



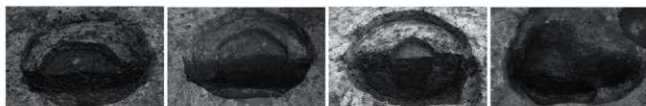
2. SB82・SB83・SB84・SB172・SB173・SB174・SB177 掘立柱建物跡、SA175・SA176 柱列跡 確認状況 (南から)



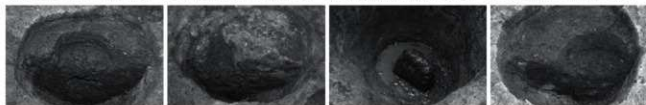
1, SB80・SB84・SB166・SB167・SB168・SB169・SB171・SB172 掘立柱建物跡、SA170 柱列跡 確認状況 (南から)



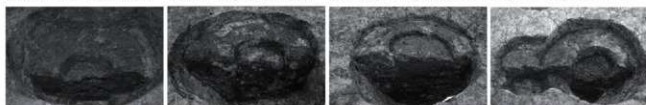
1, SB77・SB154・SB157・SB158・SB160・SB181 掘立柱建物、SA76・SA98 柱列跡確認状況（南から）



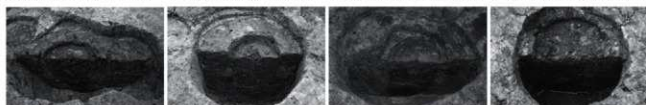
1. S874 孤立柱建物跡 P1 断面 (西から) 2. S874 孤立柱建物跡 P3 断面 (北から) 3. S874 孤立柱建物跡 P4 断面 (北から) 4. S877 孤立柱建物跡 P1 断面 (西から)



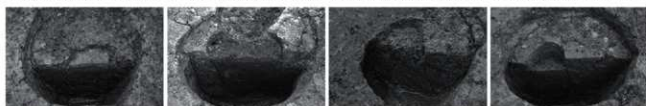
5. S877 孤立柱建物跡 P3 断面 (南から) 6. S877 孤立柱建物跡 P2 断面 (西から) 7. S877 孤立柱建物跡 P2 柱趾土状況(南から) 8. S877 孤立柱建物跡 P7 断面 (東から)



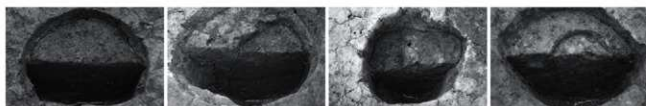
9. S877 孤立柱建物跡 P8 断面 (北から) 10. S878 孤立柱建物跡 P4 断面 (西から) 11. S879 孤立柱建物跡 P2 断面 (西から) 12. S879 孤立柱建物跡 P3 断面 (東から)



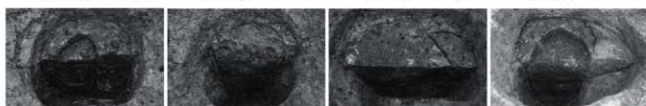
13. S879 孤立柱建物跡 P4 断面 (南から) 14. S879 孤立柱建物跡 P5 断面 (東から) 15. S879 孤立柱建物跡 P8 断面 (南西から) 16. S880 孤立柱建物跡 P1 断面 (東から)



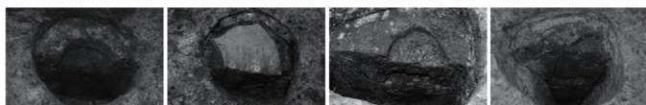
17. S880 孤立柱建物跡 P4 断面 (南から) 18. S880 孤立柱建物跡 P6 断面 (北から) 19. S882 孤立柱建物跡 P3 断面 (東から) 20. S882 孤立柱建物跡 P6 断面 (西から)



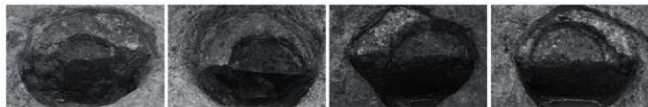
21. S883 孤立柱建物跡 P1 断面 (北から) 22. S883 孤立柱建物跡 P3 断面 (北から) 23. S883 孤立柱建物跡 P5 断面 (南から) 24. S884 孤立柱建物跡 P1 断面 (東から)



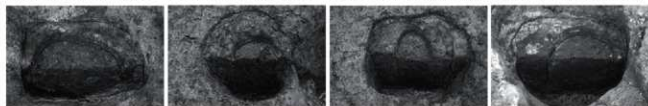
25. S884 孤立柱建物跡 P4 断面 (西から) 26. S884 孤立柱建物跡 P5 断面 (南から) 27. S884 孤立柱建物跡 P6 断面 (北から) 28. S892 孤立柱建物跡 P2 断面 (北から)



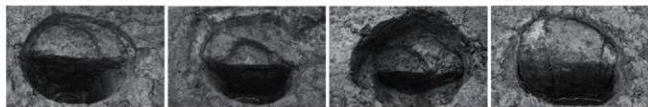
29. S892 孤立柱建物跡 P3 断面 (東から) 30. S892 孤立柱建物跡 P4 断面 (南から) 31. S892 孤立柱建物跡 P5 断面 (南から) 32. S892 孤立柱建物跡 P6 断面 (東から)



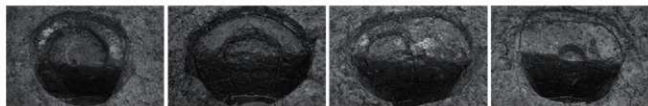
1. SB92 獨立柱建物跡 P7 断面 (南から) 2. SB97 獨立柱建物跡 P8 断面 (南から) 3. SB154 獨立柱建物跡 P4 断面 (東から) 4. SB154 獨立柱建物跡 P6 断面 (東から)



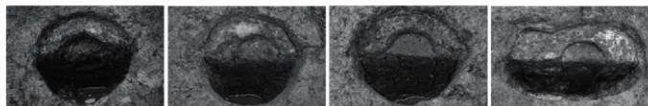
5. SB163 獨立柱建物跡 P1 断面 (西から) 6. SB166 獨立柱建物跡 P3 断面 (北から) 7. SB166 獨立柱建物跡 P11 断面 (西から) 8. SB167 獨立柱建物跡 P3 断面 (西から)



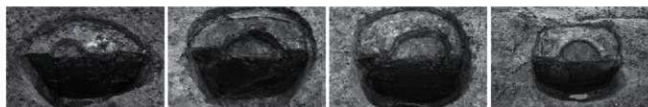
9. SB169 獨立柱建物跡 P3 断面 (南から) 10. SB169 獨立柱建物跡 P4 断面 (東から) 11. SB171 獨立柱建物跡 P2 断面 (東から) 12. SB171 獨立柱建物跡 P3 断面 (西から)



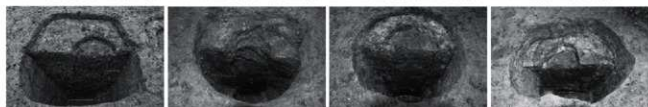
13. SB172 獨立柱建物跡 P2 断面 (西から) 14. SB172 獨立柱建物跡 P3 断面 (南から) 15. SB173 獨立柱建物跡 P3 断面 (西から) 16. SB174 獨立柱建物跡 P2 断面 (西から)



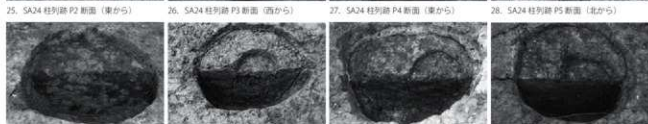
17. SB174 獨立柱建物跡 P3 断面 (南から) 18. SB174 獨立柱建物跡 P5 断面 (北から) 19. SB177 獨立柱建物跡 P1 断面 (東から) 20. SB177 獨立柱建物跡 P2 断面 (北から)



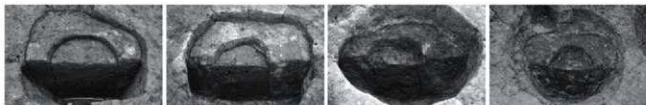
21. SB177 獨立柱建物跡 P4 断面 (北から) 22. SB180 獨立柱建物跡 P1 断面 (東から) 23. SB180 獨立柱建物跡 P2 断面 (北から) 24. SA24 柱列跡 P1 断面 (南から)



25. SA24 柱列跡 P2 断面 (東から) 26. SA24 柱列跡 P3 断面 (西から) 27. SA24 柱列跡 P4 断面 (東から) 28. SA24 柱列跡 P5 断面 (北から)



29. SA76 柱列跡 P2 断面 (南から) 30. SA81 柱列跡 P2 断面 (南から) 31. SA81 柱列跡 P3 断面 (南から) 32. SA81 柱列跡 P4 断面 (西から)

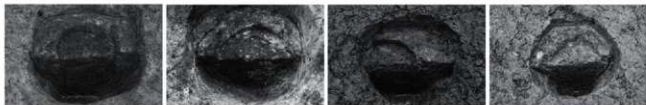


1. SA97 柱列跡 P1 断面 (南から)

2. SA97 柱列跡 P3 断面 (北から)

3. SA97 柱列跡 P4 断面 (北から)

4. SA98 柱列跡 P1 断面 (東から)



5. SA164 柱列跡 P2 断面 (西から)

6. SA165 柱列跡 P3 断面 (北から)

7. SA175 柱列跡 P3 断面 (西から)

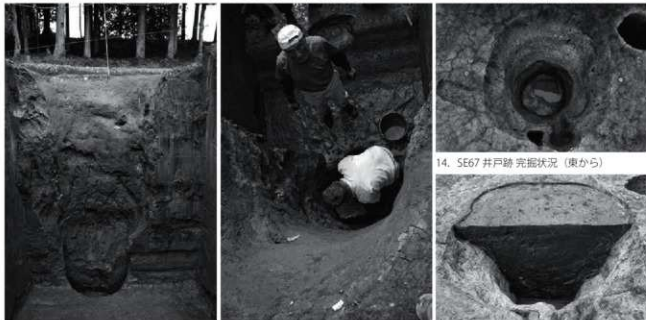
8. SA176 柱列跡 P9 断面 (西から)



9. SE61 井戸跡 上半部掘り下げ状況 (西から)

10. SE61 井戸跡断面 (東から)

11. SE61 井戸跡 完掘状況 (東から)



12. SE61 井戸跡 完掘状況 (西から)

13. SE61 井戸跡 調査風景

14. SE67 井戸跡 完掘状況 (東から)



16. SE87 井戸跡 完掘状況 (北から)

17. SE87 井戸跡断面 (北から)

18. 5 区 遺構断面実測作業風景



1. SE85 井戸跡 完掘状況 (東から)



2. SE85 井戸跡断面 (西から)



3. SE85 井戸側 検出状況 (西から)



4. SE85 井戸側 確認状況 (西から)



5. SE85 井戸側内堆積土断面 (西から)



6. SE85 井戸側 検出状況 (南から)



7. SE90 井戸跡断面 (北から)



8. SE90 井戸跡 木材出土状況 (北から)



9. SE90 井戸跡・SK91 土坑 完掘状況 (北から)



10. 5区遺構平面実測作業風景



11. SK55 土坑 完掘状況 (東から)



12. SK55 土坑断面 (東から)



13. SK59 土坑断面 (南から)



14. SK60 土坑断面 (北から)



15. 5区遺構確認作業風景 (南から)



16. SK86 土坑 完掘状況 (北西から)



17. SK86 土坑断面 (北から)



18. 5区遺構平面実測作業風景



1. SD57 堀跡 完整状況 (南から)



2. SD57 堀跡 縦断面 (南部・西から)



3. SD57 堀跡 横断面 (南部・南から)



4. SD57 堀跡 横断面 (北部・南から)



5. SD57 堀跡 横断面 (中央部・南から)



6. SD57 堀跡断面 (南部・南西から)



7. SD57 堀跡 掘出土状況 (東から)



8. SD57 堀跡・西辺土塁南端部 (南から)



9. SD57 堀跡調査風景



10. SD4a・SD5b 溝跡 接続部断面 (南から)



11. SD58 溝跡断面 (北から)



12. SD58 溝跡断面 (南から)



1. SD64 溝跡断面 (南から)



2. SD68 溝跡断面 (東から)



3. SD88 溝跡断面 (東から)



4. SD211 溝跡断面 (南から)



5. S区遺構確認作業風景 (SX62焼成遺構周辺)



6. SX52 焼成遺構断面 (北から)



7. 焼成遺構群 確認状況 (北から)



8. SX62 焼成遺構 完掘状況 (南から)



9. SX62 焼成遺構断面 (南から)



10. SX66 焼成遺構 調査風景



11. SX63 焼成遺構 完掘状況 (南から)



12. SX63 焼成遺構断面 (南から)



13. SX65 焼成遺構 確認状況 (西から)



14. SX65 焼成遺構 完掘状況 (東から)



15. SX65 焼成遺構断面 (東から)



16. SX66 焼成遺構 完掘状況 (南から)



17. SX66 焼成遺構 壁面赤色硬化状況 (南から)



18. SX66 焼成遺構断面 (南から)



1. 5区遺構確認作業風景 (北から)



2. SX69 焼成遺構 完掘状況 (南から)



3. SX69 焼成遺構断面 (南から)



4. SX71 焼成遺構 確認状況 (南から)



5. SX71 焼成遺構 完掘状況 (東から)



6. SX71 焼成遺構断面 (東から)



7. 休憩風景



8. SX72 焼成遺構 完掘状況 (南から)



9. SX72 焼成遺構断面 (北から)



10. 6区遺構確認状況 (西から)



11. SD4a・SD4b・SD5b・SD6・SD7 溝跡 確認状況 (西から)



12. SD4a・SD4b・SD5b・SD6・SD7 溝跡 完掘状況 (北西から)



1. SD4a・SD4b・SD5b・SD6・SD7・SD184 溝跡 完掘状況 (北から)



2. SD4a・SD4b・SD5b・SD6 溝跡 完掘状況 (北東から)



3. SD4a・SD4b・SD5b・SD6・SD7 溝跡 確認状況 (南から)



4. SD4a・b 溝跡 完掘状況 (東から)



5. SD4a・SD4b・SD5b・SD6 溝跡 確認状況 (西から)



6. SD4a・SD4b・SD5b・SD6・SD7・SD12・SD13 溝跡 確認状況 (南から)



7. SD4a・SD4b 溝跡断面 (東部・東から)



8. SD4a・SD4b 溝跡断面 (西部・東から)



1. SD5b 溝跡 完掘状況 (東から)



2. SD5b 溝跡断面 (東から)



3. SD7 溝跡 完掘状況 (東から)



4. SD7 溝跡断面 (西から)



5. SB3 掘立柱建物跡 完掘状況 (南から)



6. SB26 掘立柱建物跡 確認状況 (南から)



7. SB3 掘立柱建物跡 P1 断面 (北から)



8. SB3 掘立柱建物跡 P2 断面 (北から)



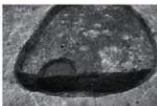
9. SB3 掘立柱建物跡 P3 断面 (北から)



10. SB26 掘立柱建物跡 P1 断面 (南から)



11. SB26 掘立柱建物跡 P4 断面 (南から)



12. SB26 掘立柱建物跡 P5 断面 (南から)



13. SB26 掘立柱建物跡 P7 断面 (南から)



14. SB146 掘立柱建物跡 P1 断面 (南から)



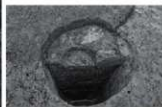
1. SA148 柱列跡 確認状況 (南から)



2. SA28 柱列跡 P2 断面 (西から)



3. SA148 竪立柱建物跡 P1 断面 (西から)



4. SA183 柱列跡 P1 断面 (西から)



5. SE10 井戸跡 完掘状況 (東から)



6. SE10 井戸跡断面 (東から)



7. SK17・SK18 土坑 完掘状況 (南から)



8. SE11 井戸跡 完掘状況 (東から)



9. SE11 井戸跡断面 (東から)



10. SK17・SK18 土坑断面 (南から)



11. SD12 溝跡断面 (西から)



12. 6区遺構調査風景 (西から)



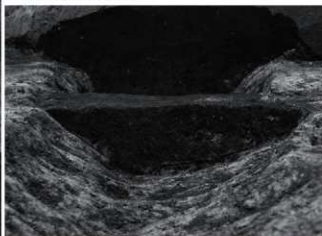
13. SD4a・SD4b 溝跡調査風景 (西から)



1. SD13 溝跡 完掘状況 (南から)



2. SD13 溝跡断面 (北から)



3. SD14 溝跡断面 (南から)



4. SX1 性格不明遺構 確認状況 (西部・南から)



5. SX1 性格不明遺構 確認状況 (東部・南から)



6. 発掘調査成果見学会



7. 発掘調査成果見学会



8. 発掘調査成果見学会



1. 西小屋館跡遺構確認調査区全景（東から）



2. 西小屋館跡遺構確認調査区全景（西から）



3. 西小屋館跡 T1区 遺構確認状況（南から）



4. 西小屋館跡 西辺土塁南端-T1区（南から）



5. 西小屋館跡小築台-T1区300m南側（南から）



6. 西小屋館跡 T1区 遺構確認状況（南から）



6. 西小屋館跡 西辺土塁（北東から）



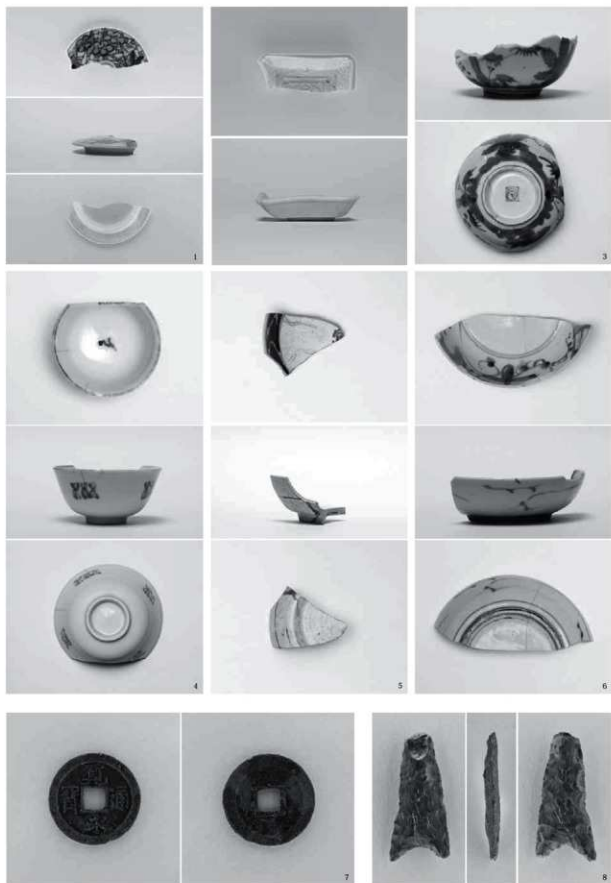
7. 西小屋館跡 北辺土塁（南西から）



8. 西小屋館跡 北辺土塁（西から）



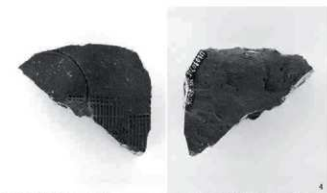
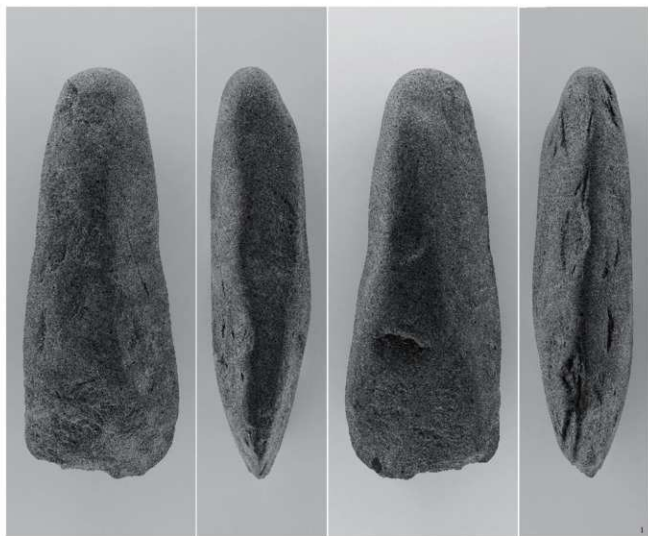
9. 西小屋館跡 北辺土塁北側の窪地（東から）



(1~6: S与1/3 7・8: S与1/1)

SK96 土坑出土遺物 SD93 溝跡出土遺物 (1) 1区遺構外出土遺物

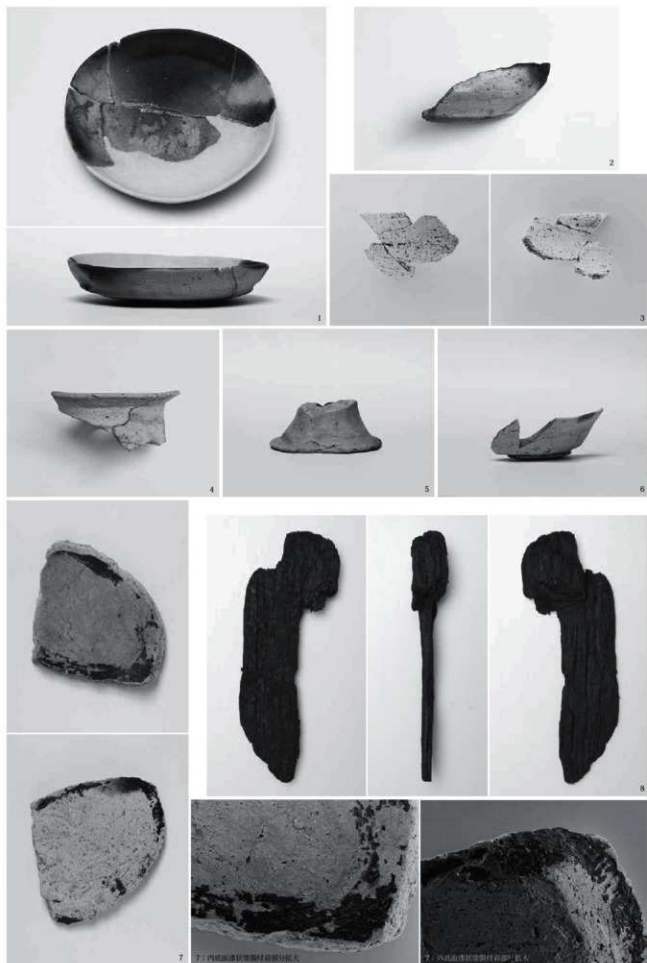
(1~6: S093・第10図, 7: SK96・第7図, 8: 遺構外・第11図)



(1: 5 与 2/3 2~6: 5 与 1/3)

SD93 溝跡出土遺物 (2) SK120・SK121 土坑、SD117・SD126 溝跡、2 区遺構外出土遺物

(1: SD93・第11図、2: SK120・第15図、3: SK121・第15図、4: SD126・第21図、5: SD117・第22図、6: 遺構外・第22図)



SD107 溝跡、SX142 水溜め状遺構出土遺物

(1~7: SD107・第19回, 8: SX142)



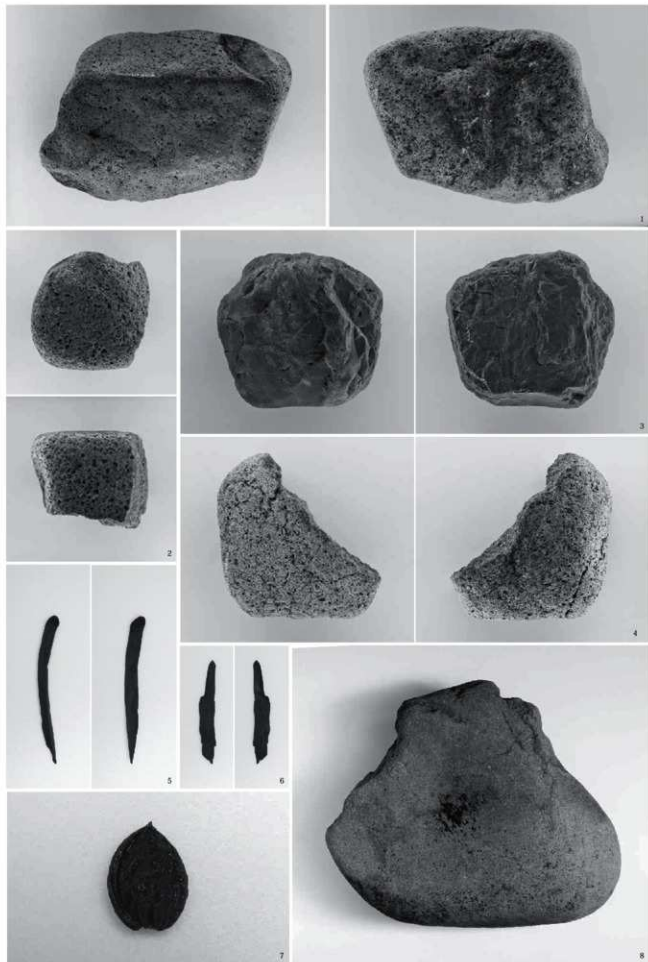
SX143 水溜め状遺構出土遺物
(1 : 第22回)



(1: 縮尺任意 2~6: 5年 1/3)

SE45 井戸跡出土遺物 (1)

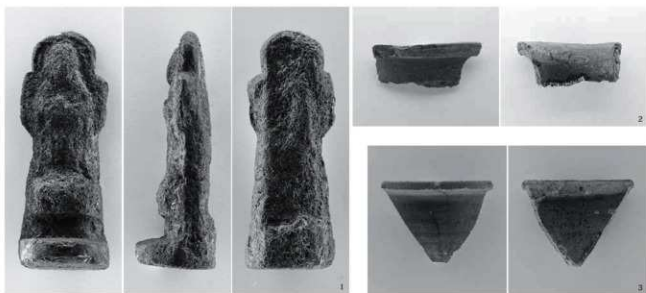
(第 32 図)



(1~6: S 与 1/3 7: S 与 1/1 8: S 与 1/4)

SE45 井戸跡出土遺物 (2)

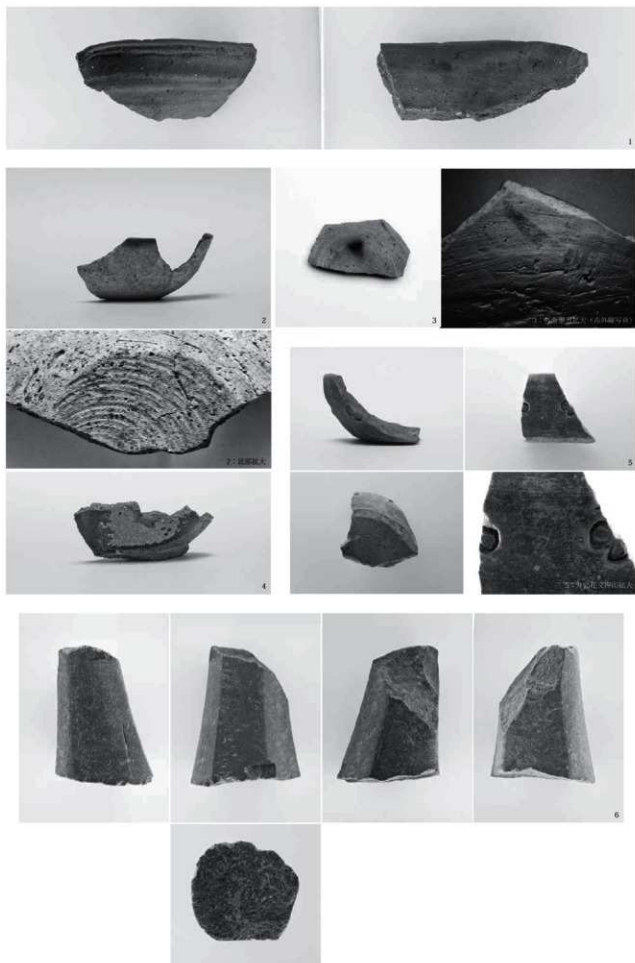
(4・8: 第 32 図)



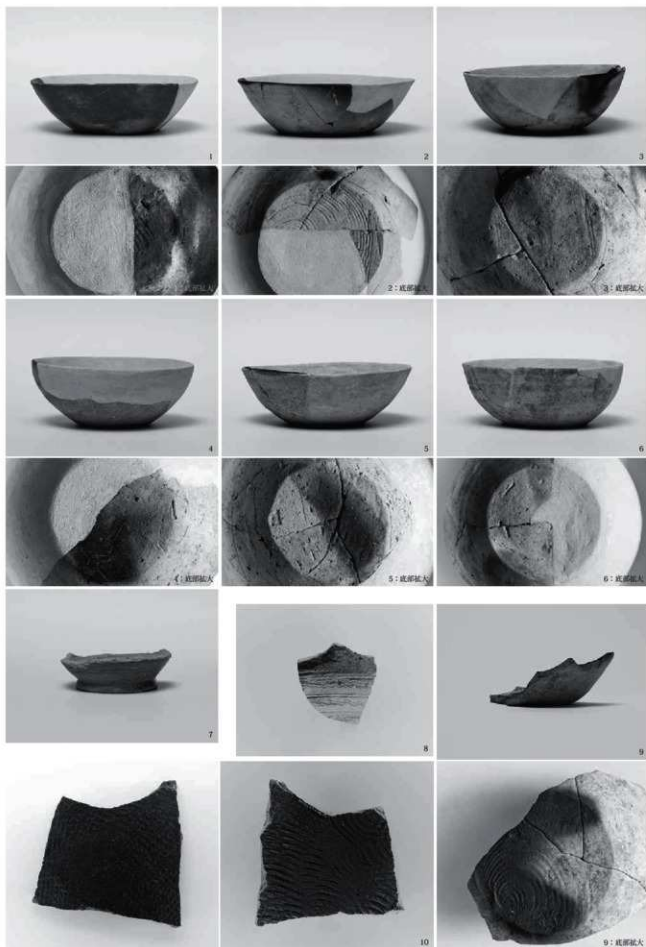
(1: 5 与 3/2 2: 3: 5 与 1/3 4: 5: 5 与 1/4)

SB77 掘立柱建物跡柱材、SE61 井戸跡、SD130a 溝跡、4 区遺構外出土遺物

(1・2: 遺構外・第 37 図, 3: SD130a・第 34 図, 4: SB7792, 5: SE61・第 64 図)

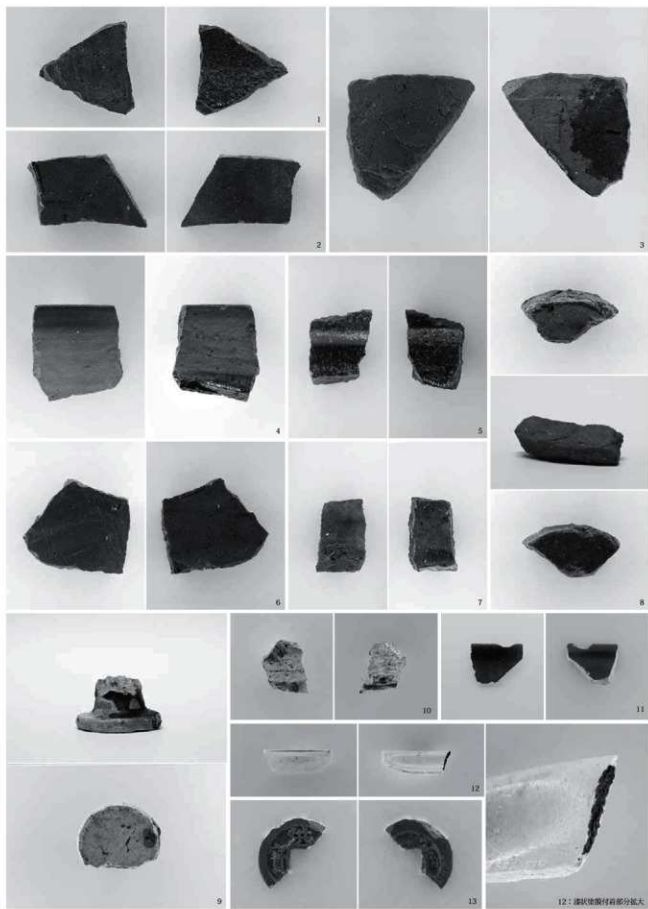


SE67・SE85・SE90 井戸跡、SK59 土坑出土遺物
(1: SE67・第64図, 2~4: SE85・第64図, 5: SE90・第65図, 6: SK59・第67図)



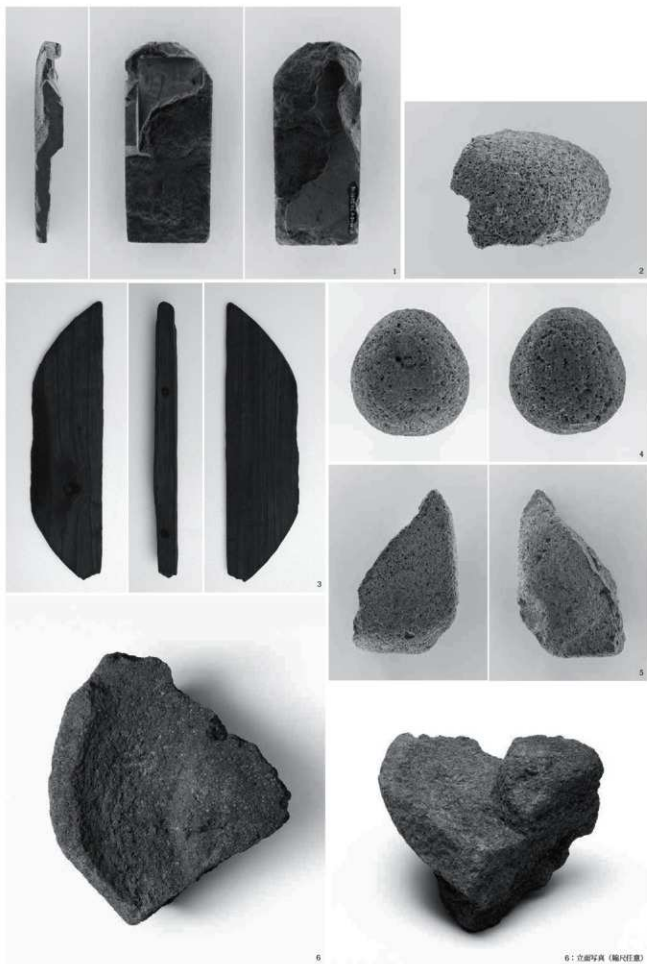
SK89 土坑出土遺物 SD57 溝跡出土遺物 (1)

(1~7: SK89・第67回, 8~10: SD57・第71回)



SD57 溝跡出土遺物 (2)
(1~12: 第70図, 13: 第71図)

(1~12: S 与 1/3 13: S 与 1/1)

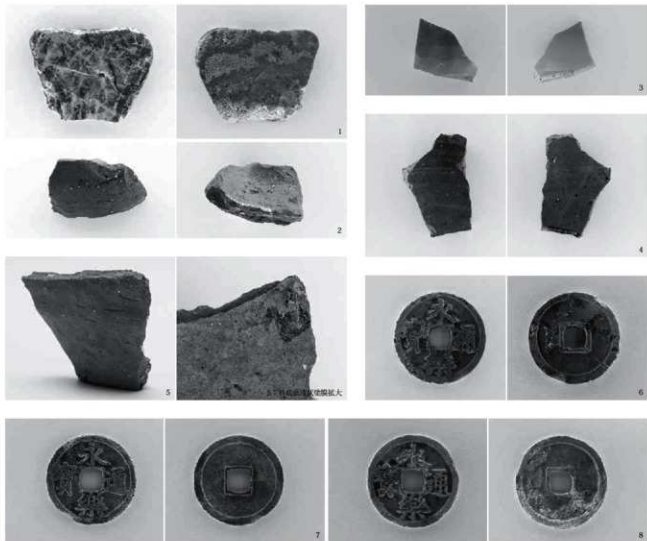


6: 立体写真(撮影任意)

(1・3: 第71図, 2・4~6: 第72図)

SD57 溝跡出土遺物 (3)

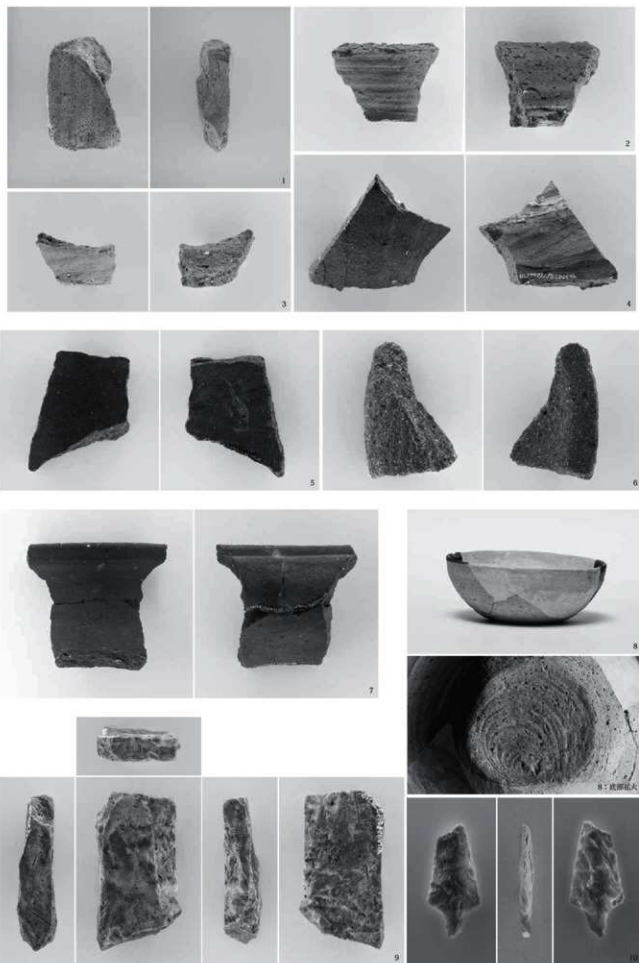
(1・3: 第71図, 2・4~6: 第72図)



(1: S 年 2/3 2~5: S 年 1/3 6~9: S 年 1/1)

SD48ab・SD58・SD68 溝跡、SX52・SX65・SX72 焼成遺構、柱穴出土遺物

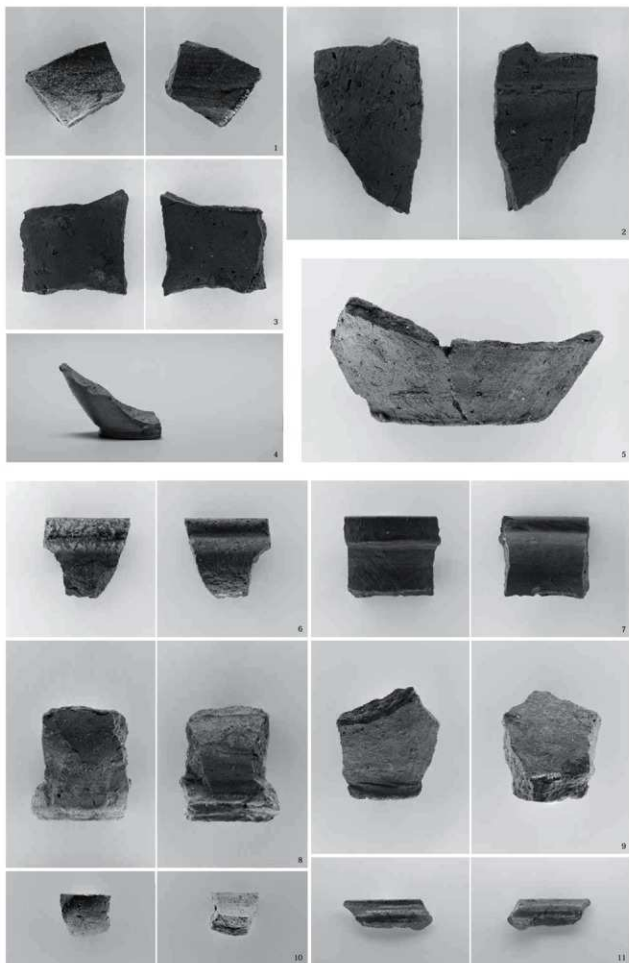
(1・2: SD48・第75図、3: SD58・第75図、4: SD68・第75図、5: P154・第78図、6: SX65・第76図、7・8: SX72・第76図、9: SX52)



[1~8: 5年1/3 9: 5年2/3 10: 5年1/1]

SD5b・SD7・SD144 溝跡、5区遺構外出土遺物

[1~4: 遺構外・第78回, 5・6: SD5b・第86回, 7: SD144・第89回, 8~10: SD7・第86回]



SD4a・SD4b 溝跡出土遺物
(第 84 回)

【 解 説 】

かけがえのない遺跡を未来へ

私たちの足もとには、昔の人の暮らしが暮らした家の跡や、そこで使われた土器や石器などの道具が埋もれている場所があります。このように、昔の人の生活の跡が残されている場所を、「遺跡」と呼んでいます。遺跡は、長い歴史の中で大地に刻み込まれた私たち人間の生活の記憶なのです。

蔵王山麓の豊かな自然環境に恵まれた蔵王町には、私たちの祖先が残した多くの遺跡があります。人々がいつ、どのようにして郷土蔵王に住み着いたのか。彼らは日々の生活をどのように送り、何歳まで生きたのか。土器づくりは誰の仕事だったのか。興味の尽きないテーマです。

遺跡を調べることで昔の人の知恵に学び、私たちの歴史や文化をよく知ることは、私たち自身の生活を見直したり、将来を考えるためにとても大切な役割を果たしています。そのためには、長い歴史を経て今日に伝えられている大切な遺跡を、私たち国民共有の財産として、未来の子どもたちの世代へ守り伝えていかななくてはなりません。

遺跡を記録に残すための発掘調査

西屋敷遺跡と西小屋館跡は、小村崎地区のなだらかな丘の上に埋もれている昔の人々の生活の跡です。小村崎・平沢地区の円田盆地では、水田や畑を使いやすく作り変えるほ場整備工事が計画されました。できるだけ遺跡を壊さないで工事を行なうために、地元地権者の皆さんでつくる蔵王町土地改良区や工事を行なう宮城県大河原地方振興事務所ではたくさんの工夫をしました。それでも、どうしても遺跡が壊れてしまう部分では、工事を行なう前にどのような遺跡が残されているかを詳しく調べ、その様子を写真や図面に記録するために、蔵王町教育委員会が発掘調査を行なうことになりました。発掘調査では、たくさんの発掘作業員の皆さんが汗を流しました。このように、たくさんの人の努力によって、西屋敷遺跡と西小屋館跡の記録を残すことができたのです。

西屋敷遺跡と西小屋館跡の時代

ここに刊行した「西屋敷遺跡ほか発掘調査報告書」をひも解くと、雄大な蔵王山麓に抱かれた円田盆地に暮らした人の歴史であり、西屋敷遺跡と西小屋館跡が「中世」と呼ばれる時代の地方の村落の様子を知ることができる重要な遺跡だったことが分かります。発掘調査では、今から600～750年ほど前（中世前半：鎌倉～室町時代）に小村崎あたりを治めた領主（武士）の館の跡と、その隣につくられた家臣の屋敷の跡などが発見されました。

中世（鎌倉～戦国時代）は、武士と民衆が活躍した時代です。平安時代の終わり頃、源氏と平家の争いを勝ち抜いた源頼朝が鎌倉に幕府を開きました。それまで400年ほど続いた貴族の政治が



西屋敷遺跡の発掘調査

西小屋館跡の西側にある西屋敷遺跡では、鎌倉～室町時代の屋敷の跡が発見されました。



西屋敷遺跡の見学会

発掘調査期間中に開かれた見学会には町内外からたくさんの方が訪れ、遺跡を見学しました。

終わり、武家が政治を行なうようになったのです。私たちがイメージする「武士」の姿は、鎌倉時代に出来あがりました。この頃の日本は動乱も多く、鎌倉幕府が倒され、南北朝時代を経て室町時代、戦国時代と言うように政権が何度も変わりました。戦国時代には地方の武士や民衆が力をつけ、自分たちの地域を守るために団結してさまざまな戦いを繰り広げました。武家と民衆にはそれぞれの文化が生まれ、そこに伝統的な貴族の文化や中国など外国の文化が入り交じり、現在まで続く日本独自の文化が形づくられたのです。西屋敷遺跡と西小屋館跡は、このように人々が生き生きと躍動した時代の地方の様子を知ることができる興味深い遺跡なのです。

土塁と堀で守りを固めた領主の館

西小屋館跡の一角には、幅10m、高さ3mもある土手がL字形に130mもの長さで残っています。土を突き固めながら高く積み上げた「土塁」です。東北福祉大学で考古学を研究している吉井宏先生と学生の皆さんがこの土塁を詳しく調べたところ、土塁の外側が周りよりも低くなっていることを発見しました。吉井先生は、これらが館を囲んでいた「堀」の跡だと考えました。

今回発掘調査をした場所は、館を囲む土塁のすぐ外側です。地面を注意深く掘り下げていくと、土塁に沿って幅が4m以上で深さ1mもある大きな堀の跡が発見されました。吉井先生の予想が、見事に的中したのです。堀の両岸は急な角度に削り取られ、一度入ると簡単には抜け出せない工夫がされていました。堀の中からは、600～750年ほど前（鎌倉～室町時代）の焼き物やお金が出土したので、この頃に使われていたことが分かりました。

昔の人々が城や館を造った時の設計図を、「縄張り図」と言います。縄張り図には、館の守りを固めるための様々な工夫が凝らされたことでしょう。考古学者の観察と今回の発掘調査から、土塁と堀で守りを固めた「西小屋館」の縄張り図の一部が解き明かされたのです。

とても立派に見える西小屋館の土塁ですが、吉井先生によると土塁の斜面の角度は中世の山城などで普通見られるものとは比べるとややなだらかです。「戦に備えた館」というよりは「日常の住まいとしての館」だったのではないかと考えられるそうです。西小屋館跡のある丘を尾根伝いに2kmほど登った山の上には、兵糧館跡があります。大規模な土塁と堀をめぐらし、



発掘された西小屋館を囲む堀の跡

西小屋館跡の土塁の外側で発見された堀の跡です。幅が4m以上、深さは1mあります。



西小屋館跡に残る土塁

敵の侵入を防ぐために土を高く積み上げて作られました。幅が10m、高さは3mあります。

天然の急峻な崖をも利用した強固な山城です。兵糧館からは、村の様子を遠くまで見渡すことができました。領主は平地の西小屋館で日常生活を送り、いざという時には領内の人々とともに兵糧館に立てこもり、戦に備えたのかもしれませんが。

館と隣り合う家臣の屋敷

西小屋館の堀跡の外側にある西屋敷遺跡では、幅 1.5m ほどの溝で囲まれた敷地からたくさんの掘立柱建物跡や井戸跡が発見されました。溝跡からは西小屋館の堀跡と同じ頃に使われた焼き物が出土しています。敷地は一辺の長さが 40m ほどの四角形で、100m ほどの長さがある西小屋館の半分くらいなので、西小屋館の主に仕えた家臣の屋敷だったようです。屋敷の溝と建物には、何度も作り変えた跡が残されていて、長い間の暮らしがあったことがわかります。西小屋館跡の内部はまだ調査されていませんが、同じように長い間の暮らしの跡が残されていることでしょう。



兵糧館跡に残る土壘と堀の跡

山の斜面を土壘と堀が何重にも複雑に取り巻いています。戦いに備えたことが分かります。



西小屋館跡の隣で見つかった家臣の屋敷の跡

家臣の屋敷を囲んでいた溝の跡です。何度も作り変えられました。奥の杉木立が西小屋館跡です。



家臣の屋敷に建てられた建物の跡

地面に見えるたくさんの丸い穴は、建物の柱を立てた跡です。建物も何度も作り変えられました。

今も残る 600 年前の遺跡

西小屋館の跡は、今は畑や水田、宅地として利用されていますが、高さ 3m もある土壘が残されていますし、地形を注意深く観察すると、今は埋まってしまった堀の跡を見ることができます。堀の下には、およそ 600 年前の小村崎あたりを治めた領主の暮らしの跡が埋もれているのです。兵糧館の跡は、地域の皆さんの手によって史跡公園として整備され、ハイキングコースとして親しまれています。細い山道を登っていくと、急な丘の斜面に幾重にもめぐるされた土壘や堀の跡が姿を現します。下草がきれいに刈り込まれ、室町～戦国時代の山城の大規模な土木工事の様子がとても良く分かります。兵糧館の跡に登ると、円田盆地の水田地帯を一望することができます。

円田盆地の田園風景は、近年のほ場整備工事によって大きく様変わりしました。しかし、工事にかかわったたくさんの人々によって、できるだけ遺跡を保存する工夫が重ねられました。西屋敷遺跡も西小屋館跡も、遺跡の大部分は今もまだ地面の下に保存されています。兵糧館跡は、地域の皆さんによって大切に守られています。小村崎地区の遺跡群は、地域の歴史を肌で感じることでできる場所として、これからも永く守り伝えられていくことでしょう。ここに記録された西屋敷遺跡・西小屋館跡の考古学的成果は、地域の歴史を解き明かす鍵として大変貴重なものです。

報告書抄録

ふりがな	にしやしきいせき ほか							
書名	西屋敷遺跡 ほか							
副書名	経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査							
巻・次								
シリーズ名	蔵王町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第15集							
編著者名	鈴木 雅							
編集機関	蔵王町教育委員会							
所在地	〒989-0892 宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北10 In 0224-33-3008 Fax0224-33-3831							
発行年月日	西暦2012年（平成24年）3月23日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
にしやしきいせき 西屋敷遺跡	宮城県刈田郡 蔵王町大字小 村崎字西屋 敷・宮前地内	43010	05196	38°7'33"	140°41'19"	2009.4.16 } 2009.9.30	6,215.5㎡	経営体育成 基盤整備事業 （県営ほ場整備 事業・円田2期 地区）
にしごやたてあと 西小屋館跡	宮城県刈田郡 蔵王町大字小 村崎字西屋敷 地内	43010	05048	38°7'31"	140°41'22"	2010.12.16 } 2010.12.24	165.0㎡	経営体育成 基盤整備事業 （県営ほ場整備 事業・円田2期 地区）
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西屋敷遺跡	集落跡	弥生 飛鳥 奈良 平安 中世	掘立柱建物跡 43 棟 柱列跡 26 条 井戸跡 8 基 土坑 33 基 堀跡 1 条 溝跡 62 条 水溜め状遺構 4 基 焼成遺構 13 基 性格不明遺構 2 基 柱穴多数	中世陶磁器 近世陶磁器 ロクロ土師器（資料ノ人込） 土師器（西側式・東側中下層式・東側集） 須恵器 かわらけ 瓦質土器 弥生土器 石器（石槌・石杵・磨石・石臼・石臼） 木製品（イヌガキ・羽根箸・井戸軸） 金属製品（銅中釘・銅釘） 焼骨片 総量：コンテナ 12 箱分		<ul style="list-style-type: none"> ・方形の廻り込みを持ち、壁面が焼熱により赤色硬化し、底面に炭化物層が堆積した焼成遺構がまがまって確認され、木炭焼成施設と考えられる。 ・焼成遺構から出土した炭化物を試料として実施した放射性炭素年代測定（AMS 測定）の結果、¹⁴C 年代は 310 ± 30-460 ± 30yBP と測定され、暦年較正年代は 15 世紀中葉 -17 世紀前半の間に複数の範囲で示された。 		
西小屋館跡	城館跡	中世	井戸跡 1 基 土坑 1 基 堀跡 1 条 溝跡 3 条 柱穴 6 か所	なし				
要約	<p>西小屋館の西辺・南辺を区画した堀跡を確認し、西小屋館が土塁と堀を備えた方形館であることが判明した。縄張りは一辺 100m 程度の変形した五角形を呈し、一町四方を基調としたと考えられる。また、西小屋館の西側に隣接して、約 40m 四方の敷地を溝で区画して掘立柱建物群と井戸などを配置した屋敷が形成されていたことが判明した。出土遺物の年代観や遺構配置から、13 世紀後半頃（鎌倉時代後半）に西小屋館とそれに付随する形で西隣に屋敷が成立し、少なくとも 15 世紀前半頃（室町時代前半）までは存続したことが確実であり、焼成遺構の存在から 16 世紀頃（戦国時代）までの存続期間を考えることが可能である。仙台地域の調査成果を参考にすれば、西小屋館の大規模な土塁と堀は 15 世紀頃に整備された可能性がある。さらに、14 世紀中頃（南北朝時代）に確立されたと思われる方形館体制の考え方に基づけば、西小屋館の当時の館主は有力国人層で、西隣には国人領主の家臣クラスの屋敷が形成されていたと推定される。</p> <p>このほか、9 世紀中頃（平安時代前半）の掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡などを確認した。確認した遺構は少数であるが建物と溝の配置に計画性が窺えることから、一般集落とは異なる性格を持つ施設が存在した可能性がある。井戸跡では堀地に伴う祭祀行為の痕跡が確認された。また、溝跡から 7 世紀末 -8 世紀初頭（飛鳥時代終末 - 奈良時代初頭）の遺物が出土し、在土土師器の特徴と異なる関東系土師器が含まれていた。北西側の丘陵部に集落跡が存在する可能性がある。</p>							

蔵王町文化財調査報告書 第15集

西屋敷遺跡 ほか

—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査—

2012年（平成24年）3月23日 印刷・発行

発行 蔵王町教育委員会

〒989-0892 宮城県刈田郡蔵王町門田字西浦北10

TEL 0224-33-3008 FAX 0224-33-3831

印刷 株式会社 津田印刷

〒989-1236 宮城県柴田郡大河原町字東原町13-5

TEL 0224-52-5550 FAX 0224-52-3097
